北斗の拳／花の慶次／平松伸二

高橋よしひろ／所 十三／久保ミツロウ／寺田ヒロオ

昭和50年男

Born in 1975

2024 March vol.027 3月号

特別定価990円

オレたちが追いかけた 漢

—マンガ編—

HERITAGE

昭和50年男
Born in 1975

デジタル版には、表紙画像や目次に掲載している記事、
画像、広告、付録が含まれない場合があります。

掲載情報は原則として奥付に表記している発行時のものです。

以上をご理解の上、ご利用ください。

昭和50年男

Born in 1975

今なお根強い人気を誇る『機動武闘伝Gガンダム』30周年を記念して、
期間限定生産版Blu-ray BOX(2016年9月、11月発売)と同仕様・同価格の特装限定版でリリース決定!!

みなさんお待ちかねー!
第13回ガンダムファイト
レディー・ゴーッ!!

機動武闘伝 Gガンダム 石破天驚 Blu-ray Box

第壱巻&第弐巻

3月27日(水)発売 価格:各37,400円(税込)

▲第壱巻 商品展開イメージ

▲第弐巻 商品展開イメージ

http://www.g-gundam.net ©創通・サンライズ

EMOTION BANDAI NAMCO
発売・販売元:株式会社 バンダイナムコ フィルムワークス
お問い合わせ先 バンダイナムコフィルムワークス〔お客様センター〕 Eメール:support@bnfw.co.jp
営業時間:午前10時～午後5時(土・日・祝日および年末年始を除く)

あなたの一票でベストアニメソングが決まる！

80年代アニメソング総選挙 ザ★ベスト100

1980年代の人気ナンバーワンアニメソングはどれだ!?
あなたの心に残る好きな楽曲にぜひ投票ください。
皆さんが投じた票の結果でベスト100を決定します。

投票期間
2024年 2月9日（金）▶ 2024年 3月10日（日）

結果発表
2024年 4月6日（土）

投票ルール

80年代（1980年1月1日～89年12月31日）に世に出たアニメ作品（テレビ、映画、OVAなど）のオープニング、エンディング、挿入歌より選出した200曲から10曲を選んで順位付けしてください。

投票サイト

投票はこちらから!

https://reminder.top/80s_animesong/vote/

昭和50年男　Re:minder　歌 歌謡ポップスチャンネル

｜主催｜昭和50年男／Re:minder - リマインダー／歌謡ポップスチャンネル
｜メディアパートナー｜「9の音粋」（BAYFM）／「ラジオ歌謡選抜」（FMおだわら）

昭和50年男
Born in 1975

定期購読会員大募集!!

期間限定キャンペーン

年間17% OFF!!

今ならなんと!

月額990円(税込)が 初回1冊分無料!!

※2回目以降は月額990円(税込)をお支払いいただきます。

お申し込みは右記のQRコードからできます。

昭和カルチャー倶楽部

買いに行く手間なし!

毎号送料無料で「昭和50年男」をお届け!

隔月刊・偶数月(2・4・6・8・10・12月)11日発売。
毎号発売日までに自宅に届きます。

次号の到着が楽しみ!

編集部から毎週〈会員限定〉メルマガを配信

編集秘話に、取材レポートなどなど、
誌面に載らない情報をメルマガでお届けします。

昭和50年男とは? <隔月刊・偶数月(2・4・6・8・10・12月)11日発売>

「ただ懐かしむだけでなく、ノスタルジックな共感や情熱を、明日を生きる活力に変える」をテーマに、夢あふれていた少年時代を振り返って当時流行った事物を紹介したり、同世代へのインタビューで50年生まれたちの今を切り取ります。1975年生まれ、'80〜'90年代育ちの全男子に贈る! …でももちろん、昭和を振り返りたい、知りたい方でしたら、世代や性別を問わずにお楽しみいただけます。

お申し込み締切 2024年3月25日(月)

※「昭和50年男 2024年5月号」(4月11日発売)よりお届けいたします。

お問い合わせ MAIL : customer_inquiry@heritage.inc TEL : 03-3528-9791(株式会社ヘリテージ マーケティング部)

昭和50年男 Born in 1975

CONTENTS

2024 March
vol.027

表紙：『北斗の拳』（「第134話 闘気を撃つ！の巻」原画）
©武論尊・原哲夫／コアミックス 1983

連載

096 談駄団!
097 コミックキャラバン
098 DJフクタケの謎の円盤POP
099 男子ファンシー道
100 直角が行く。
102 高橋名人の冒険時代
122 DJ BLUEの音楽探訪 うらばん
093 今月のコレ欲しい! アレ行きたい!

S50's NOW 2023

104 1911年から続く
Leeのヴィンテージをよみがえらせろ!!
魂の復刻プロジェクト
108「平成仮面ライダー」の代表作が令和によみがえる!
『仮面ライダー555 20th
パラダイス・リゲインド』
112 谷村有美 セレンディピティ
幸せの連鎖 ゲスト・中村 収
118 土屋敏男のテレビの記憶
東京演芸界の生き字引、高田センセー登場!
ビートたけしと共に時代をブチ抜く!

皆様の声が『昭和50年男』を作る！
アンケートへのご協力お願いします!!

『昭和50年男』では、読者の皆様へよりおもしろくより共感できる記事をお届けするため、毎号の特集に関するアンケートを実施してます。
ご協力、よろしくお願いします。

※ご回答期限：2024年3月31日（日）

巻頭特集 006

オレたちが追いかけた漢
—マンガ編—

CHAPTER1 漢語り

008 二人が本音をぶつけ合う！
原 哲夫×ケンドーコバヤシ
オレたちが追いかけた漢

CHAPTER2 北斗の拳

016 画か？ それとも写真か？ 論争が起こったリアルさに衝撃！
ケンシロウから受け継いだ一途な愛を貫くカッコよさ
よゐこ 濱口 優
022 愛深きゆえに哀しい男、恋さんが語る
男に必要なのは〝強さ〟と〝やさしさ〟
シャンプーハット 恋さん
027 劇場版主題歌「Heart Of Madness」は…
ケンシロウとユリアの二人のテーマだ！
子供ばんど うじきつよし
032 マンガ・音楽・映画のネタがことごとく直撃！
You（北斗の拳）はカルチャーShock!
036 編集部がセレクト！
憧れの強敵（とも）

CHAPTER3 花の慶次—雲のかなたに—

040 男に生まれてきたからにはかくありたい
前田慶次という鑑
アニメーション作家 今川泰宏
046 天衣無縫の傾奇者
義の武将 直江兼続
声優 浪川大輔
050 編集部がセレクト！
手本にしたい武士（もののふ）

CHAPTER4 漢を描くマンガ家

054 外道どもを地獄に堕とし続けて40年超
平松伸二の正義
060 動物バトルマンガの頂点！
『銀牙 —流れ星 銀—』高橋よしひろの描く犬の男気物語
066 オレたちの十代を熱狂させた疾風伝説！
作画・所 十三が語る『特攻の拓』誕生秘話

CHAPTER5 自己を育てた作品・人

072 昭和50年女・久保ミツロウがマンガ原体験を初めて棚卸し
ひん剥かれるマンガが好きなんです
078 トキワ荘の頼もしいアニキ
竹村よしひこが語る寺田ヒロオの横顔
086 昭和50年男・魚乃目三太が愛読マンガから学んだ
やさしさを込めた〝人の物語〟を描くこと

番外編

091 本誌スタッフが憧れた5人の漢たち

※本誌掲載の価格はすべて税込です。

特集

オレたちが追いかけた漢

マンガ編

オレたち昭和50年生まれは、マンガの隆盛期を謳歌していた世代である。幼少期に『コロコロコミック』『コミックボンボン』でマンガの入口をくぐり、三大少年マンガ誌の『週刊少年ジャンプ』『週刊少年マガジン』『週刊少年サンデー』を読み出すとますますマンガへの興味が広がっていった。

そこで、今号では印象的な男性キャラクターに注目して、愛読したマンガ作品を集めている。圧倒的な強さを誇る男、勇気と知恵で道を拓いて進む男、愛とやさしさにあふれた男、元気で熱い男、面倒見のよい兄貴タイプの男…。オレたちの胸を熱くした男性キャラクターを〝漢〟としてくくり、彼らの魅力に迫ってみたい。今のオレたちはアノコロに追いかけていた漢にどれだけ近づけたのだろう!?

己の身がかわいくて
泣く男など…
奥羽の戦士に
一匹もおらんぜ
（ジョン『銀牙伝説WEED』）

やはりこの命
捨てねばなるまい…
（ジュウザ『北斗の拳』）

依頼主の心が
オレの心を
ふるわせた時――さ!!
（冴羽 獠『シティーハンター』）

でも…私は…
私は嘘をつきました…
（野村省吾『戦争めし』）

いい油（ゆ）だったぜ
（富樫源次『魁!!男塾』）

てめーはおれを
怒らせた
（空条承太郎『ジョジョの奇妙な冒険』）

不良少年だぜ

虎は……なにゆえ強いと思う？
もともと強いからよ
（前田慶次『花の慶次―雲のかなたに―』）

「いいよ」って
どこまでいいの!?
いつかちゃん？
（藤本幸世『モテキ』）

理くつじゃないんだよ、
人をしんじるってことは。
（高畑和夫『エスパー魔美』）

哀しい男よ
だれよりも
愛深きゆえに
（サウザー『北斗の拳』）

地獄に堕ちろ〜!!
（雪藤洋士『ブラック・エンジェルズ』）

!?
『特攻の拓』

だってオラは
人間だから
（ジェロニモ『キン肉マン』）

死ぬまえにせめて
これから生きる若者たちのために
道しるべをつけてやるのが
われら老兵の使命よ！
（紅桜『銀牙―流れ星 銀―』）

みんなで幸せになろうよ。
（後藤喜一『機動警察パトレイバー』）

一人の人間が自分以外の人のために、
人生の幸せの何分の一かでも犠牲にするのは
大変なことなんだ。たとえ、親と子でも……
（平賀＝キートン・太一『MASTERキートン』）

秀人は・・・・オレの“マブダチ”だ!!
（浅川 拓『特攻の拓』）

てめえらの血は
なに色だーっ!!
（レイ『北斗の拳』）

俺達ァ健康優良
（金田正太郎『AKIRA』）

※本誌に登場する作品から印象的なセリフを抽出しました。

『北斗の拳』や『花の慶次 ―雲のかなたに―』で美しく強い男を描いたマンガ家・原 哲夫と、原の作品をこよなく愛する熱い男のケンドーコバヤシの対談が実現! 魅力的な登場人物はどのように生まれ、読者は彼らのどこに惹かれたのか。そしてオレたち昭和50年男が目指すべき男の姿とは!?

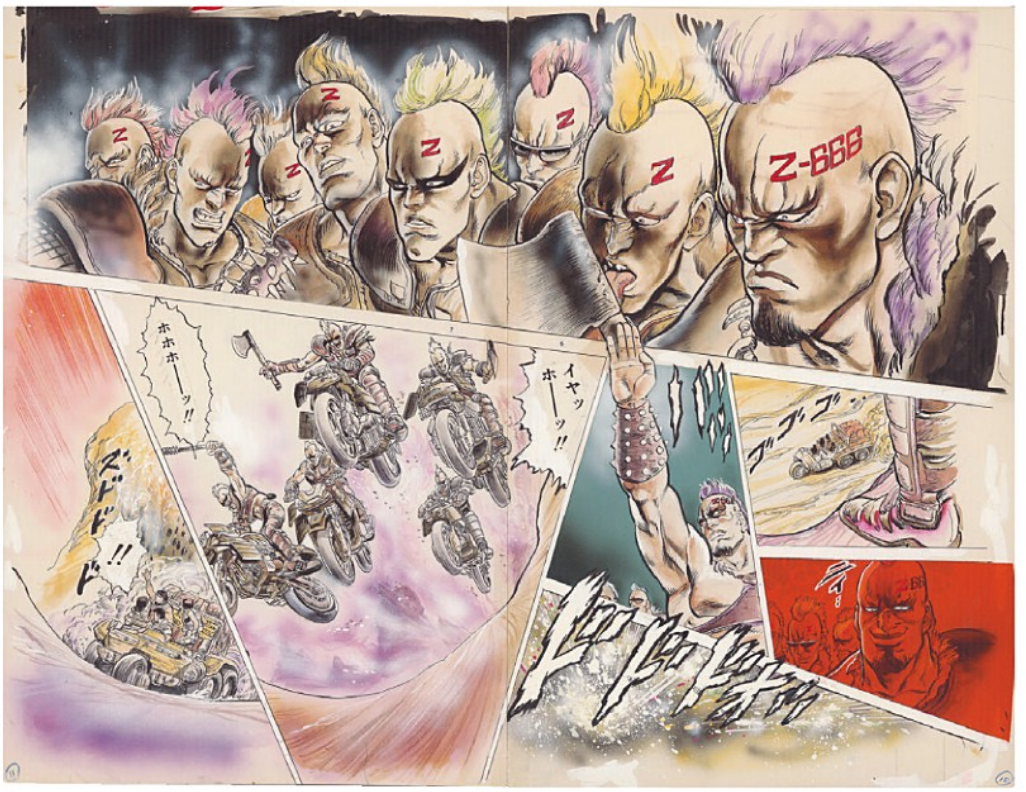
取材・文：フジジュン　撮影：吉場正和

CHAPTER1 漢語り

二人が本音をぶつけ合う!

原 哲夫 ケンドーコバヤシ

オレたちが追いかけた漢



第1話の巻頭カラーページ。大気の熱まで伝わる渾身のタッチとバイクやクルマの細かな描き込みに心を奪われる

――昭和50年男は小学校4年生の頃、アニメ『北斗の拳』が始まって衝撃を受けて、原作を読んでより好きになったという人が多い印象です。昭和47年男のケンコバさんは、いつ頃から読んでいましたか。

コバヤシ 僕は『少年ジャンプ』の連載第1回から読ませていただいてます。

原 何歳の頃ですか？

コバヤシ 小学校6年生くらいですかね？だから、最初からちゃんと理解して読んでました。6年生なんて、まだ納税してないだけで一人の立派な男ですからね。

原 あははは（笑）。

――『北斗の拳』1話目を読んだ感想は覚えていますか？

コバヤシ ちょっと刺激の欲しい年頃だったので。自分の欲しかったものとジャストフィットしたっていうのはありました。人のお腹から腸が飛び出す描写なんて初めて見ましたからね（笑）。

原 『遊星からの物体X』とか観てなかったですか？

コバヤシ 観たのは中3くらいになってからですね。

原 僕はあの辺の映画を観て、「こういう感じか」というのがあって。

コバヤシ ちょっとグロい描写に、作画への影響があった？

原 「こういう描写が世の中には普通にあるんだな」って。

コバヤシ いやいや、臓物がぐちゃぐちゃ出てるマンガなんて、そこらになかったですよ（笑）。

原 いや、映画やエンタメの世界では、すでにやっているんだなと思ったんです（笑）。

コバヤシ 僕のそういう作品との出会いは『北斗の拳』でした。

原 あの頃、マンガで表現した人はあまりいなかったかもしれない。永井 豪先生くらいかな？

コバヤシ 永井 豪先生も刃物で刺すのはあったと思うんですけど、その続きを描いたのは原先生じゃないですか？脳しょうや内臓まで飛び出してくるのは（笑）。

原 そこはあまりリアルに描かないように、陰影で飛ばして描いていたんですけどね。

コバヤシ だから、小学校高学年くらいの僕にとってちょうどいい刺激だったのかもしれない。

――小学生の頃、『ノストラダムスの大予言』にすごくおびえてたので、作品の設定にもバシッとハマって。世紀末の世界観がすごくリアルに感じました。

原 それは僕らも子供の頃から刷り込まれてて。世紀末後の世界というのは、想像しました。

コバヤシ 「そういうもんや」と思ってましたよね。『北斗の拳』では、〝199X年〟って言ってましたけど、「1999年やろうな」と思ってて。僕、99年の年齢は27歳やったんですけど、貯金ゼロにしてましたからね。「どうせなくなんねんから」って（笑）。

原 僕は37歳の年だったんですけど、その年の正月に核ミサイルが落ちてくる夢を見ましたよ（笑）。だから何もなく過ぎた時、「あ、こなかったんだ」って。

コバヤシ いや、ガッカリでしたよ。ガッカリ言うたら怒られますけど（笑）。

――『北斗の拳』を読んでいると、こうした事態では大事な人を守るために強くなければならないとも思いました。

コバヤシ 僕はそうなった時に備えて、「免許を見せろ」とは言われないでしょうけれども一応、バイクの免許をとって。いつでもモヒカンにできるようにバリカンも買っておきました（笑）。そこは僕の弱いところですけど、「略奪する側にまわらないと、守り一辺倒はしんどいぞ」と思って。

原 ケンシロウ側ではなくて、雑魚キャラ側なんですね。

コバヤシ 完全に雑魚キャラですね。盗賊集団「Z（ジード）」側でしょうね（笑）。

世紀末に守り一辺倒はしんどいから略奪する側になろうと思っていました（コバヤシ）

©武論尊・原哲夫／コアミックス 1983

敵味方に限らず自分のルールを貫き通すところがカッコいい

オールカラーにしたかった第1話制作秘話

――原先生は48ページにも及ぶ『北斗の拳』第1話をどんな想いで描かれたのですか？

原 連載開始の前に読み切りを2本描いて、思い切り挑戦をしていたんです。自分が描きたかったブルース・リーや松田優作さんみたいなキャラを描いて、それでダメだったらあきらめようと思っていたら人気が取れちゃった。連載が始まるとなった時は、全力で死ぬ気でやろうと思いました。巻頭カラーも普通は3ページくらいですけれど、「7ページくらいほしい」と言って。本当はオールカラーで描きたいくらいだったんですけど、当時にはなかったページ数を描いて。

――ひとコマごとの熱量が今見てもものすごいです。

コバヤシ 僕はこの熱量にアテられたんですよ。それで雑魚キャラ側にいこうとしたんです。

原 そっち側に漢を感じたんですね（笑）。

――ケンシロウのモデルとしてブルース・リーと松田優作の名が出ましたが、憧れた実在の漢はどなたでしたか？

原 小学生の頃は松田優作さんが憧れで、中学生の頃にブルース・リーのアクションに憧れて。ただ、僕の場合は憧れの人を絵に描きたいと思うタイプなので、こうなりたいと思ったことはないですね。

コバヤシ 当時からマンガ家になりたいと思っていたんですか？

原 小学校2、3年生の時には決めてました。親父がサラリーマンで、朝早く出かけていくんですけど「絶対起きられない！」と思って（笑）。

コバヤシ あはは。でも、マンガ家になったらそれ以上に眠れない日が続くわけですよね？

原 寝られないのは平気なんです、朝早く起きるのがダメで（笑）。親父のことはカッコいいと思っていたし、憧れていましたけどね。

――ケンシロウは多くを語らず背中で見せる昭和の親父みたいなカッコよさもありますよね。

原 もちろん。親父がそういうタイプで、ジャケットを肩に羽織って、おみやげのスイカを指にかけて帰ってくるみたいな。

コバヤシ いなせですね。

原 僕と違ってスポーツマンでケンカっ早い。ケンカの仲裁をして血だらけで帰ってきたり「キャッチボールやるぞ」って外に連れ出されたりして。親父はお尻をクイッと向ける投げ方をしていて、後に野茂（英雄）を見てそれがトルネード投法だったとわかったんです。

コバヤシ 早すぎたトルネード投手（笑）！ 理論的にすごい投法らしいですからね。

――ケンコバさんが憧れた漢は？

コバヤシ 僕はばあちゃんっ子やったんですけど、「男はしゃべるな。口数の少ないのが男だ」というのがばあちゃんの教えやったんで、今の自分を見せられないです（笑）。

原 普段は無口でしょう？

コバヤシ どっちか言うたら、口数は少ない方やと思います。でも、寡黙というほどやないし、自分では言いたくないひと言も言っちゃうんです。たぶん、ケンシロウやったら、鍋を触った時に「熱っ！」とか言わないでしょ？「寒っ！」とか、「臭っ！」とか（笑）。あと僕、原先生の作品に出てくる漢たちの好きなところがやっと割り出せました。これは変な風に取ってほしくないんですけれど、作中の登場人物は精神が成長しないんですよ。最初から自分のルールが決まっている漢たちが、自分のルールを貫きにやってくるんです。他の少年マンガって、未熟な人たちが成長していく物語なんですけど、原先生の作品は敵味方を含め、自分のルールのぶつけ合いをしているところにカッコよさを感じるんです。

原 僕は成長物語が本当に嫌いだったんですよ。『巨人の星』とかそういうので育ってるから、努力、根性みたいなのが少年マンガには必要だとされていて。

コバヤシ 『少年ジャンプ』やと、〝友情・努力・勝利〟ですね。

原 そう。そういうのが本当にイヤだと思っていて、僕は完成

した大人が描きたいと思っていたの。年少の子供向けに描く気はなくて、小学校5年生くらいに読んでもらいたかったんです。

コバヤシ じゃあ、オレはちょうどよかったんですね（笑）。でも、そこに気づけたのは最近で、「なんでこんなに共通して、どのキャラも好きなのかな？」と思った時、そこやったんです。全員が悩まないというか、最初から「俺はこういう男だから」って出てきますからね。

――ケンシロウは愛や哀しみを知って強くなっていきますけれど、それは成長譚ともちょっと違いますよね。

原 僕は成長譚になるのがイヤだったんですけど、武論尊先生や編集部の考えもあったんです。たとえば、回想でケンシロウがシンに負けるシーンがあるけれど、僕はイヤだったんです。でも物語上そういうことにしなきゃということで、そこは言うことを聞いて。

コバヤシ 過去にああいうことがあったから今があるというのを、後に知るパターンがよかったですよね。

原 僕はマンガの描き方とかストーリーの作り方とかを全くわからなくて、やりたいことを感覚だけでぶつかってやっていましたから。それを大人が無理やり直してくれていたという感じで（笑）。ケンシロウは少し成長しているような感じに見えちゃうかな？と思いましたけど。本当は〝松田優作＋ブルース・リー〟みたいな完璧な漢でいきたかったんで、ケンシロウが負けるところとか見たくなかったんです。

レイの南斗水鳥拳によって洋服を切り裂かれ、あられもない姿になったマミヤ。原の高い画力で描かれたヌード画にドキッとさせられるが、純白のパンツがレザー製で、汚れのつきにくいものであったという衝撃の事実が明らかになった

コバヤシ 原先生がそのつもりやったってことがわかったんで、この気持ちを言えてよかったです。あと女性にも『北斗の拳』から学んでほしいところがあって。マミヤがレイに服を切り裂かれるシーンで、「あの水のない時代に、ここまで清潔に保てるか？」ってくらい真っ白なパンツを履いてるんです。

原 あれは白黒だからわかりづらいけど、レザーやスエードの起毛のイメージだったんで汚れが目立たないんですよ。

コバヤシ そうやったんですか!? これは40年目にして明かされた新事実ですね（笑）。

原 だから光沢があるんです。

コバヤシ（画を見て）ホンマや、影がありますね！

原 あと、マミヤの村は水が豊かという設定だったんで、風呂には入れたんですよ。

コバヤシ 下着をじゃぶじゃぶ洗ってもよかったんですね（笑）。

原 なぜ、レイがパンツだけ残したのか？って疑問はあるけど。

コバヤシ コンプライアンスギリギリのところで踏みとどまったんでしょうね、レイが（笑）。

原 あのシーンもやりたくなかったけど、堀江信彦さん（当時の編集者）に「描け」って言われて。「モッコリさせなきゃダメだ」っ

雲のように自由に生きるジュウザ。水浴びする女性の輪に飛び込んでイチャイチャするうらやましいシーン。イケメンで我流拳で闘う姿も美しく、ファン人気も高い

て。

コバヤシ わはは。結構、容赦ない言葉で言うんですね（笑）。

ジュウザがいたから、前田慶次が生まれた!?

――ケンコバさんが『北斗の拳』で、最も漢を感じるキャラは誰ですか？

コバヤシ 多くの人が言うでしょうけど、男としてジュウザのように生きてみたいというのはありますけどね。いちばん単純な理由としては、「たくさんの女の人と風呂に入りたい」というのがありますけど。「こんなに縛られずに生きられたら素敵やろうな」って憧れるところはありますね。

――ジュウザはすごく人気のキャラですが、『花の慶次―雲のかなたに―』の前田慶次にも近いところがあります。

原 実際にジュウザができたので、慶次につながったんです。僕は笑顔を描くのがイヤで。

コバヤシ え？ 前田慶次と言えば笑顔じゃないですか。

原 そう。笑顔と言えばマンガの基本じゃないですか？ でも僕はそれがやりたくなかった。だけれども『北斗の拳』が終わってやることがなくなった時、「笑顔が似合うさわやかな漢を『花の慶次―雲のかなたに―』で描こう」となって。ジュウザとかアインとか、笑顔を描いていた数少ないキャラの系統でいこうかと思って描いたんだけど、笑顔が描けなくてすごく苦労して。原稿を上げた後に、堀江さんに描き直しをさせられましたね。

コバヤシ ちゃんと笑えてないと（笑）。演技指導みたいなのが入ったんですね。

原 そうそう。演技指導や画の指示みたいなのが、当時はすごくあったんですよ。

――ジュウザや慶次のようにいつも自由で笑顔でという生き方は漢として憧れるけど、なかなかできるものではありません。

コバヤシ 時代背景を考えても、そんなに明るくいられる時代じゃないのに、それでも笑っているのがいいんですよね。

原 ただ、僕は「漢とは」みたいなことにあんまり興味がなくて、押しつけられて描いていたという感じでした。武論尊先生や堀江さんがすごく高度なことを僕に教えてくれるんですけど、僕はそんな次元で考えていなかったです。ケンコバさんと一緒で雑魚側の人間なので（笑）。

コバヤシ 原先生も略奪する側の人間でしたか!?（笑）

原 僕も女の子がいっぱいいる所に飛び込みたいとか、そういうタイプなので。

コバヤシ 男だったら誰だってそうですよね!?（笑）

原 でも、堀江さんは〝漢の生き様〟みたいなところにすごくこだわっていたし、「それを描かなきゃ少年誌じゃない」と言っていました。それはそれでいいと思ったし、僕はマンガ家として作品がよくなるように魅力的に見えるように一生懸命描くだけで。僕には「漢とは」みたいな持論がないんです。

――そんななかでも先生が漢らしさを感じる人っていました？

原 僕はマンガ家に憧れて育っ

村の食料を確保するために老人が命がけで手に入れた種もみを、死んだ老人の墓に蒔くシーン。「無神経さがケンシロウっぽい（笑）」（原）

雑魚キャラも決して手を抜かず、ヘルメットやアイテムなどを毎回変えていたという原。すぐに死んでしまう雑魚キャラも強烈に印象に残るゆえんだ

ているので、実際に会った人では本宮ひろ志先生が漢らしくて本当にカッコよかったですね。すごく目がキレイなんです。僕がアシスタントで入った高橋よしひろ先生の仕事場では先輩たちにも本宮プロの関係の人が多くて、みんな本宮先生の話をしていました。

コバヤシ マンガの流派でいうと、本宮流なんですね。

原 そうですね。僕も本宮先生が大好きだから、そこに入れたのがうれしかったし。「本宮先生ってカッコいいよね」ってみんなが話していて、本宮先生の武勇伝を語りながらマンガを描いたりしていて。武論尊先生もすごくおしゃれでカッコいいですよ。

コバヤシ そうなんですね。ひとつ聞きたいことがあるんですけれど、先生が思っているよりも人気が出ちゃうキャラクターってありましたか？

原 一回しか出てないのに、皆さんがずっと覚えてくださっているキャラはありますね。でかいババアとか、火炎放射器の男とか。「いつまでその話を言ってくれるんだろう？」と思って（笑）。

コバヤシ 映画『マッドマックス』の最新版に火炎放射器を撃つようなキャラが出てきますからね。『マッドマックス』を参考にして『北斗の拳』を描いたはずやのに、先祖返りしてる感じもあります。

原 種もみのじいさんのエピソードもパクられてたり、こっちがパクったらパクり返されてみたいなのがあるんですよ（笑）。

コバヤシ 「実るさ…下にあの老人が眠っている」って、じいさんが命がけで守った種をケンシロウが墓に蒔いちゃって。子供の頃にこのシーンを見て「ケンシロウ、むちゃくちゃ言いよるな」と思ったんですけど、よく考えると人の死体から生まれるバクテリアって確かに植物をよく育てそうですよね（笑）。

原 僕はいい話だと思って描いてたんで、「そんなんで実るのかよ!?」って後でツッコまれてびっくりしたんです（笑）。

コバヤシ 硬い岩盤の上にパラパラやっていましたからね。

原 その無神経さがね、確かにケンシロウっぽいです（笑）。

――「こういうのがみんなにウケるんだ！」と想像以上に人気が出て驚いた主要キャラクターはいましたか？

原 実際、ラオウなんて人気投票をしたら、ケンシロウより段然上でしょう？

――『北斗の拳』公式サイトのキャラクター紹介のアクセスランキング（※）では、1位ジュウザ、2位カイオウ、3位ラオウで、ケンシロウは10位止まりです。

コバヤシ そうなんですね。でも、主人公だけでなく敵キャラがそこまで人気が出てしまうマンガって、すごいですよね。

本当はケンシロウを殺そうと思っていた

原 でも僕は、本当はケンシロウを引き立たせるために、ケンシロウに勝ちそうな最大のキャラを必死に考えていました。やっぱりケンシロウをいちばん立てたかったんですけど、他のキャラがどんどん人気になってしまって。

コバヤシ 皮肉にも、というか。

原 脇役の人がそんなに知られていて人気があるってあんまりないんで、うれしいですけれどね。

僕には「漢とは」みたいな持論がないんです（原）

©隆慶一郎・原哲夫・麻生未央／コアミックス1990

自由を愛する天下御免の傾奇者、『花の慶次―雲のかなたに―』の主人公・前田慶次。明るく豪快で心やさしい、誰からも愛される人たらしであり、いくさ人として圧倒的な強さを見せる。“漢のなかの漢”と言えるその生き様は日本人の心をつかみ、強烈な魅力と存在感を放つ

※…https://hokuto-no-ken.jp/hokuto_archives

ケンシロウは死ななかったことで伝説になれなかったんですね

【PROFILE】 ケンドーコバヤシ
昭和47年、大阪府生まれ。マンガ、アニメ、プロレス、バイク、クルマを愛好する。マンガをテーマにするトークバラエティ『漫道コバヤシ』（フジテレビONE ／月1回放送）に司会者として出演中

――ラオウはケンシロウに敗れた後に、「実はラオウは…」という人間味がある話や少年時代のエピソードがいろんなキャラの回想で出てきます。それがますますラオウに好感を覚えさせますよね。

原 ラオウのあの死に方は、レジェンドになりますもんね。本当はね、僕はケンシロウを殺したかったんです。

コバヤシ え、ケンシロウを殺したかった!?

原 僕はやっぱり松田優作さん世代なんで。

コバヤシ なるほど。『蘇える金狼』のラストでも、主人公の松田優作さんは息絶えます。

原 それもそうですし、やっぱり『太陽にほえろ!』のジーパンの死に様ですよね。たばこを吸いながら血まみれになって、「なんじゃこりゃあ!」って叫ぶあのシーンのカッコよさ。

コバヤシ なるほど。ケンシロウの死に様のカッコよさを描きたかったんですね。

原 そう。あのジーパンのラストみたいな死に様、非情美の世界を描きたかったんです。でも、ケンシロウは最後まで死ななかった。だから、他のキャラと比べた時に人気が低いんです。

コバヤシ 死ななかったことで、伝説になれなかったんですね。

原 そう思います。「これからも旅が続く」みたいな感じで終わったんで本当はそれがイヤだったんだけど、描いてるうちに「この流れだとそうなるな」と思って。『太陽にほえろ!』のショーケンも松田優作も殉職したから、〝主人公は最後に必ず死ぬもんだ〟と子供の頃から思い込んでいただけだったんですけどね。

コバヤシ 確かにケンシロウがものすごく強い壮絶なライバルたちじゃなくて、何気ない青年の刃とかで死んだら伝説だったでしょうね。

原 それがおもしろいでしょうね。でも、サウザーが少年に脚を刺されているから。

コバヤシ そうか、そういうシーンは別のキャラでやっちゃってるんですね。

原 そう。他のキャラで発散しちゃっているから、ケンシロウにできなかったんですよね。死ぬ人は美学を語って死んでいくでしょう? だから、どんな悪党でも美しくて目立っちゃうんですよ。それがケンシロウだけ結末がないまま終わっちゃったから、印象が弱くなってしまうんです。

コバヤシ 昔、立川談志師匠もおっしゃっていました。「芸人っていうのは生き様で見せるな、

死ぬ人は美学を語って死ぬから どんな悪党も美しく目立つんです

【PROFILE】原 哲夫／はらてつお
昭和36年、東京都生まれ。高校卒業後、高橋よしひろのアシスタントを経て、1982年に『鉄のドンキホーテ』で連載デビュー。『北斗の拳』の他、『花の慶次 ―雲のかなたに―』『公権力横領捜査官 中坊林太郎』など多くのヒット作がある

死に様で見せろ」って。

原 だから、死に様で語らせていたところはありましたね。慶次も結局、引き際でしたからね。

――ケンシロウが死ぬならば、やはりラオウ戦の後でした？

原 そうですね。そこでしょうもないことで死ぬのがよかったですね。やっぱりケンシロウは人を殺めてるので、殺めたヤツは死ぬという鉄則があるんです。

コバヤシ あははは！ なるほど、因果応報といいますか。それで言うたら、ケンシロウは何万回死んでも足りないですよ。

原 いくら正義とは言えね、殺しすぎでしょ？（笑）。そこが腑に落ちてないから、『蒼天の拳』では霞 拳志郎が死ぬんですよ。そこまで描けてないですけど。

――最後に昭和50年男読者に向けて、漢として生きるためのアドバイスをください。

コバヤシ 今日教わりましたよ。漢は死に様や何かの締め方、「エンディングこそ本気を出せ！」というのが大事かもしれないです。

原 それですよ。僕も「引き際をきれいにできるのか？」というのが最大のテーマだと思っています。

コバヤシ これは新たなテーマを投げかけられましたね。僕らも50代になって、引き際を考える年代になるわけですから。

原 僕なんて絵描きだから、死ぬまで描いていても誰にも文句を言われないから。それは幸せだと思いますけどね。

コバヤシ はい、原先生にはいつまでも描き続けてほしいです。

«« 最新 INFORMATION

北斗の拳40周年大原画展 ～愛をとりもどせ!!～

連載開始から40周年を記念し、史上初・過去最大の大原画展が開催中。ラオウ編までの136話より約3000ページと連載当時描かれた400枚の彩色原画を厳選し、「愛」をテーマに6つの章で迫力のストーリーをたどる。2024年夏に神戸、2025年春に福岡と巡回する予定。

日 2024年3月1日（金）～3月31日（日）
場 金山南ビル美術館棟（名古屋）
HP https://hokutonoten.com/
X @40thHokutoNoTen

3月 名古屋 開催!

※本記事の『北斗の拳』のマンガ写真は原画です。すべて「北斗の拳 40周年大原画展 ～愛をとりもどせ!! ～」に展示されます。

画か？ それとも写真か？ 論争が起こったリアルさに衝撃！

ケンシロウから受け継いだ一途な愛を貫くカッコよさ

よゐこ 濱口 優

子供から少年へと成長する過程で出会った『北斗の拳』。当時覚えた衝撃は40年経った現在でも忘れることはない。そして、濱口 優の生き方にも知らず知らずのうちに大きく影響を与えていた。

取材・文：安田慎吾　撮影：甲斐俊一郎

主人公・ケンシロウの必殺技・北斗百裂拳。「あたたたたーっ!!」の掛け声とともに相手の秘孔を連打。『北斗の拳』世代ならば必ず一度は真似しているはず

テレビ番組『アメトーーク!』の〝北斗の拳芸人〟にも出演し、芸能界きっての『北斗の拳』通として知られる濱口。この作品との出会いは、偶然手にした『週刊少年ジャンプ』がキッカケだった。

「ある時、アパートの前にジャンプが古雑誌で出されていたんです。ひもが外れていたからちょっと読んでみたんですよ。そこで初めて見たのが『キン肉マン』だった。ウルフマンがスプリングマンにバラバラにされているシーンが目に入ってきて衝撃でしたね。それまでは『コロコロコミック』とか『コミックボンボン』を読んでいて、こんなバイオレンスなシーンなんてなかったですから。『なんだこれは!?』って感じでしたね。昭和のコンプライアンスなんてない、規制されていないものが、ページをめくった瞬間、ドーンって飛び込んできた感じです」

この時に受けたショックで、他の少年たちと違わず、一気に『キン肉マン』、そして『少年ジャンプ』の魅力に濱口はハマっていったのである。

当時『少年ジャンプ』には、『キャプテン翼』『Dr.スランプ』『キャッツ♥アイ』『コブラ』といった、数多くの人気マンガが掲載され、いわゆる〝黄金時代〟へと駆け上がっていく時期だ。

「誰よりも早く読みたいから、他よりも早く売っている店に買いに行くんですよ。本当は月曜発売ですけど、土曜日に売ってるたばこ屋があったんで。そこはカーテンの裏の奥に『ジャンプ』を隠していて、僕らが買いに行くと、おばちゃんが闇取引みたいに、そっと出してくる。そこに小学生が列をなしているっていう異様な光景でしたね」

同級生たちも『コロコロコミック』などの児童向けのコミック誌から『少年ジャンプ』に乗り換えていくなか、ついに『北斗の拳』の連載が始まった。

「もう衝撃的すぎました。今なら〝劇画タッチ〟という言葉で処理できますけど、当時はそんな言葉も知らなかったんで。あの画のリアルさが信じられなくて、写真に色をつけたんじゃないかって思ったくらいでした。これが人が描いた画のわけないやんって。ジャンプのなかでも異質でしたから。当時の僕らはあんなリアルな画を見たことなんてないんで、友達と『これは写真なのか画なのか』って論争になりましたよ」

受けた衝撃は、画のリアルさだけにとどまらない。その内容は、さらに濱口少年の心を撃ち抜くことになる。

「人が破裂してましたからね。(第一巻の冒頭をペラペラとめくりつつ)いや〜、今見てもヤバイですね。内臓が飛び出してますから。『キン肉マン』でウルフマンがバラバラにされて驚いていた僕らからしたら、これを見た瞬間『やったー!!』ですよ(笑)」

当時誰もが試した秘孔！南斗水鳥拳はプールで

連載開始と同時に少年たちを虜にした『北斗の拳』はすぐに少年たちの遊びのなかにも取り込まれていった。

「ケンシロウの真似をして、友達と秘孔を突き合うんですよ。でも、効かないじゃないですか。マンガだから当たり前なんですけど、あの時は〝経絡秘孔〟の存在を完全に信じていましたから。効かないのは自分たちのせいであって、ケンシロウはもっと深いところを突いているんじゃないかとか、いろいろと想像して試してみて、『こうじゃないんやろな』とか本気で悩んでました。北斗百裂拳も真似したりもするんですけど、100発打つのって本当に大変なんですよ。みんなで数えるんだけど、疲れてくる。こんなに多いのかって。それをケンシロウは一瞬でやっちゃうんだからすげぇなって。キャラ的にそれをやられる側の人も決まってましたよね。ハート様みたいに太っているやつがおもに狙われるんですけど、突然『あたたたたーっ!!』って打たれるから、いつも怒ってました(笑)」

『北斗の拳』の物語が進むにつれ、さまざまなキャラクターが出現する。当然、少年たちの間で行われていた〝ごっこ〟の幅も広がっていった。

「南斗水鳥拳のレイは、よく真似してましたね。レイって手を

当時はあの絵のリアルさが信じられなかった

©武論尊・原 哲夫／コアミックス 1983

たった一人で拳王侵攻隊と戦うレイ。「てめえらの血は なに色だーっ!!」の名台詞が登場したエピソード。アイリを守ったリンの涙を見て、完全ブチ切れモードに。こ、こわすぎる…。そして、アイリの台詞「わたしは戦う!! もう逃げたりしない」など、とにかく記憶に残るパンチラインが続出する回だ

横に振って敵を切るじゃないですか。あれをプールの時間、水でやるとできた気分になるんですよ。水面を切るように手を振って、水しぶきを立たせるのが気持ちよくて。あとレイがユダと闘った時に、水面に手をついて飛び上がるじゃないですか。あれも真似しようとしてましたね。もうちょっとで、できるんじゃないかって当時は思ってたんですけど、今思えば、本当に純粋でしたよね」

199X年にこんな時代がやってくると信じていた

当時の少年たちは今では考えられないほど純粋だった。そして迫りくる世紀末。誰もがこの世の破滅を心のどこかで信じていた。もちろん濱口少年も。

「199X年になったら、本当にあんな世界になってるんじゃないかって思ってましたからね(笑)。もちろん、世代的にノストラダムスの大予言も信じていたし」

『北斗の拳』に続々と登場する個性の強いキャラクターたち。その存在は、新たなエピソードが始まる度に濱口の心を奪っていった。

「ケンシロウはもちろんですが、南斗五車星が出てくるまではレイが好きだったんですよ。南斗水鳥拳の、あのしなやかな動きが好きで。五車星が登場してからは、雲のジュウザですね。それまでの『北斗の拳』に出てくるキャラクターって武骨な感じの人ばっかりだったじゃないですか。でも、ジュウザは違うんですよ。あの飄々とした雰囲気に心惹かれましたね。それまでのキャラクターたちと違って、闘わないで逃げたりするじゃないですか。最初の登場シーンも敵に小便かけてるっていう、あのフワフワ生きてる感じが好きでしたね。僕は『北斗の拳』のコミックスは読み返さなくても、話の内容ははっきりと記憶に残っているんですよ。なかでも、ジュウザの登場シーンは鮮明に覚えてますね。それだけ印象深かったんだと思います。その分、勉強に関しては頭に入れてなくて、頭の中は隙間なく『北斗の拳』で埋め尽くされていました」

勉強よりも『北斗の拳』。作品への愛というよりは、もはや作品のなかに入り込んでいたと言っても過言ではないだろう。

「レイとラオウが闘った時も、本気でレイに勝ってほしいって思ってました。感情移入というか、完全にマンガのなかにいました。だから、レイがラオウにやられてしまった時はショックがでかかったですね。指一本でやられましたからね。まさか、レイが馬上で。しかも指一本で」

マンガのなかの出来事を、現実で起きた事のように、感情が揺さぶられていたのだ。

その後84年にはアニメ化され、その流行にはさらに拍車がかかった。しかし、マンガから入ったファンのなかにはアニメの雰囲気に違和感を覚える者もいたようだ。

「僕はマンガ派とかアニメ派かっていうのは全くないですね。ケンシロウもキン肉マンも冴羽獠(『シティーハンター』)も同じ神谷 明さんが声優でしたけど、全く気にならなかったです。それよりも、ケンシロウの『あたたたたーっ!!』が、あんなに高い声だったのかとか、レイの『ヒ

経絡秘孔を突かれた相手は、身体の内部から破壊され無惨に破裂。表現の仕方は、現在よりもずっと自由だった昭和の時代にあっても過激なシーンだった

くても、ストーリーは記憶に残っているんです

プールの時間になると濱口が何度もチャレンジしたレイの南斗水鳥拳。そして鍛錬をすれば水面に立てるものと信じて疑わなかったが、実際に奥義・飛翔白麗を成功させた者はいない

ョォー』ってこんな感じなのかとか、新しい発見がありましたからね。唯一難点を挙げるとすれば、マンガは超リアルなタッチだったから、それに比べると、アニメはスッとしてて『ケンシロウ、色白すぎるやん』とは思いましたけど。映画の『北斗の拳』（86年）はすごかったですね。原作のカッコよさ、マンガと同じようにリアルなタッチで感動しました」

『北斗の拳』消しゴムはコンプリートできず！

マンガ、そしてアニメが流行するとそれに伴いグッズが登場。濱口はキン消しコレクターとしても知られるが、『北斗の拳』でも何かグッズを買い集めたりいたのだろうか。

「『北斗の拳』も、キン消しと同じような消しゴム人形がシリーズで出てたんですよ。大好きで集めていたんですけど、多分、不人気だったんでしょうね。すぐに終わっちゃったみたいで。キン消しみたいにデフォルメされているんじゃなくて、ケンシロウだったらちゃんと踏ん張ってカッコよくポーズをとっているんですよ。でも、レイは、原作と比べるとちょっと太ってて、もうちょっと細く作ってくれないかなって思ってました。ラインナップは、ウイグル獄長とかアミバ、ケンシロウの師匠のリュウケンもいたり、マニアックなキャラも商品化されていて、おもしろかったんですよ。でも、確かサウザーとかラオウはいなかった。きっと人気キャラは、分散して出すつもりやったんでしょうね。パート1から順番に、人気キャラを分散して出そうともったいぶっているんやろなって心待ちにしていたら、そのまま出なかった。ラオウはほしいですね。今でも出してほしいですよ」

コミックスを読み返さなラオウとの闘い後は『北斗の拳』ロスになるも…

『北斗の拳』のストーリーは、ケンシロウが長兄であるラオウを倒すことで、ひとつの区切りを迎える。ファンのなかには、ここで作品から離れていく人もいたが、濱口の『北斗の拳』に対する熱は冷めることはなかった。

「やっぱり、ラオウを倒した時点でひとつの物語が完結しているじゃないですか。だから、みんなと同じように『北斗の拳』ロスみたいのはありました。ただ、『ジャンプ』は読み続けていたから、作品から興味がなくなるというのはなかったんですよ。ロス感はありつつも、まだ『北斗の拳』を欲している自分がおって『次はどうなるんやろ？』という期待感はありましたね。そんな時に、今度はケンシロウが修羅の国に行くんですよ。修羅の仮面を被ったやつが出てきて強烈に強くて、そこがたまらんかったんですよ（笑）。たまらな

【PROFILE】 濱口 優／はまぐちまさる
昭和47年、大阪府生まれ。1990年に高校の同級生である有野晋哉とお笑いコンビ、よゐこを結成。シュールなコントで人気を博す。『めちゃ×2イケてるッ！』や『いきなり！ 黄金伝説。』などバラエティ番組で活躍。YouTubeチャンネル『濱口優と秘密基地』ではキャンプ動画やバイクのカスタム動画などを配信中

武骨なキャラクターがそろう『北斗の拳』のなかにあって、唯一柔和な雰囲気をもった雲のジュウザ。初登場で敵に小便をかけたり、女風呂に乱入するなど、自由な生き方は心なごむ癒やしの存在であり、憧れる少年も多かった

く興奮して『ヤバイぞこの国!』って思いましたね。一般兵レベルでこんなに強いんや…ケンシロウに傷をつけるなんてすごいなって、ひとりで興奮したのを覚えてます。いつの間にかロスの感覚は吹っ飛んでいましたね。でも期待した修羅の仮面は、後に大したこともなくってショックだったんですけど(笑)。もうちょっとがんばってって! 元斗皇拳のファルコとかも好きでしたよ。あとは、後半になってバットがデカくなって出てくるっていうのもグッとくるものがありましたよね。リンも大人になって出てくるとか。マンガを読みながら、年月と成長が感じられたのも、感慨深いものがありました。ケンシロウもサングラスをかけているとか、ファッションも気になってたし。肩当てがデカくなってるとか(笑)。装飾も変わっていたり、腕に付けているやつも変わったり…。ずっと同じ服を着ているみたいだけど、ケンシロウって意外にオシャレなんですよ」

子供だからこそ理解する虚構と現実の線引き

ラオウとの闘争終結後も『北斗の拳』から心離れることなく、生活の一部と化していた濱口には心に残るセリフもあった。

「レイの『てめえらの血はなに色だーっ!!』っていうのは、印象深いですね。こんなキレ方あるんやなって…熱血のひと言ですよね。赤い血が流れてないってことですよね。こんな酷いことをするのは人間じゃねえっていうのを、直接的にではなく、こんな言葉で表現するのがカッコいいなと思いましたね」

多感な時期ゆえの女性キャラへの思いもあった。

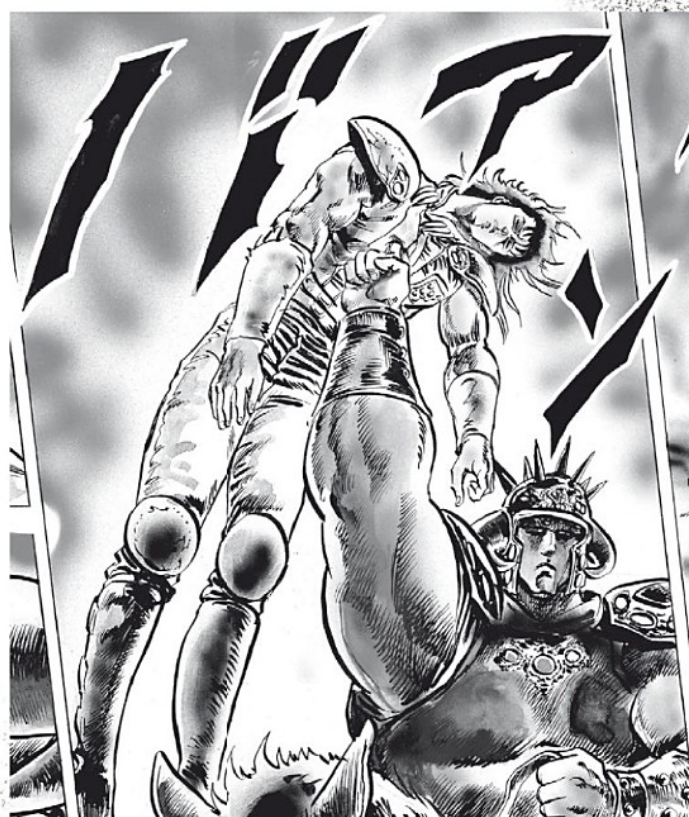
「美人が多かったですよね。いい具合の衣装だったり、露出具合だったり、少年マンガとしてはこれぐらいがいいですよね。レイがマミヤの服を南斗水鳥拳で切っちゃうとか、今じゃ怒られちゃいそうですけどね」

当時、フランスでは人間が破裂するなど『北斗の拳』のバイオレンスな内容に対し抗議の声が上がったという。

「それを聞いた時には、そんなこと言う国があるんやって驚きましたね。うちの母ちゃんなんて『そんなのマンガやろ? ホンマに血を見たいわけじゃないから、ええやろ』って言ってたくらいですから。でも、ちょっと日本もそうなってきていますよね。もうテレビで『北斗の拳』はやらないですもんね。やっぱり、内臓が破裂したりするのは、テレビで放送するのは無理なんですかね…」

現在、子供をもった濱口にとって、『北斗の拳』はどう映っているのだろうか。

「別に子供が読んでもいいと思いますよ。真似をしていたら『ホンマに叩いたらあかんで』とは言いますけど、そうやって覚えていくこともありますからね。僕らの頃は、同時期に『必殺仕事人』も流行っていたんですけど、ペンを使ってかんざしの秀(飾り職人の秀)さんの真似を



濱口が目を疑った衝撃シーンが、このラオウの頭上に高々と揚げられるレイの場面だ。それにしても指一本でレイを倒すとは…。まさに拳王の名に偽りなし!

「女性は守るべき存在」これが僕が『北斗の拳』からいちばん影響を受けたこと

一途な愛が『北斗の拳』の裏テーマであったのではと語る濱口。ケンシロウとラオウの対決も北斗神拳の一子相伝という宿命とともに、二人のユリアへの一途な愛あるがゆえの結末でもあった

するんですよ。秀さんは首の後ろの急所をかんざしでグサッと刺すんですけど、ホンマに刺したら痛いじゃないですか。だからペンを軽く握って、当たった瞬間に刺さらないように上手く後ろにズレるようにするんですよ。そんなの大人に言われなくてもわかるじゃないですか。急所を刺したら大変なのは子供でもわかる。それなのに、朝会で校長先生が必殺仕事人ごっこ禁止ですって言うんですよ。ここ（首の後ろ）は人間の急所ですからって。そんなの言われなくても知ってるわ（笑）」

愛する者のために犠牲に！男の生き方とは

これほどまでに、少年時代に入り込んだ『北斗の拳』は、その後の人生にどのような影響を与えているのだろうか。

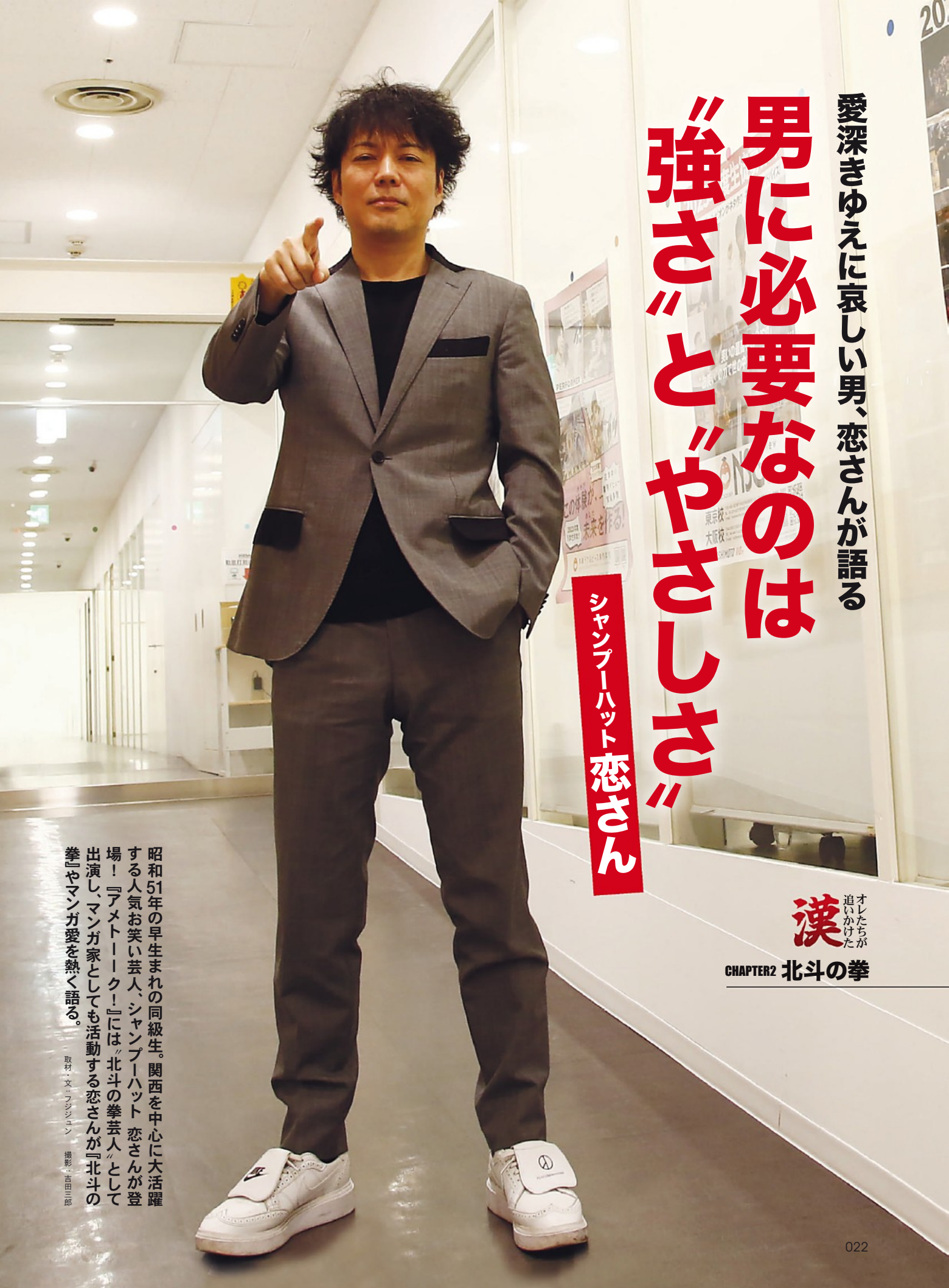
「闘いという部分で入り込んでいった部分はあるんですけど、この作品の根本には男の女性に対する〝一途な愛〟っていうのがあるんですよ。ケンシロウもユリアにぞっこんじゃないですか。女の人は守るべきものっていうのがあって、『こいつのために命を賭けて闘う』っていうのが描かれていたんですよね。僕は、その部分は『北斗の拳』の影響を受けているかもしれませんね。女性は守るべきものっていう思いはずっともっていますから。同じ時期に好きだったもうひとつのマンガ『キン肉マン』は、恋愛とか女性とかそういうのが全くなくて、男子の頭の中っていう世界観で、女性には全くおすすめできません（笑）。それに比べて、『北斗の拳』は、裏のテーマとして〝女性への愛〟があると思うんですよ。女性をめぐって男たちが闘いを繰り広げる。そこは女性にもすすめられるポイントだと思うんですよね。『北斗の拳』の魅力は闘いだけじゃない。誰かのためにとか、人の犠牲になるっていう精神は、やっぱりこのマンガの影響かなぁ…。人のために命を全うしていくカッコよさということを学んだ気がします。ジュウザの『やはりこの命捨ててねばなるまい…』とかも、まさにその精神ですもんね。男のカッコいい生き方を学んだ感じですね。愛する者のためなら、絶対に負けない無敵な存在を目指したいですよね」

濱口にとってケンシロウの生き方は、現在でも憧れる理想の男なのだ。

「でも、なかなかあそこまではなれないじゃないですか。だから、雲のジュウザがふわっとしていていいなと思うんですよ。闘わないで逃げる時があってもいい。ジュウザの生き方には、救われた気持ちになるんですよね。ケンシロウとかラオウとかシリアスなキャラのように生きると、時々『しんどいな〜』ってなると思う。そうすると、自由に生きている雲のジュウザがめっちゃええやんって」

自由に生きる。近年は家族を大事にしながら、キャンピングカーやバイクなど自分の趣味を楽しんでいる時間もある濱口。そういう好きなことを自由に楽しむというスタイルはもしや…。

「もしかしたらジュウザの影響なのかも（笑）。知らず知らずのうちに、ジュウザを目指しているのかもしれませんね」



愛深きゆえに哀しい男、恋さんが語る

男に必要なのは“強さ”と“やさしさ”

シャンプーハット恋さん

昭和51年の早生まれの同級生。関西を中心に大活躍する人気お笑い芸人、シャンプーハット 恋さんが登場！『アメトーーク！』には〝北斗の拳芸人〟として出演し、マンガ家としても活動する恋さんが『北斗の拳』やマンガ愛を熱く語る。

取材・文：フジジュン　撮影：吉田三郎

結成30年を迎えるお笑いコンビ、シャンプーハットとして、関西を中心にテレビや劇場で大活躍する恋さん。特技はイラストを描くことで、2018年に小学館のWebマンガサイト『サンデーうぇぶり』でマンガ家としてデビュー。3年にわたって『パパは漫才師』を連載していた。

仕事でもマンガに携わった恋さんに、まずはマンガに興味をもったキッカケから話を聞く。

「最初は『ゲームセンターあらし』ですね。1個上の兄貴がいるんで、家に単行本があって、兄貴が買ってた『コロコロコミック』を読んでみたいな感じでしたね。小1とか小2の頃、『あらし』が好きすぎて〝あらしクラブ〟ってクラブを作って。クラブ員は兄貴と兄貴の友達2人。ただ、あらしの絵を描くだけっていう活動をしてました（笑）」

画風や物語の深さに惹かれて夢中になったのは、中学生の時に読んだ『デビルマン』だった。

「『デビルマン』はアニメの再放送を観たのがキッカケだったんですが、最初に憧れたマンガでしたねぇ。マンガ版を見たのは中学生くらいだったんですが、テレビとは違うデビルマンの哀愁にもすごく惹かれましたね。ただ、内容はすごいエグいんですよ。ヒロインの美樹ちゃんの弟でタレちゃんって子がいるんですが、首を切られちゃいますからね。これを小学校の頃に読んでたらトラウマになりますよ。永井豪先生のこと嫌いになってたと思います（笑）」

強さとやさしさを学んだ人生のバイブル

そんな恋さんが、現在も最も好きで影響を受けたマンガが『北斗の拳』。『週刊少年ジャンプ』は家族の影響で、小学校低学年の頃から読んでいたそう。

「ウチはおやじもおかんも『ジャンプ』読んでて。おかんも『こち亀』と『シティーハンター』が好きやったり、家族全員が読んでたんですよ。僕は『キン肉マン』も好きでしたけど、やっぱりいちばん好きだったのが『北斗の拳』でした。アニメになる前からジャンプで読んでて、単行本も全巻持ってて。単行本は2回、買い直してます。1回目は実家に置いてきたやつを全部捨てられて、それは親父が買い直してくれて。2回目はメッセンジャーの黒田さんに貸したら、古本屋に売りに行きよったから買い直して（笑）」

『北斗の拳』は、〝男には強さとやさしさが必要なんだ〟ということを学んだ人生のバイブルだと、力強く語る。では、少年時代の恋さんは、作品のどこに惹かれたのだろうか？

「今で言う『鬼滅の刃』と一緒で、敵のもつストーリーですね。最初はシンを倒した後、なぜそうなったのか？という理由はだいぶ後に出てくるんです。ケンシロウがシンの墓を作っていると、バットが『なんでそんな男に墓を作ってやるんだよ』って言うんですよ。『同じ女を愛した男だから』というケンシロウの台詞にズキューン！ときて。「なんという台詞や！ 小学生にこんなヤツおらんぞ!?」って思ったり（笑）。シンに限らず、敵の一人ひとりが物語を背負ってるし、強すぎるパワーワードをもっている。だから一つひとつの台詞が胸に刺さるんですよね」

最後まで意地を見せ、「おれはお前の拳法では死なん!!」と身投げをして死んでいったシン。『北斗の拳』は悪役にも物語があり、美学があり、カッコいい台詞で読者の心をつかむ。

「僕は自分のプロフィールを書く時、〝愛深きゆえに哀しい男〟と、ケンシロウがサウザーに贈った言葉を書いてたんですけど、サウザー篇も悲しかったですね。まさに〝愛深きゆえに哀しい〟

「同じ女を愛した男だから」の台詞にズキューン！

物語が多くて、すべてのエピソードに泣きそうになるシーンがあるんですよ」

魂を込めた台詞で泣かせる武論尊の原作に、ペンに込めた熱まで伝わってくる原 哲夫の画。イラストを特技とする恋さんは、絵の描き方も『北斗の拳』から学んだそう。

「自分のマンガの画風とは全然違うんですけどね。影の描き方とか、原先生の画を参考にして描いてました。筋肉の作りとかよくわかってる人が描いてる画やなと思ったし、それを白黒で表現してるのがすごくて。影の入れ方とか真似して、ペンの太さを変えてすごくていねいに描いてましたね。教科書の落書きも筋肉ムキムキの男の絵ばかりでした。『北斗の拳』ばっかり見てたから、男の絵しか描けなかったんですよ」

原の描く女性の画で印象的だったのは、マミヤがレイの南斗水鳥拳で裸にされてしまう、有名なあのシーン。

「マミヤの乳がバサ〜ッて出て、レイに『女でなければ胸をかくす必要もない』って言われるシーンがとにかく衝撃で。僕ら世代にはマミヤのおっぱいと宮沢りえの『サンタフェ』が衝撃の二大ヌードでしたよね（笑）」

『北斗の拳』で、男として憧れたキャラクターは？という質問には、「もちろんケンシロウもですけど、それぞれの魅せ場がありすぎてねぇ…」と悩む顔を見せた恋さん。

「ラオウの幼少期のエピソードも好きなんですよ。リュウケンにラオウとトキが崖から叩き落とされて、『上がってきた方だけを北斗神拳の伝承者として育てる』と言った時、ラオウがトキを背負って上がってきて『弟と一緒でなくては養子にいかぬ！』って言うんですけど。非情な男になる前のラオウを見て、めちゃくちゃカッコいいなと。レイは出てきてからずっと感動させてくれますし、なかなか一人に絞れないですけど。一人挙げるなら、やっぱり座右の銘にしてるサウザーですね」

特に好きだというサウザーの最期について、まるで今読んだかのような正確な描写で、恋さんは熱っぽく語ってくれた。

「サウザーと言えば、『愛などいらぬ!!』『愛ゆえに人は苦しまねばならぬ!! 愛ゆえに人は悲しまねばならぬ!!』という名言もありますけど、最期は悲しすぎましたね。シュウを殺したという許せない思いもあるけど、『むかしのように……、もう一度ぬ

リュウケンから崖の下に落とされたラオウとトキ。落下時にケガを負ったトキはラオウに道を譲るが、なんとラオウはトキを背負って崖を登り、リュウケンのもとへ。さらには「トキの面倒はおれが見る!!」と言い放つ！

悲しすぎる

「サウザーやラオウのエピソードもそうですけど、『北斗の拳』を読んで、〝どんな悪いヤツも昔は愛してくれる親がいて、なんの悪さも知らない赤ちゃんだったんだな〟って思うと、あんまり人に対して腹が立たなくなりましたね。『憎らしいヤツやけど、どこかで曲がってしまった理由があるのかな』とか思います。それは自分が親になって、余計に思うようになりました。子供の友達でも親が離婚したり、亡くなったりというのがあると、『この子たちが真っ直ぐ成長してくれればいいな』と見守りたくなる気持ちはありますし。『みんなケンシロウみたいに育ってくれればいいな』と思いますね。ケンシロウって、おそらく20歳くらいでしょ？ よくもまぁ、あんなに人の心がよくわかるなって思いますよね（笑）」

多くを語らないからこそ言葉に重みがある

主人公のケンシロウの魅力についてあらためて聞くと、「不器用なところじゃないですかね」と答えた恋さん。

「不器用やし、多くを語らないからこそ言葉に重みがあるし。あまり泣いたりしなからこそ、流した涙に重みがあるんですよね。シュウの息子のシバがおとりになってダイナマイトで突っ込んでいった時とか、ライガとフウガが岩を抱えたまま絶命した時とか。あと、シンの横に座ってるユリアと再会した時も泣いてますね。ラオウと闘ってる時は、『もはや次の一撃がわれらの最後の別れになるだろう』って、闘ってる最中には泣いてるんですけど、倒した後は泣いていなくて。『み……見せてくれこのラオウを倒した男の顔を』ってラオウと見つめ合ってる時のケンシロウの凛々しい表情もすごくいいんです。ケンシロウが泣かないのは、〝男は無駄な涙を見せない〟ってことでしょうけど。それだけ無駄な動きがないってことですよね」

「ケンシロウの男気を学んで、男は黙って背中で見せるみたいな生き方はできてますか？」と聞くと、「いや、あそこまで完璧すぎるのもどうかな？ と思ってしまいますね」と笑う。

「人間の弱さやもろさを見せるのも男ですからね。ケンシロウが子供を育てたら、ケンシロウにしかならんでしょう（笑）。あのテンションは今の時代に合わないですよ。飲み会でも『いえ～い！』って盛り上げられないタイプやし、一緒にカラオケ行っても絶対歌わへんタイプでしょ？（笑）」

強さというところで、『北斗の拳』に影響を受けて身体を鍛えたりという思い出はあった？

「指立てはやりました。あと、〝北斗残悔拳〟は何人かに試しましたね。『（耳の上に親指を立てて）ここ、指入るな。本当に死んじゃったらどうしよう？』と思いながらやってました（笑）。あと、ちょうどテレビで映画『ドランクモンキー 酔拳』を観て、ジャッキーチェンがくるみを指で割ってるのを見て真似して。今もくるみがあると割ってみようとは思っちゃいますね。『ロッキー』を観て、ジョッキで生卵を飲んだり（笑）。『北斗の拳』もそうですけど、あの頃、見聞きしたものって心に強く残ってるんですよね。女の子も中学の時に好きだった子が一番で、いつまでもそれを越えられませんから」

アニメ『北斗の拳』が始まったのが、昭和50年男が小学校4年生だった1984年。テレビがオレたちに与えた影響が大きかったあの頃、恋さんのようにマンガから『北斗の拳』を知った人もいるが、アニメで知ってマンガにハマった人も多いはず。

「僕ももちろんアニメも観てましたよ。マンガだとアニメよりくもりを…』ってお師さんの像にすがりつく最期のシーンはとてもかわいそうでした。『哀しみや苦しみだけではない。おまえもぬくもりをおぼえているはずだ』ってケンシロウが声をかけた後、サウザーが少年の頃のようなやさしい表情に戻って負けを認めるんですけど、そのままお師さんにすがりついて死んでしまう。『わが生涯に一片の悔いなし!!』の名台詞を残して死んでいったラオウみたいにカッコよく死ぬのもいいけど、サウザーは最期に本当の自分に戻って死ねたのがすごくよかった」

『北斗の拳』から学んだ男気について聞くと、強さとやさしさと即答。そのことが、自身に与えた影響を話してくれた。

©武論尊・原哲夫／コアミックス 1983

じっくり見られるから感動しますけど、アニメは違った魅力がありますよね。シンの手下のジョーカーってキャラとか、アニメにしかいないキャラもいるんですよ。『ひでぶ』とか『あべし』とか、敵キャラの叫びはマンガだとあんまり出てこないですし。千葉 繁さんの次回予告とか、どんどんエスカレートしていきましたしね（笑）。ハートが暴れて、部下をビンタで殺すシーンがあるんですけど、すごい迫力で。『すげぇ！ どうなってるんやろ!?』と思って、コマ送りで見たらちゃんと目ん玉が飛び出とったんですよ（笑）。誰も気づいてないと思うんですけど、「すごいもん放送してるな！」と思いましたね。秘孔を突かれた敵の血が吹き飛ぶシーンとかは、ケンシロウが少し離れてから、光みたいになってブシューってなるとか。残酷になりすぎない配慮はされてましたけど」

　また、『北斗の拳』の舞台となる〝199X年〟に、「1999年7月、恐怖の大魔王が空から降ってくる」という『ノストラダムスの大予言』の人類滅亡説を重ねて、妙なリアリティを感じてたのも昭和50年男のあるある話。

「ノストラダムスの大予言はこわかったですね。『北斗の拳』もそうですけど、『漂流教室』とかもあって。ちょうどチェルノブイリの原発事故なんかもあったんで、『この後、もっとこわいことが起こるんだ』と思ってたし。世紀末にすごいビビッてました」

少年時代の思い出とマンガ家デビューの経緯

　小さい頃から好きだったイラストは「ただの落書きで、ちゃんとした絵は描いたことはなかった」と話すが、高校生になっても絵を描き続けていた。

「高校の時、落書きを描きすぎて、みんなに『描いてくれ』って言われて。クラスメイトの学園祭のTシャツにマジックで変な絵をブワッと描いてあげたりしていました。高3の時は美術を選択していたから、授業でも絵を描いたりしてたんですけど。その頃はバイクが好きやったんで、ケビン・シュワンツとか、ワイン・ガードナーとかの絵を描いてましたね」

　本格的に絵を描き始めたのは、芸人になってから。ふとしたキッカケで個展をやることになり、導かれるようにマンガ家としてデビューすることになる。

「杉本 清さんに『知り合いが個展をしてる場所に空きが出るから、個展をやらないか?』と言われて。めっちゃ小規模ですけど、毎年個展をやるようになったのが、ちゃんと絵を描くようになったキッカケでしたね。マンガは僕の子供が小さい頃のエピソードを書き溜めてて。というのも自分が忘れたらもう一生、世の中から消えるエピソードやから。子供らが大きくなった時、しゃべってあげようと思って書き残してたんです。それを聞いた会社の人が出版社につないでくれて、担当の人が『家族ものでマンガ描きませんか?』と話をもってきてくれて。『ちょうど家族ネタ、めっちゃあるんですよ』って3話くらい持って行ったら、『これでいきましょう！』って決まったんです」

　こうして、家族をテーマとした『パパは漫才師』（小学館）の連載が始まった恋さん。ストーリーマンガを描くのは初めてで、ネームを描くのもかなり苦戦したそう。

「自分の話の展開があるんで、1話ごとのページ数もバラバラなんですけど。いらん部分は描きたくないし、絶対にいる部分は入れたいし。マンガのコマ割りにするのは最初、かなり時間がかかりましたね。ど素人なんで、『どう読ませたらいいか?』ってところからわからなくて。鳥山 明先生のすごさについて調べた時、『戦闘シーンで目がいきやすくリズムよく読めるコマ割りと台詞配置になってる』っていうのを見て『だから読みやすかったんや！』って感心したり。自分でマンガを描くようになっ

「もう一度ぬくもりを」とお師さんにすがりつくサウザーの最期が

かってプロフィールに「愛深きゆえに哀しい男」と書いていた恋さん。その原点はサウザーの死。お師さんのもとで、まるで子供ような安らかな表情になるサウザー。大の『北斗の拳』好きの恋さんだが、そのなかでも一押しのエピソード。

大人視点でもう一度読んでください！

て、マンガとの向き合い方も変わったと思います。今もめちゃくちゃマンガを読むんですけど、画や魅せ方をしっかり見るようになりました。がんばって描かなあかん背景とか、悲しみを伝えるための引きの画とか。マンガってトークと一緒で、感情を伝えるための間があったりしますからね。たとえば、サッカーのワールドカップで南アフリカに勝った時、NHKでは無音で客席を30秒くらい映していて。これは喜んでる選手だけでなく、歓喜して泣いている客席を見ることで感動するんですよね。マンガもそういう描写を挟むことで、台詞もなしにひとコマで感動を伝えたりするでしょう？そういう見せ方ができるのが、マンガという表現のすごさだと思います」

また、自身が『北斗の拳』で、男の強さとやさしさを学んだように、子供たちにもマンガからいろいろ学んでもらいたいと考え、マンガをたくさん買い与えてるという。

「子供の頃って、マンガじゃないと入ってこないですからね。文字も大事やけど表情も大事で、台詞と同時に表情がしっかり頭に残っていたりするんで」

最後に昭和50年男たちに、男らしくカッコよく生きるためのアドバイスとエールをもらった。

顔を見せてくれと言うラオウを、凛々しい表情で見つめるケンシロウ。この後、少年マンガ史上、屈指の名シーンである「わが生涯に一片の悔いなし!!」へと続いていく。多くを語らないからこそ、一つひとつの言葉、そして流した涙に重みがある、と恋さんは分析する

「まず、小学校以来、『北斗の拳』を読んでないのなら、大人視点でもう一度読んでみたら、伝わり方も変わると思うので、ぜひ読んでみてください！あと個人的な話でいうと、自分のマンガにも書いたんですけど、子育てをしてると子供から教わることがたくさんあるなと思って。ウチのおかんが仕送りを受け取ってくれなくて、『自分の子供らのために使え』っていつも言うんですよ。これどういうことかよくわからなかったんですが、子供らが小学生の時にね、僕の誕生日にプレゼントを買ってきたんです。ドラクエのスライムのおもちゃとか、裸のおっさんのシールとか。その時に僕、『これ、なんぼすんねん？パパの誕生日は金使わんでええから、自分のために使えや』と言ったら、子供たちがなんとも言えん表情をしてて。『わ、おかんと同じこと言うて、同じ表情にさせてる』って思って（笑）。『幸せってなんやろう？』とあらためて考えた時、『お金とかじゃなくて、子供らが毎日楽しく元気に暮らしてくれてることがいちばん幸せなんや』と思って、ようやくおかんの気持ちがわかったんです。だから皆さんも親はもちろん、世話になった人に孝行したいなら、元気に楽しく生きてる姿を見せることがいちばんやと思うんで。これからも毎日楽しく元気に暮らしてください！」

【PROFILE】 恋さん／こいさん
昭和51年、大阪府生まれ。新大阪歯科技工士専門学校で相方のてつじと出会いコンビを結成。1996年、当時はまだ無名ながら『オールザツ漫才』（毎日放送）でトーナメント優勝。2020年には『第55回上方漫才大賞』で大賞受賞。特技はイラストで2018～21年の間、『サンデーうぇぶり』（小学館）上で連載マンガ『パパは漫才師』を執筆。現在は一男二女のパパ

劇場版主題歌「Heart Of Madness」は…

ケンシロウとユリアの二人のテーマだ！

子供ばんど うじきつよし

アニメ版『北斗の拳』は、その内容と同様に、話題になったのが劇中に流れる音楽の数々。劇場版も含め5曲の楽曲に携わったのが子供ばんどのうじきつよしだ。だが、ヒットの裏には、アニメソングを歌うことへの葛藤も。当時、うじきつよしが何を考えて曲を作り、そして歌ったのだろうか？ その心の内をインタビュー！

取材・文：藤本晃一（開発社）　撮影：八島 崇

5曲という歴代で最も多くの『北斗の拳』の曲に関わるアーティストになるうじきつよしは、まだ高校生だった1973年に「子供ばんど」を結成。サザンオールスターズやカシオペア、エレファントカシマシといった数多くの人気バンドを輩出する名門バンドコンテスト「East West」に出場し、79年、グランプリを受賞。翌80年にアルバム『WE LOVE 子供ばんど』でキャニオン・レコードよりメジャーデビューを果たす。ハードロックバンドとしてライブ活動を続けていたうじきつよし率いる子供ばんどに『北斗の拳』の音楽の依頼がきたのは、85年のことだった。

「『北斗の拳』のことを全く知らなかったんです。意外に思われるんですけど、アニメやマンガに、ある時期から全く触れていなかったんですよ。幼い頃は、『鉄腕アトム』などは読んでいましたが、その時期、週刊マンガ誌は読んでいなかったですね。ただ『AKIRA』だけは例外的に読んでいましたが」

曲を作ることになり、初めてマンガ『北斗の拳』を読んだうじきは、どんな感想をもったのだろうか。

「あ！『マッドマックス』じゃ

ん！と思いましたね。昔、『ワイルド7』というアウトローな警官が活躍するマンガがあったんですが、それにも少し似た雰囲気を感じましたね。『北斗の拳』はさらに、『マッドマックス2』のような、世界が終わった後の話という点もおもしろいと思いました」

　では、そもそも『北斗の拳』の音楽を手がけるきっかけとはなんだったのだろうか。

「最初に話をいただいたのは、劇場版の主題歌だったんですが、高見（義雄）さんという東映のプロデューサーにお会いすることになったんです。この高見さんが、とにかく熱い方で、『アニメーションだけれども、（実写）映画という姿勢で東映として取り組みたい。そして映画音楽のつもりで作ってほしい。かつロックでやりたい』というようなことをまくし立てるように熱く語ってきたんです。高見さんにとって『北斗の拳』の世界観、そしてケンシロウのイメージで浮かんできた音楽が、ロックだったんでしょうね。そんなふうに『北斗の拳』のこともよくわからないまま、熱く語っているこのおじさんは一体何者だ？と思いつつ、その熱意というか、高見さんがやろうとしているこ

とがおもしろそうだなと思い…そこがスタートでしたね（笑）」

　主人公のケンシロウが宿敵・ラオウと闘うまでを描いた映画『北斗の拳』（86年）は、主題歌、エンディングテーマを子供ばんどが担当。本編内の音楽は、本格的な映画音楽にすべく、服部克久（※）が担当した。

　今でこそ日本のアニメーションって世界を席巻しているが、当時はまだ、そこまで高い地位ではなく、そういうなかで、高見氏は、『北斗の拳』が壮大なストーリーであること、映画ではそれを集約して、時間的に描き切れない部分、内容を凝縮しなければならない部分を曲で埋めたいと、うじきに伝えたそうだ。

「高見さんは、1時間半という短い時間で、映画本編を単独でも成立させ、かつアニメやマンガのファンの方たちにも納得してもらえる作品の完成を目指していました。最初、ラフなストーリーをいただいたのですが、全く予備知識がなく、単行本を読んでイメージをふくらませて、ケンシロウとユリアの二人のテーマが欲しいということだったので、そこから作りました。子供ばんどの新曲を作るというよりも、自分の中で頭を切り替えて、映画の音楽を作るんだ！って感じで取り組みましたね。このバンドで何ができるかってことよりも…もちろん自分たちが演奏したんですけど、曲を音楽担当の一部のような気持で作っていったんです」

　ちなみにうじきにとって『北斗の拳』で印象に残っているキャラクターは誰なのだろうか。

「ごく初期のものを集中して観ているじゃないですか、その後、どんどん話が発展していくので、正直なところストーリーを把握できてないんですね（笑）。だから自分にとって印象的なのは映画版で内容をギュッと凝縮したケンシロウとラオウですかね」

『北斗の拳』関連の歌がバンド最大のヒットに

　そして誕生したのが、当時のアルバムと同時進行で作られた主題歌「Heart of Madness」とエンディングテーマ「Purple Eyes」だった。

「観音崎京急ホテル内にマリンスタジオという音楽スタジオがあったんですよ。すごくいいスタジオで、そこに籠って曲を作りました。アルバム全体の曲作り、レコーディングなど、2週間ぐらいで全部終わらせました。『Heart Of Madness』に関しては、心臓の鼓動から始まるイメージで、シーケンサーのなかにその音を作って鳴らしながら音を重ねていく感じでした。すごいシンプルで、今聴くと音数が極端に少ないですね。基本的に子供ばんどでは、シンセサイザーを使っていないので、鳴っている音は、リズムと弦楽器、ギターとベースですね。それでもアルバムに収めた曲のなかでは時間をかけた方だったと記憶しています」

　歌の入った完成した映画のシーンを劇場で観た時の感動を、うじきはこう話す。

「イントロから入って、最終的にオープニングの画像も合わせ、

【PROFILE】うじきつよし
昭和32年生まれ、東京都出身。1979年、子供ばんどのギター、ヴォーカルとして、名門バンドコンテスト「EastWest」に出場し、グランプリを受賞。80年にメジャーデビュー。ライブバンドとして名をはせる。88年に音楽活動を停止。その後、俳優業、クイズ番組、ニュース番組の司会業などで活躍。2007年に音楽活動を再開させる

映画館で最初に観た時はやっぱりびっくりしました。心臓が〝ドク、ドク〟と脈打つ音がリズムになって展開していくという、今の時代では考えられないくらいとてもシンプルなものなんですけど、映画館に響いていって…自分が思っていた、狙っていたものを作ってもらったのがうれしかったですね」

しかしながら「Heart Of Madness」と「Purple Eyes」は、これまで子供ばんどがやってきたベーシックなロックンロールとは結果的に違うものとなり、バンドのファンからは非常に不評を買ってしまったという。

「ちょうどその時期に、映画のプロモーションを兼ねて、『夜ヒット』（夜のヒットスタジオ）といったテレビやラジオ放送局の出演が増えた影響もあったのでしょう。ファンの間では、なぜ、これをやる!? みたいな賛否がありましたね。去年の紅白歌合戦に出ていた（映画『スラムダンク』のエンディング主題歌を歌った）10-FEETや（『鬼滅の刃』の主題歌を歌った）マン・ウィズ・ア・ミッションなど、今やアニメの主題歌はアーティストにとって、ある種、ステータスであったり、目標だったりするかもしれませんが、当時、アニメの主題歌っていうと、〝アニメの歌〟という域を出ていない印象でした。実のところ、ロックバンドとして、『アニメの歌を手がけるのはいかがなものか』って悩むくらい抵抗はありましたね。『お前、アニメに魂を売るか?』みたいな感じでした。とはいえ、これっておもしろいことができるんじゃないかっていう期待や、何よりロックミュージックということで、高見さんが自分たちをピックアップしてくれたのがうれしかったですね」

劇場版『北斗の拳』の楽曲依頼がきた時、うじきはマンガを全く読んでいなかった。そこで初めてコミックスを手に取り、読んでみた感想は…「『マッドマックス』じゃん！」。荒廃した世界を舞台にストーリーが進んでいく内容は、素直におもしろいと感じたという

映画音楽を作るんだ！ という気持ちで取り組んだ

ファンの間では賛否を呼んだ『北斗の拳』の音楽だったが、結果的には、これがバンドにとっての大きな飛躍となる。

その頃ライブ活動をメインにしていた子供ばんどだったが、残念ながら、一連の歌の影響で動員数が増えたわけではなかった。しかし、それらの曲は、やがてひとり歩きを始め、バンドとしてセールス的に最大のヒット曲となっていく。

「今となっては、あの時もう少しうまくやっていたらなぁと考えますね。というのも、ステージでほぼ、それらの曲を演奏しなかったんです。曲が浮いちゃうんですよ。ライブに来てくれているお客さんたちもあんまり認めたくない雰囲気がある時代でしたしね。今だったら大喜びだと思うんだけど」

テレビシリーズでも曲を担当することに

映画だけでなく、子供ばんどは、テレビシリーズの『北斗の拳』でも「YouはShock」でお馴染み、クリスタルキングの「愛をとりもどせ!!」に続く主題歌を担当することになる。

「映画版の次に、じゃあテレビでも…ということになり、『SILENT SURVIVOR』という曲を作りました。東京のスタジオでレコーディングと並行して、歌詞をああでもない、こうでもないと考えながら、『♪揺れる炎の中で夢も捨てて…』って歌っていたんですよ。するとスタジオに来ていた高見さんが、レコーディングルームに入ってきて、『うじき君、言わんとしていることはわかるけど、夢は捨ててはいかんのだよ!』と熱弁するんです。自分は、ケンシロウがあらゆるものを奪われて、愛情というものが抹殺されて、そのなかでも闘いながら生きていく――夢を捨てても立ち向かって生きていかなければならないと思って、その詞を書いたんですけど、『うじき君、夢を

©武論尊・原哲夫／コアミックス1983

※…昭和11年生まれ、令和2年没。作曲家、編曲家。1950年代より、日本のテレビ、ラジオ番組、ドラマ、アニメ、映画の音楽を数多く手がける。

捨ててはいけない。なんとか夢を残そうじゃないか！』とおっしゃって『夢を求める』に変わったんです（笑）。今回このお話をいただいて、真っ先に思い出したのはこの話ですね。当時、自分は20代後半だったんですが、もう少し若い頃だったら、『歌詞を変えろだ!? バカ野郎！』みたいな感じだったと思うんですよ」

ちなみに当時、クリスタルキングが歌ったオープニングテーマ曲の「愛をとりもどせ!!」のことは知らなかったそうだ。そしてうじきは、テレビシリーズ『北斗の拳2』の主題歌となるTOM★CATの「TOUGH BOY」のプロデュースも手がけることに。

「当時、TOM★CATのプロデューサーの方を、自分たちも存じ上げていたので、『ぜひ、かんでよ』ということになり、プロデュースに関わらせていただきました。これが、結構すごい楽曲だったんですよ。デモテープは、TOMがやっていたバンドで作っていたんですが、彼らが作ったデモテープは完璧でしたね。完成度の高いこのデモをどこまでテレビサイズのなかでインパクトのあるものにしていくかってことで、今も浜田省吾さんのバンドで活躍しているキーボードとマニピュレーターの福田（裕彦）という自分の幼馴染みがいるんですが、彼に声をかけてアレンジ、細かい部分の微調整、そして自分がギターを弾いて完成させました。『TOUGH BOY』、ほんと、いい曲ですよね。デモに入っていたギターもとてもカッコよかった。リフはそのまま使いました」

こうして計5曲の『北斗の拳』の曲に関わることになったうじき。当時を振り返り、こう語る。

「自分もある程度オヤジになった今、そこに関わらせていただいて、やっぱり幸せだったと思いますね。ファンのみんなが認めるとか認めないにかかわらず、これらの曲は、作品としてひとつの時代のなかに残させてもらえます。その楽曲を制作することを生業としてきた人間としては、一部分に関われたことは一生の宝物なのかな」

小学3年生の頃からギターを弾く早熟な子供

うじきが音楽を始めたきっかけは、3つ違いの姉と8つ違いのいとこの存在だった。

「二人の影響が大きくて、小さい頃はグループサウンズやベンチャーズなどを聴いていたマセガキだったんですよ。小学校3年生の時にいとこが、エレキギター（グレコ製のリッケンバッカーのコピーモデル）を『俺いらないから、つよしにやるよ』と言ってくれて、ちょうどその頃、グループサウンズが全盛で、タイガースやベンチャーズの曲を教えてもらって弾き始めたのがスタートです」

やがてうじきの興味はアメリカのグループ、モンキーズに。

「曲がポップでわかりやすかったんですね。ビートルズよりもモンキーズだったかもしれないです。その後、クリームやジミ・ヘンドリックス、レッド・ツェッペリンなんかを知るんですが、最初はちょっと（よさが）わからなかったというか、〝こわい〟（笑）という印象でした」

それでも、中学になる頃には、〝歪んだギターの音〟がうじきの心をつかみ、そこからさまざまなロックを聴くようになっていく。やがてうじきにとっての運命の出会いとも言うべきギタリスト／シンガーの音楽に出会う。ブルースギタリスト、ジョニー・ウィンターやその弟、エドガー・ウィンターらとの活動で知られるリック・デリンジャーである。

「『オール・アメリカン・ボーイ』（73年）というアルバムが出た時、深夜のFM東京で『ロックンロール・フーチー・クー』（後に子供ばんどもカバー）という曲がかかったんですけど、それを聴いた時に『この人、俺に近い！』と思ったんです、意味不明な思い込みですが（笑）。そこから彼に傾倒していったんです。ギタリストとして音楽をやっていくなかですごく影響を受けたのはリック・デリンジャーで、ボーカリストではハンブル・パイのスティーヴ・マリオット、この二人ですね。ロックンロールはもちろん得意なんですけど、そのフィールドだけに留まらず、

PHOTO：YUTAKA UMETSU

現在も活動を続けている子供ばんど。ライブの情報など最新の活動は、QRコードよりXにてご確認を！

人生の節目に『北斗の拳』が絡んでくるんです

R&Bや、アメリカンポップスの要素ももつところから、とても刺激をもらいました」

83年にはうじき憧れのリック・デリンジャーにアルバムのプロデュースをしてもらえる機会を得る。

「82年にリック・デリンジャーが来日した時に、さまざまなミュージシャンにインタビューをしていた知り合いに『リック・デリンジャーに会えないかな?』と相談したんですよ。そうしたら、子供ばんどでライブをやっていた原宿の『クロコダイル』にリック・デリンジャーを連れてきてくれたんです。しかも同時期に来日していたチープ・トリックのベーシスト、トム・ピーターソンも一緒に。しかもギターを持ってステージに上がってくれて一緒に『ロックンロール・フーチー・クー』をセッションしてくれるという夢のようなことが起きたんです。さらにその日のライブはゲストにCHABO(仲井戸麗市)を迎え、ライブを観に来ていた(忌野)清志郎さんが司会を始めるという夢のような一夜になりました。ステージに清志郎、CHABO、リック・デリンジャー、トム・ピーターソンがいるという今では考えられない驚きの風景でしたね」

これをきっかけにリックが滞在しているホテルを訪ね、バンドのアルバムのプロデュースをお願いする。レコード会社の人たちも半信半疑だったようだが、バンドはアメリカに行き、リック・デリンジャーのプロデュースのもと、アルバム『HEAR T BREAK KIDS』の制作を実現。アメリカでのライブもこなす。

その後、ややバンドとしての行き詰まりを感じた88年、ライブの2000回公演を最後に、子供ばんどは、活動を休止。うじきは、ソロミュージシャンとしての道は選ばず、俳優、テレビタレントの道へと進む。

『北斗の拳』の歌が音楽活動を再開させる

2007年には新たに21世紀バージョンが作られた「SIL ENT SURVIVOR」と「Heart Of Madness」を発表し、うじきは再び音楽の制作を始める。

「その時って自分は音楽の仕事を離れていたんですよ。88年に音楽活動をストップさせて、90年代は全く自分から音楽やることがなくて。2000年に入ってもその状態は続いていたんですが、アニメーション音楽が盛り上がってきたなかで、レコード会社から『北斗の拳』の音楽も原曲から発展させて、時代にアダプトさせていった方がいいじゃないかという話がきたんです。自分としては、はぁ、そうですか…という感じであまりピンとこなかったのですが、『TOUGH BOY』時に世話になった福田にお願いしたら、すごいのを作ってきて、そこから発展していろいろなバージョンが誕生しました。ものすごいギターが入っているバージョンとか(笑)。そこからですね、音楽を再開させるのは。正直、2007年バージョンは、自分にとって、音楽を再び始めるリハビリのようなものでした」

これをきっかけに、うじきは、音楽へカムバックを果たす。さらに11年には「Purple Eyes」のリニューアルバージョンもリリース。これが子供ばんどの再始動のきっかけとなり、14年には「Heart Of Madness」と「Dry Your Tears」のニューバージョンも新たに録音する。

「人生の節目に『北斗の拳』が絡んでくるんです(笑)」

子供ばんどは現在もライブを中心に活動中だ。

手林氏の心に強く残るケンシロウとサウザー、ラオウの名場面。このカットはコラボ商品のパッケージに採用された

マンガ・音楽・映画のネタがことごとく直撃！

CHAPTER2 北斗の拳

北斗の拳 YouはカルチャーShock!

『北斗の拳』にふんだんに散りばめられた映画や音楽などのユースカルチャーネタやド派手な表現は、連載当時の小中学生に大きなショックを与えた。同作のコラボ商品を開発・販売する書泉の手林大輔社長もその一人。心に刻まれたショックの正体はなんだったのか!?

オレたちが追いかけた漢

取材・文：半澤則吉　撮影：小林岳夫

東京の中心地、神田神保町と秋葉原に巨大な店舗をもつ「書泉」。イベントやフェアが数多く行われ、ここでしか買えない本やアイテムもそろう〝趣味の本屋〟として人気を博す書店だ。2023年には『北斗の拳』とのコラボグッズを発表し注目を浴びた。そう、現在社長を務める手林大輔氏もまた、『北斗の拳』に魅せられた男の一人だ。

ここでは、オレたち昭和50年男の兄貴分である彼に、『北斗の拳』というカルチャーについて、そしてコラボ商品を開発したいきさつについて語っていただこう。『北斗の拳』との出会いを、手林氏はこのように語り始めた。

「僕は昭和45年生まれで『北斗の拳』の連載当初は『週刊少年ジャンプ』が、まさにど真ん中のカルチャーでした。あの『北斗の拳』がアニメになるんだと驚いたことがいちばん印象に残っています。この作品のアニメ化は無理じゃないか？みたいなことを言いながら、友達と盛り上がっていたんです」

13歳でこの作品と出会った手林氏にとっては〝まさかのアニメ化〟だった。

「車田正美先生の作品が好きで、それまでも『ジャンプ』では『リングにかけろ』など王道をよく読んでいました。その後も『男坂』が好きでしたね。『北斗の拳』は『Dr.スランプ』が人気だった1983年に登場した作品。『ジャンプ』のなかでもかなり異色の画という印象でした。話が進むに連れてどんどんシュッとした感じになっていきましたけど最初は画がとにかく無骨でしたから、アニメ化には正直、驚きました。また、それまでは秘孔を突いたら人が壊れるなんてアイデアがなかったので、とにかく衝撃的なマンガでもあった。秘孔を突くのをマネしてみんな、つき指していたよね！」

いわゆる〝ジャンプ黄金期〟は一般的に83年、『北斗の拳』のスタート時から、『スラムダンク』連載終了の96年までと言われることが多い。まさに『北斗の拳』は一大マンガブームのトリガーになった作品と言えるだろう。この頃、『ジャンプ』の売上は300万部を超え、年々、発行部数を増やしていく。

「娯楽がマンガかゲームくらいしかなかった時代。パン代としてもらったお金を貯めてこっそりマンガを買っていました。飯よりもマンガだろと（笑）。マンガやアニメを観て、それを友達と話すのが大事なカルチャーだったんです」

©武論尊・原哲夫／コアミックス 1983

小中高生の憧れが凝縮されていた作品

さらに、手林氏は『北斗の拳』と音楽とのつながりについても言及する。

「当時、テレビでは『ザ・ベストテン』が全盛の時代でした。僕は音楽も大好きで、よく音楽番組も観ていました。なので、『北斗の拳』の主題歌をクリスタルキングが歌ったのは衝撃。『大都会』の人、最近何やってるんだろうみたいな話を友達としていたところで、いきなり〝♪YouはShock〟が流れてきたわけですから。そのこと自体が、めちゃめちゃショックでしたよ」

あまりにも印象的な『愛をとりもどせ!!』の歌い出しに触れると、手林氏の語りはさらに熱を帯び始める。

「しかも、主題歌はその後『2』でTOM★CATになったでしょ。『ふられ気分でRock'n'Roll』の後に『北斗の拳』かよ!と驚きましたし、そしてKODOMO BANDでうじきつよしかよ! ともなった(笑)。僕のなかで音楽と『北斗の拳』は不可分なものというイメージがあるんです」

最先端の日本の音楽、そしてマンガ、二つの大好きなモノが合わさった作品、いや、ぶつかり合って新たなケミストリーを起こした作品こそ『北斗の拳』だったのだ。しかし、このマンガが交わっていたカルチャーは日本の音楽だけではなかったのだと、手林氏は続ける。

「今思えば『北斗の拳』に登場するキャラクターは80年代の海外タレントをなぞったものが多かった。ユダはどう見てもボーイ・ジョージですしね。ちょうどその頃は『MTV』が入ってきた時期だったので、僕らの世代も一気に洋楽を聴くようになって海外のミュージシャンに惹かれていたタイミングでした」

妖星のユダのモデルが80年代初頭にデビューしたイギリスのニューロマ系バンド、カルチャー・クラブのボーイ・ジョージではないかと『北斗の拳』ファンの間では語り草になっている。

「当時はまだ、アニメやマンガ好きというのは、カッコいいか・悪いかでいうと〝カッコ悪い〟だった時代。でも、洋楽を聴くのは〝カッコいい〟だった。まさにこの二つをつなぐ接点が『北斗の拳』にはあったと思うんです。おそらく海外の人を真似していることが伝わるように意図的に描いているなぁと、読みながら感じていました」

ユダの他にも、リュウガはデヴィット・ボウイ、ハンはフレディ・マーキュリーがモデルと言われ、同様の例は多い。ケンシロウはブルース・リーや松田優作など人気俳優のイメージを交ぜたものと原 哲夫本人も語っているとおり、音楽に加え映画の影響も絶大だった。まさに当時のスターが色濃く反映された作品なのだ。これは『北斗の拳』に限ったことではなく、他の作品でも同じ現象が起こっていた。

「たとえば『BASTARD!!―暗黒の破壊神―』や『ジョジョの奇妙な冒険』も洋楽をはじめ海外文化の影響を強く受けた印象でした。マンガを読んでバンド名を調べて、その音楽を聴いたりしていましたね。音楽とマンガのミックスがおもしろかったですし、その時代はマンガ家側がわざと他ジャンルのカルチャーを交ぜていた。海外スターというのが、真似しても怒られないしカッコいい、そんなギリギリのラインだったのかもしれません。『北斗の拳』のキャラはキャラ立ちしていて魅力もあると思うんですけど、その元ネタ探しみたいなこともまた、おもしろかったんです」

さらに、手林氏は当時のマンガは80年代のヤンキー文化とも密接な関係があったのではと推察する。

「『北斗の拳』は必殺技の名前が漢字じゃないですか。威力がありそうな漢字を並べて、自分で必殺技を考えるみたいなこともやっていました。これってちょっとズラして考えてみると、当時のヤンキー文化の影響が大きいですよね。すべての言葉を漢字で書くというまさに〝仏恥義理〟の世界(笑)。今思うと〝北斗の拳〟には、海外カルチャーとヤンキー文化、小学校の高学年や中学生がカッコいいと思う要素が、いっぱい入っていたんじゃないかな」

40~50代に刺さるキャラとコラボしたかった

このように当時の少年たちを魅了した『北斗の拳』だが、連載開始から40年以上経ってもなお、そのカッコよさを保っているというのがスゴい。圧倒的なキャラクター描写、ストーリーの壮大さも相まってレジェンド作品として、今も当時と変わることなく愛され続けている。そして、いつまでも憧れの存在であるがゆえに、『北斗の拳』は、新たなコンテンツを生み出し続ける作品でもある。

「今や『北斗の拳』のコアミックスさんは、自分たちでこの作品をいじりにいっている。本当にそれがスゴいなと思っていて。普通だと『うちのキャラクター

衝撃だったクリスタルキング、TOM★CAT…このマンガは、あの頃の音楽と不可分です

南斗六聖拳の一人、妖星のユダのモデルになったとも言われるカルチャー・クラブのボーイ・ジョージ。80年代のマンガ作品は流行を積極的に取り入れていた。写真はカルチャークラブ『ハウス・オン・ファイヤー』

資料:編集部

企画が動き出してからケンシロウの好物がビーフカレーだったと聞いて驚きました！

はこういうキャラなので、そんなことできません』と言いたくなるでしょう。でも二次創作を自分たち側からやっちゃう姿を見ていると、懐の深さを感じますね。やはり真ん中に『北斗の拳』という真面目な物語があるので、どれだけふざけても大丈夫という自信があるんでしょう」

確かに近年、『ケンシロウによろしく』や『北斗の拳 世紀末ドラマ撮影伝』など『北斗の拳』から派生した作品が続々登場するなど、原作自体が、まだまだ掘り甲斐のあるコンテンツということを証明している。さらには、マンガとのコラボ商品も注目度を高めているようだ。

「2023年が40周年ということもあるんですが、毎週ニュースに『北斗の拳』の話題が出るくらいさまざまなコラボをなさっている。これってスゴいこと！」

そう話す手林氏自身も、『北斗の拳』とのコラボ企画でケンシロウグッズを具現化し話題をさらっている。

「書泉グランデがある神保町は、〝神田カレーグランプリ〟というイベントが有名なんです。カレー店が多い街なのでその一番を決めようというもので、このイベントと一緒になって街ぐるみで何かやりたいというのが第一歩でした。だけど、僕らはカレー屋じゃないしスタンプラリーの場所というくらいでは物足りない。街をキャラクターがジャックする、そんなところまでできるとおもしろいんじゃないかなと思ったので、まずカレーグランプリの事務局の人と相談するところから始まりました」

カレーと書店のコラボ、それだけでも十分に注目を浴びそうな企画だが、手林氏はそのシンボルに我らがケンシロウ、そしてラオウを選んだ。

「神保町には40～50代の男性が多くいらっしゃいます。そのジャストターゲットに懐かしいと思ってもらえるキャラから選ぼうとなり『北斗の拳』の名が挙がりました。僕も影響を受けたマンガだし、『北斗の拳』とコラボができるとなった時はテンションが上がりましたね」

いい大人が本気でバカをやるのがおもしろい

『北斗の拳』×カレーという夢のプロジェクト。手林氏はカレー開発の裏話をこんな風に教えてくれる。

「最初からケンシロウとラオウでカレーを作ろうと決めていました。僕らは、ケンシロウは〝愛〟があるから赤、ラオウは黒王号の印象があったので黒というイメージをもっていて、対照的な2種類のカレーを作りたかったんです。でも、企画を進めていったらケンシロウの公式のキャラクターカラーは深い青色、ラオウは赤ということが判明しました。そんな設定があるとは知らなかったのですが、キャラクターカラーに合わせるために、当初案から色が逆になったんですよ」

こうして現在、販売されている「ケンシロウ愛のビーフカレー〝黒〟」と「ラオウ・悔いなしチキンカレー〝赤〟」の具体像が見えてきた。

「パッケージにはケンシロウと

書泉が開発、販売する「神田カレーグランプリ2023 × 北斗の拳」ケンシロウ愛のビーフカレー（ビーフビンダルーカレー）辛口とラオウ悔いなしチキンカレー（バターチキンカレー）中辛。その他関連グッズは店舗とオンラインストアで販売している（販売期間は3月31日終了予定）

注文はコチラ！

2個セットで5名様にプレゼント

2月29日までに「昭和カルチャー倶楽部」にて本誌をご購入くださった方を対象に、抽選で2個セットを5名様にプレゼントします。応募フォームをメールで送りしますので、ご記入ください。

【PROFILE】 手林大輔／てばやしだいすけ
昭和45年、富山県生まれ。1993年にベネッセコーポレーションに入社し、幼児向けの教育サービスなどに携わる。2022年9月より、書泉代表取締役社長に就任

ラオウを打ち出しながらカレーを絡ませたらおもしろいと思い、いろいろな案を出したのですが、なかなか通りませんで。スプーンを持たせたところ、やはりダメ。自然にスプーンを持っているようにしてほしいとリクエストがあり、社内のデザイナーに調整してもらいやっとOKをもらえた。もちろん何をやってもいいというわけではないのでしょうが、コアミックスさんのご担当の方にもしっかり話を聞いていただいて、いろいろなチャレンジができましたね」

またカレーそのものも本気で作ったと手林氏は胸を張る。

「神田カレーグランプリの実行委員会の方とうちの社員で20種類くらいのレトルトカレーを食べ比べました。ケンシロウは黒のビーフビンダルーカレー、ラオウは赤のバターチキンカレーという風にまず方向性を決め、どうせ作るのだったらOEMじゃない方がおもしろいということで、レトルトカレーを数多く手がけている36チャンバーズ・オブ・スパイスという会社にお願いして、ゼロからカレーを作ることにしたんです。いい大人が本気でこういうことをやるって、いちばんバカバカしくておもしろいじゃないですか（笑）。書泉はたまたまメインターゲットの年齢層が高めの書店ですし〝趣味の本屋〟でもありますから、こういう取り組みはお客様にもぴったりハマったように感じています。それに、コアミックスさんが言っているんで間違いないと思うんですが…、実はケンシロウの好物はビーフカレーという設定らしいんですよ！ それも今回初めて知った事実でしたね」

ケンシロウがカレー好きだったとは驚きだが、手林氏たちが懸命に作ったカレーは2000個のうち既に現時点では1300個以上が売れており、大人気だそう。同時期に製作したカレー皿とスプーンのセットなど関連グッズもファン垂涎のアイテムとなっている。カレーは店舗やネットでも購入できるので『北斗の拳』ラバーはぜひとも、そのパンチ力のあるカレーの味に打ちのめされてほしいところだ。

2020年に体験した世紀末の光景

『ジャンプ』誌面やブラウン管で、リアルタイムで『北斗の拳』を見つめ、令和の世に新たなコラボを生み出した手林氏は、最後に、「余談ですが」と断りながらこんなことを話してくれた。

『北斗の拳』の世界観が実に予見的だったという、興味深い話だ。

「コロナ禍になった時に、『北斗の拳』みたいになってしまったと思ったんですよ。映画の『マッドマックス』シリーズもそうですが、荒廃した世界で、みんなマスクをしている。あんな異様な光景はマンガや映画でしか見たことがありませんでした。Zoom会議で、マスクの次は『北斗の拳』の世界みたいにみんなモヒカンになるぜ、なんてそんな冗談を言っていた記憶がありますね。今考えると、本当に世紀末のような感じでした。こうなるなんて思っていなかったし、あの頃ってまさにマンガの世界でしたよね」

『北斗の拳』を語るうえで外せないキーワード〝世紀末〟と近年、いやというほど聞かされた〝コロナ禍〟という言葉がふと重なり合って、ドキリとする。

「80年代『北斗の拳』の連載当時はノストラダムスがめちゃくちゃ流行っていた頃でしたからね。世紀末という言葉はよく耳にしました。でも、世紀末って終わってみると大したことがなかった。1999年も2000年問題もあれほど大騒ぎしていたのに、何もなかったんですよね。だから、まさか2020年に世紀末のような世界を迎えるとは思っていませんでした」

手林氏は自身のエピソードを織り交ぜつつ、『北斗の拳』の先見性のスゴさを強調する。

「コロナ禍の頃にアメリカに出張に行ったんです。ちょうどアジア人しかマスクをしていない時期でした。だからマスクをしているとみんなが見てくるんですよ。『何やってるのコイツ？』という目で。本当にマンガの中の話でしかなかった『世紀末』がこんな形で出てくるんだなと思って、とてもこわかったです。『北斗の拳』ではケンシロウが解決してくれたけれど、実世界ではそうじゃないということもあらためて感じましたね。40年も前に、そんな荒廃感のある未来を描いてらっしゃったというのが不思議ですよね。人が未来を想像すると、抽象的になりがちですよね。なんとなくぼやけているというか。それゆえに、マンガ家の先生方はすごく細かく調べられたうえで描いていると思いますね。絶対に当てずっぽうではなくて、当たるべくして当たっている予見という部分はあるかもしれない。『北斗の拳』もこういう未来もあるかもしれないというところを、手繰り寄せて描かれた作品じゃないでしょうか」

『北斗の拳』の奥深さを感じられるエピソードで締めくくっていただいた。最先端の文化を汲み入れつつも、未来まで予見していた作品だったとは！ 今、読み返すとさらに、その世界観やケンシロウたちの熱い言葉の数々が身に沁みるはずだ。

編集部がセレクト！

憧れの強敵（とも）

『北斗の拳』の主要な男性キャラクターは、皆が強さと誇りをもち、互いにぶつかり合う。その熱い姿に昭和50年男たちは強く惹かれていた。見よ、これが本誌編集部がセレクトした10人の強敵だ！

文：有田シュン

オレたちが追いかけた 漢

CHAPTER2 北斗の拳

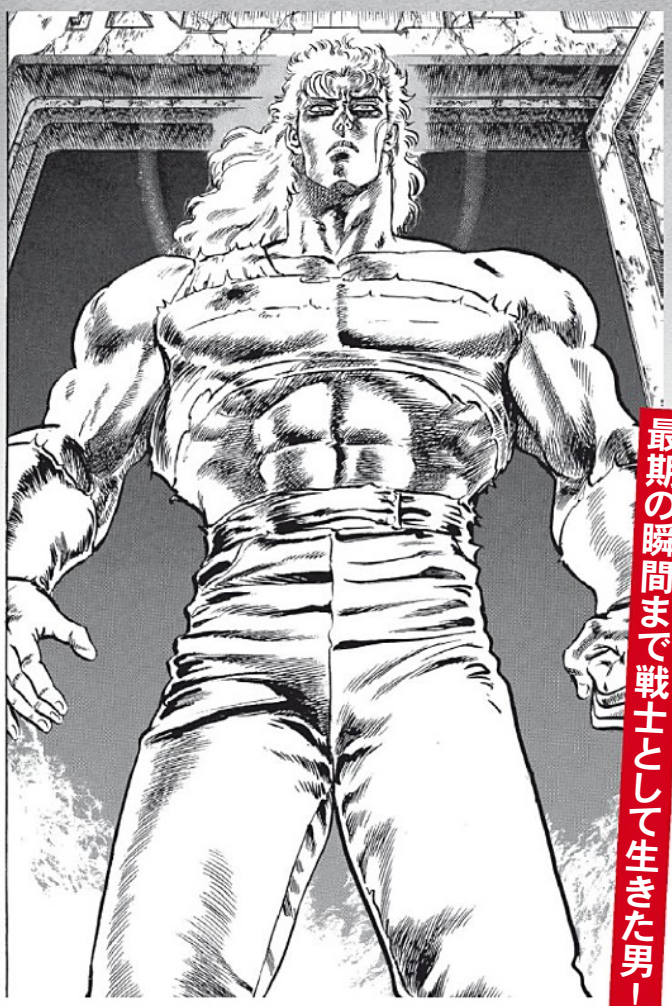
ジュウザ

南斗五車星の一人にして我流の拳を使う「雲」の男・ジュウザ。己が愛するユリアの異母兄であることを知り、かつユリアはケンシロウと愛し合うようになったことから、身を引き無頼を装うようになる。しかし、南斗六星最後の将がユリアだと知るや、ジュウザはユリアとケンシロウのためにラオウに立ち向かい、壮絶な最期を遂げる。愛する女と、その女が愛した男のために命をなげうつ男気は圧巻！

©武論尊・原哲夫／コアミックス 1983

レイ

胸に七つの傷をもつ男にさらわれた妹を取り戻すべく、あらゆるものを利用してきたクールガイのレイ。しかし、本来はその内に熱い思いを抱く男だ。正義のためにその身をなげうとうとしたリンが傷つけられているのを見て激昂したシーンは、屈指の名場面！ 残り僅かな命を燃やし、ユダと死闘を繰り広げた後、誰にも見られず一人で散華する最期も、彼流の美学が感じられた。



最期の瞬間まで戦士として生きた男！

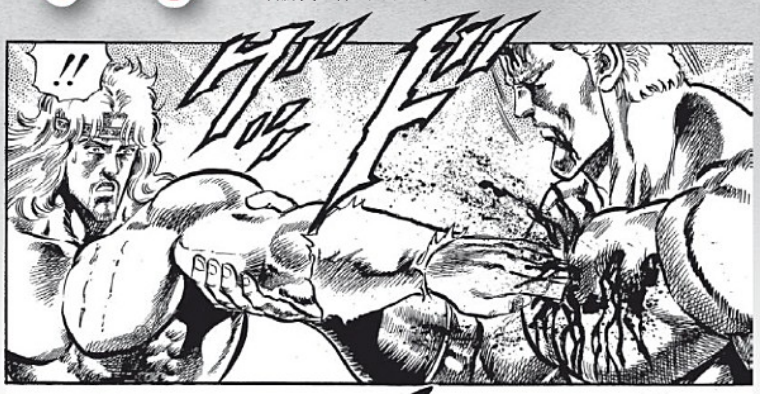
ラオウ

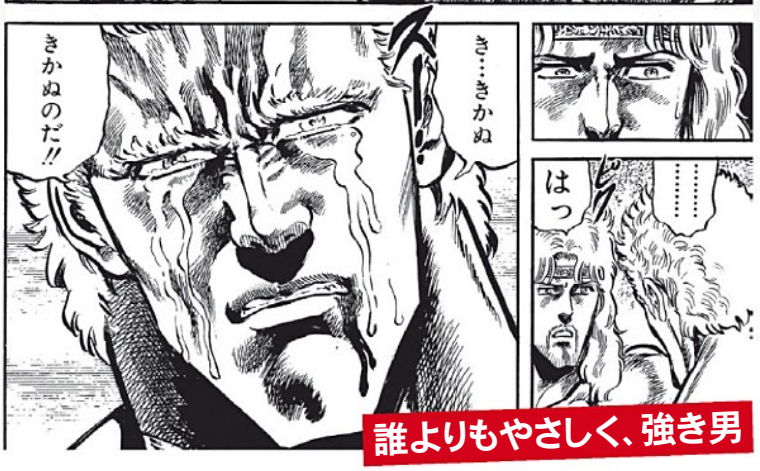
世紀末を揺るがした、偉大なる巨星

力がすべてを支配する時代を、己の拳で統一するという野望を抱くラオウ。腕っぷしのみならず、人としての尊厳を何よりも重んじる、高潔にして孤高の生き様は読者に強烈な印象を残した。最強の座を手にすべく愛を捨てたと思っていたラオウだが、愛と多くの強敵との記憶を手にしたケンシロウとの決戦において敗北を喫する。その最期は、成長した弟の姿を喜ぶ兄としての愛情と、拳王としての誇りに満ちたものだった！

トキ

慈愛に満ちた男・トキ。その実力は兄のラオウも認めるほどだったが、その身はすでに病に蝕まれていた。ラオウの覇道を食い止めるべく対決を挑むも、渾身の一撃は致命傷にはならず、かつての精彩を欠く弟の拳にラオウは兄として滂沱の涙を流す。尊敬する兄に挑むトキの熱い姿と、ラオウの素顔が垣間見える名勝負を繰り広げた。





誰よりもやさしく、強き男

サウザー

愛ゆえに愛を捨てた悲劇の帝王

秘孔が効かないということでラオウまでもが直接対決を避け、ケンシロウを一度は敗北させるほどの実力者である聖帝サウザー。実は修行中に最愛の師匠を手にかけ、南斗鳳凰拳の伝承者となった過去がある。宿命とはいえあまりの悲しさゆえに、愛を捨て帝王の道を歩むことになったのである。愛ゆえに道を踏み外した哀しき男である。

長い旅のなかで、数えきれないほどの強敵と闘い、その死を見届けてきたケンシロウ。彼のなかには、これまで闘ってきた男たちの技と魂が刻まれていたのである。強敵との別れの哀しみを知ることこそが、北斗神拳究極の奥義・無想転生の本質だったのだ。これが、最強ゆえに哀しみを知らぬラオウとの勝敗を分けたのである。

闘いのなかで成長し続ける北斗神拳伝承者

ケンシロウ

シュウ

その拳は守るべき誰かのために！

かつて南斗と北斗の交流試合で負けた幼きケンシロウの命を救う代わりに、自らの両目を潰したシュウ。今は聖帝サウザーに虐げられる人のために闘い続けていた。しかし捕らえられた拳句、守るべき民のために命がけで巨石を背負わされ壮絶な最期を遂げる。生涯を誰かのために捧げ続けてきた、仁義の男だ。

シン

ユリアへの愛に殉じたKING！

ユリアをめぐる対立もさることながら、若きケンシロウの胸に七つの傷を刻んだ張本人として強烈な印象を残したシン。最初の強敵にして非情の男という印象の強い彼だが、後にラオウからユリアを守るべく、あえてユリア殺しの汚名を被ったことが明らかになる。男としての意地と恋のために生きたシンもまた、愛すべき強敵だ。

ジャギ

闇討ち上等！世紀末の世界で悪をささやく仮面の男

かつて伝承者候補でありながら卑怯な闘い方を好むため、師リュウケンからも危険視されていた男。かつて弟子ケンシロウから返り討ちにあったことから、ケンシロウの名を騙って悪行を繰り返していた。いかにも小物感漂う男だが、シンを悪の道に引きずり込んだ張本人でもあり、ある意味序盤の黒幕と言えるかも？

アミバ

俺は天才なのに！いろいろと残念なところが愛おしい!?

自称天才のアミバだが、トキにプライドを傷つけられたことから、トキの名を騙り見よう見まねの北斗神拳でその評判を落とす行動を繰り返していた。どんな拳法でも誰よりも早く習得できるセンスは結構すごいのだが、その使い方を間違ってしまった残念な強敵だ。

©隆慶一郎・原哲夫・麻生未央／コアミックス 1990

男に生まれてきたからにはかくありたい

前田慶次という鑑

かつては歴史好事家の一部のみが知る存在だった〝傾奇者〟前田慶次を、戦国時代のヒーローへと変えた『花の慶次―雲のかなたに―』。アニメで熱血ロマンを描くことに定評のあるアニメーション監督・今川泰宏が「日本史のエポックとなる作品」と称える本作の魅力とは!?

取材・文：一角二朗

揺らぐことのない人物像を確立

隆 慶一郎の小説『一夢庵風流記』（新潮文庫）では「傾く」ことを《異風の姿形を好み、異様な振舞いで人を驚かすことを愛する》と定義している。そんな巨体で美丈夫な傾奇者・前田慶次像のイメージを定着させたのは原 哲夫の流麗な画であった

我々昭和50年男にとって衝撃の作品だった『花の慶次―雲の彼方に―』（原作：隆 慶一郎／漫画：原 哲夫／脚本：麻生未央）。1990年から『週刊少年ジャンプ』に連載され、当時としては珍しく、戦国の世を舞台に、少年たちに初めて大人の男の生き様を教えてくれた作品である。

本作の主人公・前田慶次（前田慶次郎利益）は、史実のうえでは織田信長を支えた、甲賀の滝川一益一族の出とされる。後に加賀百万石の当主となった前田利家の兄・利久の養子となったあたりから記録が残され、北条氏の小田原征伐後に前田家を出奔。晩年は上杉景勝に仕え、歌を詠む風流人として一生を終えた。

江戸時代には武士たちの説話として話題となったようだが、現代では忘れられた存在であった。時を経て彼をフィーチャーすることになったのが、隆 慶一郎の小説『一夢庵風流記』（※1）で、それを原作としたのが『花の慶次』だった。この2つの作品が、現代の人たちがもつ前田慶次の人間像を作り上げたと言っていい。実際、慶次を人並み外れた体格の武将として描いたのも、この2作からである。

〝傾奇者〟の存在を世に知らしめた物語

「『ジャンプ』の連載から、本

オレたちが追いかけた 漢

CHAPTER3 花の慶次

今川泰宏が影響を受けた名作ドラマ・映画

映画『上意討ち 拝領妻始末』（'67）
滝口康彦の『拝領妻始末』（講談社文庫所収）を原作に、『切腹』（'62年）の小林正樹監督が封建制度のなかの理不尽を描いた

映画『風林火山』（'69）
三船、石原裕次郎、中村（萬屋）錦之助のスター3ショット踏み。さらには井上 靖の原作（新潮文庫所収）の映画化として、大ヒットした

大河ドラマ『峠の群像』（'82）
写真は堺屋太一の原作第1巻（全4巻／文春文庫所収）。再放送もされ全編映像が残っているものの、ソフト化されているのは総集編のみ

※1…それ以前にも海音寺潮五郎、大佛次郎、山田風太郎などが小説に描いている。映画では『あばれ大名』（1959年）で市川右太衛門が前田慶次郎を演じ、松風も登場するが、人並み外れた体格ではない。後に大河ドラマ『利家とまつ～加賀百万石物語～』（2002年）で及川光博が妖しい慶次郎を演じている。

すべての男が共感するロマン

相手が時の権力者・豊臣秀吉であっても傾き通す――
己の掟のために命を賭ける、そんな前田慶次に惹かれる

当に大変なマンガだと思って読んでいました。あの頃〝傾く〟という言葉を知っていた人って、どれくらいいたんでしょうね。時代小説などに親しんでいた人はわかっていたんでしょうけれど、少なくとも自分は知りませんでした」

本作を初めて読んだ時の感想をこう述べるのは、今川泰宏。今川といえば、『聖戦士ダンバイン』(83～84年)などの富野由悠季作品での演出を皮切りに、『ミスター味っ子』(87～89年／監督)、『ジャイアントロボ THE ANIMATION―地球が静止する日』(92～98年・OVA／監督)、『機動武闘伝Gガンダム』(93～94年／総監督)、『鉄人28号』(04年／監督)…。熱量が高くダイナミックな作風のアニメ作家として昭和50年男にはお馴染みだろう。

その今川が『花の慶次』を〝エポックメイキングとなる作品〟というのだから、本作への興味が湧いてくる。

「〝傾奇者〟というそれまであまり表に出ていなかった武士の生き様を、前田慶次という男を通して紹介した。原作小説で描かれた世界をマンガ、しかも『ジャンプ』という世間に広がりやすいフィールドで描いたことがすごいんですよね」

れの〝義〟という筋をもって戦う

〝傾く〟とは何か。原哲夫によれば、《自分が面白いと思えば、少年のように目を爛々と輝かせて、無邪気にそこへ向かって突進していく。人になんといわれようと、自分が心底面白いと思ったことをやるだけ。しかも命を賭けて、である》(集英社文庫『花の慶次』10巻「あとがき」より)ということになる。

「あんな派手な格好の大きな男が、傾きまくるわけだから、(慶次のことを)空想の人物なのかって考えてしまいますよね(笑)。でも、利家を水風呂に入れて出奔するなんて話は、史実に残っているんですよ。信長・秀吉・家康の世界観で固定されていたなかで、傾奇者という豪快な人物を新たに世に広めたことが、この作品の力なんだと思います」

人間像を定着させる物語の強さ

このように、世間にイメージを定着させる、力のある物語というものが存在する。

「僕のなかではまず、映画の『砂の器』(74年)です。あれは雷が落ちたような衝撃を受けました」

『砂の器』は、殺人事件をめぐってベテランと若手の二人の刑事が捜査するうちに、関係者の悲惨な過去を知る、という松本清張原作の長編推理小説が原作。黒澤 明作品の助監督を長く務め、数多くの清張作品を映画化した野村芳太郎がメガホンをとった。

「そこで脚本の橋本 忍さんが、原作の後半にたった一行だけある、親子の旅のエピソードをふくらませて、日本映画史上最高の40分と言われるシーンを作ってしまった。オーケストレーションの迫力も含めて、その後『砂の器』は映画版のイメージの方が強くなってしまったわけですよね」

たとえば、盲目の侠客・座頭市というキャラクターも、子母澤 寛(※2)の10ページほどの短篇から、主役の勝 新太郎や三隅研次(※3)などの監督が色づけしたもので、原作と世に広まっている人物像は大きな開きがある。

「時代物というところでは、さわやかでカッコいい沖田総司像を作ったのは、テレビドラマ『新選組血風録』(65～66年／NET＝現・テレビ朝日、東映)の島田順司さん。史実では瓜実顔の人物だった沖田を、美青年のイメージに変えたのは、演じた島田さんの影響でしょう」

乱暴なもの言いをすれば、時代劇の多くは、史実(語り継がれた説話など)から、講談や大衆文学、さらに時代を経て歴史小説や映像化されるなかで、作り手によってイメージがふくらみ、定着したものということになる。

「エンターテイメントのためとはいえ、メディアに生きる人間として、資料に対して嘘をついてはいけない。ただ、その資料を読み解くなかで見えてくるファンタジーもある。そこが歴史物のおもしろいところでもあり、難しいところでもあるのでしょ

※2…『新選組始末記』『新選組遺聞』『新選組物語』の三部作で、新選組のイメージを確立した作家として知られる。
※3…『座頭市』『眠狂四郎』『子連れ狼』シリーズなど、多くの人気時代劇シリーズを手がけた映画監督。

うね」

時が進み、歴史の研究が進むにつれてこれまでの常識が変わってくることもある。近年では、研究者の間で織田信長は凡将だったのではないかという説も討論されているくらいだ。

「ちなみに僕は織田信長が嫌いなんですよ。だって桶狭間の戦いで〝今川〟義元が情けない姿で描かれるでしょう？〝今川〟のイメージを悪くしやがって、って…冗談ですよ（笑）」

世の不条理と戦う時代劇のヒーローたち

そんな今川に、影響を与えた時代劇を聞いてみた。

「映像のスペクタクルという意味では角川映画の『天と地と』（90年）ですね」

〝赤と黒のエクスタシー〟のキャッチコピーで、総製作費55億円をかけて川中島の合戦を再現した超大作だ。

「槍の戦いや、上杉軍が〝車懸りの陣〟、武田軍が〝鶴翼の陣〟（※4）を作って戦う合戦を、実写で初めてリアルに見せてもらえた。映画館で前の方に座って、視界をすべてスクリーンにして観ると、すさまじいビジュアルでしたね」

CMなどで話題を集めて、ハリウッドに負けじと大金を使った角川春樹も、日本映画界の傾奇者と言えるかもしれない。

「あとは、いちばん初めに観た時代劇だったと思うんですが、三船敏郎さんが山本勘助を演じた映画『風林火山』（69年）。山本勘助は武田を愛して仕官し、甲斐に海をもつという見果てぬ夢をもった。それゆえに川中島で戦って死んでいくんですが、最後に信玄が《あまりにも大きな夢を観すぎて…うつけ者、うつけ者めがあ！》と唸るシーンは、今思い出しても泣けますね。自分のなかで時代劇の雛形になっている映画です。あと、同じく三船敏郎さん主演の『上意討ち 拝領妻始末』（67年）も大好きですね。武士の世界の理不尽を描ききっているところが」

側女（そばめ）を藩主の命で拝領させられた伊三郎（三船）の息子・与五郎（加藤 剛）。二人の間には愛情が生まれ、子供にも恵まれる。ところが、藩に跡継ぎ問題が勃発すると、与五郎に側女を返せと命が下る。あまりの不条理に親子は怒り、藩に弓を引くことになる——という、武士としての矜持（プライド）を描いた作品だ。

「不条理と戦う男という意味では、『忠臣蔵』ですよね。なかでもNHKの大河ドラマ『峠の群像』（82年）は全話録画して、毎年12月14日に討ち入りの回に到達するように合わせて観ています（笑）」

時代の理不尽に対して、それぞれ

通商産業省（当時）の官僚だった作家・堺屋太一の原作で、赤穂藩お家断絶を時代の変わるターニングポイント（＝峠）としてとらえた群像劇である。

「もはや武士の社会も刀からそろばんに移っていく時代になっていた。浅野内匠頭が、礼法指南役の吉良上野介に斬りつけたわけですが、その理由のひとつが、内匠頭が上野介に賄賂を渡さなかったから、とされているんですね」

この頃、指南役への賄賂は当然の礼儀とされていた。だから上野介は内匠頭にルールを知らない〝田舎大名〟と蔑んだ…というのが、定説となっている。

「ところが、本来はけんか両成敗のはずなのに、吉良はおとがめなしで、浅野は切腹、お家は取り潰しとなった。『峠の群像』のおもしろいところは藩を会社、武士をサラリーマンにたとえて、その理不尽をわかりやすく描いたところなんですよね」

サラリーマンは主君＝社長につくのか、藩＝会社につくのか、それとも生活のために他の藩に仕官＝転職するのか…。まさに、現代ならではの物語である。

「主君の仇を討つのか、お家の再興を目指すのか、と家臣のなかでも割れる。緒形 拳さん演じる大石内蔵助はどっちつかずのように見せて策を講じるなかで、《私は…この時代の流れに腹が立つ》って、本音を吐くんですよね。今の時代にも通じるような、その時どきのルールのなかに起こる不条理に揺れ動く心が描かれているから好きなんです」

そう言って、なおも今川は続

世の道理を示す

直江兼続の小姓・弥之助が身分の高い小姓13人の卑怯な罠にかかり斬殺されたことを知った慶次は、果たし合いの末に全員を斬り伏せる。理不尽には武をもって制す。男のやさしさ、礼儀なのだ

※4…上杉軍が使った車懸りの陣とは車輪が回転するように次々に新しい部隊が攻撃する陣形。武田軍は翼を広げた鶴のように左右に広がる鶴翼の陣をしいた。

ける。

「僕が『花の慶次』を好きなのも、登場する人たちが時代の理不尽に対して、それぞれの〝義〟という筋をもって戦う心が描かれているからなんですよね。だからこの作品で、誰かひとり好きなキャラクターを選べという質問をされたら、困ってしまうんですよ。みんな登場の仕方は違っても、筋を通すことしかできない。そのために、時には涙を流すこともある。恥ずかしいぐらい不器用な男たちなんです。だから、決定的に悪いと思えるキャラクターって、ほとんど登場しないんですよね。その日本人ならではの男の不器用さ、かわいらしさみたいなものを徹底して描いている。とにかく素直じゃない、けれど〝こんな男になりたい〟という姿なんですよね。高倉 健さんの映画を観ると、みんな劇場を出るときに健さんになって肩で風を切るって話があるでしょう?（笑）。それと同じ感覚が『花の慶次』にもあるんですよ」

現代に生きる我々も、こうした不器用さをもっている。ただ、世の理不尽と戦う強さをもつ人間ではないだけだ。そこに、慶次をはじめとする登場人物たちに、感情移入する。

「筋が立つと大暴れすることがあっても、無駄な殺生はしない。暴力のぶつかり合いではなくて、心のぶつかり合いとして描いてあるんですよね。それをいくさ人、傾奇者の慶次たち登場人物が説いてくれる。〝あぁ、オレもこんなこと言ってみたいなぁ〟という気持ちになるんですよ（笑）。そこがこの作品の魅力だと思います」

アニメーションになった傾奇者たち

『少年ジャンプ』で『花の慶次』の連載が終了してから15年後の2008年、『義風堂々!!直江兼続―前田慶次 月語り―』が『週刊コミックバンチ』（新潮社、後にコアミックス『月刊コミックゼノン』）で始まった。この物語はさらに、『義風堂々!!直江兼続～前田慶次 酒語り～』（原作：原 哲夫・堀江信彦／漫画：武村勇治）、『義風堂々!!直江兼続～前田慶次 花語り～』（原作：原 哲夫・堀江信彦／漫画：出口真人）と続いた。『義風堂々!!』は、〝義〟を重んじる上杉景勝の軍師として活躍した直江兼続と、上杉に仕官して隠居した終生の友・前田慶次が酒を傾けながら思い出を語らい、あらためて戦国時代の男たちをとらえ直した作品である。連載中の2013年から『義風堂々!!兼続と慶次』としてアニメ化され、今川はそのシリーズ構成を担当した。

アニメ『義風堂々!!兼続と慶次』のオープニングでは、その〝義〟をこう説いている。

「義の文字は
我と羊である
羊は美と同じである
故に義とは
我を美しゅうする
の意となる
繰り返す
義とは正に
己にとって美しく生きる
ということになるのである」

こう振り返ってみると、『義風堂々!!』は今川の資質にピッタリな物語のように思えてくる。歴史物への思い、義を描く姿勢、スペクタクルを描ける設定、そしてテレビアニメ『真マジンガー 衝撃！Z編』（09年）のあしゅら男爵のような人知を超える〝スーパー〟な存在…。

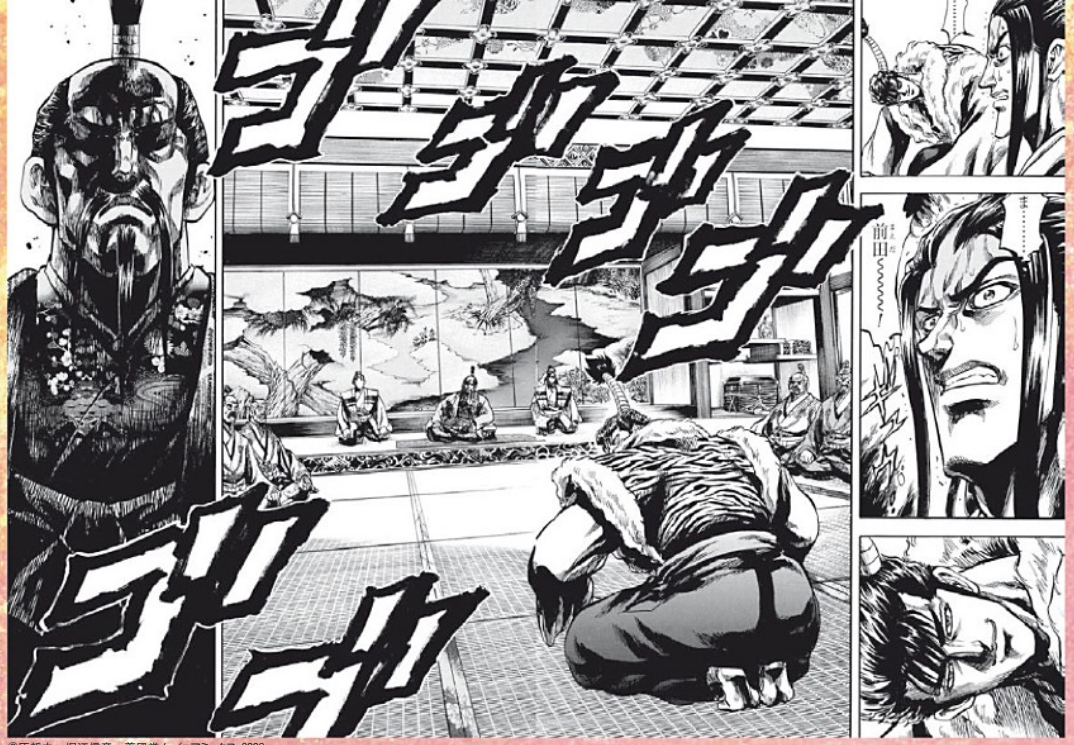
「もう10年以上前の話なので、詳しい経緯は忘れてしまったのですが、その前に原先生のアニメ『蒼天の拳』（06～07年）のシリーズ構成を担当していたので、このマンガをフィルムに置き換えるには、どのシーン、どのセリフを抜いてふくらませていくか、というサビの効かせ方はわかっていたところがありました。そのうえで、『花の慶次』が前田慶次の英雄譚なのに比べて、『義風堂々!!』は直江兼続を通じて、歴史上のエピソードを追っていくことに重点が置かれていると感じたんです」

確かに『義風堂々!!』は直江兼続と前田慶次の回想から、彼

徹底して描いている

不器用な生き方こそが男の本道

藩の窮地を救うために慶次を斬り、自分も死ぬ覚悟だった慶次の莫逆の友・奥村助右衛門だったが、失敗する。いくさ人としての決意、そして不器用な生き様には涙を禁じ得ない



©原哲夫・堀江信彦・義風堂々／コアミックス 2008

原作：原 哲夫・堀江信彦／漫画：武村勇治『義風堂々!! 直江兼続 ～前田慶次 酒語り～』（コアミックス）

慶次が豊臣秀吉に謁見する場面は『花の慶次』序盤のクライマックスシーンのひとつ。『義風堂々!!』の描写と併せて読みたい

らが歩んできたそのストーリーが綿密に描かれていく。アニメでも、京での兼続と慶次の出会い、そして秀吉の圧力によっていくさ場に赴いた佐渡平定、さらにはその後、上杉景勝の上洛によって兼続と慶次、二人のいくさ人が秀吉のもとを訪れる…というように。

「たとえば秀吉と謁見する場面がありますよね。慶次が斜めに髷を結って、顔を横に向けることによって、頭を下げるけれども、本心では頭を下げていない――というシーン。これはなぜ秀吉のもとを訪れなければいけなかったかの理由も含めて、『花の慶次』よりも『義風堂々!!』の方が綿密に描かれているな、と感じましたね」

シナリオを書くうえで、さらなるポイントにしたのは「わかりやすさ」だったと今川は言う。

「普通のことのようですが、僕はこれがいちばん大事なことだと思っているんです。歴史物は登場人物が多くて、名前もややこしかったりするので、必ず初登場の時はキャラクターをピックアップで描写します。さらには、舞台背景もわかりづらいので、セリフだけで説明するのではなくて、どういった状況なのかを画で見せてあげる。ストーリーのテンポも速いので、ひとつひとつのエピソードが流れて消えてしまわないように、ていねいに描くことが重要だと思いました」

笑わぬ不器用な男の千金の笑顔

そんな『義風堂々!!』において、今川がひとつだけ後悔していることがあるという。

「クライマックスで、上杉景勝が笑うシーンです。景勝は笑顔を見せないことで有名だった。それを効果的に使いたかったのですが…」

ところで『義風堂々!!』では、直江兼続は子供がいなかったとされる上杉謙信の落とし胤（だね）という説をとっている。兼続は上杉家家臣の樋口兼豊の長男で、直江家に養子になったとされているが、史実的にははっきりしたことはわかっていない。景勝は、兼続が謙信の子であると知ってから、上杉家を兼続と共に守ると決意し、笑顔を捨てた。兼続も、そんな景勝と上杉家のためには命をも捨てると決めた。それが〝義〟であった。

さて、今川の心残りのアニメのシーンに戻ろう。兼続が謙信の子という事実を知った徳川家康は、上杉家を混乱させるため、伊賀忍軍を差し向けてその証である地蔵菩薩像を奪おうとする。兼続たちは少数精鋭でそれに立ち向かい、景勝もその場へ向かう…というのが、アニメのクライマックスだ。

「アニメの最終回前に原作に追いついてしまい、最後の3話ほどはギリギリまで仕上げられなかったんですよ。仕方なく原作の一区切りできるタイミングで終わらせたのですが、後でマンガを読んだら、景勝の笑顔の描き方がとてもすばらしくて…〝あぁ、オレにはこの発想はなかった〟と観念しましたね（笑）」

＊

それから10年、前田慶次をめぐるシリーズは『前田慶次 かぶき旅』（コアミックス『月刊コミックゼノン』）としてまだ続いている。時代劇ファンでもある今川は、実写でも慶次の世界を観たいと語る。

「慶次と兼続の話をひとつにして、NHKの大河ドラマで観てみたいですね。いいでしょう？初のマンガ原作大河ドラマ！時代考証もきっちりしているし、何より日本人が好きな人間がたくさん登場しますし。それくらい、広い人たちに訴える魅力がある物語ですよ」

※自画像

PROFILE

今川泰宏／いまがわやすひろ

昭和36年、大阪府生まれ。富野由悠季の下で『聖戦士ダンバイン』『機動戦士Zガンダム』などの演出を務めた。監督作品として『ミスター味っ子』『ジャイアントロボ 地球が静止する日』など。近年はアニメ作品のシリーズ構成や脚本なども担当している

直江兼続といえば兜の前立に〝愛〟の文字。終生、上杉景勝をサポートした名将の心意気が表れている
（原作：原 哲夫・堀江信彦、漫画：武村勇治『義風堂々!! 直江兼続―前田慶次 月語り―』より）

浪川大輔が惚れた天衣無縫の傾奇者
義の武将 直江兼続

アニメ『義風堂々!! 兼続と慶次』で直江兼続を演じたのが、浪川大輔だ。大の戦国時代ファンでもある浪川が役作りを通して実感した兼続の人物像と、同アニメ作品を通底するテーマ〝義〟について熱く語ってくれた。

取材・文：一角二朗

オレたちが追いかけた漢 CHAPTER3 花の慶次

「歴史ものは昔から好きだったんです。戦国に関する読み物などは子供の頃から読んでいて…」

そう語るのは、アニメ『義風堂々!! 兼続と慶次』（2013年）で主人公・直江兼続を演じた浪川大輔だ。

「ドラマやゲームなどの影響もあって、伊達政宗が好きになって、その流れでいちばん興味をもった武将が大谷吉継（※）でした。ゴツゴツした武将よりも、スマートなイメージの武将が好きでした。『義風堂々!!』でも妖しい感じで登場しますよね。僕も演じてみたいな、と思いましたもん（笑）」

さらに浪川は、歴史物の魅力をこう語る。

「特に戦国時代の歴史って、ファンタジーを感じさせる部分があると思うんです。たとえば、織田信長の遺体が出てこないのはなぜかとか、本当は本能寺で死んでいないとか、ロマンを感じる逸話がたくさんある。そんなところに惹かれたのかもしれません」

浪川は昭和51年生まれ、すなわち我々昭和50年男とほぼ同年代である。だから当然、黄金期の『週刊少年ジャンプ』を通ってきた。

「『花の慶次―雲のかなたに―』は『ジャンプ』の連載から読んでいました。前田慶次たちへの憧れはあったんですけど、手の届かないすごい人たちだな、というイメージがあったんですよね」

20年を超える時を経て、そんな浪川に『義風堂々!!』のオファーがやってくる。慶次と酒を酌み交わしながら、兼続視点で彼らの生きてきた歴史を振り返る、という構成だ。

「僕のなかでは兼続と慶次が主役のような感覚をもっていました。兼続は上杉景勝の参謀として活躍した人物なので、華としてはやはり慶次の方があると思っていたんです。なので、オファーをいただいた時に、この作品の魅力を最大限に伝えるには、慶次とのバランスをどうとるかがポイントになるのかな、と考えていました」

兼続たちにとって〝傾く〟のは当然の生き様

「作品自体の雰囲気に熱があって、登場人物のたたずまいも含めて、すべてがカッコいい」

と浪川が言う『義風堂々!!』。美丈夫の直江兼続を演じる際に考えたことはなんだったのか。

「当時の自分は、どちらかというと線の細いキャラクターが多く、兼続のような人物は珍しか

※…豊臣家家臣で、越前敦賀を治めた。関ヶ原の合戦で石田三成に味方した。

©原哲夫・堀江信彦・義風堂々／コアミックス 2008

ったので、まずは内面から兼続になることから始めました」

兼続が重んじるのは、主君――いや、実は父親である上杉謙信が重んじた〝義〟だ。兄のような景勝と、彼が継いだ上杉家を時には大胆な行動で、また時には影となって守るという信念で生き抜いた男である。だから死が迫るような窮地に陥っても、こわがることなく、いつも平然とした態度で生きるスーパーな人間に映る。

「僕は、兼続も慶次も、恐れという感情がないわけではないんだと思うんです。こわいものがないわけではない。ただ、義に生きるということが大事で、そのための心の在り方を知っている人たちなんです。もっと言えば、兼続たちがもっている心の大切さは、戦国時代も現代も関係ないんじゃないか、と」

それを理解するためのキーワードが〝傾く〟である。

「傾くってなんだろうと考えてみたんです。兼続だったら前立に〝愛〟の文字をかたどった兜をしていますよね。慶次の格好もそうですけど、派手な格好をして自らを大きく見せるとか、ハッタリを利かせているわけではなくて、義に生きるために、自分を奮い立たせる生き様の表れなんだろう、と思ったんです」

つまり、義に生きる兼続にとっては、傾くのは当たり前のことということになる。

「なので、それを演者ががんばっている感じを見せずに、当然のものとして演じなければならないな、と考えていました。監督をはじめとするスタッフさんとも、傾く＝大げさに演じるのではなく、落ち着いて、堂々とした感覚を大事に演じましょうと話をしていました」

ひと言で周りを鎮める月のような兼続のオーラ

そのうえで、先に挙げた慶次とのバランスを考えた。

「たとえば慶次が周りの人たちを巻き込んでいくような陽気さをもっているとすれば、兼続の場合はひと言発することで周りを鎮められるオーラをもたせたかったんです」

太陽のような熱をもった傾奇者が慶次なら、兼続は月のような輝きをもった傾奇者ということになる。

「大きな声を出すのは、いざという時だけ。ガンガンいくのではなく、静かに攻める。慶次を演じた佐藤拓也くんは、もともと声に人を惹きつける力がとても強いパワフルな役者さんです。だから、僕もそこに合わせて、引っ張ってもらった部分があるかもしれません。兼続と慶次は刎頸（ふんけい）の友ではあるけれど、考え方は違います。どちらも器の大きい人間だけれど、個性は違う。ある部分は僕と佐藤くんの関係でも同じだと思うんです。自分は自分、でもお互い相手も認める。そんなところがカッコよく見えればいいなと考えていました」

そんなアニメ『義風堂々!!』のなかで、兼続と慶次の関係性が表れる演技が、佐渡攻めを行うシーンだ。秀吉の策略を乗り越え、戦の勝敗が見えたなかで、兼続と慶次が割って入り、二人でこう叫ぶ。

《抗う者がおれば、この直江兼続と前田慶次が、猛き龍となり、義をもってお相手いたす!》

すると、川の水が龍となって空高く舞い上がる――。

「あのシーンは、佐藤くんとユニゾンで録ったんです。佐藤くんの声がすばらしすぎて、ついていくのに必死でした（笑）」

原作の描写をさらに広げた、アニメならではの名シーンである。ところで、『花の慶次』、『義風堂々!!』シリーズは、こうしたスペクタクルや、力をもって戦う場面も多いが、実は言葉によって大きく運命が動くシーンが多い。

「それだけに、言葉の出し方に

〝傾く〟とは義に生きるために自分を奮い立たせる生き様

物語のクライマックス、鉄扇を持って舞う兼続。巨大な槍に加え、この鉄扇は武器にもなる（『義風堂々!! 直江兼続 ～前田慶次 酒語り～』より）

『義風堂々!! 直江兼続 ～前田慶次 酒語り～』（原作：原 哲夫・堀江信彦 作画：武村勇治）
アニメ『義風堂々!! 兼続と慶次』の原作であり、主人公・直江兼続の知られざる真の物語を描く

は気を遣いました。ただ、言葉のニュアンスだけではなく、そこからにじみ出る雰囲気を大事にしたんです。それには、作品がもつ画面の力にも助けていただいている部分が大きかったですね。たとえば、セリフのないシーンでも、花びらがひらひらと舞っていくとか、〝間〟がものを言う演出によって、キャラクターの考えることがより引き出される感覚がありました。僕の好きな兼続の姿が、度々あった、風が吹くシーンです。風が吹いてきて、ほんのちょっと髪が揺れる。そこから見える兼続の顔が、天下を見ているような空気感をもっているんです。ぜひ、それは皆さんにも堪能していただきたいポイントです」

余計なことを言わない傾き者たちのやさしさ

浪川が兼続を演じるうえで、もうひとつ大事にしていたことがあるという。

「兼続や慶次がもっているやさしさです。誰かが困っている時に、ことさらに〝助けてあげようか〟という姿勢を見せるのではなく、スッと手を差し伸べる感覚なんですよね。そのカッコよさを演じきりたかったんです」

そのうえで印象的だったのが、兼続の従者・茂助とのエピソードだという。

まだ兼続が樋口与六と名乗っていた頃、京で身重の妻をもつ茂助を夜盗から助ける。しかし、結局妻は殺されてしまい、与六が夜盗を退治した後、茂助は首を吊って妻の後を追おうとする。与六は巨大な槍でその綱を切って、こう言う。

《この槍を持つ供がおらぬ
越後まで……いや
死ぬる時までこの槍……
持ってはくれぬか？》

「余計なことは言わないけれど、ちゃんと最後まで面倒を見る。助けると言ったら、助ける。その心は絶対にぶれることはない。そんな必要最低限かつ心を打つ言葉がスッと出てくる。そんな男のカッコよさを感じます」

ちなみにアニメでは、時を経て、秀吉の計略で〝負け戦〟を覚悟し、ひとり上洛する兼続を、茂助が必死の形相で追いかけてきて、叫ぶシーンがある。

《こいつはオレの槍だ！
オレの持つ槍だって！》

兼続が提示した、やさしい義の心は、いつしか茂助に〝兼続と共に生きて死ぬ〟という義の心を植えつけたのである。

「個人的には行動を共にする茂助や、忍者の次郎坊との会話が好きなんです。茂助役の川本 成（なる）さんのまっすぐなお芝居と、次郎坊役の郷田ほづみさんの強面だけど軽快な感覚。演じていても楽しかったですし、あの独特な空気感を生み出せたのは、お二人に助けていただいたおかげだと思います」

ちなみに作品が作品だけあって、キャストにも実に男らしい役者陣が配置されている。兼続の主・上杉景勝はアニメ『ＢＬＥＡＣＨ』で茶渡泰虎（さどよしとら）を演じた安元洋貴。上杉謙信は『インフィナル・アフェア』シリーズなどアンディ・ラウの吹き替えで知られるてらそままさき。石田三成の家臣である島 左近は『黒子のバスケ』木吉鉄平でお馴染み浜田賢二。さらには信長に仕えた甲賀の忍・伴 太郎左衛門には重鎮・羽佐間道夫…といった面々だ。

「石田三成を演じた加藤和樹くんは、ものすごく身体を鍛えているので、アニメのキャラかと見間違うくらいでしたね（笑）。ともかく、アフレコ現場は男らしい声だらけで、尊敬する先輩方も勢ぞろいしていたので、緊

茂助が若き日の兼続（樋口与六）に救われる。無骨だがやさしい言葉をかけられたことで、長く従者として付き添うことに――（『義風堂々!! 直江兼続～前田慶次 酒語り～』より）

大人になって兼続というキャラにめぐり会えたのは財産です

張しました。自分が1年目、2年目だったら、震え上がっていたんじゃないかなぁ（笑）」

そして、織田信長役は山寺宏一である。

「山寺さんの信長は、ひと言でいえばスタイリッシュ。品があって、カッコよかった！」

大人になったからこそ理解できる〝義〟の心

ところで、その山寺と浪川には意外なエピソードがある。

「僕がまだ若かった頃、10代、20代の頃、役者として迷っていた時期があったんです。そんな時、何かの仕事でご一緒した山寺さんが『いいぞ、がんばれよ！』なんて褒めてくださって。『もっと一緒に仕事ができるようになるとうれしいなぁ』という言葉が励みになって、変なもの言いになりますが、気が楽になったんです」

浪川の役者としてのキャリアは40年近くある。我々昭和50年男がテレビで観た（87年『日曜洋画劇場』放送）『ネバーエンディング・ストーリー』で、すでに主人公・バスチアンの声を演じている。さらには『E.T.』の日本語吹替版制作を長らく許可しなかったスティーヴン・スピルバーグが、その声を聞き、主人公・エリオット役に浪川を起用するという条件で、ソフト化できたという逸話のある才能なのだ。

その後、会社勤めを経験しながらも活動を続け、『ロード・オブ・ザ・リング』シリーズのフロド（イライジャ・ウッド）、『スター・ウォーズ』シリーズのアナキン（ヘイデン・クリステンセン）などの、時どきの大作洋画の主人公や、アニメでも『GANTZ』（04年／玄野 計役）をはじめ、現在に至るまで印象的なキャラクターを演じている。

「僕がアニメでメインキャラクターをいただくようになったのが、30歳を迎えた頃でした。それまでの自分は、どちらかというと線の細いキャラクターを演じることが多かったんです。それから40歳近くになってくると、『ルパン三世』シリーズの五ェ門を担当（11年～）させていただくようになったり、少しずつ独特な味をもつキャラクターを演じることが増えてきたんです」

そんな頃に担当したのが『義風堂々!!』の兼続だった。

「新しいことに挑戦する、という経験をさせていただけることは、ありがたいことだと思います。とにかく精いっぱい、一生懸命演じたという思い出だけが残っているんですけれど、この年齢の時に兼続というキャラクターにめぐり会えたのは、僕の財産だと思います」

そう笑って、浪川は続ける。

「今考えてみると、『花の慶次』を読んだ少年時代には〝義〟に生きるという登場人物の気持ちであったりその魅力を、十分に理解できていたかどうかは、正直わからないところがあります。『義風堂々!!』も含めて、大人になってあらためてシリーズを読み返してからの方が、心に染みる言葉やシーンが多かったように思います。その一方で、この〝義〟という心をもっと早く理解できていたら、自分自身の考え方も変わったかもしれないな、という自分の生き方をも考えさせてくれる作品です」

大人になったからこそ演じられる役のおもしろさ、味わえるテーマの重さがあるのだ。

【PROFILE】 浪川大輔／なみかわだいすけ
昭和51年、東京都生まれ。子役時代から声優として活躍し、アニメや洋画の吹き替えを演じる。代表作は『スター・ウォーズ シリーズ』のアナキン・スカイウォーカーや『ルパン三世 シリーズ』石川五ェ門など。俳優や映画監督など幅広く活動中

編集部がセレクト！

手本にしたい武士（もののふ）

『花の慶次 ―雲のかなたに―』を読むと、〝義〟のためにいかに生きるかについて考えさせられる。時に義を貫かんと懊悩する漢たちは、いささか不器用でもある。だが、それがいい！ 本誌スタッフが惚れ込んだ10人の武士がここに集結！

文：一角二朗

前田慶次

風変わりな格好と振る舞いをするが、己の掟のために命を賭ける“傾奇者”。負け戦に好んで出陣する“いくさ人”でもある。時の天下人・豊臣秀吉にも傾いてみせ、傾奇御免状を与えられる。叔父・前田利家に古老の臣・村井若水が切腹させられそうになった際には「見なされ 若水殿のツラを!! 戦場で傷だらけになったきたねえツラだ。だがそれがいい。これこそ生涯をかけ殿を守り通した忠義の甲冑ではござらんか!!」という言葉で救う、真のやさしさももつ。

真のやさしさをもつ、天下御免の傾奇者

漢（オレたちが追いかけた）

CHAPTER3 花の慶次

©隆慶一郎・原哲夫・麻生未央／コアミックス 1990

終生の友となった
〝いくさ人〟

直江兼続

〝愛〟をかたどった兜の前立が印象的な、上杉景勝の右腕。兼続の小姓・弥之助の仇討ちで、同じ〝いくさ人〟として慶次とわかり合う。佐渡攻めには〝押しかけ助っ人〟として兼継の陣に参戦、ついには会話をせずとも心が通じ合う終生の友となる。後に出家した慶次と米沢で酒を飲みながら思い出を語り合う、『義風堂々!!』シリーズも必読。

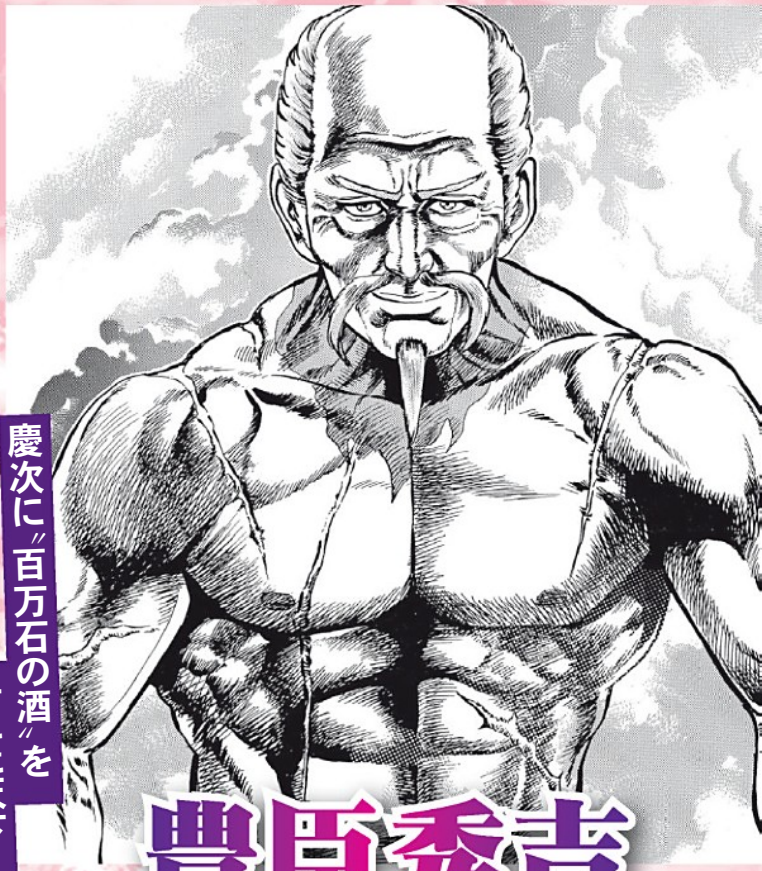
奥村助右衛門

彼の行動が前田慶次伝説の幕を開いた

前田家家臣で、慶次の莫逆の友。居城である末森城が1万5000人の佐々成政勢に急襲された際、援軍に駆けつけた慶次と共に500人の兵力で守ってみせた。利久が死に、前田家に慶次を縛りつけるものがなくなったと知るや、慶次のもとを訪れ、その背中を押す。彼の行動が、前田慶次伝説の幕を開いたと言ってもいいだろう。

頭脳と武力でのし上がったかつての“傾奇者”にして、天下人。噂を聞きつけて呼び寄せた慶次が、猿の舞を見せるなどの傾き三昧を行うと、彼を絶対に飼い慣らせぬ獣であると感じながらも、自分の手の内に置こうとする。それは慶次、兼続、助右衛門、伊達政宗、真田幸村らと風呂を共にし、“百万石の酒”を与えるほどだった。

豊臣秀吉



慶次に〝百万石の酒〟を与えた天下人

秀吉を謁見した際に、猿の舞を見せた慶次に一瞬の殺気を感じ、泰平の世に失われつつあったいくさ人の心を見いだす。やがて家康も野良仕事の舞を見せ、その場を和ますだけではなく「一人くらい自由なやつがいてもいい」というコンセンサスを作ったのだった。一方、秀吉は慶次の微笑みに、かつての家康の姿を見ていた。やはり彼もいくさ人なのだ。

徳川家康

慶次の殺気から、いくさ人の姿を見いだした男

捨丸

出奔した慶次の前に現れ「惚れ申した ―― !!」とひれ伏し、供に加えるよう願い出る。実は加賀藩で四井主馬の下で働く忍びの者として慶次を追い回していたが、その傾きっぷりに惚れたのだった（弟を蹴り殺した松風に乗ってみたかったのも理由だった）。仲間を7人斬り殺して認められると、慶次の旅に随行するようになった。

殺しにきたのに慶次に惚れた忍びの者

伊達政宗

慶次の拳でアイデンティティを取り戻した独眼竜

ご存じ“独眼竜”も、慶次の前では形無し。桜の下で謀反の猜疑心に駆られ家臣を斬った政宗を慶次は殴り飛ばす。小田原攻めを渋る伊達家に、豊臣の使者として慶次が訪れた際にも「餓鬼に言葉が通じるか!!」と張り倒される始末。だが、その拳の熱さに自らのアイデンティティと友の情を取り戻し、小田原攻めに参戦することになる。

真田幸村

人質として秀吉に預けられている際に、松風を見て「お前のような馬と一緒に思い切り暴れまくってみたい」と願う、根っからの“いくさ人”。一方で、加賀の武士に理不尽な暴力を受ける捨丸を自らの拳で救ったり、失明した猿飛佐助の妹・沙霧への果たせぬ愛に涙したりと、戦国を生き抜くにはやさしすぎるほど一本気な好漢。

いくさへの思いとやさしさにあふれた好漢

千利休

茶の湯から慶次と心が通じた〝いくさ人〟

秀吉に仕えながら、かつては家康に天下取りを促すなど、慶次をもって「茶頭というよりあれはいくさ人じゃ!!」と評させる大人物である。息子の道安が京で無礼を働いたにもかかわらず、斬られなかった（が顔を腫らすまで殴られた）ことから慶次に近づく。慶次の一見無手勝流な茶の湯が、自らの奥義と近いことから心が通じた。

どこまでも傾き続ける慶次を愛した父

前田利久

先代の前田家当主で、**利家の兄。慶次を身ごもったまま奥入れした母・お春を愛し、粗暴**ながらもやさしさあふれる慶次を愛した。ある戦いで水が絶たれた際には自らの血で慶次を生かそうとするなど、実の父以上にそのつながりは強かった。慶次が雪のなかで点てた茶を飲みながら、「どこまでも傾きよるわ」と笑顔で没する。

平松伸二の正義

外道どもを地獄に堕とし続けて40年超

法の目をかいくぐって不正を働き甘い汁を吸う〝外道〟に裁きを下すヒーローたちの物語『ブラック・エンジェルズ』。今も最新シリーズを描く平松伸二に、マンガへのモチベーションと、衰えを知らない正義の熱の源を問う！

取材・文：内田名人　撮影：徳山喜行

CHAPTER4 漢を描くマンガ家 漢 オレたちが追いかけた

『ブラック・エンジェルズ』（以下、『BA』）での決め台詞「地獄へ堕ちろ～」とともに、本誌読者世代に強烈なインパクトを残している『ジャンプ』作家・平松伸二。1970年代から現在に至るまでコンスタンスにヒット作――なかでも多くの勧善懲悪モノを世に送り出している。そんな平松の幼少期の話からうかがってみた。

「岡山の山奥に住んでいたんですよ。1時間半ほど歩いていかないとお菓子も買えないような山奥でした。当然マンガ本もバスに乗って町に下りていかないと買えないわけですよ。だからマンガ雑誌なんて親が年に数冊買ってくるものだけ。そこで『鉄腕アトム』、『鉄人28号』を読みながら、おぼろげに『マンガ家になりたいなぁ』と思っていました。そして中学生くらいに『巨人の星』、『あしたのジョー』といったスポ根マンガ全盛時代が始まって、さらにマンガを描きたい気持ちが高まっていったんです」

中学時代、平松に多大な影響を与えた〝漢〟マンガが3作品ある。

「まずは『巨人の星』。僕の少年時代は川崎のぼる先生の絵がいちばん光っていたと思います。

あそこでケツを割っていたらマンガ家になれていなかった

絵柄に影響を受けましたね。次に、ちばてつや先生の『あしたのジョー』。ちば先生は抒情的なシーンがすぐれているんですよ。そして本宮ひろ志先生の『男一匹ガキ大将』。これは迫力という点で飛び抜けていました。この3作品は僕のバイブルですね」

中学2年生の時に石ノ森章太郎の『マンガ家入門』で描き方を学び、中学3年生の時には『週刊少年ジャンプ』の「月例新人賞」にサッカーマンガ『野性のヘディング』を応募。これが佳作となりマンガ家への扉が開く。

「1㎝四方のコマに僕の入賞作が載っていたんですが…あんなにうれしかったことはいまだにないですね。『マガジン』『サンデー』も新人応募はしていましたが、この2誌は大御所作家の連載が多くて。そこへいくと『ジャンプ』はジャンプ新人マンガ家を起用していたので、いちばんデビューしやすい環境だったんですよ」

さらに、高校1年生の時に応募した『勝負』は、『週刊少年ジャンプ』1971年50号に掲載。平松のマンガ人生はいきなり結果が出る形で始まった。

「高校時代の3年間で描いた作品は『ジャンプ』本誌に5、6本載っています。応募して描いたものもあれば、編集部からの依頼で描いたものもあります。そのなかの『限界30球!』は武論尊さんと初めて組んだ作品ですね。まだ世間のことを何も知らない高校生だったから学園ものやスポーツマンガくらいしか描けないんですよ」

平松の岡山の実家には、なんと『ジャンプ』編集者・後藤広喜（後の4代目『ジャンプ』編集長）がスカウトに訪れている。このことからいかに平松が期待をかけられていたかがわかる。

「まず高1の時、後藤さんに『将来どうするの?』と聞かれたので『マンガ家になりたいので、お世話になります』と答えています。そして高3の時、後藤さんと当時の『ジャンプ』編集長・中野（祐介）さんがいらっしゃって『高校を卒業したらいらっしゃい』とおっしゃってくれたんです。編集長が青田買いのように家までスカウトに来たのは僕と『キン肉マン』のゆでたまごさんの2組だけみたいですね」

初の締め切りのある仕事に追い込まれ

そして74年に上京。平松のマンガ道が本格的にスタートする。

「後藤さんが成城学園前駅（東京都世田谷区）に四畳半のアパートを用意してくれていました。でも、いきなり連載はもらえないので、まず『アストロ球団』の中島徳博先生を紹介してくれたんです。『アストロ球団』の担当が後藤さんだったので。そして中島先生のもとで1年間アシスタントとして助っ人をすることになるんです」

この時代のことは平松による自伝マンガ『そしてボクは外道マンになる』に詳しい。作中でジャンプ編集部は作家と編集者が怒号をかわし合う〝漢〟の職場として描かれている。

「中島先生は本当にゲーゲー吐きながら仕事をされていましたね。後藤さんの描写にしても同じ。定規を手でパチパチと叩いて…今だったらパワハラですよ（笑）」

そして平松19歳の時にマンガ家として大きな試練が訪れる。

「中島先生の手が原因不明の病気で2倍くらいに腫れあがってしまって『アストロ』が休載になり、『月刊少年ジャンプ』で執筆予定だった読み切り作品も描けなくなってしまったんです。そこで急遽、僕がピンチヒッターとして『月ジャン』の読み切り作品を描くことになって。中島先生からストーリーを聞いて描くことになるんですが、10日くらいしか時間がない。背中に脂汗をかきながら〝締め切りに追われるこわさ〟を知りました。しかも人を使って一日何枚できるか、という計算もできないからすべてが手探りなんですよ」

これまでのように描き上げていた原稿が載る形でなく〝初めての締め切りがある仕事〟。そのプレッシャーに平松は追い込まれた。

「中島先生のご自宅でネームをやっていたんですけど、なかな

自身の功績を挙げるために更生した前科者に濡れ衣を着せる悪徳刑事（第一話）など、情状酌量は一切無用な外道のオンパレード

©平松伸二

かネームができない。中島先生の奥さんが襖を隔てて寝ているんですが、何度『カンベンしてください！ 僕にはできません！』と土下座して謝ろうと思ったことか。あの時は本当にこわかったんですよ。でも、あそこでケツを割っていたらマンガ家になれていなかったでしょうね。あの場面を乗り切ったから今があると思います。逃げなかったのは…責任感ですかね。マンガ家を目指して上京したのに、ここで逃げたらもう後がないと思ったから踏ん張れたんでしょう」

こうして描き上げた『球道武蔵』は『月刊少年ジャンプ』75年6月号に無事掲載。それが評価されてか平松の初期代表作『ドーベルマン刑事（デカ）』は『週刊少年ジャンプ』75年39号より連載開始される。

「上京して『ジャンプ』で連載するのが夢だったんですけど…中島先生の仕事ぶりや締め切りに追われて描くマンガのツラさを知ったばかりなので『いや、もうちょっと先にしてもらえませんかね…』という気持ちもありました（笑）。当初は10回連載の予定だったんですが、運がいいのか悪いのか（笑）、第1話の読者アンケートが1位だったので長期連載が決まりました」

『ドーベルマン刑事』は映画化やドラマ化もされる大ヒット作となるのだが、平松自身に作品の手応えを感じているヒマはなかったという。

「毎週原作がきて原稿を上げて…と、とにかく締め切りに追われて描いていましたから。第1話は31ページくらいでストーリー的にも1話完結できるページ数だったんですが、それ以降は毎週20ページ。そうなると1話完結は難しいので2週完結の前後編になるんですよ。でも前編のアンケート結果が芳しくないということで編集部が『やっぱり20ページでは少ないから毎週30ページにしよう』と言ってきて。新人だから毎週20ページでもキツいのにね（笑）。でも増ページしてからアンケート結果はまたよくなりましたね」

平松勧善懲悪モノ決定版『ＢＡ』誕生の経緯

『ドーベルマン刑事』はド派手なアクションに加えバイオレンス描写がウリになっていた。それまで青春路線の作品を描いていた平松に抵抗はなかったのだろうか。

「なかったですね。『ドーベルマン刑事』は勧善懲悪パターンのマンガですから、僕も原作を読んで『あ、この悪党はやっつけなきゃしょうがねぇなぁ』と思いながら描いていました。勧善懲悪がピタッとハマる性質だったんでしょう」

では、平松勧善懲悪モノの決定版『ＢＡ』が誕生するまでは、どのような経緯があったのだろう。

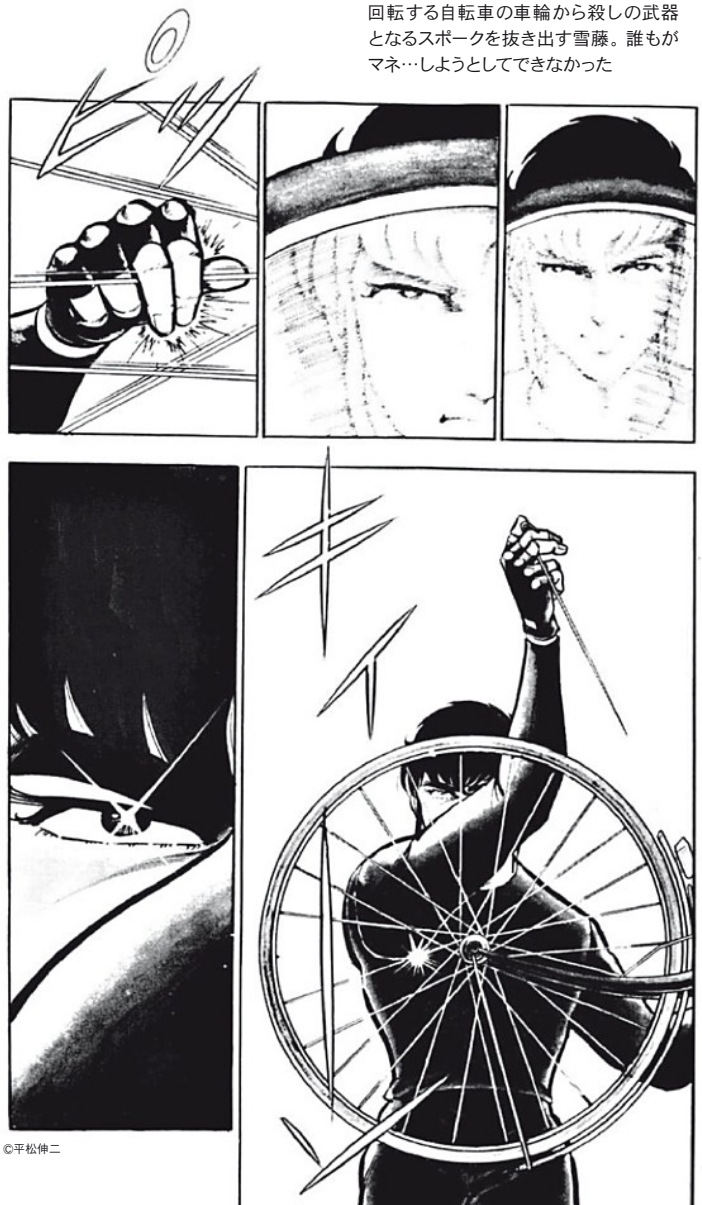
「僕ね、後藤さんから『原作付きのマンガを描いているうちは、俺はお前をマンガ家として認めない。自分で話を考えて自分で画を描くのがマンガ家なんだ。オリジナルを描いていないうちはただの絵描きだ！』と言われていたんですよ。なので『ドーベルマン刑事』の後は『オリジナルをやりたい』と思っていたんです。そこで僕のプロレス好きを活かして『リッキー台風』（80年）の連載が始まりました。この連載は1年半続いたので成功の部類に入るんですが、『ドーベルマン刑事』ほどヒットはしなかった。その時『やっぱり自分には勧善懲悪が合っているのかな』と思ったんです。そこで、その頃テレビで必殺シリーズが人気だったので〝必殺の現代版〟はどうだろう、と。また『ドーベルマン刑事』が体制側だったので、今度は反体制側を主人公に勧善懲悪をやってみようと考えたんです」

『ＢＡ』以前の平松オリジナル勧善懲悪作品では『ジャンプ』81年16号に掲載された読み切り作品『ニートに翔んで』。学園を舞台にした仕置モノで、鉄針と鋼線を用いて仕置を行う主人公・立原は『ＢＡ』主人公・雪藤洋士のプロトタイプと言える。

「立原のモデルは高校時代の2

は自分から黒いオーラが出ているんですよ

回転する自転車の車輪から殺しの武器となるスポークを抜き出す雪藤。誰もがマネ…しようとしてできなかった



©平松伸二

©平松伸二

雪藤による仕置。スポークは両手持ちの場合もあり、他にワイヤーでの吊り殺しや吹き矢での仕置も見せた

年先輩です。彼は全国模試で10位以内に入るような優等生で、青白い外見でした。掲載誌では変えられていましたが、もともと立原は〝雪藤〟という名前だったんですよ。モデルになった彼も漢字は異なるんですが〝ゆきとう〟という苗字でした。『BA』での雪藤は中村主水（もんど）のイメージがありますかね。表向きはカッコよくなくてドジなやつなんだけど、悪を仕置する時はメガネを外してクールになるという」

『BA』は『ジャンプ』81年46号より連載開始。主人公・雪藤をはじめとした〝黒い天使〟たちが世の悪党たちを闇に葬っていく〝暗殺〟をメインとした物語。少年誌マンガとしてはかなりドギツい題材だ。周囲はどのように反応したのだろう。

「第1話は刑事が元犯罪者を陥れて、また犯罪を犯させる…という話なんですが、さっそく警視庁から『警察はこんなことはしない！』ってクレームがきましたよ（笑）。『BA』第1話のアンケート順位は3位だったんですが、単行本でいえば『ドーベルマン刑事』より売れていますね」

外道な悪党を描いている時

『BA』開始当初は雪藤ひとりでの仕置だが、第6話「黒い稲妻！」で仲間が登場。その新キャラが後にマンガ界屈指の漢キャラとなる松田鏡二だ。

「タイトルを『エンジェルズ』と複数形にしているのでメンバーを増やしていこうという構想はありました。松田が登場したての頃は松田優作をモデルにしています。優作は『太陽にほえろ！』時代から好きで、いまだに松田優作の外見に敵う人はいないと思っています。男心をくすぐる俳優ですよね。…まぁ、その後ウチの松田はどんどん優作から離れて超人になっていきますけど（笑）」

『BA』はナイフ使いの麗羅、ムチ使いのジュディ、催眠術使いの亜里沙など女性キャラの人気も高い。しかも雪藤×ジュディ、松田×麗羅などメンバー同士での恋愛模様も描かれる。

「やっぱり男だけだとむさくるしいですから。そして女性が出てくれば当然、恋愛関係になりますよね。あれは自然の流れでそうなりました。麗羅の元カレである水鵬が意外と人気あるんですよ。松田という新しい恋人ができた麗羅のために身を投げうつ…自己犠牲精神でしょうかね」

水鵬とは義手マシンガン、そして水を自由に操るメンバー。このように登場人物がもつさまざまな殺し技も『BA』の魅力のひとつだ。

「自転車のスポークで刺殺という雪藤の技は『必殺仕掛人』の藤枝梅安、松田の人体破壊技は『必殺仕置人』の念仏の鉄…と、目新しさはなかったんですけど、松田は空手の貫手で人体を貫いたりと、どんどんパワーアップしていきましたね。戦う相手が手強くなれば、松田も強くなっていかざるを得ないので、そこは『ジャンプ』のバトルものの流れですよね」

松田は超巨大ブーメランを武器にしたり、バズーカ砲を素手で受け止めたりと作品が進むにつれパワーアップ。そんな松田を描くうえで心がけていたことは？

「う〜ん…松田が空を飛んだりしなければ大丈夫かな、と（笑）」

BAが仕置する悪党のパターンもさまざま。ヤクザ、強盗、権力者…などが作品中で〝外道〟行為を見せているが、毎回どのように物語を作っていたのだろうか。

「当時は『世の中にはどんな悪いことをしている連中がいるんだ？』と、新聞の切り抜きをストックしてファイル化していました。描いている本人でも『こいつは始末しなきゃしょうがねえなぁ』というほどの悪人が描けた時は、燃えながら描いていましたね」

その悪党の在り方もさまざまで、作品のなかでは哀しい仕置も描かれた。

「雪藤が思いを寄せる女性が、実はヤクザによってシャブ中にされた通り魔だった回（「黒い衝動」）とかね。ただ悪いやつを出してやっつけるのではなく、悪事をするにもその悪人なりに

事情がある、というものを入れ込んでいました。そうすると抒情的な物語ができるので。印象に残っている悪党では、やっぱり1話目の悪徳刑事かなぁ。読者からは不良少年集団がおばあちゃんを焼きゴテでいびる回（「黒い甘え!!」）。『あれはトラウマになりましたよ』とよく言われます。『羽死夢が亡くなるシーンが忘れられない』という感想もよく聞きますね」

羽死夢とは仲間の亜里沙に密かに心を寄せているBAメンバー。が、敵の催眠で操られた亜里沙によって刺し殺されてしまうのだ。あのシーンで読者が受ける絶望感はハンパなかった。

「亜里沙のことを想いながら、その亜里沙に殺されるというね。まあ、少年誌で描くものじゃないよね（笑）」

悪を描いている時に発せられる黒いオーラ

物語は中盤から「竜牙会」という巨大組織との対決がメインになっていく。

「『BA』は最初1話で完結モノで考えていたんですが、だんだんと悪事のネタも尽きてくる。そうすると巨大な悪の組織があって、雪藤たちがその組織に立ち向かっていく…という展開の方が話が作りやすいんです。竜牙会は悪党は悪党なんだけど殺し屋組織ですから。ここから『どんな殺し技を使うのか?』という殺し屋キャラクターを考えることになっていきますね。そして物語後半はホワイトエンジェルとの超能力バトルになるんですが…このあたりから記憶がないんですよ。バトル中心になっていくとエスカレートしていくだけなので頭が混乱していたんですかね。まぁ『ジャンプ』で連載を続けるにはバカにならないとできないですよ（笑）」

では、悪を描く際に苦労することは?

「キャラクターに気持ちを乗せて描いているので、悪党が出る時は僕も悪党の気持ちになっているわけですよ。そんな時自分から黒いオーラが出るんです。悪党になりきっている時は『世の中のものは全員敵だ!』と思って描いていますからね（笑）。あとネームをやっていて、なかなかアイデアが出ないと鬱々としたものが溜まってくる。そんな時にたばこを買いに外出すると『あ、今通行人と肩がぶつかったりしたらすぐケンカになるわ』と思うことがありましたね」

この〝黒いオーラ〟は『BA』と『マーダーライセンス牙』（88年）連載期にいちばん出ていたという。

「たとえば僕が自室で自分の仕事をやっていて、別の部屋でアシスタントが背景とかを描いている時。アシのみんなは明るく仕事をしているんですが、そこに僕が入っていくと途端にシーンとなるんです。おそらくものすごく黒いオーラを発していたんですよ（笑）。背景の下絵を僕の部屋に持ってくるアシスタントさんの足音も死刑囚のようにすり足でしたね。僕のところに来るのがこわいらしいんですよ」

©平松伸二

マンガ界屈指の漢キャラ・松田鏡二の初登場シーン。クールな雪藤にド熱血漢の松田という名コンビは令和の今も健在

平松のアシスタント出身作家は『キャプテン翼』の高橋陽一、『タフ』シリーズの猿渡哲也など錚々たる面子がいる。彼らの当時の印象は?

「高橋君は僕と全然違うジャンルの作家ですが『ボールはともだち』という台詞にはうなりましたね。あの発想は僕にはありませんから。猿渡くんは彼が描いたデッサンを見た時に『めちゃくちゃ画が上手いな。これは将来、強敵になる』と、その才能にビビりましたね」

その猿渡もマンガ内に現実モデルがいる悪党を登場させ、そしてむごたらしく始末することで有名だ。

「猿渡君は僕の黒いオーラを受け継いでいるかもしれないね（笑）。で、取材では取材側から『平松先生は過去に何人か殺しているんじゃないか?』ってことをよく言われるんですよ。ああいうマンガを描いているから、そういう印象をもたれるんですよね。でも会ってみたらいたって普通。そりゃ、人を殺していたら警察に捕まってますからね（笑）。マンガでさんざん怒って

破天荒な松田の活躍を見て日々の悩みを忘れてもらえれば

【PROFILE】 平松伸二／ひらまつしんじ
昭和30年、岡山県生まれ。1971年に『勝負』が『週刊少年ジャンプ』に掲載。高校卒業後、中島徳博のアシスタントを務め、75年に『ドーベルマン刑事』の連載スタート。代表作に、『マーダーライセンス牙』『どす恋ジゴロ』『そしてボクは外道マンになる』など

きたので今その感覚はマヒしています。新聞を読んで怒るということはありませんね。ネームをやる時は怒りがふつふつとするものがありますけど」

では『ジャンプ』連載時に意識されていた作家は？

「それはもう『北斗の拳』の原（哲夫）さん。とにかく圧倒的に画の力がスゴかった。『すごい人が出てきたなぁ』と危機感を感じたうえ『これはもう俺、ダメかな』とまで思いましたから。他人のマンガを読んでいちばん衝撃を受けたのは『北斗の拳』ですね。…でも、原さんに限らずスゴい作家が出てくると最初はショックを受けるんです。だけど目が慣れていって、それが当たり前になってくると、そんなに気に病むこともなくなってくるんです。『この人はこの人でがんばっているんだから俺なりにがんばればいいんだ』って」

『BA』の連載は85年に終了。松田も作品のなかで死亡しているのだが、なんと『マーダーライセンス牙&ブラックエンジェルズ』（98年）において何事もなかったように再登場。これに『BA』ファンは大いに驚いた。

「松田のキャラには愛着があったから『また描きたいな』と思ったんです。ここで『いんだよ、細けぇことは』が生まれました。松田はこれでなんでも済ませてしまうんで便利なキャラですよね（笑）」

「あんた死んだはずじゃ…」という雪藤に対し、松田がサラッと放つこの言葉で、これが大ウケ。ネットでは「いんこま」と略され、あらゆる矛盾を吹き飛ばす景気のいい言葉として使われている。

「『「いんだよ～」は私のいちばん好きな言葉です』とよく言われるんですよ。世の中で生きていくと傷つくこともあるじゃないですか。それをあの言葉で解決できてしまうそうです。こうなると、もう人生訓ですよね。描いてる本人もまさかこんなキャラクターになるとは思っていませんでしたが、日頃の細々とした悩みも松田を見て『あ、気にしなくていいんだ』と思ってくれれば幸いですね。…でも松田を出せばなんでもできちゃいますから、出すとどうしても雪藤の影が薄くなっちゃう。今はそこが悩みどころではあります。まあ、雪藤が松田にちゃちゃを入れることで『手前（てめ）ェ～』となるからいいコンビだとは思いますけど。とにかく松田は出てたら描いている作者でもコントロールできないんです。ホント、スゴいキャラクターですよ」

そんな最強の漢を作り出した平松に、読者に向けて平松が思う〝漢として大事なこと〟を聞いてみた。

「そうですねぇ…僕は結婚して40数年経つんですが、そうするとわかってくるんですよ、『男がなんだかんだ言っても女には敵わねぇな』ということが。女性の方が基本的に強いと思いますね。出産の痛みも男性が経験したら死ぬ、とまで言われているじゃないですか。いくら男ががんばっても女性には敵わない、というのが僕の持論です。だから読者の方に僕から言葉を贈るとしたら『女の人には逆らわないようにしましょう』ですかね（笑）」

長きにわたって漢を描き続けている平松の結論…これは重い！

「あ、でもね、僕は梶原一騎先生の世代ですから数年に1回『男たるもの！』といった感情が湧いてきて、妻に逆らう時があるんですよ。…でも結局、負けるんですけどね（笑）」

いちばん漢なのは女性、ということで。…いんだよ、細けぇことは！

«««« 最新INFORMATION

最新シリーズの舞台は江戸

『ブラック・エンジェルズ』が時代劇となってリブート！ 売れない浮世絵師・雪士（ゆきじ）は、法の網の目をかいくぐる外道どもに死の裁きを与える闇の仕置人。内職で張った番傘を脇に抱え闇夜にまぎれる…。外道どもの頭上には必ずや黒き死の天使が舞い降りる！ 松田らお馴染みのキャラクターが仕置を下す痛快アクションは健在。

『大江戸ブラック・エンジェルズ』（リイド社）

動物バトルマンガの頂点！

『銀牙―流れ星 銀―』高橋よしひろの描く犬の男気物語（ストーリー）

犬が言葉をしゃべり、闘い、熱い男気を見せる――『週刊少年ジャンプ』連載時には、その斬新な設定が読者の度肝を抜いた『銀牙 ―流れ星 銀―』。作者の高橋よしひろが、『銀牙』創作秘話や、アシスタント時代の思い出、忘れじのジャンプ作家仲間たちについて熱く語った！

取材・文：山本俊輔　撮影：小林岳夫

1983年に『少年ジャンプ』誌上で連載がスタートした『銀牙 ―流れ星 銀―』。コミックス、文庫などを合わせた累計発行部数は1000万部以上！

©高橋よしひろ／集英社

『銀牙』のストーリーは実家の秋田県での原体験から生まれた

高橋よしひろは昭和28年、秋田県雄勝郡東成瀬村出身。雪深い奥羽山脈の麓で、かつての伝説により、平家の落人集落と呼ばれている地域だ。高橋は十人兄弟の五男坊として生まれ、主に農業を生業とする実家で、幼い頃から仕事を手伝ってきた。

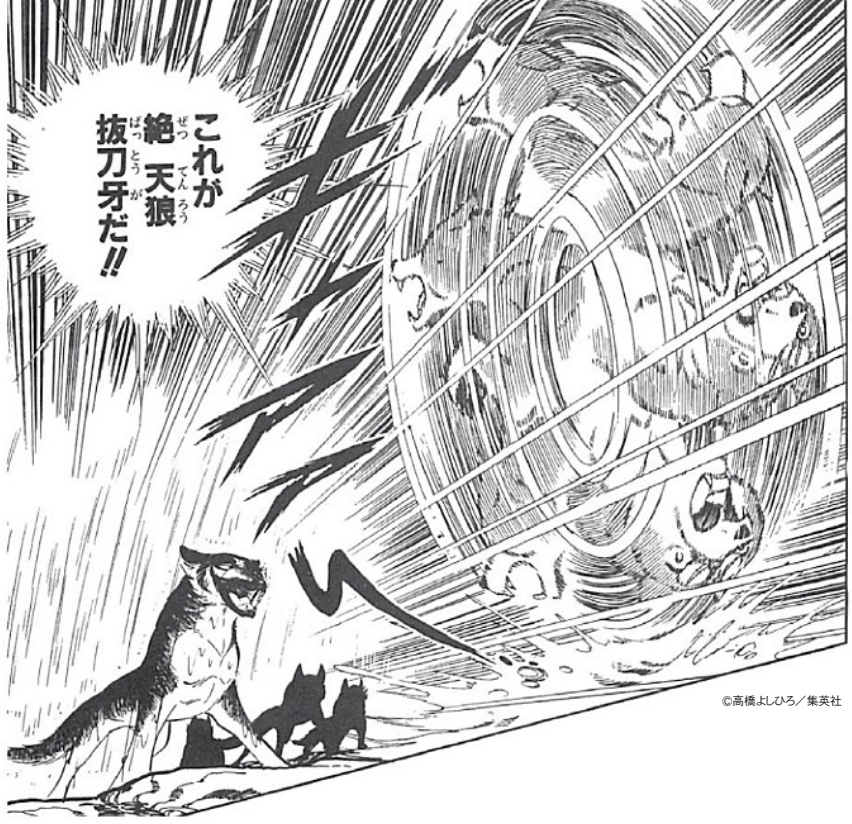
「うちは牛を飼ってたんだよね。小学校4年生の頃からずっと、それの世話を任されて。夏は山に放すからいいんだけど、冬場は家の中で飼うんですよ。6年生の時に畜舎を大きく建て替えて、牛が20頭になりました。僕とすぐ上の兄貴の二人で冬場ずっと全部の面倒を見てて、朝晩世話しないといけないから、それだけでつらくて牛を見るのも嫌でね（笑）。そんな世界だから、どうしても家にいるのが嫌だったんですよ」

そんな小学生時代のある日、父親が知人から子犬をもらってきた。秋田犬の雑種だったが、名前をつけることを任された。高橋少年はこの犬の毛色から、「クロ」と名づける。このクロとの出会いが、後に動物マンガの巨匠となる高橋よしひろの原点となった。

「僕が20歳になる頃まで生きてましたから、子供時代をずっと一緒に過ごしてきましたね。親父がニワトリを飼ってたんだけど、クロにご飯をやるとニワトリたちがバーッと走ってきて犬のご飯を全部食べちゃうのね。それでクロは怒って吠えるんだけど、ニワトリたちもそのうち慣れてきて、吠えられても逃げなくなってくるんだよ。ある日ニワトリの頭がない死骸が見つかって、親父が『これはクロの仕業だな』って言いだした。クロのいるゴザの下にニワトリの頭があったんですよ。それでもう親父が怒っちゃって、クロをつなぐ鎖を二つ折りにしてバッチンバッチン叩いて。それぐらいこわい親父だったんですよ」

『銀牙』シリーズで描かれる、犬と犬同士の迫力の格闘バトル。これのヒントとなる光景を初めて見たのも、クロを通じてだった。

「クロのところに遊びにくるポチっていう猟犬がいたんですよ。クロとポチは仲良く遊んでたんだけど、1年くらい経ってから、クロが傷ついて泣きながら帰ってきたの。それでびっくりして富山の置き薬をつけてあげたんだよ。そうしたら次の日も泣いて帰ってきて、見たら遠くにポチがいるのね。それで『ポチが来たぞ、行け』って言ったら『ワウウッ！』って怒るんだよ。どうも2匹はケンカしていたんですよ。原因はポチに彼女がいたらしくて、それにクロがちょっかい出して咬まれたみたい。それからしばらくの間、5年か6年くらいケンカしてたね。絶対に降参しないんだよ。ところが僕が中学生になったくらいに、ある日ポチが来て。うちの前は除雪もしてないから一本道なんですよ。一本道なのに迂回してこっちに来ないの。前は平気でうちの前を歩いていたのに、遠回りして避けるようになった。ここにはクロがいるからやばいと思ったんだろうね。その頃はポチも10歳くらいになってて、うちのクロは4歳か5年くらい。年を取ると獰猛（どうもう）な犬でも弱くな



©高橋よしひろ／集英社

少年マンガの“お約束”といえば必殺技。銀の放つ「絶 天狼抜刀牙」は当時の担当編集者によるネーミングだそう。『銀牙』の後半となる八犬士編では、「滅・変異抜刀牙」などさまざまなバリエーションが登場する

るんだよね」

巨匠・本宮ひろ志の元でアシスタントになる

動物（犬）と並んで高橋少年を構成した重要な要素がマンガだ。こちらは小学校5年の頃に親しくなった友達の自宅で月刊誌などを読ませてもらうようになってからハマった。手塚治虫の『鉄腕アトム』などは特に夢中になり、自分でも興味をもってマンガやイラストを描くようになる。

「小学校6年生の時に、学級新聞の挿絵とかは全部やってました。だから自分としてはすごく自信はあったんです。うちの村なんか開拓村落みたいな場所なんだけど、実家にはなぜかガラスペンとインクがあって。紙は5円の画用紙が売ってたの。A3よりも大きいサイズで、それを半分に切って原稿用紙にして描いてました。昔は紙ってすごく貴重なものでしたからね」

高橋がマンガ家を目指した理由のひとつに家庭環境があった。父親はドブロクを飲んで寝てばかりで家計は火の車。高橋が小6の時には父親が大きな借金をして、畜舎と牛、そして家の建て替えを行った。だが牛の世話を含め、すべては身体の弱い母親と高橋ら子供まかせ。本人は酒を飲み、怒鳴りちらすだけ。そのため毎年赤字で、高橋は中学を卒業するまで、1円たりとも親からお金をもらったことはなかった。絵を描く紙は、正月に遊びにくる年の離れた兄や姉からもらえるこづかいを蓄え、それをやりくりして購入し、一片たりとも無駄にしなかった。

中学を卒業した高橋は、愛知県の自動車部品工場で働くようになる。そこで『少年マガジン』や『少年サンデー』を知り、初めて見た時の衝撃、そしてその迫力たるや。すぐに東京に出てマンガ家になろうと決意したのである。その後も職を転々とし、名古屋市内の理髪店を経て、ようやく上京することに成功する。

「山奥からポッと出てきたもんだから名古屋駅まで行くのがこわくてね。どうやって東京行こうかなと思って、東名バスで行ったんですよ。それで名古屋の理髪店の知り合いが渋谷に迎えに来てくれて。僕は10人兄弟だったんだけど、上の兄貴が江戸川区の自動車修理工場に勤めていたから、そこの2階に寝泊まりさせてもらえた。そしたら兄貴が、『本宮ひろ志は葛飾区にいる』って言うの。当時はマンガ家の住所がマンガ雑誌に載ってたのよ（笑）。それで休みの日に行ってみた。先生の仕事場は1DKのアパートで、アシスタントが4人くらいいて。アパートのドアをトントンって叩いたら、『誰？』って本宮先生のお兄さんが出てきたんですよ。『ひろ志は今寝てるんだけど、なんの用事？』って。『マンガ家になりたいんです』と伝えたら『ちょっと上がれよ。すぐ起きるだろうから』と言われて。そこで待ってたんだけど、全然起きてこないんだよ。でも女の子が遊びに来たらすぐに起き上がって出かけて行っちゃった（笑）。結局『今は人手が足りていて、半年後に一人辞めるから、その時にもう一回来いよ』って」

そして半年後、晴れて本宮ひろ志のアシスタントとして働き始めることになる。

「アシスタントの面接の時に『お前何がおかしいんだよ!?』って本宮先生に怒られてね。僕は面接だったから笑顔で受け答えをしていただけなんだけど、先生は真顔で怒ってるの。ヘラヘラしたやつだと思われたみたい。あれは僕が17の時だから、本宮先生は23歳くらいか。この時はさすがに雇ってくれないなって思ったよね。そしたら先生のお兄ちゃんががんばってくれて、『あの子はすごくやる気があるから』みたいなことを言ってくれてね。アシスタントになれたのは先生のお兄ちゃんのおかげ。でも今になって（当時本宮プロに出入りしていた）武論尊が『俺が入れてやったんだ』って言ってるんだけど（笑）」

当時、圧倒的人気を誇るマンガ家のひとりだった本宮の作風は、その後の高橋の作家活動に大いなる影響を与えることになった。

「僕のマンガは男がどうのこうのっていうシーンが多いじゃない？ あれは本宮先生の受け売りっていうか（笑）。『男一匹ガキ大将』を見ていたからね。そのなかのセリフで『男を集めてこい』っていうセリフがあるんですよ。それは『銀牙』でも使

いましたね。犬が任侠のあるしゃべり方をするのは本宮先生の影響ですね」

時代は少し先に飛ぶが、高橋自身も売れっ子マンガ家になった際には、若手のアシスタントたちを雇った。そのなかには、後に大物になる若き才能たちもいた。

「原 哲夫くんはね、担当の堀江信彦さんの紹介で来たんだよ。原くんは描くのがすごく速かった。ほんとは寺沢武一のところに行きたかったらしいんだけど、『あそこは(仕事のスピードが)遅いからダメ』って言われて。それでうちに来たんだよね。宮下あきらは『悪たれ巨人』かなんかで観客席を描いてもらったんだけど、でき上がりを見たら学ランを着た人相の悪いやつばかりが観客席にいるんだよ。時間もないから直さず原稿を入れたら『月刊ジャンプ』の担当者に『これ描き変えてよ』って言われた(笑)。宮下くんはあの頃はどおくまんに影響されてたんだよね。宮下くんって器用でさ、マンガの絵柄を時流に合わせて変えることができる。平松伸二さんっぽい時もあれば、原 哲夫くんが人気の時は原くんの画に似てるし。宮下くんはそういうところも結構うまかったよね」

連載時、人気低迷も路線変更で大逆転

高橋は本宮ひろ志のアシスタントをこなしながら、17歳の時に執筆した『下町弁慶』を第3回手塚賞に応募。あえなく落選となるが、同作が編集者の目に留まり、72年に『週刊少年ジャンプ』誌上に掲載されて、マンガ家デビューを飾った。そして、それから約11年後、83年には代表作『銀牙―流れ星 銀―』が『ジャンプ』で連載開始となる。この作品は当初、秋田の山奥に住む少年・大輔と、その飼い犬の秋田犬・銀が、仇である巨大熊の「赤カブト」を倒すために修行と成長を繰り返すという内容だった。しかし、人気作のひしめく当時の『ジャンプ』にあっては、苦戦を免れず…。

「『銀牙』は最初よかったんだけど、その後どんどん人気が落ちていったんだよね。『これじゃ20回くらいで終わっちゃうよ』って言われて。集英社の場合は週刊でやってても、年に3回か4回新連載が始まるんですよ、毎回。それで新人が入ってきたら、どんなにベテランの作家でも人気投票で上にいかないと終わっちゃうんだよね。『銀牙』は結局4年続いたんだけど、『(このままだと)最初の2~3ヶ月で終わるよ』って言われて」

そこで高橋がひらめいたのが、犬同士が会話すること。

「担当の人に『犬、話させようか?』って提案したら、『いいんじゃないですか?』って言うんだよ。『白い戦士ヤマト』が20歳の時に『月刊ジャンプ』で連載が始まって、ずっと人気があって15年続いたんですが、ヤマトではセリフは入れずにすべてナレーションで進行していました。でも、犬同士に会話をさせたら、話はもっとおもしろくなると思っていて。それで『銀牙』が打ち切りになりそうになった時に『どうせ終わるんなら、セリフを入れてみよう』と、試しに銀にしゃべらせてみたの。そうしたら20何本ある連載のなかで後ろの方だった順位が、人気投票で6番目になってね」

当初は人間と犬が協力して人喰い熊に立ち向かっていく、という内容が、犬同士が仲間を集めて徒党を組んで熊とバトルを展開するという話に変わったことで、『銀牙』は大成功を収めることになる。その発端となる巨大熊・赤カブトの存在のヒントも、高橋の少年時代に見た村の習わしにあった。

「村で春先に熊狩りがあるんですよ。それで熊を獲ったら大きな2tトラックの荷台に磔(はりつけ)にするんですよね。俺がまだ5つか6つの小さい時に、実際に見たのよ。子供だったからものすごく熊が大きく見えた。それで荷台の中を見たら犬みたいな大きさの子熊も2頭撃たれて死んでてね。春先に熊が里に来るから、必ず熊狩りをやるんだよ。だから子供の頃に山に行っても、熊を見ることはなかった。人間の声や音がすると、熊は避けたんだよね。今は全く逆で、人間の

犬が話すアイデアで、凋落していた人気が一気に爆発!

『銀牙』シリーズの最初期メンバーであるシェパードのジョン。仲間を守るため、自らの命を投げ出す。誇り高く、そしてクールな性格は、死の瞬間まで変わることはなかった。(『銀牙伝説WEED』より)

©高橋よしひろ/日本文芸社

『WEED』でジョンが死ぬ時は青年誌にもかかわらず手紙が殺到した

ところへ来たら美味しいものがあると思っているらしくて、熊は人がいると喜んで寄ってくるらしいよ。人が何もしないってわかってるから」

銀の他にも、ベン、クロス、ジョンといった、個性的な仲間や敵となるキャラクターが毎回のように登場し、赤カブトへの仇討のストーリーは快調に進展していく、と思われたが…。

「あれはね、犬が全国から兵隊を集めて、赤カブトに向かっていくぞってところで俺の中では『完』だった。そしたらさ、編集部の方から『まだ続けてくれ』って言われて。正直『えぇ〜?』と思ったね。犬が熊と戦えるわけないって経験から知っているから。そこからはもう地獄の苦しみ。毎回毎回10ページずつ描くんだけど、ギリギリにならないとアイデアが出てこないのよ。『高橋くんはどうやってアイデアが出てくるの?』ってよく聞かれるんだけど、いやいや、考えて考えて出してるんだよと(笑)。僕はアイデアの引き出しなんて全然ないんですよ。でも、キャラクターに個性があれば、話はなんでもできるんだよね。それは『銀牙』で学んだかな。昔はキャラクターって、背が高い・小さい、太ってる・やせてる、くらいの違いしかなかった。でも今なら、たとえば大阪弁と東北弁とか、そのくらいの違いでも話を広げることができる。それを学んだのはテレビドラマ『ふぞろいの林檎たち』ですね。あれにはいろんなキャラクターが出てくるからね」

【PROFILE】 高橋よしひろ／たかはしよしひろ
昭和28年、秋田県生まれ。中学卒業後、愛知県の自動車工場に勤務。その後、さまざまな職業に就きながらマンガを描く。1972年、『週刊少年ジャンプ』誌上にて『下町弁慶』でデビュー。本宮ひろ志のアシスタントを経て、76年、『悪たれ巨人』を連載。他の作品に子供時代の体験を交えた動物マンガ『白い戦士ヤマト』(76年)、『銀牙―流れ星 銀―』(83年)など。2021年、前年に亡くなった矢口高雄の後継として、横手市増田まんが美術館の2代目名誉館長に就任

車田正美氏が編み出したヒットの法則

そんな生みの苦しみの状況のなかでも、作品をおもしろくするアイデアはいろいろと湧き上がってきた。犬たちが繰り出す〝必殺技〟もそのひとつである。

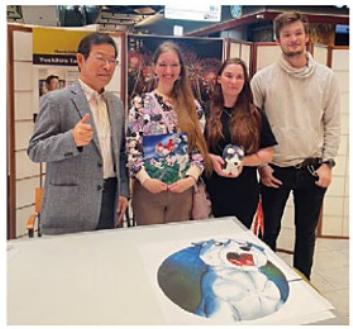
「『刀を引くと切れるっていうから、回転しながら攻撃する技ってどうかな』って編集部に相談したら、当時の編集の人が、『絶・天狼抜刀牙』っていう名前を考えてくれた。ただ必殺技は『銀牙』が最初じゃなくて、『白い戦士ヤマト』でもそういう技があったんです。でも名前をつけたのは『銀牙』が最初」

派手な必殺技に名前がつくのは、少年マンガの王道。高橋はその〝王道のセオリー〟を車田正美氏から教えてもらった。

「車田正美さんの『リングにかけろ』では『ギャラクティカマグナム!!』って叫んで敵がぶっ飛んでいくじゃない(笑)。たまたま編集部に行く時に集英社のエレベーターを上がる所で車田さんと一緒になったのよ。ちょうど僕が『悪たれ巨人』やってる頃。その時『俺、人気取れないんだよな』って言ったら、車田さんが『そんなの簡単だよ』っていうの。『どうするの?』って訊いたら『敵を味方にするんだよ』と。『それで読者が喜ぶんだから』って、そういう発想だったのね。その手法は『巨人』で使わせてもらって、もちろん『銀牙』でも採用してます。あとは必殺技(笑)」

敵だった犬のキャラが仲間になり、ド派手な必殺技を繰り出したりと、さまざまなアイデアを盛り込み「赤カブト編」は見事に完結した。しかしジャンプのなかでも屈指の人気マンガに成長した『銀牙』だけに、そう簡単に完結させてはもらえない。休む間もなく新章の「八犬士編」をスタートさせる。

「八犬士編はね、担当の若い子が物語の設定を作ってくれた。それでおもしろいねってなって、じゃあ富士の樹海の中に狼が棲んでることにすればいいかと。呪文のディテールとかは全部編集部がやってくれましたね。呪文の名前とかは全部僕が考えたんだけど。要はあの頃ロールプレイングゲームってのが流行ってたから、それをやろうとしてたんだよ。次々と敵が出てくるみたいなね。ホントは赤カブト篇で終わりにしたかったんだけど、アシスタント5人くらいいたから仕事がなくなると困るじゃない」



フィンランドでは ムーミンに並ぶ人気!

『銀牙』シリーズは世界的に大人気。特にフィンランドでは熱狂的な支持を得ている。2023年にはフィンランドのヘルシンキにあるカンッピ・ショッピングセンター内で「義勇一心 Striving for Justice in Finland 2023」と題し、高橋よしひろ先生のサイン会が行われた。多くのファンが詰めかけ、なかには銀牙のキャラクターのタトゥーを入れている人も！ 左写真の3人は甲斐三兄弟のコスプレだ。

87年に八犬士編が終了し、『銀牙』は4年間続いた連載のフィナーレを迎える。その後、高橋は活躍の場を小学館に移す。

「『銀牙』が終わって、次にやったのが『甲冑の戦士雅武』。その後は小学館にいきました。小学館は『銀牙』で漫画賞取ってるから。それで小学館のパーティに行って偉い人に挨拶したら、『いいね、じゃあ『コロコロ』で描いてみて！』って言われちゃって。『コロコロ』はもちろん知ってたけど、さすがに子供向けすぎるなって思ったから、『俺は無理です』って答えたのよ。それで学年誌の『小学四年生』で描いてみた。それはサッカーのマンガ（『Jリーグの疾風』）だったのね。そしたらそれがグラビアを抜いてずーっと人気の1位。『なんだ、そんなに人気があるんだ！』ってビックリしたよ」

まだまだ終わらない『銀牙』の伝説

一方、代表作である『銀牙』の人気はなおも根強く、主人公・銀の息子であるウイードを主人公に据えた『銀牙伝説WEED』、そのまた息子のオリオンが主人公の『銀牙伝説WEED オリオン』など、掲載誌を変えて『銀牙』の物語は現在まで連載が続いている。延べ30年近くにおよぶ壮大な物語に登場した数多くの犬キャラクターのなかで、作者の高橋が特に印象に残っているのは土佐犬の紅桜と、ジャーマンシェパードのジョン。

「紅桜は最初から死ぬことを考えていたキャラクターだったんだよ。あれは当初は『白い戦士ヤマト』のキャラクターだったんですよ。ヤマトで使おうと思って、自分から闘う相手を探して四国まで渡っていったっていうエピソードも全部考えてたんだよね。ジョンは法玄にやられて死ぬ時、泣きながら原稿を描いたほど。それくらい思い入れがあった。あの時はファンレターがいっぱいきてさ。青年誌ってファンレターは大体こないんだけど、『早くジョンを楽にさせて』って。2ヶ月ぐらい引っ張ってたんだけどね。ファンの人たちにも作者の心意気みたいなものがわかるんだろうね。ジョンが死ぬ時にカッコいいセリフを吐くんですよ。『みんなが来るから5分待ってくれ』って言ったら、『俺はせっかちだから待てねえよ』ってね。『これから地獄へ行って赤カブトでも追い回すか』ってセリフはキマったと思うな。実は『銀牙伝説WEED』になった時、一人ひとりレギュラーを死なそうと思ってたの。でも出版社からは『死なせてはダメ』って言われてね。それは集英社の時からそうだったんだよ。でも日本文芸社に移ってからは自由にやらせてもらえるようになって、ジョンも死なすことができた」

熱烈なファンを擁する『銀牙』。その熱は遠い北欧のフィンランドにも飛び火しているのを読者の方はご存じだろうか？

「なんかフィンランドですごい人気があるんだよね。今までイベントで2回呼ばれて行ったんですよ。サイン会もやったんだけど、『銀牙』のキャラやマンガの1シーンの入れ墨を入れている人もたくさんいた。ちょうど僕の誕生日だったので、ファンのみんなが〝♪ハッピーバースデーよしひろ〟って歌ってくれてさ。この前テレビで『フィンランドの犬事情』ってやってたのを観たら、ジョンとかベンとかリキとか『銀牙』のキャラクターの名前をつけた秋田犬やシェパードを、おばちゃんが飼っているんだよ」

多くの読者の胸を熱くしてきた『銀牙』。その作者である高橋にとって、〝男〟〝男気〟とは一体なんであろうか。

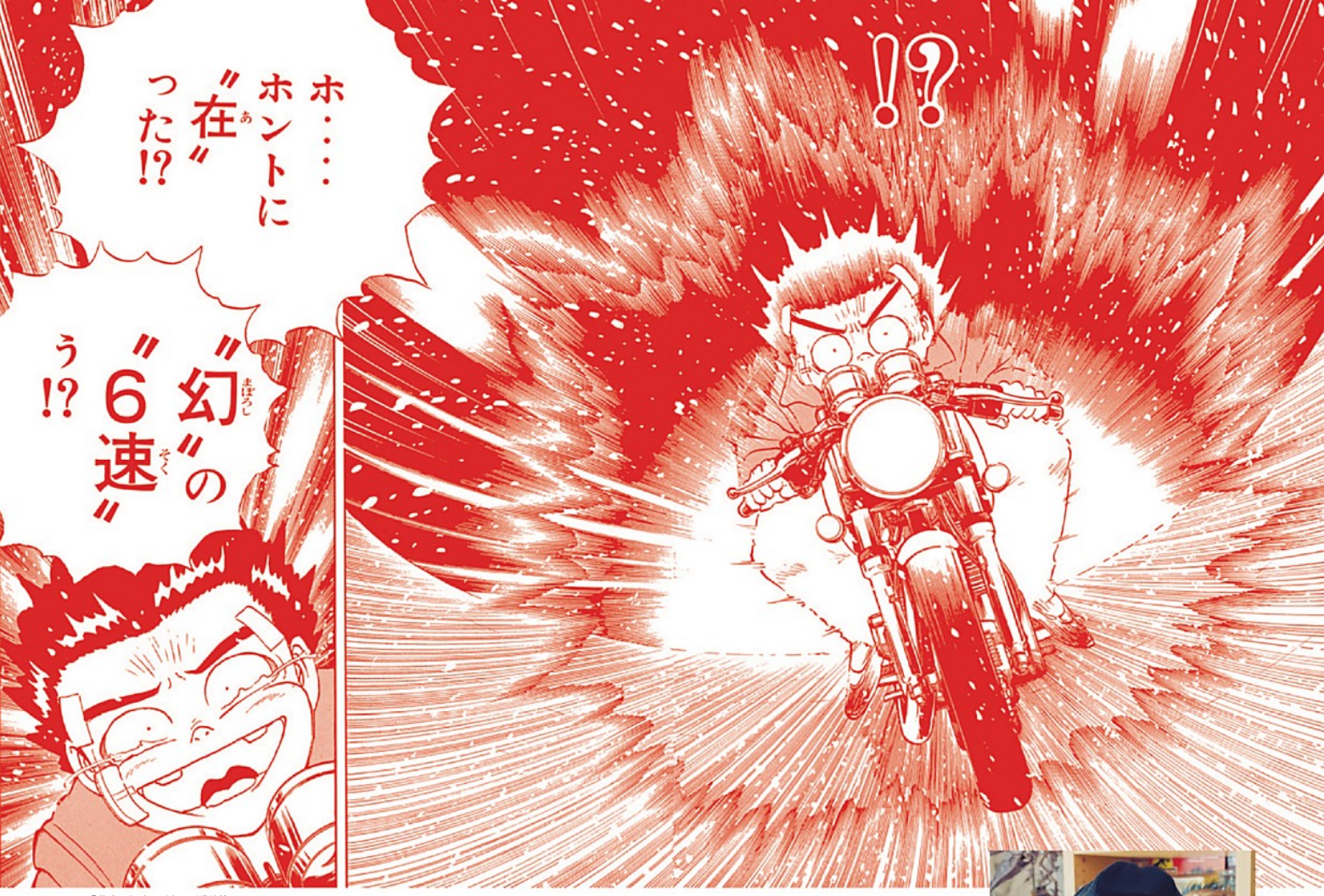
「『命をかけて家族を守る』っていうことかな。今後の目標としては相変わらず『銀牙』シリーズを描き続けますけど、でもね、さすがにもう敵がいないんだよ。誰か考えてよ（笑）」

«« 最新 INFORMATION

デジタル全盛の今でも、高橋先生は肉筆で作品を描き続ける。ペン先に込めた情熱が、キャラクターたちの目に力を、そして命を吹き込む！

新たなる銀牙の物語、始動！『銀牙伝説レクイエム』

高橋よしひろ先生の新連載が『週刊漫画ゴラク』（日本文芸社）でスタート。犬たちが健やかに暮らす自然豊かな楽園に、新たな敵が忍び寄る…。安息の地を守るため、犬たちは再び立ち上がる。奥羽軍の最終聖戦が今、始まる！



©佐木飛朗斗・所十三／講談社

オレたちの十代を熱狂させた疾風伝説!

作画・所 十三が語る『特攻の拓』誕生秘話

「“待”ってたぜェ!! この“瞬間”をよォ!!」勢い満点のセリフと絵柄で90年代ヤンキーマンガの代表格となった『疾風伝説 特攻の拓』。その名作ができるまでの誕生秘話を“訊”くぜェ!!

取材・文：長谷川貴洋　撮影：吉場正和

「〝事故〟る奴は…〝不運〟（ハードラック）と〝踊〟（ダンス）っちまったんだよ…」をはじめとする数々の名シーンで、1990年代の『週刊少年マガジン』で読者の熱烈な支持を集めた暴走族マンガの筆頭格。その作画を手がけた人物と聞けば、多くの読者は〝ヤンキーの親玉〟のような容貌をまずイメージするかもしれない。

だが実際にお会いすると、実に温厚でやさしい笑顔。自らを〝オイラ〟と呼び、恐竜のことになると目を輝かせて話が止まらない——想像と真逆のギャップに驚かされる。そんな所 十三がどのような歩みでマンガ家となり、金字塔『疾風伝説 特攻の拓』を生み出すに至ったのか。まずは少年時代のことからうかがってみた。

マンガ家を目指したのは大学生活も終わりの頃

「動植物や昆虫が好きで、図鑑や『ファーブル昆虫記』とか熟読してましたね。自然とそっち方面に詳しくなるから、友達にいろいろと訊かれるんで、ちゃんと答えられるように一生懸命勉強していました」

〝野球少年〟〝サッカー小僧〟など少年の肩書はいろいろある

マンガ家を目指そうなんて大それたことは少年時代は考えてもいませんでした

が、所はさしずめ〝昆虫ハカセ〟といったところ。

「あとはプラモデルも作りましたよ。タミヤの戦車とかハセガワの戦闘機とか。高校生の時に松本零士先生の『戦場まんがシリーズ』にハマった時は、機体に細かい絵柄を針で描いたりしていましたね」

所の実家は書店だった。本に囲まれてさぞかしマンガ三昧だったろうと思いきや…。

「〝本はお客様に売る商品であって、本屋の子供が手をつけるものじゃない〟と教育されていたので、本屋の子でありながらマンガを読むのは友達の家か駄菓子屋さんに置いてあるボロボロになった『マガジン』や『サンデー』。その後、歯医者さんに通うようになってからは待合室に置いてあったチャンピオンの『ブラック・ジャック』は特におもしろくて夢中になりました。でも『こういうマンガを描きたい！』というような気持ち、たとえば『まんが道』みたいな、ああいう一途な意識はなかったですね。マンガ家を目指そうなんて大それたことは考えてなかった」

それでも昆虫観察や模型製作で養われた観察眼や手先の器用さは、絵を描くことに活かされたようだ。

「模写とか、絵を描くこと自体は好きだったんですよ。たとえば高校生の頃、先生の顔の特徴をデフォルメした似顔絵を描いて授業中にみんなで回し見してクスクス笑ったり、女子生徒から『このマンガの絵を私のノートに描いて！』って頼まれて、全然知らない少女マンガの美少女キャラを描いたり…。ただ、積極的に絵の勉強しようというほどではなかったんです。友達が同人誌を描いてても『あんな面倒くさいこと、よくやるなぁ』って思ってました」

自分から何か描こうという意欲はほとんどなかったという所だが、駒澤大学に進学すると大きな転機が訪れる。

「サークルも特に入りたいところはなかったのですが、友人に誘われて。どんな感じだろうって、ちょっとおもしろそうな感じがしていたんです」

それが「駒澤大学漫画クラブ」である。ホラーファンタジーでコアなファンを獲得していた高橋葉介氏や不条理4コママンガの芳井一味氏らを輩出したそのクラブは「ウチは〝読む〟漫研じゃねえんだ、〝描く〟漫研だから」という、まさに〝虎の穴〟的なハードな集団だった。

「でもそこでね、絵を描くのが楽しいというよりは、〝ストーリーを作る〟のが結構楽しいんだっていうのを知って、かなりマンガにドップリになりました。もうずっとネームを切ってましたね。最初はあくまで趣味のつもりでいたんで、職業にしようと思ったのは大学3年の時。そろそろ本当に就職を考えなきゃいけなくなった頃ですね」

その年の学園祭に、後に『月刊マガジン』の担当になる石井氏ら編集者が訪れた。

「従来のように新人が編集部に持ち込んでくるのをただ待っているのではなく、編集者が自ら学園祭などをめぐって新人を発掘するというのを石井さんが始めた時でした。その時はオイラの隣にいたやつが石井さんから名刺をいただいて。後にそいつが家業を継がなきゃいけないからお前にやるよってその名刺をくれたんです。で、それを持って講談社に行って『僕はお名刺はいただいてません、隣にいたやつです！』って(笑)。それでも石井氏は話を聞いてくれて、『じゃあとにかく夏休み中に一本描いて持ってこいよ、新人賞に一応応募しとくから』って」

チャンスをつかんだ所は太陽の照りつける盛夏のなか『ピントはずれのかぞく式』を描き上げた。それがなんと、講談社新人漫画賞佳作を受賞する。

「でも応募前は一切期待されていない(笑)。後に聞いた話では編集長から『ハシボー(箸にも棒にも掛からない)』なんて呼ばれていました。どうやらプロマンガ家は難しいんじゃないかって思われていたみたい」

しかし、その受賞を励みにして描いた『名門！多古西応援団』で状況は変わる。

「オイラの同期、いわゆる〝ハシボーじゃない〟人たちはちゃんと最初から連載でしたが、オイラの『多古西』はまず読み切

作品を知らない人でも見たことのある1コマ。今では日本を代表するネットミームと化し、炎上系のニュースがあると必ずやSNSで貼られるほど有名なワンシーンだ

センスが合わない時は三つ巴の闘いに 個性のぶつかり合いから、作品は生まれた

りで、その反応次第で連載を決めようっていう感じでした」

ハシボーから人気作家へ怒涛の仕事量をこなす

掲載された所の読み切りは、読者アンケートで見事にトップ10入りを果たす。新人の読み切りでこの結果は「意外とコレすごいことだよ」と評判に。晴れて連載化が決定した。

「大学在学中は授業中でも家でもずっとマンガを描いていて、部屋に遊びに来た友人や後輩がベタやトーン貼りを手伝ってくれたりしてましたが、連載開始後もそれがそのまま続いてる感じでした。原稿料としてお金が入ってくるようになったっていうのがいちばんの違いですね」

『多古西』のヒットで、『仰げば尊し!』など『週刊少年マガジン』での連載も決まっていく。この時期は競合雑誌間の売上競争が激化しており、所の仕事量も尋常ではない量に。

「でね、とうとう倒れちゃって。後から聞いたんですけど、オイラが倒れた時に持っていたペンが折れちゃって、意識がないのに折れたペンで描こうとしていて、周囲にあわてて制止されたそうです(笑)。そういうこともあって、編集部で〝10週描いたら2週休み〟みたいなローテーションがその頃作られるようになったんですよ。今でいう〝作者取材のため休載〟っていうやつですね。作者が休暇をとれるのと、その副産物としてそこに新人の読み切りを入れられるようになり、新人がデビューするチャンスの場ができた。『これはあの時、所先生が倒れてくれたからだよ』って編集者さんから感謝されることもあります。ちなみに恐竜にハマったのはこの休暇を利用した時から。今やそれがライフワークな感じですからね。人生何が起こるかわからないものです」

多い時には1話で50個以上、全編で5785個登場する「!」や「!?」マーク。シリアスな場面でも構わず「!」「!」と連打するのは当時の編集担当縄谷氏の発案だった

デビューから4年経過後の88年、また新たな機会がやってくる。〝原作付きの作画〟である。その原作者の名は史村翔(ふみむら)。史村氏の別ペンネームは武論尊。『北斗の拳』などで知らない人はいないマンガ原作者だ。その史村氏が所と組みたいと担当編集にリクエストして、それを伝えてきたのだ。

「いやこんな下手くそでもいいんですか!? て言ったら、その時担当氏が言うには『多分、お前に求められたのは画力じゃないよ。史村先生の書いたものを、お前ふうにアレンジするっていう仕事を求められているんだと思うよ』って言われたんです。実際とにかく自由にやらせていただきました。それなりに数字も出せたし、これは貴重な経験でしたね」

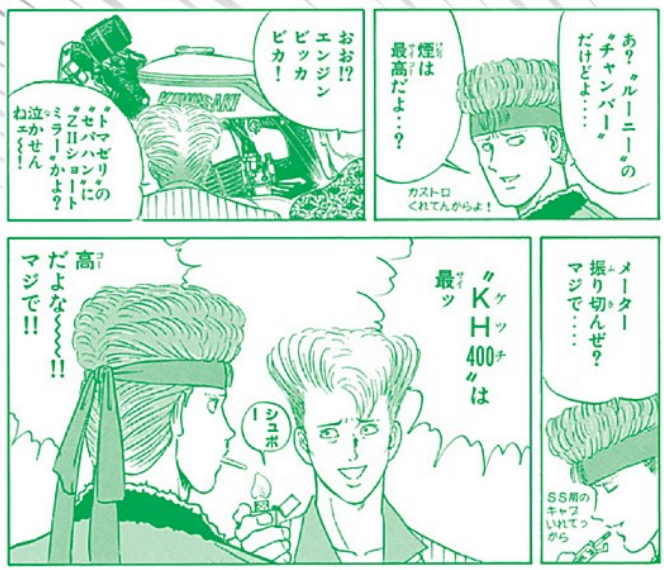
原作者、編集者、マンガ家個性がぶつかり伝説を生む

デビューから7年目、ついに所の代表作のひとつである『特攻の拓』がスタートする。その経緯から教えてもらった。

「まずね、その頃担当が変わっ

「下書きの下書き」という貴重な原画。アシスタント伊藤氏による緻密なバイクの描写が目を引く。ホイールのワイヤースポークが一本一本ていねいに手で描かれている右の画に注目

マンガのそこかしこで繰り広げられるバイク談義。また"天羽編"では同様にギター関係の蘊蓄が展開！これらも『特攻の拓』の魅力のひとつだ



たんですよ。縄谷くんという、もともとは『月刊マガジン』で4コママンガを描いていた作家で、よく編集部ではマンガ家同志として挨拶をしてたんですけど、不思議な縁で彼が担当編集になりまして。で、彼が企画をいろいろもってくるんですけど、オイラとあんまり合う内容のものがなかったんです。そうしたら『じゃあ暴走族はどうだ』と言うんです」

所は「暴走族なら実録モノみたいなのならおもしろいと思う」と返事をし、後日、縄谷氏が持って来たのが、原作者の佐木飛朗斗氏による企画だった。当初予定していた暴走族の実録モノではなかったが、まずは前後編の読み切りで様子を見てみようということに。実は、それが『特攻の拓』の第1話と第2話である。

ところで原作者と作画担当とは、どのような関係にあるのだろうか？

「佐木さんから届く原作というのは文章で、映画のシナリオみたいな感じですかね。本来はそれを見て、作画担当が細部のコマのディテールとかを自由にイメージして…っていう。ただ『拓』の場合は、担当の縄谷くんも含めた三人で作っていた感じなんですよ。佐木さんが原作を書いて、縄谷くんがコマ割りをして、オイラがそれを描く時は、それをアレンジしたり、もしくは忠実に描いたり。ただ、それも時期によってやり方は変わっていきました」

ものを創造する才能の特徴のひとつに、〝頑固さ〟が挙げられるが、この三人も相当だったようだ。

「相当我の強い人たちなんで『絶対そこはこれ入れよう』みたいに言ってくるんですが、ちょっとセンスが合わない時もあって、三つ巴の闘いになったりするわけです(笑)。でもまぁそこらへんはね、本当に三人のそれぞれの個性のぶつかり合いからあの作品が生まれたんだと思います。そのなかでオイラも佐木さんや縄谷くんから学んでいったんだと思いますね」

佐木氏は重厚なシリアス系、縄谷氏はギャグ・下ネタ系、そして所は人情・友情・泣かせ系と三人の得意とする〝作風〟がうまくブレンドされて絶妙な〝味〟が出たのも興味深い。

「別の出版社の人とかにも『特攻の拓』ってオイラの『多古西』と佐木さんの『R16』(原作：佐木飛朗斗／作画：桑原真也)をミックスさせたもんですよねってよく言われます。『R16』が本来佐木先生が描きたかったハードな世界で、そこに人情的な〝温かみ〟を、所さんが加えてますねって」

「!、!!、!?」この表現は担当編集のしわざだった!?

『特攻の拓』を語るうえで外せないのが、単語を〝〟でくくる独特な言い回しや『!?』を多用するコマ演出だ。この作風が生まれた経緯を聞いてみた。

「まず〝〟は原作の佐木さんによるものです。ルビの独特なボキャブラリー、使うポイント、あの使い方はもう天才ですね。もうひとつの『!?』、いわゆるハテナマーク、ビックリマークはね、佐木さんは関係なくて、縄谷くんがやってたの。彼が全コマにあるくらい打ちまくるんですよ」

事実、30話を過ぎる頃になると「!?」「!」の数は急増し、40話前後では1話のなかに50個以上もの「!?」が乱舞するようになった。

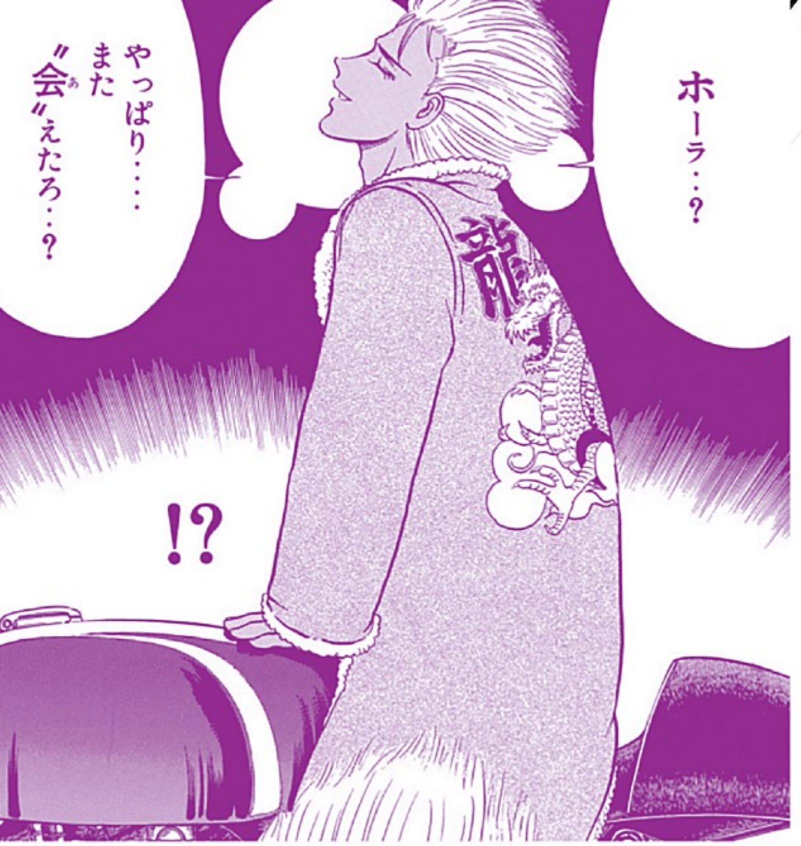
「最初の頃は単行本になる時に『これはさすがに多すぎるよなぁ』とコッソリと写植を剝がしてたんです。刊行されてから気づいた縄谷くんが怒って『剝がしたでしょ！』って(笑)。それ以降は全部剝がすとバレちゃうから少しづつ間引いて。担当編集者は別にもう二人いたんですけど、そのうちの一人と一緒に…だからその編集者は『私はあのびっくりマークを剝がすのが仕事でした』って同僚に語っていたという話も聞きました」

効果的に使ったり、リズムを作るのであれば…と所は疑問を感じていたものの、やがて〝剝がすのが面倒になって〟そのままに。だが、結果的に「!?」の多用が、『特攻の拓』の特徴のひとつとなった。

そして『特攻の拓』が人気を博し、今も高い評価を得ている理由のひとつがバイク描写である。何しろ、小さなコマでも手を抜かない。それどころか、異様な精密さを保っているのだ。それこそパーツの一つひとつが実にリアルに描かれており、しかも玄人好みのパーツだったりする。暴走族だからといってロケットカウルの付いたいわゆる

『特攻の拓』復刻版、続々刊行中！

現在『復刻版 疾風伝説 特攻の拓』が、講談社より毎月2冊ずつ刊行中。最終第27巻は3月18日発売予定。また、『復刻版 疾風伝説 特攻の拓』全27巻のそれぞれの帯に付いている応募券、計27枚を集めてはがきに貼って応募すると、『疾風伝説 特攻の拓』特製特攻服風Tシャツを応募者全員にプレゼントするキャンペーンを実施中。2024年4月30日（火）当日消印有効。なおサイズはLサイズのみとなる。



連載中、キャラが一人で動き出したのが"龍神"こと天羽時貞。SRにハーレーのピストンを組み込んだ「ルシファーズ ハンマー」を駆る、人気キャラの一人

族車というよりも、当時風に仕上げた旧車が多く、また単気筒のカフェレーサー、ハーレーダビットソンからドラッグレーサーまで、あらゆるバイクがごった煮になって登場する。

「ああ、それはもうね、アシスタントの伊藤 功くんのおかげですね。彼は乗るのも描くのも大のバイク好きで、今でも描いてもらっているんですよ。適当にアタリ線を描いとけば伊藤くんがビシッと描いてくれる。ただちょっとね、私はもうちょっと人間に対してバイクは小さいイメージなんですけど、彼はバイク好きなんでどんどんバイクが大きくなる(笑)。私が"これで入るはず"と計算して描いてるのになぜかコマからはみ出ていたりとかもありました。佐木さん、縄谷くんの他に、バイクを描く伊藤くんがいなかったら『特攻の拓』はなかったですね」

登場キャラクターには実はモデルが存在した

登場人物が非常に多いのも『特攻の拓』の大きな特徴だ。顔の描き分けだけでなく、服装や髪型も実に多彩である。この作品では、資料集めはどのようにしていたのだろうか?

「キャラの描き分けはよく褒められましたね。あれはね、当時『チャンプロード』っていう雑誌がありまして。そこに投稿されていたたくさんの暴走族のお兄ちゃんたちの写真を参考にしました。ヤンキーの子たちでも髪が中分けとかオシャレな子もどんどん出てきていた時代でした。だから、秀人くんもマー坊くんも、実はみんなモデルの子が存在するんですよ。あと『チャンプロード』って今一緒に組んで仕事をしている『ドルフィン』原作者の岩橋（健一郎）くんが当時すごく深く関わっていたの。まさか（岩橋くんと）こんなめぐり逢いをするとはね」

それだけ多彩なキャラクターを描いてきたなかで、思い入れのある登場人物は誰だろう。

「俳優だと健さんが好きなんですけど…あ、松平じゃない方ですよ(笑)。オイラのなかでは健さんといえば高倉 健なんですが、寡黙な感じが好きなんですよ。だから、好きなキャラクターっていうと、秀人くんとかあっちゃん（真嶋秋生）とか、そういったちょっと寡黙な系統。でも思い入れって言われたら、やっぱり拓にいきついちゃうんですよね。拓はオイラを投影したキャラクターだったんですよ。オイラは佐木さんや担当各氏と意見が衝突したりすることもあったんだけど、それは別に相手が嫌いなわけじゃないんですよね。価値観は違うけど、敵視はしたくない。"相手を敵視する自分"が嫌いなわけです。拓ってみんなとなんのかんの言いながら"敵でも憎まない人"なんですよ。そういう自分が投影されているのは拓なのかなっていうのはなんとなく思います」

元いじめられっ子の主人公・浅川 拓。外道の秀人と出会い、そこから多くの不良たちと関係をもち成長していく。所は自分を投影していると語る

連載を続けているうちに、予想外にハネた（描いているうちにどんどんよくなっていった）、いわゆる"勝手にどんどん動いていくようになった"キャラクターは誰か？ と問うと、間髪入れず即答だった。

「これはもう『天羽時貞』ですね。天羽くんに関しては本当になんていうか、最初に登場した時からどんどん容姿が変わっていきましたね。最初は何か爬虫類みたいな顔で、佐木さんの原作でも"ただれた感じの目"っていうような表現をされていて、ど

【PROFILE】 所 十三／ところじゅうぞう
昭和36年生まれ、静岡県出身。駒澤大学漫画クラブ在籍中に『ピントはずれのかぞく式』で講談社新人漫画賞佳作受賞。1984年『名門！多古西応援団』（月刊少年マガジン）でデビュー。91年、『週刊少年マガジン』連載、『疾風伝説 特攻の拓』（原作：佐木飛朗斗）で作画を担当し大ヒットとなる。現在は『ドルフィン』（秋田書店 原作：岩崎健一郎）を連載する他、『DINO2』（講談社）、『ももクロ画談録』（白夜書房）など、趣味の恐竜やアイドルをテーマにした著作も多数

弱者に対して厳しく自助を求めるけど弱い人も生きていける社会じゃないとダメ

ちらかというと本当にジャンキーなキャラクター設定だったんです。けど、オイラは少しでもカッコいい感じにしたいなと思って意見を出して、だんだん自分のノリが入ってきちゃうようになった。たとえば髪の毛なんかは最初短い設定だったけどどんどん伸びちゃったりとか。それとオイラは仏教学部卒で仏教美術が好きなんで、ちょっと仏像的な〝半眼〟にしてみたら佐木さんが気に入ってくれて。〝薩摩顔〟だったかな、そう名づけてくれたのを覚えています」

強くなくてもいい男はやさしさがなければ

近年のマンガ界では2017年から『週刊少年マガジン』に連載された『東京卍リベンジャーズ』（和久井 健）が大ヒット。『特攻の拓』のDNAを受け継いだようなヤンキーマンガの要素をもったこの作品の人気には、所も目を細める。

「うれしいですよねぇ。和久井先生からは、以前『新宿スワン』を描いてらっしゃった頃に、『拓』のファンなんでちょっと使わせてもらっていいですか？みたいに言われていて。おかげさまで去年はコラボなんかもさせてもらったりして、とてもありがたいと思っています。『特攻の拓』の復刻版も出たし、こういう流れに乗っかって講談社さんがいろいろやってくださって感謝しています」

インタビューの最後に、所が考える〝カッコいい男〟とは何かを聞いてみた。

「そうですね…カッコいいかどうかっていうのは、容姿よりもやっぱり〝やさしく〟ないとカッコいいとは思えないなっていうのはありますね。変な話、オイラは日々思ったことをX（旧ツイッター）で発信しているんですけど、よく『ファンだったのに裏切られました』みたいに言ってくる方がいらっしゃるんですよ。今の政権の不正は許したくないと書けば『愛国心がない』とか、女性に対してはやさしくあるべきだと思っていると言えば『所はフェミに走った！』とか（笑）。でもオイラはそういうポリシーの作品をずっと書いてきたし、自分自身は全然変わっていない。むしろあなたたちが変わったんじゃないのって思ったりもするんです」

所と意見が合わず攻撃的になってくる人たちを見ると、ある共通点があるという。

「共通項を見ると、とにかく〝弱者に対して厳しい〟んですよ、自助をやたら求めてくる。『合理的じゃない、生産性のない人間たちは切り捨てろ』っていう…私の書いた作品ではそんなのは一切ないと思うんですよ。そもそも暴走族に生産性がありますか？ありませんよね。ちょうど40年前の『多古西』もホームレスの人たちとも仲よくするって描いています。『男は強いだけじゃなくてやさしさがなきゃダメでしょ』っていうのをずっと描いてきたつもりなのに、それが全然伝わってないなって思った時は、ちょっと悲しくなりましたね。なので、やっぱ弱者にこそやさしくないと〝カッコよくないんじゃね？〟って私は思います」

相手にやさしく、嫌わず、裏切らない。その姿は、まさに自らが描き続けてきた主人公・浅川拓そのものだ。

「ハードボイルド小説の言葉で〝強くなければ生きていけない、やさしくなければ生きている資格がない〟って有名なフレーズがあります。けれど、前半の〝強くなければ…〟という部分にオイラは違和感があるんです。強い人だけではなく、弱い人も生きていける社会にしないとダメだと思うんですよ。今の時代、そう思えるぐらいのやさしさは男として最低限もっていようよって、オイラは考えますね」

【PROFILE】 久保ミツロウ 昭和50年、長崎県生まれ。1996年に本名の久保美津子で発表した『しあわせ5はん』でデビュー。2001年『週刊少年マガジン』で久保ミツロウ名義の『3.3.7ビョーシ!!』で少年誌での連載をスタート。代表作は『トッキュー!!』『モテキ』『アゲイン!!』

昭和50年女・久保ミツロウがマンガ原体験を初めて棚卸し

ひん剥かれるマンガが好きなんです

CHAPTER5 自己を育てた作品・人

オレたちが追いかけた 漢

サブカル界にセンセーションを巻き起こした『モテキ』をはじめ、数々のヒット作、話題作を送り出してきた久保ミツロウ。これまであまり話したことのないというマンガ遍歴を語っていただいた。

取材・文：大山くまお

応援団の少年が歌舞伎町のホストの世界に飛び込む『3.3.7ビョーシ!!』、海上保安庁の特殊救難隊の活躍を描く『トッキュー!!』、ウジウジした三十路男の恋を描いて大ブームを巻き起こした『モテキ』、タイムスリップして青春をやり直す『アゲイン!!』、原案を務めたフィギュアスケートアニメ『ユーリ!!! on ICE』。

いつも、ありそうでなかったオリジナルな作品を世の中に届けてきたマンガ家・久保ミツロウ。これまで大量に読んできたマンガの一端を教えてくれた。

〝ひん剥かれ系〟のマイベスト作品とは

久保が生まれたのは、日本最西端のJRの駅がある長崎県佐世保市。マンガとアニメのファンだった3つ上の兄の影響を受けながら育ってきた。自身が買ったいちばん古い記憶にあるマンガは、小1の時の『忍者ハットリくん』。学年誌で『あさりちゃん』や『名探偵カゲマン』も愛読していた。だが、それとは別に意識して追いかけているマンガのジャンル（？）があったという。

「小1の頃から〝女の子が裸に剥かれるマンガ〟ばかりを気に

©久保ミツロウ／講談社

数年ぶりに描いた、いつものフクちゃんと46歳を迎えた今の藤本くん

『3.3.7ビョーシ!!』のフクちゃんの見た目はあまり特徴がない。「少年誌にはこういう主人公が必要なんですよ」。『モテキ』の藤本幸世はちょっとイケメンになった気がする。「きっと今は犬を飼ってます。きっと」

して読んでいたんです。これは兄の影響とは全く関係ありません。たまたま本屋で見つけた『まいっちんぐマチコ先生』が起源だと思います。バスで30分かけて通った本屋さんで立ち読みしていました」

女の子が裸にひん剥かれるマンガ。総称して〝ひん剥かれ系〟。確かにそんなマンガがたくさんあった。

「『マチコ先生』はかわいい絵柄がよかったんです。歯医者さんでうっかり『チャンピオン』に載っていた永井 豪先生の作品を読んだ時は『これじゃない…』と思いました。ちょっと小1にはハードすぎましたね」

小2で広島県に引っ越し。周囲に通える書店がなく、立ち読みライフに暗雲が立ち込める。

「その代わり社宅に『少年ジャンプ』のストックが膨大にある部屋があって、そこに自由に出入りできたんです。『宝物だ！』という感じで大量に読んでいました」

昭和50年男がもれなく遭遇する『週刊少年ジャンプ』黄金期。久保が影響を受けたのは、アニメ化もされたヒット作と、あっという間に打ち切られた作品群だった。

「家でも安心して読めるマンガが『ハイスクール！奇面組』です。平和なギャグが大好きでした。でも、あの時期に『少年ジャンプ』で読んだマンガでいちばんトラウマになったのは、ジョージ秋山先生の『海人ゴンズイ』（1984年）。女の人の裸が出そうかな、と思って読んでみたのですが、第1話のインパクトが強すぎて、ウワーッ！ となりました」

他にも10週で打ち切られた『メタルK』は『モテキ』でも引用されていた。

「『メタルK』はみんな知っていましたよね。小4で広島から佐世保に再び戻った時は『少年ジャンプ』がフィーバー状態でしたが、みんなで『硫酸鞭（りゅうさんべん）！』って遊んでいました（笑）」

久保は『少年ジャンプ』のマンガに横溢していたエロ成分をひと言で言い表してみせる。

「『少年ジャンプ』には勃起文化があったと思います。『シティーハンター』は勃起させながら、品よく抑えられましたよね。『少年ジャンプ』は、勃起するけど挿入までは想起させないというラインを守っていた気がします。私も具体的な性行為を考えずに読んでいました」

でも、暴力的な作品や女性が蔑ろにされている作品にはハマれなかったという久保が、ついにマイベスト作品に出会う。

「衝撃を受けたのが『いけない！ルナ先生』。あらゆるコンプラを破っているマンガです（笑）。ルナ先生はお色気で勉強に集中させたいだけで、すべてやむを得ずにああなってしまっているんですよ。女性の先生が描いているのもよかったですね」

『ルナ先生』が連載されていた『月刊少年マガジン』には『Oh！透明人間』も連載されていた。

「月刊になると剥かれ方が巧妙になるんです。『月マガ』はひん剥かれ文化があちこちで花開いていたんですよ（笑）」

『サルまん』を読んでどこか歪んでしまった

この頃から自分でもマンガを描きたいという気持ちが芽生えていた。初めて描くマンガは初期衝動が詰まっているものだ。

「最初にマンガを描いたのは小5くらい。ひん剥かれ系のマンガです（笑）。胸が大きくて悩んでいる小4の女の子が主人公で、好きな幼馴染みの男の子を生徒会長の女の子が狙っていてどうしよう？ みたいな話で。二人で一緒に泊まることになり、男の子を落としたい女の子がドアを

『少年ジャンプ』でいちばんトラウマだったのはジョージ秋山先生の『海人ゴンズイ』

開け放しにしたままお風呂に入って…という話でした（笑）。あと、ノーパンでスケスケのネグリジェを着て、タンスの上の物を取るというシチュエーションもありましたね。でも、それ以上先はどうすればいいかわからなくて断筆（笑）。絶対家族には見せられません」

描いていたのは、ひん剥かれ系のマンガだけではない。

「ちゃんと少女マンガにも心震わせていたので、『また逢う日まで』という切ない少女マンガも描きましたが、あんまりおもしろくなくて。次に描いたのが『宇宙船カマメシ号』というSF（笑）。その頃、『ダーティペア』のような強い女の子が活躍するSFが大好きだったので。それが小6までに描いた作品ですね」

すでに同人誌活動をスタートさせていた久保は、いよいよ雑誌に投稿するために筆を執る。

「中1になって投稿作を描こうと思い、学園もののマンガを夏休みの間に30ページほど描いたのですが、話が終わらなくてボツにしました。男の子っぽい女の子がいたり、女の子っぽい男の子がいたり、わちゃわちゃした教室の話でしたね」

投稿用に描いていた作品は、『花とゆめ』に明るい学園ものを描いていた山口美由紀の影響を受けたものだった。

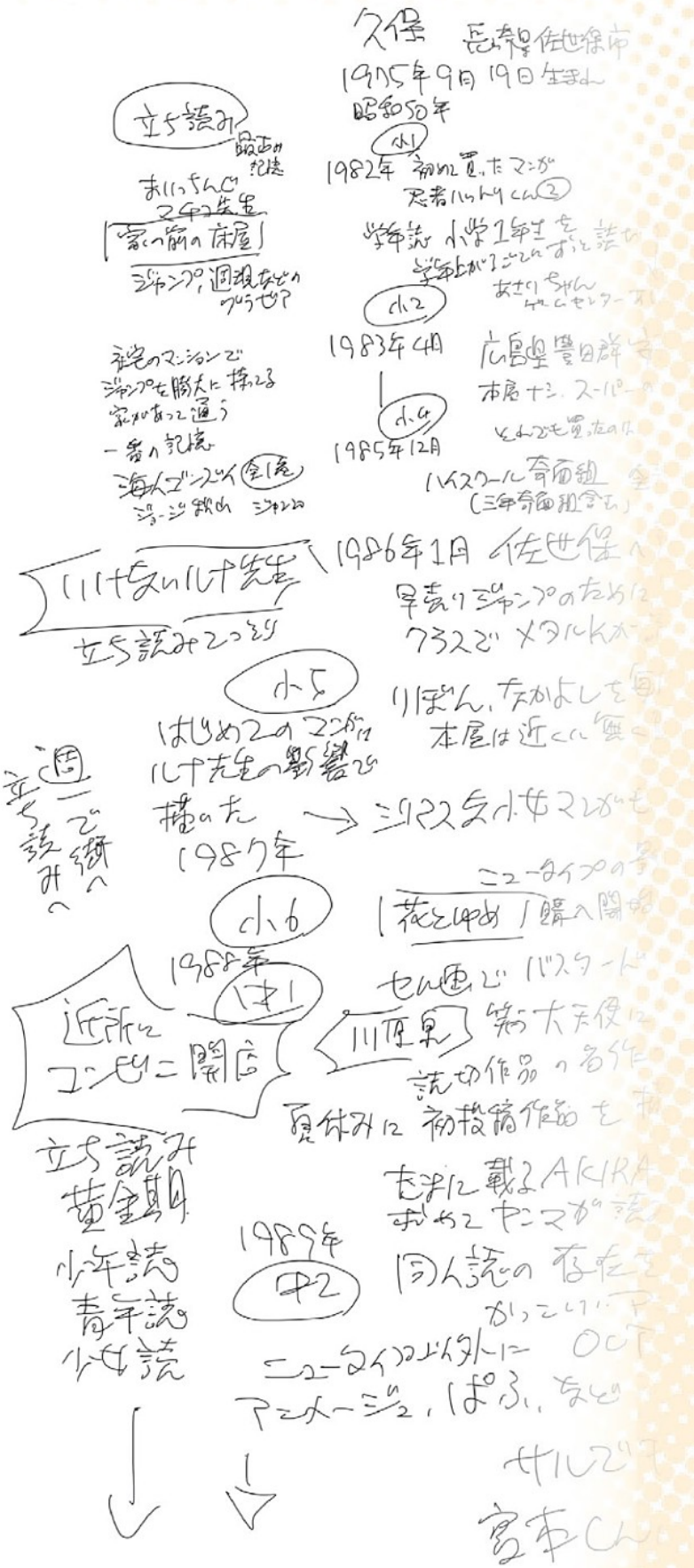
「小6ぐらいから『花とゆめ』が少年誌並みにおもしろかったですね。『ぼくの地球を守って』も『動物のお医者さん』もあって、『ピグマリオ』が始まった頃で。冒険もSFもなんでもありました。川原 泉先生と佐々木倫子先生が大好きでしたね。恋愛からも性欲からも離れた、豊かなマンガ表現に感動したんです」

この頃、近所にコンビニがオープンし、立ち読みライフが一気に充実する。月に40冊程度のマンガ雑誌を読んでいたという。

「兄が創刊時から『月刊ニュータイプ』を買っていたので、私はそれを横から読んでいました。作画方法が載っていたので画材オタクになって、『BASTARD!!―暗黒の破壊神―』のティア・ノート・ヨーコのセル画を作ったりしていました。勝手にアニメ化しようと思って（笑）。それが中1の時です」

『BASTARD!!―暗黒の破壊神―』が好きになったのも、美麗な絵柄と女の子がひん剥かれているところに惹かれたからだ。

「私、あらゆるマンガを最初から読まずに、女の子がひん剥かれるタイミングから読み始めるので、ヨーコさんが監禁されてスライムに服を溶かされる場面



久保ミツロウ手書きのマンガ遍歴メモ

インタビューに際して、あらためてメモを用意して臨んでいただいた。『いけない！ ルナ先生』のインパクトの大きさがひと目でわかる。

『モテキ』のヒロイン、いつかちゃんの“ひん剥かれ”（直前）シーン

「谷川史子先生が描くような、透明感があって、身体が薄くて、胸も大きくなくて、まつげがないシンプルな顔立ちの女性キャラが大好きで、“いつか”になりました。あとはどうやって合法的にひん剥くかを考えて描きました（笑）」

ですごく興奮して、それから熱心に読み始めたんです（笑）」

『ヤングマガジン』は後に執筆するなど縁の深い雑誌となった。

「『ヤンマガ』には、たまに幻のように『AKIRA』が載っていて、必ず『工業哀歌バレーボーイズ』が載っていて。『ヤンマガ』はずっと読んでいましたね」

この頃、目標とするような作品とも出会っている。

「『究極超人あ～る』や『ここはグリーン・ウッド』のような学園ものの群像劇の名作がいくつも生まれていたので、私もそういう作品が描けたらな、と思っていました。何か目的があるわけでもなければ、戦うわけでもなく、恋愛の駆け引きをするわけでもないようなお話が好きだったんです」

80年代が終わり、90年代にさしかかると、不条理ギャグマンガやメタ視点が織り込まれたマンガが流行り始める。その最高峰とも言える二つの作品を手に取っていた。

「どこかシニカルで批評性のあるマンガが好きだったんです。中2か中3ぐらいに『伝染るんです。』と『サルでも描けるまんが教室』を雑誌の連載で読んでいたのですが、おこづかいが少

少女時代の愛読マンガLIST

巻来功士
『メタルK』
（集英社）©巻来功士／集英社

えびはら武司
『まいっちんぐマチコ先生』
©えびはら武司

上村純子
『いけない！ルナ先生』
（講談社）

日渡早紀
『ぼくの地球を守って』
（白泉社）

ゆうきまさみ
『究極超人あ～る』
（小学館）

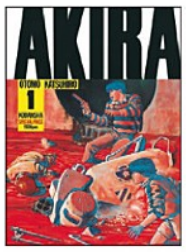
永野 護
『ファイブスター物語』
（KADOKAWA）

高田裕三
『3×3 EYES』
（講談社）

萩原一至
『BASTARD!!―暗黒の破壊神―』
（集英社）©萩原一至／集英社

新井英樹
『定本 宮本から君へ』
（太田出版）

須賀原洋行
『気分は形而上』
（講談社）



大友克洋
『AKIRA』
（講談社）

相原コージ／竹熊健太郎
『サルでも描けるまんが教室 サルまん 21世紀愛蔵版』
（小学館）

那州雪絵
『ここはグリーン・ウッド』
（白泉社）

※…『まいっちんぐマチコ先生』当時は学習研究社刊、『宮本から君へ』当時は講談社刊

カッコいい男を描くのが楽しかった『3.3.7ビョーシ!!』のソウメイ

「通っていた美容室の人の顔が好きだったので、その人の名前をいただきました。ソウメイを描くのは楽しかったですね。カッコいい男の子を描くのって楽しいんだ、好きな服とか着せていいんだ、って気持ちをようやく出せました」

なかったので単行本はどちらかしか買えない。悩んだ末に買ったのが『サルまん』でした。これには影響されましたね。マンガの入門書風でしたが、禁じ手がたくさん描かれていたんです。これを読んだせいで、どこか歪んでしまった気がします（笑）」

高校に入学した久保に衝撃が走る。自分の高校の応援団が衝撃的にカッコいいと感じたのだ。

「すぐに応援団についての同人誌を描いたんです。そこで初めて生モノ（実在の人物）の同人誌を作った感じですね」

生モノを描くおもしろさは、意外な方向からも感じていた。プロ野球のパロディ4コママンガだ。

「4コママンガが好きなお父さんが雑誌をよく買っていました。父は野球も好きだったので、90年に創刊された『まんがパロ野球ニュース』も買っていて。はた山ハッチ（やくみつる）先生が活躍していましたが、私は『ササキ様に願いを』が大好きでした。生モノの野球選手をおもしろく描くノリが大好きで、食い入るように読んでいました」

思春期を迎えるようになると、青年誌のリアルなマンガも好きになっていく。

「めちゃくちゃ好きだったのが『宮本から君へ』。年上の女が出てきたあたりからワクワクしはじめました。生々しいんですけど、宮本くんは一途ですし、ストーリーはおもしろいですし」

『少年ジャンプ』黄金期に直撃された久保だが、実は王道の大ヒット作はあまり読んでこなかったという。

「バトルものもヤンキーものも好んでいましたが乗り切れずに、だんだん少年誌から離れていきました。『SLAM DUNK』も『幽☆遊☆白書』もちゃんと読んでいないんです。たくさんの名作を読んでいないんですよ」

自分の見つけたおもしろいものは、誰かに届けるまで間を空けた方がいい

『BOYS BE…』には負けねー！と思っていた

96年、マンガ家として女性誌でデビューしたものの不完全燃焼に終わる。その後、久保ミツロウ名義で『マガジン』に連載した『3.3.7ビョーシ!!』は、歌舞伎町で生き生きと暮らす人々を描いた群像劇だった。

「『ホストマンガを描いてみないか』と言われてやり始めました。新宿を舞台にした群像劇にしようと思って、何度も何度もネームをやり直しながら、学園ものの要素や、好きだった応援団、上京してきたばかりの自分のリアルな気持ちをいろいろ盛り込んでみました。ひん剥かれ系も少し入ってます（笑）。家の近くで撮影していた『池袋ウエストゲートパーク』も入ってますね。こうやって経験したことや描きたいことを入れ込んで、昇華したものが作品として読まれるのってうれしいことなんだということを初めて経験しました」

見た目のかわいらしいヒロインたちが、全員一筋縄ではいかないのも特徴だ。男性キャラの欲望の対象でもなく、意味ありげにお預けをするわけでもない。

「他のマンガのヒロインを見ていて、そういう風にはさせねーよ、という気持ちが反映されていました。それが『マガジン』でアンケート上位にいけなかった理由でしょうね。『BOYS BE…』には負けねー！と思っていましたから（笑）」

『海猿』で知られる小森陽一が原作を担当した『トッキュー!!』は海上保安庁が全面協力してくれた。

「たくさん取材をさせてもらえるのが本当に楽しくて。イケメンを描くというより、リアリティのある男の人を描くのが肌に合いましたね。取材で得た現実からフィードバックしながらカッコよさを描いていて、応援団にハマって描いていた頃を思い出しました」

『モテキ』は、久保の個人的な

経験と音楽をはじめとするカルチャーの要素を詰め込んだ作品。きっかけは『ヤンマガ』に掲載された読み切りだった。

「『ヤンマガ』で歌をテーマにした読み切りを描く企画があって、私にも声をかけていただいたことが始まりです。読み切りはやったことがなかったし、歌も好きだったので、自分の描きたい話がわからなかった頃から少し成長したのでは、という意味も込めて『リンダリンダ』を描きました。この後、『トッキュー!!』を経て、声をかけていただいたのが『モテキ』です」

ここで久保は〝禁じ手〟を出す。初めて自分を投影した主人公を登場させたのだ。

「自分に似たキャラクターを出しました。これを描いたらもう描けないな、という。禁じ手を出した感じですね」

土井亜紀、中柴いつか、小宮山夏樹というヒロインたちも大きな反響を呼んだ。それぞれタイプが異なり、どこかにいそうな女性たちだった。

「『フィーヤン』（フィール・ヤング）系、集英社系と、雑誌のイメージから女性キャラを作っていました。こういう分析の仕方も『サルまん』の影響です（笑）」

『モテキ』は、あの年代の人々が、昭和50年男たちが、30代にさしかかり、2000年代になった頃の話だ。みんなの思いや、迷いや、空気や、欲望が、ギュッとパッケージされている。

「30代だから描けた作品だと思います。ちゃんとマンガを描いてきた自負もあって、自分が経験してきたネタもあって。ネットの意見も匿名掲示板ぐらいだったので、あまり自分を卑下しなくてよかった。今の時代は難しいですね。パパ活やマッチングアプリの話なんかも私は描けないですし。とても『モテキ』のノリでは描けないと思います」

ひとりで抱えているとオリジナリティが育つ

王道のバトルや恋愛がない。スポーツで雌雄を決しない。だけど、いつだって人間関係があって、そのなかにやさしさや摩擦があって、ヒロインはひん剥かれる。それが久保ミツロウの作品なのだろう。ここまで話してくれた久保が、ふとこんなことを打ち明けてくれた。

「実は小中高の頃に夢中になったマンガについて、リアルタイムで誰かと盛り上がって話したことが今まで一度もなかったんです。特に、ひん剥かれ系はいちばんシェアしちゃいけない（笑）。オタクとしては『あのアニメおもしろかったね』なんて話をしていたのですが、『ハイスクール！奇面組』や『宮本から君へ』のおもしろさについて誰かと話したことってないんですよね」

これまで『少年ジャンプ』やゲームの話に興じてきた我々からしてみたら、意外に思えるかもしれない。だが、それがよかったんじゃないかと久保は言う。

「誰かと話し合うことで昇華することなく、時間をかけてひとりで抱えることで自分のオリジナリティが育っていくと聞いたことがあって、それを私は大事にしたいですね。今はおもしろいものを見たらすぐにネットに感想を書いて共有できますが、自分の見つけたおもしろいものは、誰かに届けるまで間を空けた方がいいと思っています。それがやがて自分の血肉になっていくんじゃないでしょうか」

今もハマっているものはあるが、マンガにするつもりはないし、考えてもいないという。

「ゼロから想像だけでフィクションを描くことができないのは、自分の弱みだと思っています。今は将棋が好きなんですけど、趣味として長く愛したいので、大事に見ていきたいですね」

インタビューの最後に、初めてマンガ遍歴を振り返った感想を教えてくれた。

「いざ振り返ってみると王道からはズレていますよね。私の中にはやっぱり『海人ゴンズイ』が入っているんです（笑）。あと、あの時『サルまん』じゃなくて『伝染るんです。』を買ってたら、どうなっていたのかなぁ。こうやってお話できて、あの頃好きだったものを成仏させてもらった感じです」

リアルのカッコよさが『トッキュー!!』

『トッキュー!!』の真田はヒーロー感が強いキャラ。「外見はリアルからフィードバックしていたのですが、いちばんフィクションとして動いてくれたキャラだったと思います」

トキワ荘の頼もしいアニキを竹村よしひこが語る
寺田ヒロオの横顔

トキワ荘のリーダーとして後輩マンガ家たちの面倒を見、共に新しいマンガの地平を目指した寺田ヒロオ。昭和50年男は藤子不二雄Ⓐの名作『まんが道』で〝テラさん〟と親しむ一方で、その実像は案外知らないのではないだろうか。マンガ家・竹村よしひこが、トキワ荘を去ってからのテラさんとの交流について懐かしみながら語ってくれた。

取材・文：内田名人

【PROFILE】 寺田ヒロオ
昭和6年、新潟県生まれ。電電公社（新発田電報電話局）勤務の後、22歳でマンガ家になるために上京してトキワ荘に入居。トキワ荘では面倒見のいいリーダー的な存在となり、藤子不二雄ら後輩から“テラさん”と呼ばれた。代表作は『背番号0物語』や『スポーツマン金太郎』など

「寺田先生の作品では『暗闇五段』、『背番号0物語』、『スポーツマン金太郎』はもちろん、特に好きなのは『少年サンデー』に連載されていた『ノンキ先生まんがノート』。寺田先生の作品は身近な話題をテーマにしているので入り込みやすいところが好きです」

『昭和50年男』読者には『ビックリマン』で知られるマンガ家・竹村よしひこもかつてはひとりのマンガ少年。そんな竹村少年が寺田ヒロオと手紙のやり取りをするようになったのは1968年、高知県に住む高校1年生の頃だった。

「当時は雑誌の柱（※1）部分にマンガ家の住所が載っていたんですよ。僕はどうしてもマンガ家になりたかったので、マンガ原稿と一緒に『マンガ家になりたいです』と書いた手紙を寺田先生に送ったんです。この先生なら作品を見てくれるだろうと思ったんですよ。そうしたところ『がんばりなさい』といった励ましの言葉が書かれた長文のお返事をいただいたんです。そして『また作品を送ったら批評してもらえるかな？』と、マンガができたら送るというやり取りが高校3年まで続くんです。寺田先生はとてもやさしい感じの文章を書かれるので、それに僕も甘えてしまったんですね」

その竹村に寺田から「社会に出てからの勉強もマンガにきっと役に立つ。それからマンガ家になっても遅くない」という手紙が届いた。高校卒業後、竹村は寺田の助言に従い就職。この間連絡を絶つのだが、73年4月にマンガ家になるため身ひとつで上京し、埼玉県にいる兄の家で居候を始める。この時に頼った人物も寺田だった。竹村はマンガを手に神奈川県茅ケ崎の寺田宅を訪問する。

「きっと先生もビックリされたと思います。2年間も連絡がなかったヤツがいきなりやってきたんだから（笑）。今考えたら恐ろしいことですよ。大先生のご自宅に押しかけるなんて。僕もそれだけ必死だったんでしょうね。そんな僕の覚悟を寺田先生もわかっていたんだと思います。『一刻も早くマンガでお金が入るようにしてあげたい』と思われたんじゃないかな。先生の本を読むと〝マンガで生活ができること〟を大切にされていますからね」

指導を受けるうちに育まれた師弟の絆

ここから、竹村は寺田宅へ完

※1…マンガページの左右の余白部分。

僕にはギャグマンガが合う、ということを見抜いてくれたのが寺田先生でした

成したマンガを持参し、批評を受けるという日々が始まる。

「最初はアクション、その次は子供を主人公にした日常もののストーリーマンガを読んでいただいたんですが、あまりいい顔をされなかったんです。そして『いたずら番長』という学ランを着た悪ガキ大将を主人公にした8ページくらいのギャグマンガを持っていた時、寺田先生が今までにない明るい表情をされたんです。寺田先生って顔に出るんですよ。作品がおもしろくない時は背中を反らしながら普通の表情で原稿を読まれるんですが、この時は笑顔で前のめりになってコマごとにアドバイスをくれましたね。それで僕も『こういう路線でいったらいいんだ』と思いまして」

竹村、ギャグマンガ開眼の瞬間である。後の『ビックリマン』につながると思うと感慨深いエピソードだ。

「実はそれまでギャグは好きじゃなかったんですが、僕にはハチャメチャなギャグのマンガが向いているということを寺田先生が見抜いてくれたんです。というより『この子にはストーリーものは描けない』と思われたのかもしれませんね（笑）。『編集者が読みやすいよう持ち込み作品は短くまとめた方がいい』とも言われました。その後、シュートマンガやカットイラストを多く描くことになるんですが、短いページで見せる技術は寺田先生に鍛えられたものです。寺田先生は『ストーリーものはカットの集まりだ』ということもおっしゃっていて、僕もいまだにそう思っています。とにかくそこから僕のマンガは飛躍的に伸びたんですよ」

他に寺田の言葉で印象に残ったものは？

「『マンガを描いて、お金をいただいて、勉強もさせてもらえるなんて、こんないい仕事はない』ですかね。あと『いつか必ず忙しくなる時がくる。それは誰しもが通らないといけない道だから、その時はがんばらないといけないよ』という言葉もいただきました。まだ何者でもなかった僕にそんなことを話されるんですよ。『ビックリマン』がヒットして忙しくなった時は、その言葉を思い出しました」

寺田との会話のなかでトキワ荘の話題は出たのだろうか。

「自分からトキワ荘の話はされなかったんですが、僕が聞くと話してくれました。『石ノ森（章太郎）は描くのがものすごく速い。仕事をしている雰囲気がないのに一晩でキチンと仕上げているんだよ』とか。まあ、自分のことってあまり自分から話したりしませんよね。寺田先生が野球をなさっていたことも、ふとした会話のなかで知ったくらいですから。それは『ピッチャーがボール投げる瞬間、手首の筋が出る。打者はそれを見てカーブかフォークか球種がわかる』という話だったんですが、寺田先生もそのレベルだったということですよね。『世の中にはスゴい方がいるんだなぁ』と驚きましたね」

竹村のマンガ家デビューのきっかけを作ったのも寺田だった。寺田は『小学三（一）年生』『小学一年生』の編集長宛に3通の紹介状を書いている。

「あとは『編集者と顔をつなぎなさい。小さな仕事からいただいて大きな仕事をもらえる流れを作りなさい』ということですね。おかげで『小学三年生』の中野（早笛）編集長と会ってすぐ担当さんをつけてもらうことができました。そこから学年誌などでカット描きなどを始め、一峰大二（かずみねだいじ）先生のアシスタントなどいろんなことを経験しました」

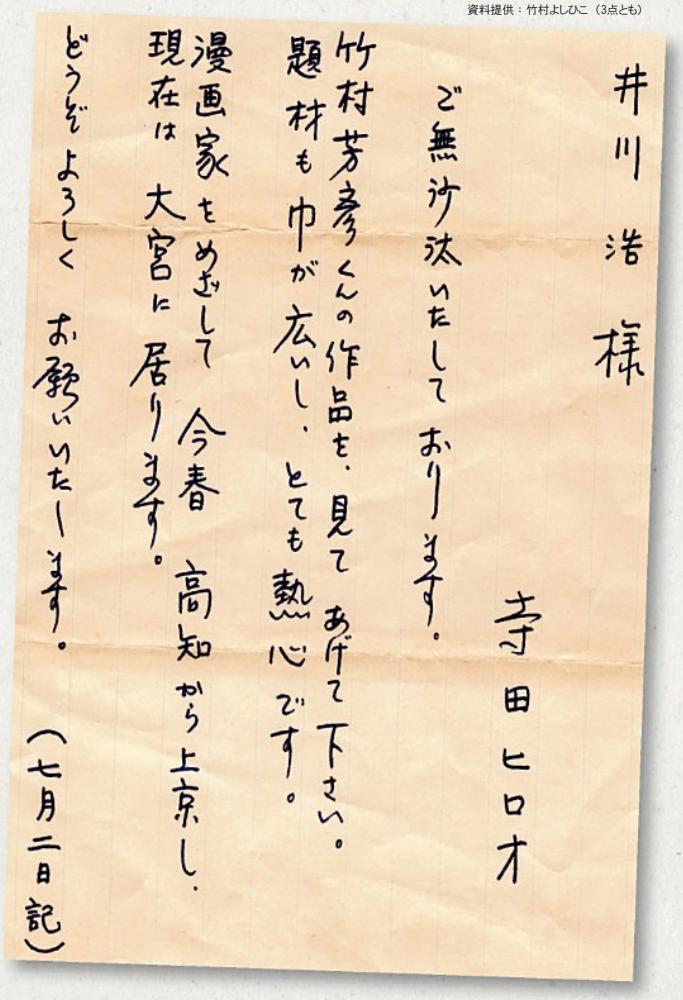
そして76年、中野が『てれびくん』を創刊するタイミングで、竹村も『ろぼっ子ビートン』でマンガ連載デビューを果たす。

「寺田先生からは『がんばってやりなさい』という言葉をいただきました。そこから『コロコロコミック』で読み切り作品を描くようになり、『ビックリマン』へとつながっていくんです。『コロコロ』2代目編集長の福島（征英（まさひで））さんも寺田先生の作

『新装版 まんが道』（小学館クリエイティブ）第5巻294ページより ©藤子スタジオ

寺田のパブリックイメージといえば『まんが道』の“テラさん”。トキワ荘出身作家がその背中を追った、頼もしきアニキとして描かれる。映像作品では河島英五、本木雅弘らが演じた

資料提供：竹村よしひこ（3点とも）

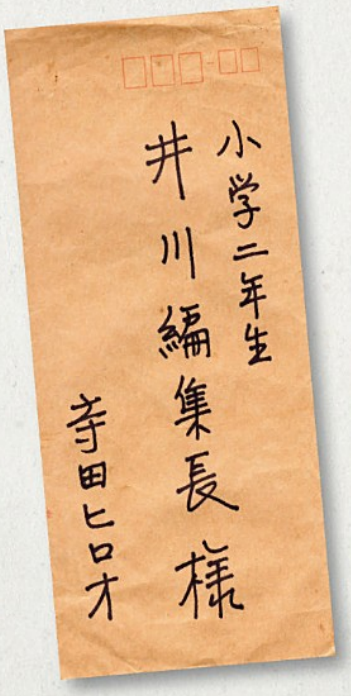


井川浩様

ご無沙汰いたしております。
竹村芳孝くんの作品を、見てあげて下さい。
題材も巾が広いし、とても熱心です。
漫画家をめざして今春高知から上京し、
現在は大宮に居ります。
どうぞよろしくお願いいたします。

寺田ヒロオ

（七月二日記）



小学二年生
井川編集長様
寺田ヒロオ

寺田が竹村を推薦した紹介状のひとつで『小学二年生』編集長へ宛てたもの。「寺田先生の筆による紹介状なんてなかなかもらえるものではないし、貴重だから1通は使わずに大事にとっておいたんです」

品がお好きだったそうですね。『彼の描くマンガは大らかで上品さがある』と、いただいた手紙に書かれていました。3代目編集長の平山（隆）さんは若手編集者時代に寺田先生の原稿を取りに行ったそうですよ」

竹村版〝まんが道〟での寺田ヒロオ像

竹村のマンガ家デビュー後、寺田とのやり取りは手紙と電話になっていく。

「うれしいことやちょっとイヤなことがあった時『先生、こんなことがあったんです！』って電話していましたよ（笑）。寺田先生はそんな駆け出しマンガ家の愚痴を笑いながら聞いてくれて…本当にやさしい方でね。そうそう、寺田先生が『「漫画少年」史』（81年／湘南出版社）を刊行する時、手塚（治虫）先生に推薦文を依頼する手紙を出されたんです。ここにも寺田先生のお人柄が表れているんですよ。『電話で頼んだら相手も断りにくいだろう。その点、手紙だと気づかなかったことにもできるから』とおっしゃっていました。忙しい手塚先生を気づかっているんですよね。返事はなかなかこなかったそうなんですが、発行ギリギリのタイミングで、受

人、そしていつも笑顔でとてもやさしい方でした

諾のお手紙をいただいたそうです。『とてもいい言葉が、ものすごく長文で書かれていて感激したよ』と喜んで話されていました」

竹村は84年に結婚。その際も寺田に報告をしている。

「その時は『女性にはちゃんと言葉にして話さないと相手に自分の気持ちは伝わらないよ』と言われました。小学館編集部でもお祝いの会を行ってくれるという話になったので、寺田先生をお誘いしたところお越しいただけることになったんですよ。残念ながらこちらの都合で先生の出席は中止になったんですが、その後『ご夫婦で遊びに来てください』という手紙をいただきました。あと、僕の仕事がうまくいきだした頃、四輪駆動車のジムニーを購入したんです。そうしたら寺田先生も喜んでくれて『茅ヶ崎に砂浜を走れる場所があるよ』と、茅ケ崎海岸のパンフレットを送ってくれましたね」

トキワ荘出身作家同様、寺田は竹村にとっても親しみやすい〝アニキ〟だった。だが、『まんが道』で描かれるようなマンガに対する厳しい面は見たことがないという。

「『ビックリマン』は原作があって僕のオリジナル作品ではないんですけど、寺田先生はそれでも喜んでくれました。若い時の寺田先生にはそういう感じもあったんでしょうけど、『マンガはオリジナルでないといけない』『こういうものは描いてはいけない』といった難しい方ではなかったですよ。僕がお会いした時はお仕事をセーブされていた頃ということもあって、いつも穏やかでニコニコされていました。『今どんなマンガ読まれていますか？』と聞くと『今ねぇ、「サザエさん」を最初から全部読んでいるんだ。いつ見てもおもしろいねぇ』なんておっしゃっていましたね」

ネットでは「暴力シーンのある作品の連載中止を編集部に迫った」といった寺田のエピソード（これは誤情報も含まれる）がゴシップ的に流布している。これを竹村はどのように見るのか。

「確かに寺田先生は暴力シーンが嫌いでした。これは僕の想像になるんですが…寺田先生は暴力で人を育てるのが当たり前の戦前の日本で育っています。そしてその暴力が戦争につながったと肌で感じていたと思います。僕の考えすぎかもしれないですけど、そういうことを伝えたか

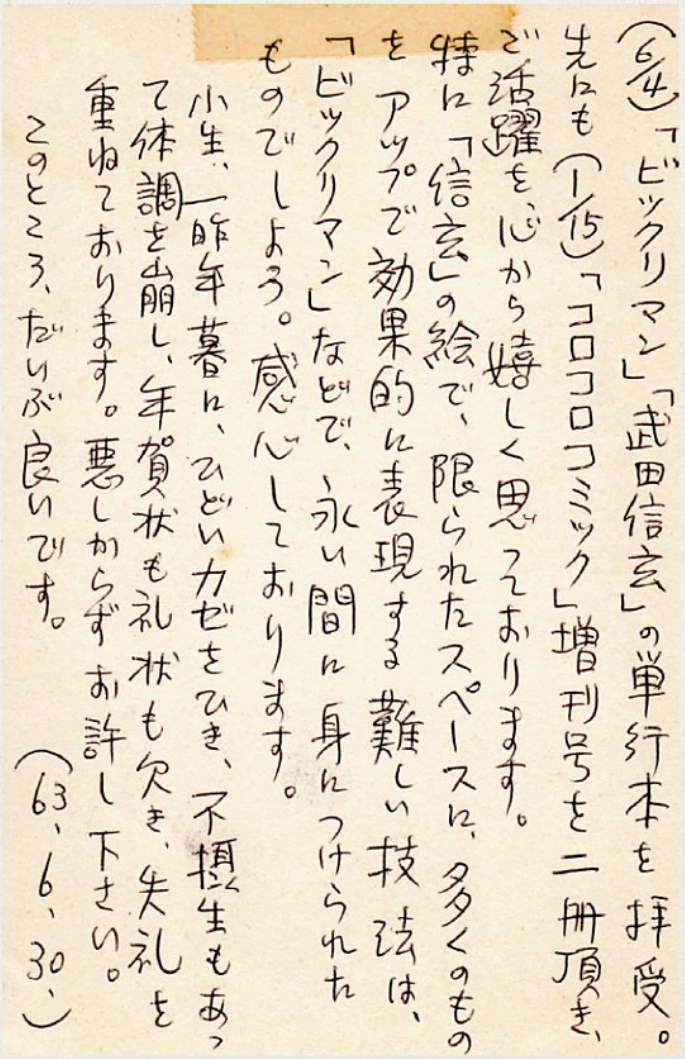
※2…『小学館の101コミックス プロ野球101のひみつ』（1976年／小学館）。
※3…1982～83年に『ザテレビジョン』（角川書店／現・KADOKAWA）に連載された『ひとこまマンガ展』のこと。
※4…1990年6月23日、藤子不二雄、石ノ森章太郎、赤塚不二夫らトキワ荘作家と寺田宅で宴会を行う。この日以降、寺田は誰とも交流を断つ。

ったのではないでしょうか。僕にもそんな寺田先生の〝イズム〟といったものが身体に染みついています。やっぱり暴力シーンはあまり描きたくないですから」

〝断筆〟と表現される時期の寺田とやり取りしていた竹村の証言はマンガ史においてもとても貴重だ。交流のあった人物の角度から見ると、また違った後年の寺田ヒロオの姿が見えてくる。

「僕が知っている寺田先生は〝断筆〟といったような言葉は一度も使っていません。『依頼がきたらいつでもやりたい』とおっしゃっていましたよ。僕が『てれびくん』にいた頃、小学館で『101のひみつシリーズ』という書籍を出していたんですが、そこでプロ野球をテーマにした本を出す際、編集部が寺田先生に描いてほしがっていたんです。僕が『寺田先生ならやっていただけると思います』と伝えたところ、すぐに引き受けていただけましたしね（※2）。中野編集長からは『いま寺田さんは大人向けの一コマを描こうといろいろがんばっている』（※3）ともうかがっていますし、セーブしながらも前向きにお仕事をされていた印象です。88年にも『武田信玄ものがたり』（金の星社）を渡すためご自宅にうかがっています。体調を崩されていた時期なんですが、そういう風には見えなかったですね。自分の弱々しい部分を他者にあまり見せたくないという方でしょうから」

そして92年、寺田は帰らぬ人となる。2年前には寺田宅でトキワ荘出身作家たちと〝最後の同窓会〟（※4）を行っていた。



竹村が送本した自著、掲載誌に対する寺田からのお礼はがき（1988年6月30日筆）。短い文章のなかにもしっかりと作画の感想が書かれている。また体調を崩した時期が1986年の暮れということがわかる

マンガの指導力に長けた

「僕がいちばん忙しい頃で、徹夜作業をして寝ていたら正午くらいに中野編集長から『寺田先生が亡くなった』と知らされたんです。お通夜は中野編集長が出席して僕はお葬式に出席しました。赤塚（不二夫）先生が子供のように泣き崩れ、両脇を石ノ森先生たちに支えられていて…あの光景は忘れられませんね。最後にお顔を見させてもらったんですが、とてもキレイなお顔でした。これも目に焼きついて離れません。とにかくあれだけ人間的にすごい方はもう出てこないんじゃないですかね」

竹村の〝まんが道〟をも拓いていた寺田ヒロオ。竹村と話している時、寺田もトキワ荘時代に戻っていたのかもしれない。

「そうだったらうれしいですね。寺田先生はその人に合った道筋を立てて指導してくれるんです。寺田先生に作品を見てもらったらみんなプロになれたんじゃないですかね。それがたまたま僕だっただけで。それぐらい教えることに長けた方でした。…だから指導者としてもっと先生にマンガ界でご活躍いただきたかったですね。そうしたらマンガシーンもまた違った方向にいったのかもしれない。大先生ですから皆さん気軽に寄れなかったかもしれませんが、もっと積極的に依頼をしにいく編集さんがいてもよかったかな」

今回、竹村は寺田への想いをマンガにした。もし寺田がこれを読んだらなんと言うだろうか。

「いつものニコニコした顔で『ありがとうね』かなぁ。寺田先生に会わずにストーリーものばかりを描いていたら僕はそこで終わっていたと思います。寺田先生には今でも感謝しています。本当に自然体ですばらしい方でした」

【PROFILE】 竹村よしひこ／たけむらよしひこ　昭和27年、高知県生まれ。一峰大二のアシスタントを経て、1976年に『ろぼっ子ビートン』でプロデビュー。87年より『月刊コロコロコミック』で連載した『ビックリマン』が大ヒットした

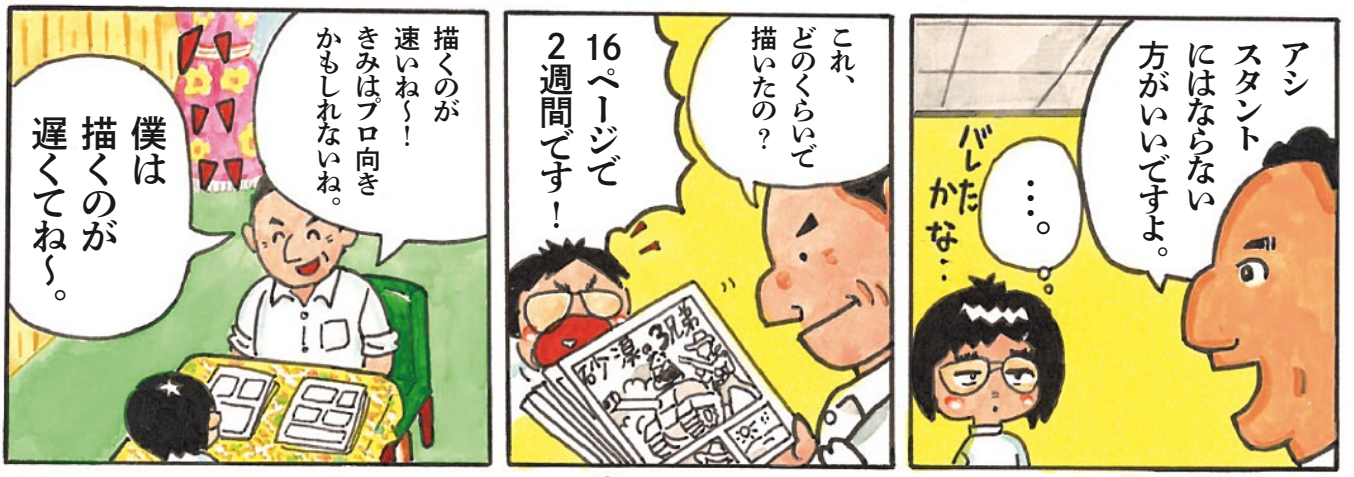
次ページは、竹村先生と寺田ヒロオの交流を描くマンガ『テラさんとボク』！

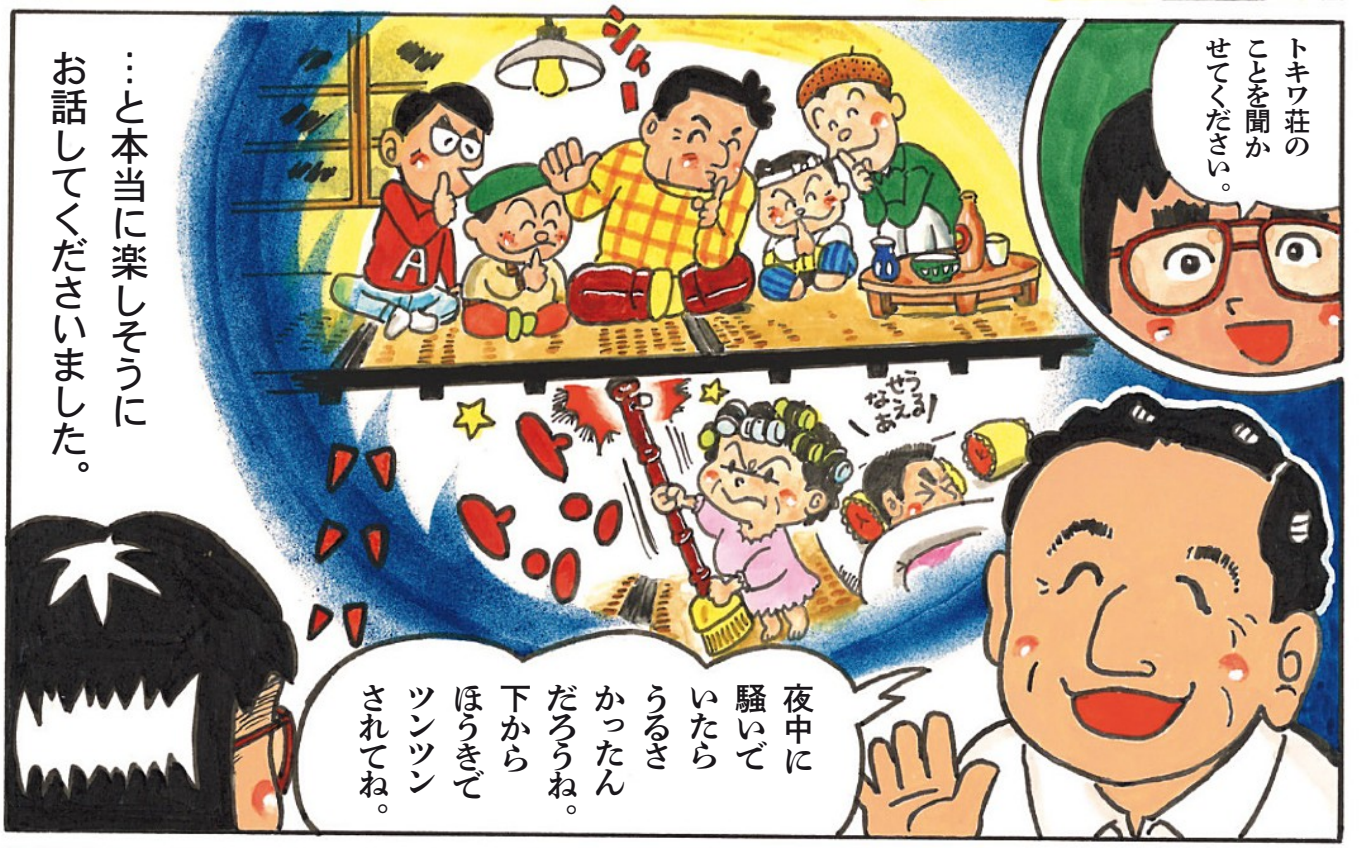
テラさんとボク

マンガ：竹村よしひこ

寺田先生とは、ボクが高校1年生の時に先生にマンガ原稿を送って長文のお返事をいただき、その後ずっと作品を見てもらっていました。

※先生には出身の新潟訛りが少しありましたけど、そのイメージで読んでください。ボクはメチャクチャ土佐弁訛りです。


アシスタントにはならない方がいいですよ。
…。
バレたかな…
これ、どのくらいで描いたの？
16ページで2週間です！
描くのが速いね～！きみはプロ向きかもしれないね。
僕は描くのが遅くてね～。


トキワ荘のことを聞かせてください。
…と本当に楽しそうにお話してくださいました。
夜中に騒いでいたらうるさかったんだろうね。下からほうきでツンツンされてね。

僕がやれることならなんでもしますよ。
先生の生原稿が見たいです！
ちょっと待ってて。

昔の出版社は原稿の管理がいい加減で、戻してくれなくて手元にあまりなくてね～。
それは『スポーツマン金太郎』の生原稿だった。

先生の原稿はゴチャゴチャ描きすぎず、空白の部分が生きている感じがした。
す、すごい…。

その後、『背番号0物語』の単行本をくださった。先生自身いちばん好きな作品らしい。
サインも入れてください！
記念に飾って！

原稿用紙は1枚の全紙を買ってきて、自分で作るといいよ。

まだ専用の原稿用紙なんかない時代でした。

寺田

その後、先生の助言どおりにギャグマンガ一本に絞り、先生宅を訪問しました。

何度も何度も読みかえして次の展開を考えるメモ

そして3ヶ月くらい過ぎた時…

コンニチワ

失礼します。

ああ。

これ役に立つかわかりませんけど…。

ジャーン!!

小さな出版社のなかにはひどいところもあってね〜。大きな会社がいいと思って。

大手の小学館への紹介状を書いてくれました。

ひどいって、原稿料を払わないってこと？

おかげで『小学三年生』の中野編集長に拾っていただきました。

学館ビル

あっ寺田さんの…

ハイ！

ただ、『少年サンデー』に行った時は紹介状の編集長は会ってくれず、若手の編集者に…。

紙より内容だろう。

こんなペラペラの紙じゃあだめだ!!

ボロクソに言われました。

あの時は悔しくて悔しくて、先生に電話してしまいました。

先生！紙のこと…おっしゃる通りです…

お詫びします

先生はボクの愚痴もやさしく慰めてくれました。

世間には、寺田ヒロオは気難しい人物と思う人もいるかもしれませんが、ボクのイメージは大きな心とやさしさをもった大先生です。

加賀正 1984 安くてうまい酒を飲むのがたのしみです 寺田ヒロオ

ぜひさまへ

ink

安いお酒って…、大先生なのに。

昭和50年男・魚乃目三太が愛読マンガから学んだ やさしさを込めた〝人の物語〟を描くこと

【PROFILE】魚乃目三太／うおのめさんた
昭和50年、奈良県生まれ。大阪工業大学を卒業後、建設会社の現場監督を経て、2008年にマンガ家デビュー。代表作は『戦争めし』『思い出食堂』『しあわせゴハン』。取材を元に登場人物の心と人生物語を描く作風で、人のやさしさを見つける天才！

漢 オレたちが追いかけた

家族で囲む食卓、活気のある食堂、夕焼けの商店街。ごはんがあれば、人はいつも笑顔になる。たとえ過酷な戦場でも。そんなマンガを描き続けているのが魚乃目三太だ。マンガを読み続け、マンガを描くことに挫折しかかった彼が大切にしていることとは？

取材・文：大山くまお　撮影：大村聡志

『思い出食堂』シリーズや『戦争めし』など、数多くのグルメマンガを描いてきたマンガ家・魚乃目三太。各作品に共通しているのは、温かくおいしそうなごはんをとおして、ほのぼのとした絵柄で描かれた登場人物たちが織りなすドラマである。そこにはおいしそうなごはん、楽しげな食卓、そして人と人との交わりがある。

その元になっているのが、魚乃目が少年時代からこれまでに出会った数々のマンガ作品だ。「手当たり次第にマンガを読んできた」と語る魚乃目は、マンガからどのような影響を受けてきたのだろうか。

下ぶくれの輪郭は『タブチくん』から

マンガとのファーストコンタクトは小学校に入ったばかりの頃。当時の大人気アニメがきっかけだった。今の絵柄はこの時出会った作品から影響を受けているという。

「最初に衝撃を受けたのはアニメの『Dr.スランプ』です。マンガも読んで、アラレちゃんをトレース（模写）したのが始まりでした。もう一つは、『E.T.』を観に行った映画館で予告が流れていた『がんばれ!!タブチくん!!』のアニメの絵柄にむちゃくちゃ惹かれたのを覚えています。小学校高学年の頃、いしいひさいち先生の『ドーナツブックス』に載っていた『タブチくん』の4コマを見つけてトレースしました。今の僕のキャラクターの下ぶくれの輪郭になっているような気がします（笑）」

1980年代中盤になると、『週刊少年ジャンプ』の黄金期が訪れる。魚乃目少年も『ジャンプ』に夢中になる。

「ビカビカッと光ってるように感じたのは『キン肉マン』。そこから『ジャンプ』にどっぷり浸かっていきました。『北斗の拳』もハマりましたね。さらにハマったのは『ジョジョの奇妙な冒険』。小学生の時、『ジョジョ』を元にしたギャグマンガを描いたぐらいでしたから」

やがて中学生になると、少年誌だけでなく、青年誌にも手が伸びるようになる。

「『ヤングマガジン』も読んでいました。『AKIRA』も載っていましたが、地元で人気があったのは『ビー・バップ・ハイスクール』。奈良の田舎だったので、みんな不良になっちゃって、周りはテルのモノマネだらけになっていたんです（笑）」

周囲がヤンキーマンガで盛り

食事の話になると、皆さん少年のような目に

軍服だけど、戦地にいるけど、戦争の現場にいるのは普通の人々。その人たちの思いとは？ 問いかけ、描く魚乃目三太の作風による兵士の笑顔に注目してほしい。「戦争時のお話を取材に行くと、当時の食事のお話をされる時は、少年の顔つきになる方が多いんです。気づいたんです、食事の思い出は大切だと」

上がるなか、魚乃目は宝物のようなマンガを発見する。浦沢直樹（原作・工藤かずや）の『パイナップルＡＲＭＹ』だ。

「少年誌、青年誌でいろいろなマンガを読みましたが、特に好きでしたね。とにかく画面がおしゃれで、コマ割りがめちゃくちゃ上手い。『ＹＡＷＡＲＡ』が大ブームになった時には、『俺は先に浦沢直樹を知ってたぜ』という気分でした（笑）」

『Dr.スランプ』や『タブチくん』の頃から、魚乃目は〝きれいな線〟〝おしゃれな画面〟のマンガに惹かれる傾向があったようだ。

「高校の頃にむちゃくちゃハマったのが井上雄彦先生の『ＳＬＡＭＤＵＮＫ』。超おしゃれでしたし、キャラたちの生き様と動きがすごいですよね。『週刊少年ジャンプ増刊』に載った短編の『赤が好き』も読んでました。バスケをやらない桜木花道の話なんです。その時からファンで、そのすぐ後に『ＳＬＡＭＤＵＮＫ』の連載が始まったんです」

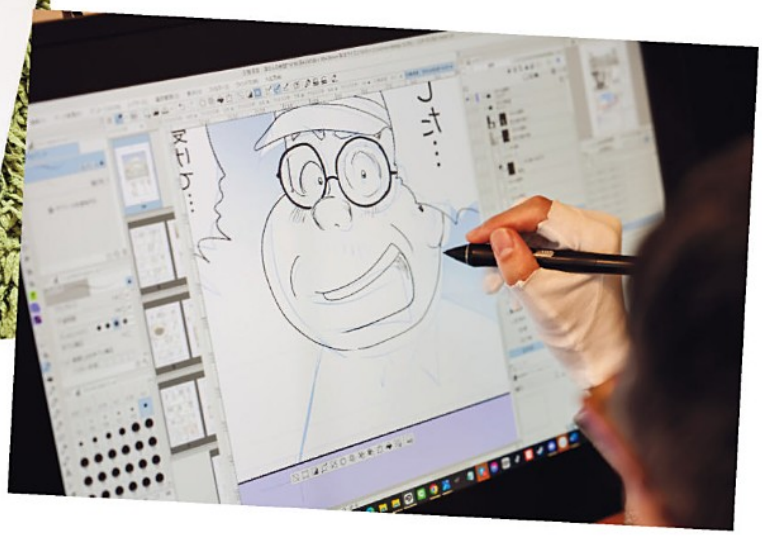
少年時代の思い出を語っていたその時、魚乃目から『キン肉マン』についてのエピソードが飛び出した。昨年末、作者であるゆでたまごの一人、嶋田隆司と初めて会ったのだという。

二度目となる長崎県五島への取材

『戦争めし』9巻で描かれた、戦時下の“かくれキリシタン”の取材時メモ。出津教会堂の食堂でふるまわれた地元食材のフレンチをはじめ、現地の方の思いが込もった食事の物語が作中で表現されている。

『戦争めし』の最新話を執筆中

『ヤングチャンピオン烈』にて連載中の最新話の執筆に勤しむ姿。きれいな線で、できるだけシンプルに人物の気持ちを伝える画を、という目標を掲げている。



人のやさしさでごはんはできています
どんなやさしい人か想像して描いてます

「少年の頃の憧れですから夢のようでした。あまりにうれしかったので、自分でキン肉マンを描いてお持ちしたんです。感謝の気持ちを表したいと思って」

もともとSNSを通じてやりとりはあったが、共通の友人を介して初対面を果たしたのだ。

「その友人は、今でも超人を考えてイラストを送り続けているんです。しかも結構採用されているらしく、その縁でお会いする夢が実現しました。嶋田先生は本当にすごいんです。これまで全国のファンから届いたはがき全部に目を通し、大切に保管されているというお話をいただきました。もちろん、僕の友人の作品も保管されていると。鳥肌立ちませんか？」

嶋田は『キン肉マン』の連載中、ファンレターすべてに返事を送っていた。それを見た編集者が、超人のアイデアを募集して作品に登場させることを提案。その後、ロビンマスクやウォーズマンなどの人気超人が読者案から生まれた。

「超人募集は、読者への感謝の気持ちの表れだったんですね。それを子供の頃から憧れていた嶋田先生から直に教えてもらえるなんて、感動のひと言です」

ごはんを作る人の人生を考える

マンガ家になろうと決心し、社会人として働きながらマンガの持ち込みを続けたが、なかなか連載は取れなかった。その頃、彼は強烈な挫折を経験している。

「連載が全く取れなかった頃、編集さんから『あなたは悪が描けない。だからあなたが善悪を描くマンガはおもしろくない』と言われました。それって戦力外通告に近いじゃないですか。たとえば、『AKIRA』なら鉄雄のようなキャラクターが描けないと、主人公も描けないと思います。悪が描けないなら、マンガを描くのをあきらめた方がいいんじゃないかと、すごく悩んだ時期があったのです」

思い悩んだ末、あることを思いつく。悪が描けないのなら、他のことを。知人からのアドバイスもあり、たとえば、食べ物に関するマンガを描いたらどうだろうかと。

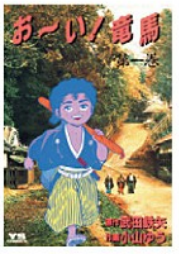
「『もう悪を描かなくてもいいや』と思うようになりました。もっと言うなら『もうキャラは描かなくてもいい』と。ごはんを主人公にしようと割り切りました。ごはんを作る人はいるわけですから、その人がどんな人生を送っているかを考えようと。そこを描けばきっと読者が喜んでくれるのではと！」

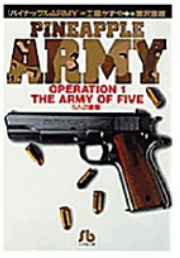
ごはんを起点に、その背景に必ずや存在する登場人物の人生に想いをめぐらせ、物語を作っていくのが魚乃目の作劇術だ。

「たとえば、大金持ちの人がカレーライス好きだとします。どんな贅沢でもできるはずなのに、なぜカレーライスが好きなのかを掘り下げてみる。その時感じたその人の人生を僕は描かなければならない！そこでドラマが生まれるんです。でも、これってアプローチが違うだけで、他のマンガ家さんも皆同じことをされていると思います」

キン肉マンはなぜ闘うのか、ケンシロウはなぜ悲しみをたたえているのか、ごはんを作る人の人生を考えるのと同じ作業なのだ。

荒木飛呂彦
『ジョジョの奇妙な冒険』
（集英社）
©荒木飛呂彦／集英社


原作・武田鉄矢／
作画・小山ゆう
『お～い！竜馬』
（小学館）


原作・工藤かずや／
作画・浦沢直樹
『PINEAPPLE ARMY』
（小学館）

原作・たかしげ宙／
作画・皆川亮二
『スプリガン』（保存版）
（小学館）

井上雄彦
『SLAM DUNK』
（集英社）
©井上雄彦 I.T.Planning,Inc.

六田 登
『F』
（ぶんか社）

はるき悦巳
『じゃりン子チエ』
（双葉社）

小山ゆう
『がんばれ元気』
（小学館）

中沢啓治
『はだしのゲン』
（汐文社）

手塚治虫
『ブラック・ジャック』
（秋田書店）

藤子・F・不二雄
『ドラえもん』
（小学館）

少年時代の愛読マンガLIST

小山ゆう先生の『お～い！竜馬』にハマりましたね。『がんばれ元気』からは人情を学びました。人情といえば『じゃりン子チエ』。チエが一瞬見せる悲しげな表情に惹かれました。戦争マンガで思い出すのは学校の図書館にあった『はだしのゲン』。『F』はとにかくクルマの描写がおしゃれで大人っぽいマンガでした。『スプリガン』もカッコよかったですね。『ドラえもん』を小学1年から6年向けに描き分け続けた藤子・F・不二雄先生のすごさに気づいたのは大人になってから。『ブラック・ジャック』の少ないページであらゆるお話を描いた手塚治虫先生はやっぱり神様です。

※…『F』当時は小学館刊

えているのか、桜木花道はなぜバスケをするのか。それを考えた時、ドラマが生まれる。『戦争めし』は毎回登場人物が異なる群像劇だが、その一人ひとりにドラマがある。そこに魅力を感じるのは、魚乃目が彼らの人生を掘り下げているからなのだ。

戦争の事実ではなく戦場にいる人を描く

食べ物のマンガを描こうと考え、手当たり次第にマンガを読んでいた頃に出会い、衝撃を受けたのが『花のズボラ飯』(作画・水沢悦子)。『孤独のグルメ』(作画・谷口ジロー)などで知られる久住昌之が原作を務めたグルメマンガだ。魚乃目は、作画とネームの両方に驚かされたという。

「スクリーントーンを使っていないのに、こんな表現ができるんだ! と驚きました。あと、女性が独り言を言いながら空腹を満たしていくだけの話なのにおもしろい! それほど長くないページ構成なのに、読ませる力がすごいんです。画力もネーム力も半端ないですよね」

後に久住とは『旅の肴〜十返舎一九 浮世道中 旅がらす〜』などの作品でタッグを組むことになる。その時、あらためて久住のすごさを知ったという。

「久住さんがすごいのは、自分の足でものすごく取材しているところです。『孤独のグルメ』の大阪でたこ焼きを食べる話では、わざわざ大阪に行き食べてきたそうです。翌朝、阪神大震災に遭って大変だったとも久住さんからお聞きしました。12ページのために、とんでもない労力をかけている。作画の谷口ジローさんもすごい人ですから、すごい方同士が組めば、それはヒット作になりますよね」

魚乃目も取材を欠かさない。実話からストーリーを作る時、大切にしているのは、そこにいた人の思いをめぐることだ。

「『戦争めし』の場合、誰が誰を殺したとか、戦争の状況や事実に焦点を当てるのではなく、普通の人たちが何をしていたのかを描いています。実は、みんな普通の人たちだったと思うんです。ただ、おかしな環境に置かれて、めしは与えられず、武器を与えられて、人を殺せと指示されていたんだろうと。僕はそう想像しています、自分に置き換えればいいわけですから。僕はそっちを描いているんです」

戦況のみを描こうとするのではなく、人の思いを想像しながら物語を紡いでいく。たとえば、『戦争めし』に「白いシチュー」という話がある。終戦直後、脱脂粉乳を使って白いシチューを作った教師たちの話だ。

「歴史的には『子供たちのために教師たちが考えた』という一文しかありません。でも、心やさしき教師じゃないと、子供たちに工夫して脱脂粉乳を飲ませ

憧れの嶋田先生へお渡しした魚乃目が描いたキン肉スグル

「今回の取材テーマ“漢を感じた”のためにとっておきのエピソードがあるんです」と披露してくれたのは、嶋田先生へお渡しした魚乃目作キン肉スグルのイラスト、そのスキャンデータ。「届いた全員の手紙に目を通していた嶋田先生のファンを思う心に感動して、僕も心を込めたんです」と教えてくれた。

読者へ伝えたい思いを最も描ききれた場面とは?

選んでくれたのがこのコマ。戦地から家族へ思いを届けたい。でも戦争で家がなくなり、届け先が不明となってしまった手紙がたくさん保管されていたという取材で得たお話から生み出した物語。

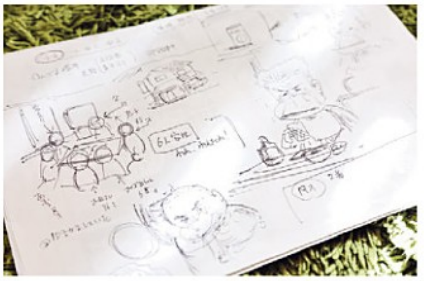
『戦争めし』2巻 「比島の味噌汁」より

©魚乃目三太／秋田書店

キャラの物語と感情をぎゅっと閉じ込めた画を！

『思い出食堂』の表紙原画

「キャラが立った人物のマンガを描くのは苦手でも、その瞬間のキャラクターの物語と感情をぎゅっと閉じ込めた画を僕は描ける！」と開眼した魚乃目の境地を感じさせる作品。ちなみにカラー作品はコピックと色鉛筆を巧みに使い分けて描かれ、温かな場の空気までも映っているかのように感じる。



「ネクター」のMV画ラフ

アーティストMOROHAが昨年発表した「ネクター」のMVを手がけた。共通する志を感じるコラボ。

連載『日本全国故郷めし』

右の写真のように読者から届いた料理情報を元に『しんぶん赤旗』日曜版にて連載中。

読者投稿に目を通す

全国のファンから寄せられた郷土料理の情報に感謝し、目を通し、次回のテーマを探っていく。

ようとは思わないじゃないですか。そこで、どんなやさしい人だったのかな？と想像して描くわけです」

やさしさは、魚乃目作品の特徴だ。なぜ作品にやさしさがあふれているのか？答えは明快だった。

「人のやさしさでごはんはできています。みんなそうなんです。みんなが食べているごはんは、食べさせてあげたい、食べてほしいという思いで作られています。そういう文化がなければ、こんなにおいしいごはんは世の中にないでしょう。ただただ、品種改良しておいしくしようなんて考えだけではないはずです」

愛情を込めて、やさしさを込めて、応援の気持ちを込めて、誰かのためにごはんを作る。それがマンガをとおしていちばん伝えたい部分だと語る。

「ごはんって共感が生まれやすいんですよね。『これ、こうするとおいしいでしょ？』というおすすめの食べ方をマンガで描いているんです」

とはいえ、時には、「自分はなぜマンガを描いているのか？」と自問自答することもあるという。でも、変わらない強い思いがある。

「強烈にマンガ家になりたかったんです。マンガ家になったなら、マンガ家であり続けたい！そのためには読者に読まれるおもしろい作品を描き続けないといけないんだと思っています。社会人になりたての頃は、昼間は職人さんたちと一緒に土木の仕事をして、家に帰って疲れ切っていてもマンガを描いて投稿していました。でも、ずっとデビューできなかった。このままで人生が終わるのかと思うと、舌を噛み切って死にたくなるぐらいのこわさがありました。だからこそ、子供の頃になりたかった自分になれた今、マンガ家を続けるために、おもしろいマンガを描くために、打ち合わせをし取材をし、描き続けているんです」

自分はマンガ家の道を選んだ。もちろん、人にはそれぞれの道がある。その部分をじっくり描いていきたいという。

「僕は職人さんの物語をよく描くのですが、誰にだって悩みがあって、人生があって、誰かを応援したいという思いがあるんですよね。そんな心を描けたら！と思います。ほんの小さな、僕にできることしかできないんですけどね」

魚乃目三太はやさしさあふれる男なのだ。

本誌スタッフが憧れた

5人の漢たち

“男らしさ”――今ではすっかり時代遅れかもしれないが、オレたち昭和50年男は、いつも“男らしくありたい”と生きてきた。ここでは本誌スタッフがマンガのなかで憧れてやまない、男らしく生きている漢キャラクターを5人ピックアップ。

一角二朗

ライター
昭和50年／茨城県生まれ

- **本郷 剛**『Jドリーム』
- **とら**『うしおととら』
- **前田慶次**『花の慶次 ―雲のかなたに―』
- **ブラック・ジャック**『ブラック・ジャック』
- **諸星あたる**『うる星やつら』

ワールドカップの夢を追った本郷も、腹いっぱいだとうそぶいたとらも、傾くことを教えてくれた前田慶次も、無免許のブラック・ジャックも…己を貫く男は素直じゃないが、その言動にやさしさがある。諸星あたるだってやさしい。ラムへの態度は、落語の夫婦関係のようにひねくれているだけなのだ。

山本俊輔

映画監督・ライター
昭和50年／東京都生まれ

- **アミバ**『北斗の拳』
- **ミキサー大帝**『キン肉マン』
- **両津勘吉**『こちら葛飾区亀有公園前派出所』
- **蜂須賀**『迷走王ボーダー』
- **猟奇王**『猟奇王シリーズ』

1.アミバは悪役ベスト5に入れたいほどクドいキャラ。2.キン肉マンを倒した数少ない超人であるにもかかわらず、その直後にミートくんに負ける始末。3.公務員なのに自由人なところ。4.ボーダーの蜂須賀の生き様は俺の生き様だ！ 5.猟奇王は令和に復活してほしいダークヒーロー。

フジジュン

ライター
昭和50年／長野県生まれ

- **池戸定治**『ゴリラーマン』
- **両津勘吉**『こちら葛飾区亀有公園前派出所』
- **江田島平八**『魁!! 男塾』
- **前田慶次**『花の慶次 ―雲のかなたに―』
- **前川新吾**『BE-BOP HIGHSCHOOL』

この5人に共通なのは、確固たる自分をもってて、ルールやしがらみに縛られない自由な生き方で、一人で生きていけるたくましさをもっているところ。そしていちばん大事なのが、そんな自分勝手な生き方をしながらモテるという点。どのキャラも本当に好きな人とは結ばれないのだが、それもまたいい。

有田シュン

ライター
昭和55年／山口県生まれ

- **星矢**『聖闘士星矢』
- **巴 男吾**『あまいぞ！男吾』
- **ピッコロ大魔王**『ドラゴンボール』
- **鳥坂先輩**『究極超人あ～る』
- **滝沢 昇**『炎の転校生』

マンガを読み始めた頃はやっぱ星矢とか男吾みたいな、王道の主人公がカッコいいと思っていたんですが、その後、思春期に差しかかった頃に鳥坂先輩、滝沢と出会い、こういうマッドなスチューデントになりたい！ と憧れを抱いたもんです。その辺から人生を踏み外したような…。

内田名人

ライター
昭和49年／山梨県生まれ

- **山下敬介**『ハーツ&マインズ』
- **田**『ディーン・ティーン』
- **勝又**『江戸川ハートブレイカーズ』
- **小林マグロー**『WORKING CLASS』
- **W浅野**『サンガース』

中高生になると、金ない・モテない・カッコよくない…といったダメ野郎たちの“ダサカッコよさ”に気づくもの。上から生きることに不器用な日陰者、高校デビューの元イジメられっ子、酒好きな自由人、職安通いのプータロー、高校を2回もダブった粗暴ヤンキー。全員、貧乏。今でも憧れです!!

徳山喜行

フォトグラファー
昭和51年／大阪府生まれ

- **範馬勇次郎**『グラップラー刃牙』
- **ラーメンマン**『キン肉マン』
- **両津勘吉**『こちら葛飾区亀有公園前派出所』
- **ジュウザ**『北斗の拳』
- **宮本武蔵**『バガボンド』

男のなかの男ということで強い男が並びました。両さんだけ毛色が違いますが、強くてやさしくてバカなところが好きです。いちばん好きなのはジュウザですね。誰にも縛られずに自由に生きる。「我が拳は我流 我流は無型!! 無型ゆえにだれにも読めぬ!!」というセリフがカッコよかったなー。

山田和哉

太平印刷社（本誌担当）
昭和51年／東京都生まれ

- **両津勘吉**『こちら葛飾区亀有公園前派出所』
- **ジュウザ**『北斗の拳』
- **鷹村 守**『はじめの一歩』
- **鬼塚英吉**『湘南純愛組!』
- **島袋 大**『ろくでなしBLUES』

『こち亀』の連載開始が1976年。同い年のマンガで小学生の時に読み始めた『ジャンプ』では既に両さんが大暴れ。たくさんの雑学と知識を教えてもらった。ジュウザは艶々なのに天才的に強く、熱い心をもっているところ。「おれは あの雲の様に自由きままに生きる」っていつか言ってみたい…。

大橋政信

デザイナー
昭和50年／東京都生まれ

- **レイ**『北斗の拳』
- **富樫源次**『魁!! 男塾』
- **敷島大佐**『AKIRA』
- **ジェロニモ**『キン肉マン』
- **野比のび太**『ドラえもん』

みんな拳法や日本刀とか使っているのに、武器は“ドス”と喧嘩殺法の富樫。鉄雄への責任と執念の大佐。また、「オラ人間だから」のジェロニモや「ドラえもんが安心しで……、帰れないんだ!」とジャイアンに立ち向かうのび太は、弱くても勇気を出して闘うことで漢になるということを教えてくれた。

半澤則吉

ライター
昭和58年／福島県生まれ

- **両津勘吉**『こちら葛飾区亀有公園前派出所』
- **ベジータ**『ドラゴンボール』
- **日向小次郎**『キャプテン翼』
- **フェニックス一輝**『聖闘士星矢』
- **バッファローマン**『キン肉マン』

“漢”といって思い出したのが、意外にも両津勘吉でした。両さんほど長期間、活躍した漢はいないし、彼のアクションには漢のロマン、欲望、夢が詰まっていました。他はライバルキャラが名を連ねました。あの頃のマンガって、ライバルの方が影がある感じで、“漢感”が高めだったなぁ。

昭和40年男 総集編シリーズ

俺たちを熱くさせた270人が集結!!

昭和外国人レスラー大図鑑

貴重な宣材写真で綴る迫力の一冊
俺たちを熱くさせた270人が集結!

世界のスーパースター編
新日本プロレス編
全日本プロレス編
世界の強豪編
マスクマン編
国際プロレスの記憶
力道山と闘った男たち
日本を愛したスーパースター
タッグチーム百花繚乱 etc.

定価 1,800円(税込)

俺たちを熱くさせた270人が集結!!

80年代アイドル総選挙! ザ・ベスト100

1980-1989 アイドルこころのベストテン

近年は、昭和歌謡を楽しむ風潮が高まっていたところに、2022年は"82年組"のアイドルがデビュー40周年だったこともあり、80年代アイドルが一際注目された年となった。この機運に乗って、みんなで人気女性アイドルを決めよう! と始まったのが、80年代アイドル総選挙!である。投票の場となった『Re:minder』の特設サイトでは2022年12月9日から2023年1月8日にかけて3245人もの投票が集まった。この投票にさらに39人のアンバサダーの投票を加えてポイント化し、獲得ポイント数で決定した上位100人の魅力をたっぷりと紹介する。
また、Second Featureでは、1980年代のアイドルに関する出来事を、関係者のインタビューとともに10年間を1年ごとに振り返る。

定価 1,280円(税込)

海の向こうの音楽に憧れ、都会のおしゃれな光景に憧れた!

俺たちを背伸びさせた 洋楽&シティポップ大全

海の向こうの音楽に憧れ、
都会のおしゃれな光景に憧れた!

・山下達郎/松任谷由実/大沢誉志幸/角松敏生/杉山清貴/稲垣潤一/杏里
・マイケル・ジャクソン/KISS/チープ・トリック/ブルース・スプリングスティーン
・英国音楽の新潮流
・王者ストーンズの陥落 etc.

定価 1,280円(税込)

昭和カルチャー倶楽部にてご購入できます。

https://showa-club.com/

今月のコレ欲しい！アレ行きたい！

第13回ガンダムファイトが今再び！『機動武闘伝Gガンダム 石破天驚 Blu-ray Box 第壱巻・第弐巻』

ガンダムの歴史を変えた異色作！ と謳われつつ、今なお根強い人気を誇るのが、『機動武闘伝Gガンダム』だ。未来世紀60年、スペースコロニー間の代理戦争として始まった4年に一度地球を舞台に行われる「ガンダムファイト」、各国を代表する格闘家がガンダムに搭乗し、世界の覇権を争う格闘競技大会、その第13回目の「ガンダムファイト」に参加するネオジャパン代表ドモン・カッシュ。だが、ドモンには別の目的があった。作品誕生30周年を記念して、期間限定生産版として発売されたBlu-ray BOX（2016年9月発売）と同仕様・同価格の特装限定版でのリリースが決定!!

■第壱巻収録内容 第1話～第24話収録

【映像特典】
放送前特番〈特別編集版〉ノンテロップOP①-1&①-2・ノンテロップED①

【音声特典】
オーディオコメンタリー
第1話&第2話 スタッフコメンタリー（中山浩太郎、河口佳高、岸山博文、五十嵐浩司）
第22話&第23話 キャストコメンタリー（関 智一、山口勝平、山崎たくみ、宇垣秀成）

【特典】
解説書（80P）・今川総監督書き下ろし「機動武闘学園!! アレンビー・ファイト！」（16P）
ドラマCD「機動武闘伝Gガンダム GUNDAM FIGHT-ROUND1&2」〈特別編集版〉
※「機動武闘伝Gガンダム GUNDAM FIGHT-ROUND1&2」は1994年にキングレコードより発売された商品となります。

■第弐巻収録内容 第25話～第49話収録

【映像特典】
「ガンダム戦記 決戦！ ガンダムファイト」「ガンダム戦記 ゴッドガンダム快進撃！」
※「ガンダム戦記」はそれぞれ1994年12月（YYV-0008）、1995年4月（YYV-0012）に発売されたVHSの商品です。

ノンテロップOP②・ノンテロップED②
1994年 番宣集・2002年 CM集・Blu-ray Box PV&CM集

【音声特典】
オーディオコメンタリー
第37話 キャストコメンタリー（関 智一、山口勝平、日高奈瑠美）
第44話&第45話 キャストコメンタリー（関 智一、天野由梨、秋元羊介、堀 秀行）
第49話 キャストコメンタリー（関 智一、天野由梨）

【特典】
解説書（80P）・今川総監督書き下ろし「ガンダムたちの挽歌」（88P）
ドラマCD「機動武闘伝Gガンダム GUNDAM FIGHT-ROUND 3 新香港的武闘戯曲」
※1994年にキングレコードより発売された商品となります。

¥各3万7,400円　予約締切：2024年2月18日　発売：3月27日
発売・販売元：バンダイナムコフィルムワークス

超ときめき♡宣伝部のニューアルバム『ときめく恋と青春』

辻野かなみ、杏ジュリア、坂井仁香、小泉遥香、菅田愛貴、吉川ひよりの6人組アイドルグループ、超ときめき♡宣伝部。2024年1月には横浜アリーナ単独公演2DAYSを成功させるなど、勢いがますます加速中の彼女たちのニューアルバムがリリースされた。タイトルに超ときめき♡宣伝部を象徴するキーワードの「ときめき」「恋」「青春」を冠した自信作。収録曲や初回限定特典（封入）が異なる、全6形態で展開されている。2024年2月5日付オリコン週間アルバムランキング1位を獲得。

■超恋盤 ¥1万5,000円（2CD＋1BR）
※mu-moショップ限定
■超青春盤 ¥1万5,000円（2CD＋1BR）
※mu-moショップ限定
■恋盤（TYPE-A） ¥7,000円（1CD＋2DVD）
■青春盤（TYPE-B） ¥7,000円（1CD＋2DVD）
■通常盤（TYPE-C） ¥3,000円（1CD）
■超宣伝盤（TYPE-D） ¥2,000円（1CD）

公式サイト URL https://toki-sen.com

40周年記念公演、追加が決定『TM NETWORK 40th FANKS intelligence Day～YONMARU～』

今年4月にデビュー40周年を迎えるTM NETWORK。この日に向けて、2022年の全9公演のツアーを皮切りに、昨年後半には最新アルバム『DEVOTION』を携えて16公演を開催、さらに現在「STAND 3 FINAL」と題したツアーを開催中。この3つのツアーは“DAY1”から“DAY34”までナンバリングされてきたが、デビュー40周年の4～5月、“DAY40”に向けた計6公演が、その名も「YONMARU」と題され、東京、大阪、横浜で各2デイズ開催されることが決定。40周年という大台に向けて歩んできた彼らの集大成となるライブにご期待!!

■ツアースケジュール 各公演チケット価格 ¥1万1,000円 ※全席指定

DAY35 日4月20日（土）東京ガーデンシアター 開オープン17：00／スタート18：00
問ディスクガレージ URL https://www.diskgarage.com/form/info
DAY36 日4月21日（日）東京ガーデンシアター 開オープン16：00／スタート17：00
問ディスクガレージ URL https://www.diskgarage.com/form/info
DAY37 日4月26日（金）大阪城ホール 開オープン18：00／スタート19：00
問キョードーインフォメーション URL https://kyodo-osaka.co.jp/
DAY38 日4月27日（土）大阪城ホール 開オープン16：00／スタート17：00
問キョードーインフォメーション URL https://kyodo-osaka.co.jp/
DAY39 日5月18日（土）Kアリーナ 開オープン16：30／スタート18：00
問ディスクガレージ URL https://www.diskgarage.com/form/info
DAY40 日5月19日（日）Kアリーナ 開オープン15：30／スタート17：00
問ディスクガレージ URL https://www.diskgarage.com/form/info

マシュー・ヴォーン監督が放つ刺激的なスパイ映画『ARGYLLE／アーガイル』

凄腕エージェントのアーガイルが世界中を飛び回り、謎のスパイ組織の正体に迫る、手に汗握るベストセラーのスパイアクション小説シリーズ「アーガイル」。ハードなシリーズの作者エリー・コンウェイ（ブライス・ダラス・ハワード）は、愛猫のアルフィーと共にのんびり過ごすのが至福の時という平和主義。エリーはファンの誰もが待ち望む新作を準備しながら、ある場所へアルフィーと一緒に移動中、突如謎の男たちに命を狙われ、間一髪でエイダン（サム・ロックウェル）と名乗るスパイに助けられることに。その後も何度も身の危険に脅かされ逃げ惑うなか、エリーが書いた小説が現実のスパイ組織の行動を偶然にも言い当てていたことが発覚。エリーの空想のはずだった世界と命が狙われる現実との境界線が曖昧になるなか、敵の一歩先を行くために世界を駆けめぐる！ 危険なミッションの先に待ち受けた運命やいかに…!?

『キック・アス』『キングスマン』シリーズで世界中の映画ファンの心をわしづかみ、スマートでゴージャスなルックと、他に類を見ないポップでクレイジーなしびれるアクション、痛快なストーリー展開をハイレベルに融合させる唯一無二の手腕で、圧倒的支持を集める“奇才”マシュー・ヴォーン監督の最新作『ARGYLLE／アーガイル』。挿入曲デヴィッド・ボウイの「レッツ・ダンス」のシーンへのハマり具合もかなり気になる!!

©Universal Pictures

■3月1日より全国公開　配給：東宝東和　公式サイト URL https://argylle-movie.jp/

絶対バレてはならない〝世紀の身代わりミッション〟『身代わり忠臣蔵』

©2024「身代わり忠臣蔵」製作委員会

嫌われ者の殿・吉良上野介（ムロツヨシ）が江戸城内で斬られ、あの世行き！ 斬った赤穂藩主は当然切腹。だが、殿を失った吉良家も幕府の謀略によって、お家存亡の危機に！ そんな一族の大ピンチを切り抜けるべく、上野介にそっくりな弟の坊主・孝証（ムロツヨシ）が身代わりとなって幕府をダマす、前代未聞の“身代わりミッション”に挑む！ さらに、敵だったはずの赤穂藩家老・大石内蔵助（永山瑛太）と共謀して討ち入りを阻止するというまさかの事態に発展！ 幕府に吉良家に赤穂藩も入り乱れ、バレてはならない正体が…遂に!? 果たして孝証は、江戸を舞台に巻き起こる一世一代の大芝居“身代わりミッション”をコンプリートできるのか？

原作・脚本：土橋章宏 、監督：河合勇人、音楽：海田庄吾という布陣で制作にあたった痛快時代劇エンターテイメント作品。東京スカパラダイスオーケストラが手がけるテーマ曲「The Last Ninja」と映像が呼応し、ドラマチックに盛り上がる展開が見どころだ。

■2月9日より全国公開中　配給：東映
公式サイト URL https://migawari-movie.jp

美少女ゲーム100タイトルをジャンル別に一挙掲載！『美少女ゲームスーパーガイド 90年代編』

1990年代初頭に独自の市場として大きく進化した美少女ゲームは一般パソコンゲームや家庭用ゲーム版として大きく普及、美麗なグラフィックにも注目が集まり、90年代後半にはギャルゲーブームのムーブメントを巻き起こし、アニメ化やグッズ化など、メディアミックス展開した作品も登場。そんなエキサイティングな90年代美少女ゲームに着目し、代表的なタイトル100作品をジャンル別に分類、当時の世相を斬るコラムも満載。カルチャーとしての視点から美少女ゲームを分析、解説する痛快な一冊となっている。

■著者紹介
前田尋之／まえだひろゆき
昭和47年、愛媛県松山市歩行町にて生まれる。1982年に『こんにちはマイコン』（すがやみつる著／小学館）の影響を受け、パソコンの可能性に惹かれる。83年に念願のパソコン、パソコンテレビX1（シャープ）を買ってもらったことから、学生時代はパソコンとゲーム漬けの青春を過ごした。90年に徳間書店インターメディアにてパソコンゲーム誌の編集に携わったことがきっかけで多数の出版物の編集や執筆に関わる。その後、96年にコナミに入社。同社退職後も家庭用ゲームソフトをはじめパソコンゲームの開発へと活躍の場を広げている。著書に『家庭用ゲーム機興亡史　ゲーム機シェア争奪30年の歴史』『ホビーパソコン興亡史　国産パソコンシェア争奪30年の歴史』がある

『パーフェクトカタログ』シリーズをはじめとしたジーウォークのゲームムックではお馴染みのB5の大判サイズで128ページオールカラー！

¥1,870円　発売中
発行元：ジーウォーク

書店限定特典を見逃すな！『BE-BOP-HIGHSCHOOL COMPLETE DVD BOOK』全2巻

昭和～平成の人気アニメがお手頃価格の分冊シリーズでよみがえる、ぴあの『COMPLETE DVD BOOK』シリーズより、『BE-BOP-HIGHSCHOOL COMPLETE DVD BOOK』vol.1、vol.2の全2巻が刊行される。DVDはOVAシリーズ全7作品＋海賊版（アニメセレクション）3作品を2巻に分けて収録。保存版のブックレットではストーリー紹介をはじめ、貴重な設定画や当時の資料、さらに作画監督を務めた人気アニメーター・羽山淳一の貴重なインタビューも前後編に分けて掲載される。そして、本作の発売を記念して、全国約30店舗の書店にてご購入の方に、数量限定で特典のクリアファイル（非売品）を先着順にプレゼント。
※クリアファイルはなくなり次第終了となります。

■カバーイラストクリアファイル特典実施店舗

【東京】紀伊國屋書店 新宿本店／三省堂書店 有楽町店／ジュンク堂書店 池袋本店／芳林堂書店 高田馬場店／書泉ブックタワー／書泉グランデ／明屋書店 中野ブロードウェイ店／ブックファースト 新宿店／ブックファースト アトレ大森店／TSUTAYA 三軒茶屋店

【千葉】ときわ書房本店

【埼玉】東京旭屋書店 新越谷店

【神奈川】有隣堂 本店／有隣堂 西口店／有隣堂 アトレ川崎店／丸善 ラゾーナ川崎店

【愛知】星野書店 近鉄パッセ店／TSUTAYA いまじん白揚春日井店

【大阪】紀伊國屋書店 梅田本店／ジュンク堂書店 大阪本店／MARUZEN&ジュンク堂書店 梅田店／旭屋書店 なんば CITY店／西日本書店 本店

【兵庫】NET21 宝塚サンクスソリオ店

【広島】ジュンク堂書店 広島駅前店

【福岡】丸善 博多店

※vol.1、vol.2 それぞれ別絵柄のクリアファイルとなります。

vol.1 ¥2,090円　発売中
vol.2 ¥2,090円　2月27日発売
発行元：ぴあ

原作／きうちかずひろ「ヤンマガ KC スペシャル」所蔵
©きうちかずひろ／講談社・東映ビデオ

2月29日までに「昭和カルチャー倶楽部」にて本誌をご購入くださった方を対象に、抽選で5名様にプレゼントします。応募フォームをメールでお送りしますので、ご記入ください。

昭和40年男 総集編シリーズ

あゝ夏の甲子園

昭和の高校野球、熱闘の軌跡

『昭和40年男』総集編シリーズの最新刊が、「あゝ夏の甲子園」。本誌創刊以来、掲載してきた「高校野球」の既発記事に、荒木大輔のロングインタビューのほか、新規の記事を加えて1冊にまとめた。ここで取り上げているのは、高校野球の黄金期と言える1971年から1989年にかけての夏の大会。後にプロでも活躍した人物も含め、甲子園史に名を刻む名選手や監督が「名勝負」を振り返っており、昭和40年男の読者はもとより、高校野球、ひいては昭和の野球が人たちにとって必須の1冊というべき充実の内容になっている。これほど多くのレジェンドたち登場して、自らの口で名勝負のドラマを語っている高校野球本は極めて稀で、歴史的・資料的価値も極めて高い1冊とも言える。

延長18回星稜対箕島／東海大相模のプリンス原 辰徳／一年生エース・バンビ坂本
やまびこ打線／逆転のPL／アイドル 荒木大輔／怪物 江川卓 …／甲子園トリビア
1946〜89年 夏の甲子園出場校

定価 1,480円(税込)

俺たちが愛したクルマたち

愛しのスーパーカー／憧れのクルマ大全

<SideA> 愛しのスーパーカー
#1 ランボルギーニ・カウンタック vs. フェラーリ・512BB
#2 心躍らされた俺たち
#3 ロータス・ヨーロッパ
#4 童夢 - 零
#5 空前のブームを再検証
#6 カウンタックの伝説

カーデザイン界のスーパースター
ジョルジェット・ジウジアーロ

<SideB> 憧れのクルマ大全
#1 トヨタ・ソアラ
#2 日産・シーマ
#3 トヨタ・マークII
#4 ホンダ・プレリュード
#5 日産・シルビア
#6 トヨタ・セリカ
#7 ホンダ・バラードスポーツCR-X
#8 トヨタ・MR2
#9 マツダ・サバンナRX-7

定価 1,304円(税込)

奇跡の昭和 FOOD SHOW

俺たちいつも腹ペコだった…けれど幸せだった。

<part1> 即席メン大研究
<part2> 食カルチャー探訪
<part3> 魅惑のお菓子
<part4> 家呑みのススメ
<part5> 健康講座

定価 1,280円(税込)

昭和カルチャー倶楽部にてご購入できます。

https://showa-club.com/

♪マリオ タスケテ〜！

駄菓子屋大好き！

談駄団（ダンダダン）！

コンビニなんてなかった時代、子供たちのカルチャーステーションは駄菓子屋だった！そんな昭和の記憶を掘り起こすのが、我々「談駄団」なのである！ファミコン戦士の忘れてた思い出第2弾だ DANE！

文・コレクション提供：ダイ（ケチャップアーツ）

さすがファミコンの王様、マリオの缶ペンはいっぱい出ております。こちらは中身のゲームはないけれど、いま出ても通用しそうなオシャレな外観。アマダ以外でもサンスターなどから出ていました

第27回：デジタルゲームのアナログ化2！

パッケージのイラストが想像力をかき立たせるナイスデザイン！

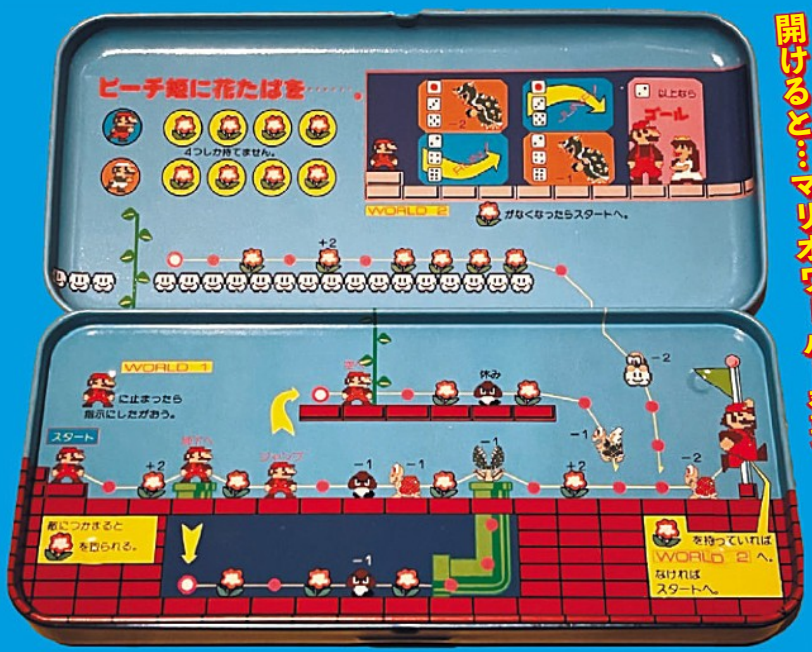
談駄団・団長のケチャップアーツ ダイです。好評でした前号に続き今回も、ゲームをアナログ化した商品を紹介！

1985年9月に発売された大名作『スーパーマリオブラザーズ』が出た頃のオレたちは、ちょうど10歳。小4か小5くらいで授業中も悪知恵つけて遊ぶアイテムを探していた。家ではファミコンをやってても、学校では鉛筆キャップがクラブになってたやつで卓上ゴルフしたり、練り消しを伸ばしたり、かみつきばあちゃん消ゴムで遊んだり。

そんななかにアマダから出たこのアイテムはもう画期的で、下段に鉛筆を入れれば立派な筆入れという文房具、中皿はゲーム内容を模したスゴロクになっているから、想像力とサイコロ一つでマリオの世界へ旅立てるという画期的な缶ペン。

当時シャーペンやボールペンなんて大人のアイテムだったので、鉛筆（リッチマンは赤青鉛筆も）、消しゴムと定規くらいしか入れなかったから、これで十分な大きさだし。値段は500円という、お手軽だけど当時の小学生にはがんばらないと買えない値段でした。他にも遊べるマリオ缶ペンもあったけど、これがワールド1と4を完全再現してて最高傑作でした。

しかし悲しいかな、当時は同じクラスの錦田くんしか持ってなくて、めっちゃ欲しかったのでした。だからこんなに覚えてるのかも。それから30年後くらいに新品で入手したのですが、そんなに高くなってなかったから相当数が売れたのでしょうね。それくらいスーパーマリオ旋風はすごかったのです。



開けると…マリオワールド登場！

下のマグネットとサイコロが付属。マリオとルイージの2人プレイが楽しめるのがすごい。土管で地下に行ったり、豆の木で雲の上に行ったりと、スーパーマリオの魅力が詰まりまくっているし、クッパを倒すのもちゃんとゲームになっている。アマダの企画者が相当やり手だったに違いないゲーム性。すばらしい！

そのワッキーさんの企画はクラウドファンディングで実現したのですが、その返礼品の一部がこのガチャガチャマン消し。こういう遊び心が昭和の駄心なのです

やっぱ駄放談YO！

ダイの駄友（だゆう）である東京・中野にある「謎の店」店長・てれこま との無駄話ならぬ“有”駄話。

てれこま（以下、て）：お疲れ様でしたHONDALADYのライブ。

ダイ（以下、ダ）：ありがと〜。編集部の人も知ってくれて「ダイさんホンダレディだったんですね」と言われたよ（笑）

て：この連載始まった頃は、休止後でしたもんね。

ダ：そうね。月日が経つのは早い。

て：あと年末に池袋で行われたワッキー貝山さんの「ガチャガチャ展」はすごかったですね。

ダ：あれはすごすぎた。昭和の駄が合法から非合法までこれでもかと詰まってた。あれこそ昭和。

て：二日しか開催されなかったのがもったいなかったですよ。

ダ：オレたちには民族博物館級の内容だったからまたやってほしい！

て：全国巡回もできそうですよね。

ダ：涙の出る内容だったから、絶対できる！『昭和50年男』さんにプレゼンしてみようかな？（笑）

て：全国駄モノ語りツアーとか楽しそうですよね。

ダ：このコーナーに反響あれば実現するかも？（笑）

ダイ（ケチャップアーツ）／昭和50年生まれ。小中高を広島県・宮島の対岸で過ごす。上京後〜現在はDJやテクノユニット・アシッド田宮三四郎／HONDALADYとして活動。学生時代よりケチャップアーツとしてデザインを始める。現在はソビエツという名でアパレルや、コスモスの研究誌『ガチャ本』や駄モノ同人大百科を制作。最新作は雑誌に載ったナゴムレコードの広告を集めたナゴム『広告』徹底紹介本。　die@ketchuparts.com　情報はXアカウントの@dietraxで発信中！

マンガは1日24時間!?

コミックキャラバン

バ〜イ 内田名人

発行部数100万部突破! そんな景気のいいワードが各誌で飛び出していた1980〜90年代はマンガ黄金期。しかし、今も燦然と輝く伝説的な金字塔の陰で、ひっそりと光っていた作品もある。本連載は、そんな忘れがたき作品たちを発見していくマンガキャラバンです!!

第27回:元祖ドラクエモンスターズ!?『DQI秘伝 竜王バリバリ隊』

文:内田名人

『DQⅠ秘伝 竜王バリバリ隊』('90)
原作:三条 陸 作画:稲田浩司 監修:堀井雄二
『Vジャンプ』(集英社)

本年1作目の紹介作品は辰年にちなんで『ジャンプ』掲載の『ドラゴンクエスト』マンガです! …と書くと皆様は、2020年に再アニメ化された大ヒット作『ドラゴンクエストダイの大冒険』を思い出されるでしょう。が、ここで紹介するのは同じ作者が『ダイ』連載中に発表していた、もうひとつのドラクエマンガ『DQⅠ秘伝 竜王バリバリ隊』です。

本作は1990年に少年マンガ誌として創刊された『Vジャンプ』において発表されました。表紙にも『Ⅰ秘伝』の主人公が描かれており、当時から三条 陸&稲田浩司によるドラクエマンガが強力な〝引き〟になっていたことがうかがえます。

ストーリーは『ダイ』の世界を離れたオリジナルで、ロトの血を引く勇者が現れる1年前を描く『ドラクエⅠ』前日譚となっています。主人公となる竜王バリバリ隊とは、元人間という出自をもつメタルスライムのピュー(正体は少年)、死神の騎士ザン(正体は一級兵士)、スターキメラのパタタ(正体は大金持ちの一人息子)、ゴールドマンのボッカ(正体は木こり)、キラーリカントのガオス(正体は魔道士)という5体編成の〝竜王配下の最強部隊〟。このうちのピューが人間としての自我に目覚めたことから、呪いによって自分をモンスターに変えた竜王の姉・竜貴妃(本作オリジナルキャラ)、そしてその配下モンスターたちに立ち向かっていく…というもの。全2話で未完となっていますが、原作者によるとバリバリ隊が〝勇者と出会いローラ姫救出をサポートする〟話なども考えられていたそう。…これは読みたかった!

© 三条陸、稲田浩司／集英社

『ドラゴンクエストⅣ外伝 —地獄の迷宮—』(集英社)
※現在コミックスは流通していません。

『DQⅠ秘伝』はこちらに収録。表題作『ドラゴンクエストⅣ外伝』では地獄の帝王・エスタークに加えて『ドラクエⅣ』勇者一行も登場する激アツ展開!!

特筆すべきは90年の時点でモンスターを主役にした作品があったということです。モンスター育成RPG『ドラゴンクエストモンスターズ』が人気シリーズとなっている現在と違って、この当時RPGゲームの敵方が作品の主役になることは考えられないことでした。これはいかに鳥山 明デザインによる愛嬌あるモンスターたちがドラクエの魅力になっているのかを証明するものでしょう。

また、身体を後方にグンと伸ばしてからの体当たりというピューの攻撃方法が後の『スライムもりもりドラゴンクエスト』シリーズにおけるスライムのメインアクションを思わせたり、ゲーム内で廃墟の町として登場するドムドーラが滅ぼされるまでが描かれていたり…などなどドラクエファンならニヤリとするシーン多数。

本作が発表された頃は『ドラゴンクエスト モンスター物語』(89年)などキャラクターやアイテムの設定を補完する書籍が続々発売されていた時期。本作もそんなドラクエワールド、そして作品のもつ可能性を広げた一作と言えるでしょう。何より『ドラクエⅠ』を舞台としたストーリーマンガは珍しいので、それだけでもドラクエファンは必見です!

『DRAGON QUEST ダイの大冒険 勇者アバンと獄炎の魔王』第1巻(集英社)

© 三条陸、芝田優作／集英社 © SQUARE ENIX CO., LTD.

『ダイ』ワールドは今も広がり続けている! ダイの師匠、アバンの若き日の冒険を描く『勇者アバンと獄炎の魔王』は『Vジャンプ』『ジャンプ+』で連載中!(既刊9巻)

『ダイの大冒険』とはひと味違うドラクエワールド!

DJ-FUKUTAKE PRESENTS

DJフクタケの ★ 謎の円盤 ★ POP

エマージェンシー！エマージェンシー！どこからともなく飛来した塩化ビニール製の謎の円盤がPOPな音と共に昭和50年男を襲撃す!? DJフクタケの謎が謎を呼ぶ連載、今回もアナタの記憶の扉をパッカーンと開けちゃいます!!

文・レコード提供：DJフクタケ

POP50-12：再発見！ NHKアニメの7インチ

本号でも紹介の投票ランキング企画「80年代アニメソング総選挙」盛り上がりそうですね！

実はDJフクタケもアンバサダー他で協力しており、あらためてこの時期のアニソンをまとめて振り返ったんですが、日本全国どこでも観られたNHKアニメ作品の楽曲群のまぁすばらしいこと！というわけで今回はNHKアニソンの名曲たちがテーマです！

まずは昭和58年の『スプーンおばさん』OP曲「夢色のスプーン」。筒美京平＆松本 隆の黄金コンビによるドラマチック＆キラキラPOP！歌うはシンガーソングライターとして本格デビュー前の飯島真理と完璧すぎる布陣。B面のED曲「リンゴの森の子猫たち」は『みんなのうた』でも放送されてましたね。

お次はパル「冒険者たち」。昭和57年放送の黄金都市をめぐるSF冒険活劇『太陽の子エステバン』のOPを飾ったさわやかなロックナンバー。作曲は『太陽にほえろ！』などの名曲を手がけた大野克夫。シリーズ途中から黄金の大コンドルが登場するメカ展開も熱かった！

続いては英児童文学が原作の昭和60年『おねがい！サミアどん』OP曲「瞬間（とき）はファンタジー」。妖精をめぐる不思議な物語のワクワクを盛り上げるモータウン調ビートと伸びやかに響く長山洋子（当時はアイドル活動期）の歌声は80's POPの魅力満載！

児童文学系といえばこちらもはずせない！昭和54年作「ニルスのふしぎな旅」は元ザ・タイガース、加橋かつみによる同名アニメ主題歌。タケカワユキヒデ作曲、チト河内編曲のディスコビートを取り入れた楽曲とノーブルな歌声はいたずら者だったニルスの冒険＆成長物語ともリンクした歌詞も相まって、いい意味でNHKらしい仕上がり。

最後は当時先進的試みだったCGの技法を取り入れた作画の一部採用も話題となった昭和58年の感動動物モノ『子鹿物語』よりOP楽曲「ハロー・トゥモロー」を。『ドラクエ』でお馴染み、すぎやまこういち御大の楽曲に戸田恵子の歌唱といえば…そう、あの『伝説巨神イデオン』の名EDテーマ「コスモスに君と」の組み合わせ再び！というわけでドラマチックな旋律と緻密な編曲がレコードでの聴き応え＆エモさMAXです!!

民放とは一味違うNHKアニメ楽曲の豊かさはオトナの耳で再発見するとまた格別なのでした！

「夢色のスプーン」

飯島真理（'83）ビクター

『超時空要塞マクロス』リン・ミンメイ役で注目を浴びるなか発表された彼女のエピソードゼロ的一枚。キュートな歌声と確かな表現力ですでにその才能の豊かさが十分に感じられる。EDはアーケードゲーム『ポンジャック』（テーカン）BGMにも使用

「瞬間（とき）はファンタジー」

長山洋子（'85）ビクター

ユーロビートのヒット曲「ヴィーナス」のカバーの印象が強いが、アイドルデビュー前はビクター少年民謡会に在籍。そこで鍛えたのどはポップスをはじめ現在の演歌歌手活動に至るまで存分に活かされている

「冒険者たち」

パル（'82）キング／スターチャイルド

日仏共同制作でヨーロッパなどでも放送され実は国外人気が高く、フランスでは2013年と2016年に新作版が放送されるほど。日本版の初回放送音声は消去され、今やオリジナルの状態で視聴することは非常に難しい

「ハロー・トゥモロー」

戸田恵子（'83）キャニオン

『アンパンマン』、『ゲゲゲの鬼太郎』（第3期）などの主演声優としてお馴染みの戸田恵子。俳優業以前に“あゆ朱美”名義でアイドル歌手としての活動実績もあり、ヒット作こそないがその高い歌唱力は折り紙付き

「ニルスのふしぎな旅」

加橋かつみ（'79）ビクター／スタジオぴえろ

いたずら小僧のニルスが妖精の魔法で小さくなってしまい、ガンの群れと旅をするという物語。自然の厳しさに他種族との共存、友情の尊さなどユーモア交えて描いた名作アニメ。アニメ制作はスタジオぴえろが担当した

DJフクタケ／昭和49年生まれ。古今東西のPOP博覧強記な謎DJ。歌謡曲公式MIX「ヤバ歌謡」や玩具＆ゲーム系楽曲集「トイキャラポップ・コレクション」などCD企画・選曲担当。今年はDJ活動30周年＆メジャーデビュー10周年！新企画の予定もあり活動がさらに面白くなりそうです！

永井ミキジの 男子ファンシー道

「マリック」という名前は“マジック”と“トリック”を合わせた造語。別名義として、栗間太澄と 松尾幻燈斎がある。

イラスト：大塚 誠／『ぼくらの超魔術入門』（成美堂出版）より

第25回 超魔術ファンシー

なんの疑いもなく本能のまま、あらゆるブームに刺激された1980年代、攻撃的なニュースやアイテムでさえも、やわらかくファンシーに包めば許されていたあの頃…。ピュアなハートをもった僕たちには見えなかった大人の事情（ファンシー）を勝手にカテゴライズします。

文・コレクション提供：永井ミキジ　撮影：松蔭浩之　タイトルイラスト：菱沼彩子

世界では中東情勢の緊迫化、米中対立の激化、日本の景気回復もまだまだ。やっとコロナが収まっても油断できない世の中だが「きてます！」何がきているのか、Mr.マリックが今年で超魔術誕生35周年が「きてます！」、いつなんどきでも80年代UKバンド、アート・オブ・ノイズ『In Visible Silence』の「Legs」を聴くと身体に力が入る。

Mr.マリック、本名は松尾 昭の超魔術を生み出すきっかけは1974年のユリ・ゲラー初来日から始まった。超能力ブームだった当時、マリックは一般の職に就くものの、マジシャンの夢をあきらめきれずに退職。各地のデパートでマジックグッズの実演販売員になりマジシャンを目指したが、世界の華やかなエンターテインメントマジックショーを観て挫折してしまった。それからというものマジシャンの夢をあきらめ、うだつの上がらない日々を送っていたが転機は訪れた。マジックグッズを取り扱うテンヨーがシーモンキーの販売に力を入れるため、実演販売の経験があるマリックを雇ったことが再びマジックの熱を取り戻すきっかけとなった。

その後マリックは88年に日本テレビの『11PM』へ出演、スプーン曲げなど超能力演出のマジックを披露したことがきっかけで、ミスターマリックの超能力的なマジックが大ブームとなった。流行語にもなった〝ハンドパワー〟で今までステージで行われていたマジックショーからテレビなどで手元を映すクローズアップマジックを超魔術と位置づけることに成功。

100円玉に通すたばこ、触れずに折れるスプーンなど、どれも超能力なのでは？と疑ったほどリアルだった。一人ひとりのハンドパワーで世の中は明るくならないものか。さぁ、マリックグッズを紹介しよう。

『Mr.マリック超魔術少年団』
全2巻（小学館）
月刊コロコロコミック増刊『コロコロイチバン！』にて超魔術で悪と戦う物語。2008～09年に連載された

『ぼくらの超魔術入門』
（成美堂出版）
1995年に発売。マリック自ら登場し写真と図説でわかりやすく解説されている。巻末にはマリックからの熱いメッセージも

Mr.マリックのマジックウォッチ
電池がなくても水で発電する腕時計、注水をすれば2～3週間はもつという画期的なアイテム

『ミスターマリック 超魔術 念動篇』
（バンダイ）
バンダイから発売された解説ビデオ付マジックグッズ。この他に「予知篇」「テレパシー篇」「透視篇」が存在する

Psychic Entertainment Live STAFFユニフォーム
胸と背中に“HAND POWER”のマークがプリントされたスタッフユニフォーム

笑魔術 きてまスプーン
1989年にバンダイから発売された巨大スプーン、裏のレバーを押せばスプーンがグラグラと曲がる。 同時期に超魔術ビデオ、SPカード、ボードゲーム、ケンタッキーフライドチキンを模したパーティパックなどが発売された

永井ミキジ／昭和49年生まれ、兵庫県出身のグラフィックデザイナー、アートディレクター。独自にカテゴライズしたコレクションの執筆、製品企画など活動は多岐にわたる。マイナースニーカーのコレクションをまとめた『C級スニーカーコレクション』（グラフィック社）が発売中

直角が行く。

3年ぶりにやってきた台湾旅行。前回の台南散策の続きは、ダンジョンのようなアヤシイ建物での物色から。おやおや、冒険感が出てきました!?

文・イラスト・題字・写真：渋谷直角

#27 台湾へ行く②

駅弁がやっぱ、信じられないほどウマイ~!

前回に続き台南編。1980~90年代の台湾古着ばかり集めたお店「新装裏百貨行」の次に訪れたのは、「香蘭 男子電棒燙」というお店。もともと床屋だった場所を、物件を借りた人が床屋の名前もそのままにして、その床屋のウエアやグッズを新たに作って販売しているという少し変わったアパレルショップ。ここが「永楽市場」という、まるで古い団地、もしくは中野ブロードウェイの超古い版みたいな建物の中にあって。電灯も沈んだ光で、薄暗~い通路をグルグルまわらないといけないんです。ポツンと肌着姿でたばこ吸ってるおじいちゃんがいたり、突然すさまじくおしゃれなカフェが現れたり、古着屋と思ったら住んでる人の洗濯物だったりとかなり異世界ダンジョン。初見でお目当ての店にたどり着くのは相当難しく(あと結構こわい!)、ダンジョン内にいた台南の人に話しかけたら親切にも連れてってくれて、なんとかお店に到着。

店内は当時の床屋のイスや鏡も置いてあって、KUWATA BAND「メリークリスマス・イン・サマー」のテレサ・テンカバーがかかっているかわいいお店。肝心のグッズは、床屋時代のウリだったと思しき「アイロンパーマ」というカタカナがTシャツにもデカデカと書かれているモノが多く、かわいいはかわいいんだけど、40代男が着るとかわいさよりも完全に「ボク、変なTシャツ着ておもしろいでしょ~?」感が出てしまい、だいぶお寒いことになりそう…。なので「アイロンパーマ」と書かれてないモノばかり購入。〝若者の店に行くおじさん〟の不幸はここにある。でもロケーション含め、台南で強く印象に残った場所のひとつ。もし自分もお店やるなら、こんな廃墟みたいな建物の中でマイペースにやれたら楽しいだろうな、と思いました(もちろん大変でしょうけど!)。あとは夜市にも寄って、この日は終了。

次の日。「新装裏百貨行」の店主に教えてもらった豚ホルモンの店「阿明猪心」で朝食。ここ、本店は観光客にも人気でいつも激混み&大行列らしいのですが、2号店なら人も少なく穴場だよ、と。確かに並ぶことなくスッと入れたし、レバーやモツのたっぷり入ったホルモンスープ、めちゃウマ!これと白ごはんの組み合わせで大満足。「阿明猪心 金華店」でググれば場所わかります。

あとは「泉元糖行」という普通にお年寄りが行くような乾物屋さんみたいなトコで売っている、満賀道雄も思わず「て、手塚治虫先生~!!」と号泣しそうなトートバッグを2種類買ったり、水仙宮市場をチラチラ見たりなどしていたら台南はタイムアップ。

行く前にチェックしていた、台南最古のレコード店「Wien disk Shop」や、zineやアートを取り扱う「Error22」、店内に安室奈美恵やキムタクの雑誌の切り抜きがベタベタ貼られているらしい90年代東京リスペクトな古着屋「トリプル・ピーコック」などは今回立ち寄る時間がなく持ち越しに。新幹線で台北に戻ります。帰りの駅でももちろん駅弁を購入!今回はチキン弁当。これがやっぱ、信じられないほどウマイ~!台南も最高でした。次回は台北編。まだまだ続きます!すいません!

渋谷直角／昭和50年生まれ。マンガ家。1990年代の若者を描いた新作『世界の夜は僕のもの』(扶桑社)が発売中。
その他イベントや情報などはホームページにて。http://www.shibuyachokkaku.com

昭和40年男 総集編シリーズ

俺たちを育んだ 昭和の愛

**深く強い愛であふれていた時代を生きた幸せを
いま一度噛み締めて明日への元気に変えよう!!**

<第一章>
胸の奥底に響いた真
人類平和のために無償の愛を捧げた人「川内康範」
今だからこそわかる、熱く、深い、愛に満ちた詞「阿久 悠」
愛でこそつながる家族の真の姿「山田太一」etc.

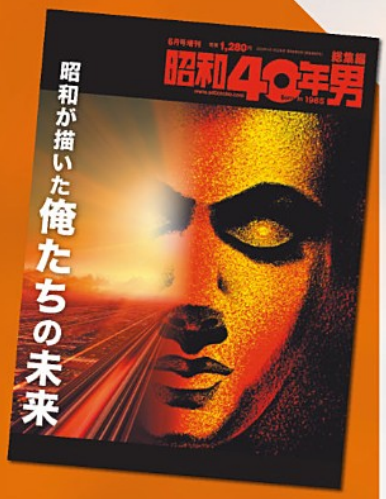
<第二章>
二人は摩訶不思議
「鮎川 誠&シーナ」「加藤和彦&安井かずみ」「内田裕也&樹木希林」「阿部 薫&鈴木いづみ」「春日三球&照代」
「ジョージ・ハリスン&エリック・クラプトン&パティ・ボイド」「シド・ヴィシャス&ナンシー・スパンゲン」「沖 雅也&日景忠男」etc.

<第三章>
恋のバカンスは夏

<第四章>
強く深い母の情

定価 1,280円(税込)

昭和が描いた 俺たちの未来



俺たちが過ごした昭和は想像力に満ち満ちていて、いつも夢と希望を与えてくれた。一方で、絶望と破滅が入り交じった未来を提示され、震え上がった思い出もどっさりある。刹那に生きた者もきっといるだろう。が、おかげさまで我々は今こうして地球で暮らしている。未来を思い描いてはドキドキワクワクする永遠の男の子たちに、この一冊を授けよう!!

- 宇宙戦艦ヤマト
- 俺たちの人生観を変えた!? 終末ブーム
- 万博と『太陽の塔』
- 米ソ宇宙開発競争
- 日本中が熱狂したハレー彗星
- 未来の原体験 少年SFパノラマ etc.

定価 1,280円(税込)

我が心の 梶原一騎

**強さとやさしさにあふれた男の
生き方を学んだ**

定価 1,280円(税込)

<第一章>
思いを馳せる3人、大いに語る
家族を愛し、そして愛された人生最後の3年間
父・梶原一騎の愛と真実
妻・高森篤子が語る
梶原一騎の世界
大槻ケンヂが語る梶原作品の魅力
梶原イズムに刮目せよ!

<第二章>
今なお、胸に突き刺さったままの男たち

<第三章>
**作品に秘められた謎と心
梶原一騎論**

昭和カルチャー倶楽部にてご購入できます。

https://showa-club.com/

オレたち世代の永遠のヒーロー！ 名人の連載だゾ!!

高橋名人の冒険時代

昭和50年男が夢中になった“ザ・80年代”なヒーロー・高橋名人！ 名人ブームを振り返りつつ、人間・高橋利幸の姿に迫るこの連載。今回からキャラバン隊はついに四国上陸！ 名人がイベントで心がけていたこと、キャラバン1年目の“名人”認知度は？ そしてここでもとんでもないハプニングが…。

取材・文：内田名人　撮影：石塚康之

STAGE 25　南キャラバン 四国・高知編

今回は1985年キャラバンの8会場目、フェリーを降りて次の日となる7月30日の高知・西武百貨店、とでん西武大会のお話です。ここはお店の方から「子供が来るかどうかわかりませんねぇ」と言われていたんですけど、開催してみるとそんな心配も杞憂で、すぐに会場が子供たちでいっぱいになりましたね。

この頃になると、子供の表情を見ているだけで楽しくてね。もう大会も8回目ですから、私もリラックスできているんですよ。オープニングでのトークさえしっかりとやっておけば、あとは子供がプレイしているところを応援するといった感じですね。

南キャラバンに関して言えば、司会にしろ実況にしろ、特に力を入れたようなことはありませんでしたね。北キャラバンは毛利君が競馬中継のような力の入った実況をやっていたそうなので子供たちは固くなったかもしれませんね。いやね、本気の〝ゲーム大会〟として盛り上げるんだったら、毛利君の実況の方が正しいんですよ。でも私は〝『コロコロ』さんとの共同イベント〟として取り組んでいたので。だからイベント中、ゲームに関係ない話をして場を和ませたりするんです。高知だと「今の時期、カツオが美味いんだろ～」って地元の話を振ったりね。さすがに最初のうちはゲームの説明をしますよ。でも午前中だけでも25組やりますからね。もう5組目以降はヘンなことしか言っていない（笑）。

この当時のゲーム大会は、集まってきた子供たちにゲームをできる環境をちゃんと与えてさえいれば、あとはどうにでもなったような記憶があります。スタッフに「次はこうしてね」と的確に言っていれば、そのようにしてくれますし。それが最初のゲームキャラバンですよね。イベントでは子供たちだけでなく私のゲームプレイも観られますからね。普段より余計に失敗はできないので、そこだけは力を入れていましたかね（笑）。でも子供たちの前で失敗する確率は低かったので、これはラッキーでした。単純にラリオスだけ成功しておけばいい、とこれだけは押さえていましたから。

翌日からは愛媛県で2会場。85年の四国大会は高知県と愛媛県の2県だけになっています。これはハドソンのみんなで話をして、四国の人口密度を考え「今回は2県で3会場だけにしよう」と決めました。また、移動の関係もありましたね。愛媛県の後は広島県の福山に行くことになるので、ここであまり動くことはやめよう、という考えでした。

高知から愛媛の松山までは、珍しくディレクターと一緒に移

名人がイベントでのゲームプレイで注意していたラリオスとはこれ。1秒間に8発撃ち込むことで5万点ボーナスが獲得できるので短期得点勝負では非常に重要

『コロコロコミック』1986年春休み増刊号（小学館）掲載
『ファミコン裏技史』（作・方倉陽二）より

PROFILE 高橋名人／たかはしめいじん
本名・高橋利幸。昭和34年、北海道札幌市生まれ。1982年にゲームメーカー・ハドソンへ入社。85年から「ゲームは1日1時間！」をキャッチフレーズに16連射を得意とするゲーム名人として雑誌、テレビ、映画と各メディアで活躍。当時のファミコンキッズたちのカリスマとなる。2012年に株式会社MAGES.へ入社。タレントとしての活動も続けながら、現在もゲーム文化振興に尽力している。オフィシャルブログ「16連射のつぶやき」
URL https://ameblo.jp/meijin16shot

『ハドソンひみつ攻略法』（小学館）掲載『ハドソン物語』（作：渡辺 敏）より

イベントの成功に不安を募らせるハドソン・工藤社長だったが、それは初日で杞憂に終わった。今回語られている高知店舗スタッフのような思いを、全国店舗でしていただろう

『少年メディア』（ハドソン）掲載『ファミコン龍虎伝』（作：中島昌利）より

高橋名人は南、毛利名人は北へと分かれ行われた85年キャラバン。2人のカラーの違いはそのままキャラクターとなり、そして翌年の映画『GAME KING』へとつながっていく

ゲームイベントで重要なのは環境づくり

動しています。ディレクターは本来なら次の会場先に前日入りするはずなんですが、松山までは距離がありすぎて、この時はできなかったんです。なので私とMCと一緒にバスで移動していますね。南キャラバンでバス移動をしたのはこの時だけです。そのバスでは途中から子供の姉弟が乗ってきたので話を聞いてみたら『ファミコンで遊んでいる』というんですよ。『じゃあ、機会があったら参加してみてね』なんて言って別れたのを覚えています。さすがに松山大会には来ませんでしたが（笑）、バス移動はそういうことがあったので楽しかったですね。

そこで名人だと気づかれなかったのかって？ いやいや、この年は〝ゲーム名人〟と言われても、私と顔がなかなか一致しないんですよ。会場で私が目の前を歩いているのに「今日、名人が来るんだって」「名人って誰？」って言われたりもしてましたから（笑）。で、イベントが始まってMCのハナちゃんから「めいじ～ん！」と呼び込まれて私がステージに上がったところで初めて子供たちは「この人がゲーム名人なのか！」と認識するんです。1年目の地方大会はそんなことが多かったですね。ほら、テレビタレントも出始めは違和感があるじゃないですか。あれに近い感覚ですよね。

そうそう、キャラバンカー組の愛媛への移動では一大事が起きていたそうなんですよ。松山まで道中は峠道を走ったそうなんですが、その途中にお地蔵さんがあったので『ちょっと手を合わせていこう』とクルマを停めたんです。そして拝んでクルマに戻ったところ…後輪が脱輪していたそうです。そこでもしクルマが崖から落ちていたら南キャラバンは8会場で終了していましたね。そんな話をドライバーが笑いながら話すんですよ。なので話を盛っているか、作っているかのどちらかだと私は思っています（笑）。といったわけで無事、松山大会が開催されたんですが、その話はまた次回に！

高橋名人のバグBugってホビー！

名人の旅のルーティンってな～に

旅行に行く時は「寝られればいいや」ということでビジネスホテルに泊まりますね。そこで安く済ませた分、美味しいものを食べたりするんです。昔は移動しながらよさげな店があったら立ち寄り、そこで楽しんだ後、また移動。そしてまたどこかに立ち寄り…という繰り返しだったんですが、今はまず目的地まで一日かけて移動して、翌日そのエリアをじっくり観光。そして翌日また一日かけて移動して…というスタイルに変わりました。今は周辺の観光などはバイクでなくタクシーを使っていますね。読者の皆さんにバカンスでぜひ行っていただきたいのは知床五湖です。ここで見る湖の景色は格別です。私は知床に行ったら毎回、行っています。それほどの絶景が観られますよ。

1911年から続くLeeのヴィンテージをよみがえらせろ!!

魂の復刻プロジェクト

**今、ジーンズブランドのリーから「THE ARCHIVES」と名づけられたシリーズの最新作が発売されている。
それらは1911年にワークウエアを作り始めてからの歴史が詰まったものだ。リーが今も愛される、その理由を探っていこう。**

取材・文：國領磨人　　撮影：網野貴香

ウエスターナー 100-J

普段はインディゴデニムを着用して働いているカウボーイたちに「おめかしする際にどうぞ！」と提案したのがこちら、サテン素材を使った「ウエスターナー」。シャツを挿して、上下のセットアップで着るのが粋である。

デニムジャケット 101-J

1931年にカウボーイブランドから登場したデニムジャケットが「101-J」。40年代には、それまで直線だった胸部の切り替えがV字型に変更になり、そのラインに沿って斜めにポケットを配するといった劇的な進化を遂げた。

歴代のLee名作

ロコジャケット 91-J

レイルロードワーカー（鉄道作業員）のための「ロコ（ロコモーティブ）ジャケット」は1921年に登場している。時刻表を収納するための「タイムブックポケット」を左身頃の内側に備えるなど、現場において必要な機能性を網羅。

ストームライダー 101-LJ

1933年には、襟をコーデュロイにしてライナーのブランケットをあしらった「ストームライダー（101-LJ）」が誕生。ストーム（嵐）が吹き荒れる極寒の平野で働くカウボーイが愛用してきたというストーリーのあるモデルだ。

オーバーオール 91-SB

リーが1911年に縫製工場を買収して本格的にワークウエアの生産を開始した当初から存在していたのがオーバーオールの「91-SB」。胸のビブポケットの底辺部が丸みを帯びるなど、デザインが完成していったのは30年代のこと。

ペインターパンツ 11-W

「11-W」のフロントはボタンフライであり、縫製部の補強はリベットではなくて糸によるカンヌキ留めの仕様。現代でもガレージワークなどのDIYには欠かせないワークウエアとして、こだわりのある男たちの寵愛を受ける。

今季復刻のLee THE ARCHIVES

「THE ARCHIVES（ジ・アーカイブス）」は、リーの伝説的なプロダクトを生地からパターンワーク、縫製の仕様といった細部に至るまで、余すところなくよみがえらせるプロジェクトだ。創業者のヘンリー・デヴィッド・リーが1911年にワークウエア事業に着手して以来のマスターピースの数々から、今季はヴィンテージファン垂涎の3モデルが完全復刻を遂げている。

今、リーの伝説を身にまとうことができる

ダンガリーズ 191-Z 1950モデル
リーのDNAを濃厚に継承する「ダンガリーズ」から、ハンマーループがなく、腰周りのフィットを向上させる山ハギを有する「191-Z」。糸の撚りを強めて薄手ながらも強度を高めた「ジェルトデニム」を採用。2万8,600円

ライダース 101-Z 1962モデル
「リー・カウボーイパンツ」における馬上での運動性能を重視したパターンから、街で着るカジュアルファッションとしてのスタイルへと進化した60年代の「リー・ライダース」。代表作「101-Z」を忠実に復刻。2万8,600円

ウエスターナー 100-Z 1962モデル
カラージーンズブームの先駆けとして1959年にデビューした「ウエスターナー」が、60年代にはシティウエアとしてビッグトレンドに。「ウエスト・ウィーブ」と独自にネーミングしたサテン生地を使用している。2万8,600円

おしゃれに敏感な昭和50年男が、ファッションの歴史を検索するならば、必ずや突き当たるであろうジェームズ・ディーンとエルヴィス・プレスリー。

ジェームズ・ディーンは、『理由なき反抗』（1955年）でリーの101-Zを穿いている。エルヴィス・プレスリーは、ヒット曲『悲しき悪魔』を最後に映画に専念することになり、その分岐的な作品となったのが『キッスン・カズン』（64年）。銀幕に映し出された彼は、リーのウエスターナーを着用している。

「全米が泣いた」ならぬ「全米が穿いた」名作群

稀代のスター二人が身にまとうことで、労働着由来のアイテムは〝反骨と洒脱の両面で魅せることのできる日常着〟として全米の若者たちの間で受け入れられるようになっていった。そんな時代の転換点を創り上げたのが、リーというブランドである。まさに〝全米が感動とともに穿いた〟のである。時が流れた現代の日本においても、その〝反骨と洒脱の大いなる魅力〟は少しも色あせていない。

次のページからは、さらに時を巻き戻して、リーという伝説をもっと深掘りしていこう。

エドウイン・カスタマーサービス 0120-008-503

Leeの歴史

1920年にはキャラクター戦略を開始

1920年にイラストで登場したキャラクターの名前を公募するための告知広告。自動車整備工のために1913年に生み出された「ユニオンオールズ」を着ている。

食品や日用品を取り扱う卸商として アメリカのカンザスにて創業

エイチ・ディー・リー・カンパニーが卸商としてスタートした時代の広告ビジュアルがこちら。「Lee」のロゴが入った缶詰や瓶詰の食品が並んでいる。

バディ・リーはバービーに次ぐ人気者に

公募によって「Buddy Lee（バディ・リー）」という名前に決まったキャラクターは、フィギュア化されて販売。60年代までさまざまなバリエーションで愛された。

1911年に縫製工場を買収 ウエアの生産を開始

1911年にリーブランドとして初めて登場したオリジナルワークウエアのひとつが鉄道作業員向けのオーバーオール「91-SB」。左は30年代に展開した広告。

リーの価値は、こだわりを柔軟に完遂すること

革新的な製品を生む そのメカニズムとは

今、『昭和50年男』の読者のなかには仕事でマーケティングやブランディングやターゲティングに苦心している人も多いのではないだろうか。本稿で語っていきたいのは、〝21世紀に活かしたい企業論・ブランド論・マーケティング論をリーという伝説から学ぶ〟ということだ。嘘や脚色のない〝事実の語り手〟としてご登場いただくのは、日本においてリーの企画、生産を取り仕切っているクリエイティブディレクターの細川秀和さんである。

「もともと、リーは1889年にカンザス州サリナで食品や日用品を取り扱う卸商としてスタートしています。その日用品のなかにはウエアもあり、ワークパンツやオーバーオールなどの仕入れ商品がありました」

米国の大平原、グレートプレーンズに展開するカンザスは、牧畜や農業が盛んな土地柄だ。卸商のエイチ・ディー・リー・カンパニーは、ワークウエアの展開内容を仕入れ商品からオリジナル商品へと切り替えていく。

「1911年に縫製工場を買収したことにより、本格的にウエアの生産を開始します。ペインターパンツ『11-W』とオーバーオール『91-SB』がリーブランドから登場した初めてのワークウエアとなりました」

企業やブランドの強さとは、〝機会や機縁を逃すことなく柔軟に自身の姿を変えていける強さ〟のことを指すのではないだろうか。卸商としてスタートしたリーには、そうした強い柔軟性があった。

リーがウエアの生産に乗り出した1911年の少し前、1908年には大衆車として十分な実用性を備えたT型フォードがフォード・モーター社から発売されている。

上がヴィンテージ、下がその復刻。ウエストベルト付けの地縫い返し仕様など、手間はかかるが丈夫で美しく仕上がる仕様を随所に

「米国で急速に自動車が普及していくなか、リーは1913年に自動車整備工からの要望を受けて全身を覆うツナギを生み出しています。それを『ユニオンオールズ』と名づけて、翌年には商標登録も済ませています」

伸びゆく市場があれば、しっかりと現場の声を拾い上げたうえで、ターゲティングとネーミングに全く隙のない独自商品を投入していったのだ。

「1920年には、そのユニオンオールズを着たイラストのキャラクターが登場します。同時に、そのキャラクターの名前を一般公募しています。今で言うところのファンマーケティングのようなものかもしれませんね。公募で集まったものから、『Buddy Lee（バディ・リー）』という名前に決まっています」

顧客との良質なコミュニケーションを積み重ねることでブランドロイヤリティ（愛着心）を高めていくという意味において、しかもネットやSNSのない時代において、リーの施策は最適解と言えるだろう。これは現代においても通用しそうだ。

「その後、バディ・リーはフィ

1945年に「リー・ライダース」が登場

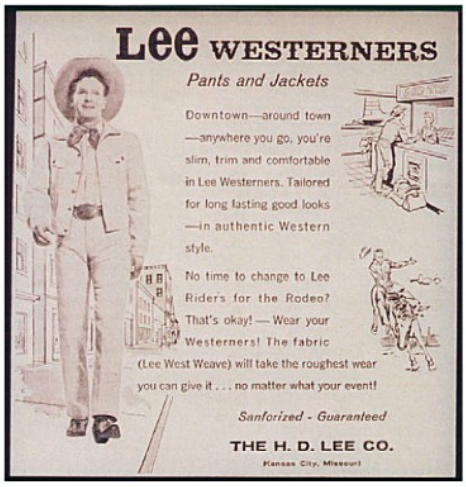
1945年には「Lee COWBOY PANTS」から「Lee RIDERS」へと商標変更。50年代にジェームズ・ディーンから公私にわたって愛され、時代とともにシルエットに修正を施しながら現代に受け継がれている。

世界初のジッパー付きデニム 世界初の防縮加工デニム

1927年には世界初のジッパー付きデニム製品「ウィジット・オーバーオールズ」を発表。今作にて防縮加工デニムも世界で初めて採用。

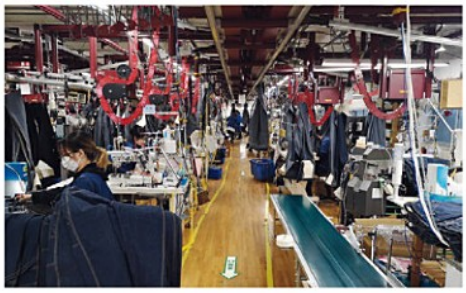
アメリカンスピリットを濃厚に宿すカウボーイパンツ

1924年、鉄道作業員や自動車整備士などをターゲットにするだけではなく、牧歌的なアメリカの風景を象徴するカウボーイのためのジーンズ「リー・カウボーイパンツ」を発表。



カウボーイのおしゃれ着という発想が斬新

1956年頃からサテン素材のジャケットやパンツを発売していたリーは、59年にカウボーイの正装用として「リー・ウエスターナー」をデビューさせている。米国東海岸の大学生にも愛された。



そして、歴史のバトンは受け継がれている

現在、リーの日本における企画、生産はエドウインが担っている。腕のいい職人がいる日本の自社工場で、生産効率が優先される現代においては逆に難しくなった往年の縫製仕様も忠実に再現。

ギュア化され、時代と共に石膏、コンポジット、プラと素材を変えていきながら、1960年代まで活躍しました。60年代にはバービー人形に続いて全米のドール売上で2位になっています」

また、カンザス・パシフィック鉄道などの鉄道網が開通してロングドライブ（繁殖地から出荷駅までの長距離をカウボーイが牛追いした後、鉄道で需要地に送り届けること）が行われるようになった開拓時代以降、鉄道作業員とカウボーイは〝広大なアメリカ大陸で働くタフな男〟を代表する存在だった。

「リーを代表するジャケットのひとつである『ロコ（ロコモーティブ）ジャケット』は、1921年に鉄道作業員のために生み出されています。また、1924年にはカウボーイに向けて『リー・カウボーイパンツ』が発表されています。その後、1945年に『リー・ライダース』が登場し、『リー・カウボーイパンツ』は『リー・ライダース』へと商標が変更されます。それは、大戦後にワークウエアが街において普通に着られるようになるのを見越しての戦略変更だったと言えるでしょう。そこから、ムービースターが着る時代につながっていくわけですから。そして、強調しておきたいのは、リーのマーケティング戦略の根底にある〝ものづくりに対するこだわり〟です。同時代のどのブランドよりも手間のかかるていねいな仕様で各所の縫製が行われています。それを現代において再現するのは至難ですが、やり遂げることが我々の使命です」

【PROFILE】
細川秀和／ほそかわひでかず
クリエイティブディレクター。1990年、株式会社エドウイン入社。翌年からLeeブランドに携わり30年以上のキャリアをもつ。THE ARCHIVESシリーズを立ち上げ、AMERICAN RIDERSシリーズなどのロングセラーの開発も行ってきた

「平成仮面ライダー」の代表作が、令和によみがえる！

『仮面ライダー555（ファイズ） 20th パラダイス・リゲインド』

平成ライダーシリーズのなかでもその人間ドラマが異彩を放つ『仮面ライダー555』。そのVシネクスト版が劇場上映中だ。ここでは主演の半田健人に、『仮面ライダー555』がキャリアに及ぼした影響や、自身の好きなヒーロー像を聞いた。

取材・文：牛島康之　撮影：吉場正和

2001年にジュノン・スーパーボーイ・コンテストのファイナリスト選出から芸能界入りした半田健人。その2年後には当時18歳という史上最年少ライダーとして『仮面ライダー555（ファイズ）』の主人公・乾 巧役を演じることになった。当時は『仮面ライダー555』への出演が決まり、すぐさま上京。初めての東京での一人暮らし、そして初めての主演作品ということでうれしさよりも不安な気持ちの方が勝っていたという。

「初の主演作でしたし、撮影も1年をかけるロングスパン。作品の撮影が始まった時はうれしさというよりも、正直、心が重いという感じでした（笑）。この1年間をどう闘い抜くか、心がいっぱいでしたね。撮影開始が2003年で今から約20年前。その年は自分の人生のなかでもメモリアルイヤーとして心に刻まれています」

そんななか、役作りに関して、監督やプロデューサーからは自然体のままの半田健人で演じてくれと指示があったとのこと。

「役作りに関しては、監督の田﨑竜太さんとプロデューサーの白倉伸一郎さんが、半田健人がもっている素材の部分を見て、採用してくださったので、変に役を演じさせるというよりは、素の部分の自分で演じていました。一度、自分なりに芝居っぽく演じてみたんですが、田﨑さんに見透かされて『余計なことはしなくていい。そういうのは小芝居というんだ』と指摘されました。それからは変に考えず、台本で読んできたことをナチュラルにやる、ということを1年間通してやりましたね。だから〝乾 巧〟という役は、18、19歳なりの等身大の半田健人でもあるんです」

また役作りに関しても独特だったと語る半田。役作りのために過去の仮面ライダー作品を観た方がいいかと聞いたら、田﨑監督からは「観なくていい」と。その意図は平成仮面ライダー作品である『仮面ライダーアギト』『仮面ライダーアギト』『仮面ライダー龍騎』とは違う、全く新しい作品が作りたいから、変に影響されては困るということだった。

その他には何も制約がなく、衣装も自分で選べたし乾 巧お馴染みの黒いPコートも今後の撮影は時期的に寒くなるため、半田自身が、衣装候補のなかからいちばん分厚いアウターを選んだという。

彼のこれまでのキャリアのなかで『仮面ライダー555』はどういう位置づけなのだろうか。

〝乾 巧〟は18、19歳なりの等身大の半田健人

「当時思っていたことと、20年経って思ったことが変わってきていますね。ある時期までは、出演デビュー作のひとつにすぎなかったんです。ところが、今は自分のあらゆる活動における根っこ（基礎）を作ってくれた作品だなと感じています。自分は今、俳優の他に歌もやっていますし、その他にもいろいろなお仕事をさせてもらっています。それができているのも『仮面ライダー555』をやってこられた自信に支えられているからだと痛感しています。世の中の多くの人がやはり〝仮面ライダー555〟の人として見ています。それが名誉なことだということを、ここ数年ですごく感じるようになりましたね」

若い頃はそのイメージを払しょくしたいがために、他の違う作品の自分も見てほしいという気持ちが強かったが、今はそれがあっての自分というところに帰結しているようだ。

役を育てたのは自分だという強い思い

『仮面ライダー555』は半田健人にとってかなり思い入れのある作品である。今回、劇場版『仮面ライダー555 パラダイス・リゲインド』で久々に乾 巧を演じることで、どのような気持ちで役に臨んだのだろうか。

「『仮面ライダー大戦』の映画では、ゲストとして自分が主役ではないなかでの出演でした。今回の映画は『仮面ライダー555』としては復活という意味合いが強く、役への挑み方の気持ちも特別なものが強かったです。ただ、だからこそ〝同窓会〟になってしまってはいけないと思ったし、新しいものを作るという使命感もありました」

そんな気持ちで臨んだなか、大きな出来事が起こる。台本で納得のいかないシーンがあったのだ。

「最初にきた台本のなかに違和感があって。それは自分が20年間背負ってきた『仮面ライダー555』に対してのミスマッチだったので、そのシーンは相応しくないんじゃないかと。『仮面ライダー555』の世界観やファンが思うこの作品はこうだというものに相反する要素だったので少々生意気でしたが、監督とプロデューサーにそのシーンの解釈を差し替えてほしいと直談判したんです。共演者の〝園田真理〟役の芳賀優里亜さんも同じことを感じていたので、この違和感は本物だと思ったんです」

難しい話ではある。監督やプロデューサーは当時の焼き直しではなく、常に新しいものを作りたいと思っている。そういった意味で必要だったシーンかもしれないが、役に思い入れもある演者側には既存のものを守る義務もあるのだ。変わらないものがあって、それで良しとするという考えが半田のなかにあったことで自ら意見し、制作陣と話し合った。

「テレビシリーズの時は、与えられたものをやるという全くの受け身だったので、そういったことはありませんでした。でも今回は疑問に思ったことを監督に意見する。自分も大人になったなと思いましたね」

半田は今回の撮影での出来事をそう振り返る。その出来事はそれだけ真剣に役に向き合っているという半田や共演者の真摯な姿勢に他ならない。『仮面ライダー555』を生み出したのは監督やプロデューサーかもしれないが、それを背負って育ててきたのは演者側である。その責任感が半田たちをそういった行動に導いていったのだ。

そんな半田が、今回の映画の見どころをこう語ってくれた。

「ひと言でいうと『仮面ライダー555』らしい作品がまた作れたなという感じですね。観終わった後に残るものに〝これが『仮面ライダー555』らしさだな〟と思えるものが作れたと思います」

彼が考える『仮面ライダー555』らしさとはどういう部分なのだろうか。

「ひとつは〝暗い〟ということ（笑）。あとは〝やせ我慢の美学〟ですね。本当にみんながそう。乾巧という役はそのやせ我慢の真骨頂みたいなところだし、園田真理に関してもそう。みんな本音で生きていない。〝やせ我慢〟が生むドラマが見どころだと思いますし、やさしさと自己犠牲がこの作品のテーマになっているので、それが今回も存分に発揮されていると思います。あとは20年経った我々出演者の姿をいい風にとらえてほしいですね、年輪というか。成熟したなぁと感じてほしい。大人になった反面、まだ乾巧らしさが残っている部分もあるので、そのあたりはいい塩梅に表現されていますね」

20年ぶりの作品ということで共演者も半田と同じく活動を続けてきて今がある。そこも含めて出演者との再会という部分も楽しめたという半田。どういう心境で撮影に臨んだのだろうか。

「自分と芳賀優里亜さんと村上幸平さんはプライベートでもちょこちょこ会っていたし、3人でお仕事をする機会もあったので、Vシネの現場で久しぶりという感覚はなかったですね。ただ、密に連絡をとってきた仲間だからこそ、この作品に向かう準備は3人ともできていました。もっと言えば、2022年の時点で3人で話した時に〝来年が20周年だけど何かやるのかな〟とは事前に話をしていました。要するに3人のなかで、今回のVシネみたいな作品があるのであれば、準備しておかなきゃねというのは話したんです。作品が決まった時はうれしかったですし、戸惑いもなく作品に入れた感じでした」

自分が共感できる人間くさいヒーローが好き

『仮面ライダー』といえば、みんなのヒーロー的な存在。自身でヒーローを演じていた半田にとって、憧れていたヒーロー像はどういったものだったのだろうか。

「スポーツ系で自分のヒーローといえば、『週刊少年サンデー』で連載されていた小山ゆう先生の『がんばれ元気』の主人公、堀口元気です。自分のなかに三大マンガがあって『うる星やつら』『がんばれ元気』『漂流教室』なんですよ。全部、『週刊少年サンデー』で連載されていたもの。それぞれジャンルも違うし、何が好きかという確固たる理由もあるのですが、〝堀口元気〟が好きなところが自分の趣味にもつながっているんです」

半田には〝昭和趣味〟があるのは、ご存じの方も多いだろう。その昭和趣味の発端が『がんばれ元気』だったのだ。それまで〝ボクシング〟というものをよく知らなかったし、興味もなかったが、マンガを通して興味をもったそう。このマンガが描かれたのは1976年から。その当時、実際にいたボクサー事情が気になって調べたところ、それが〝昭和〟という時代に興味をもつきっかけになったという。半田が生まれる10年前の世界だ。

「『がんばれ元気』を読んでボクシングを始めることはなかったですが、自分の中にある柱のひとつである〝昭和〟というコンテンツのきっかけを作ってくれたうえでは、堀口元気は僕のヒーローなんです。最初に読んだのは小学生の頃、ふとしたタイミングで何回か見返すのですが、おもしろいことに読む年齢によって全く印象が変わるマンガなんです。大人になって読むと以前理解できなかった内容や意味もわかってくるので、感動するポイントが違います。読み取れていなかった部分にあらためて気づいたり……。『仮面ライダー555』も実は〝夢〟というテーマがあります。ただ乾巧は夢をもっていないけど、他の登

〝やせ我慢〟が見どころ

【PROFILE】 半田健人／はんだけんと
2003年に平成仮面ライダーシリーズ第4作『仮面ライダー555』の主人公に大抜擢され、史上最年少ライダーと話題に。その後、昭和歌謡への深い知識を活かしてタレントとして活躍。現在もアーティスト、俳優として活動の場を広げている

場人物は夢をもっているんです。自分には夢はないけど、他の人の夢を守るというのがテーマだったり。『がんばれ元気』も似たようなところがあって、堀口元気が主人公ですが、他の登場人物は大小にかかわらず、全員が夢をもっている。そのことに最近気づいたんです。それが実は裏テーマになっているんじゃないかと思うんですよ。だから小山ゆう先生に質問したいですね。『がんばれ元気』はただのスポ根モノじゃなくて、青春群像劇なんですよ。今思ってみれば、堀口元気も乾 巧と同じく、根がやさしくてやせ我慢の人なんです。このマンガに出てくる登場人物は、本当にみんな魅力的に描かれているんです」

昭和のボクシングマンガと言えば、『あしたのジョー』であり『リングにかけろ』である。ヒーロー然としているのはそれぞれの主人公である〝矢吹 丈〟であり、〝高嶺竜児〟であるのだが、半田健人は堀口元気に何を見い出したのだろうか。

「『リングにかけろ』はまさに『がんばれ元気』と同時期に連載されていた作品でしたし、『週刊少年ジャンプ』の方が、ヒーロー然とした世界観や登場人物が多いと思います。サッカーマンガにしても『キャプテン翼』のように技が人間離れしていくわけで、そこを楽しんでいくのが王道。ですが、小山ゆう先生の描くマンガは、派手な技もない現実の範囲内での人間ドラマなんですよね」

『あしたのジョー』は半田の生まれた時代とマンガが描かれた時代背景のリンクする部分がなく、共感できなかったという。

「小山ゆう先生も『あしたのジョー』の連載が終了してから数年しか経ってない時期なので、ボクシングマンガを描くにも勇気がいることだったと思います。同じようなことを描いても勝てないので。自分は昭和歌謡が好きなので、それにたとえると『あしたのジョー』は演歌。だけど『がんばれ元気』はポップスなんですよ」

半田と言えば昭和歌謡というイメージもあるが、最近気になる曲やアーティストはいるのだろうか。

「最近思うのはＹｏｕＴｕｂｅや音楽のサブスクができたことで音楽がより身近になりました。今までであれば、自分の足でレコード屋に通って、自分でお金を使って仕入れなければならなかった情報が簡単に手に入ります。これには賛否両論がありますが、自分は長年、聴く術がなかった音楽が聴けるので、本当にありがたいと思いますね。

半田健人はサブスク音楽についてこうも語る。

「サブスクで聴く音楽は必ずしも好きな音楽じゃない。お金を使うまでもない音楽なんだと思います。ただ、そうやって聴いたなかにも発見はあるんです。〝あの人はこんないい音楽を出していたんだ〟とか、聴いておいてよかったとか。僕が歌謡曲にのめり込み始めた時はとにかく昔の曲ばかりを聴いていましたが、今の世代は音楽をCDやレコードで聴かずにスマホで聴きます。すなわち、今流行っている曲も30年前に流行った曲も同列にあると思うんですよ。頭では30年前の曲とわかっているけど、価値としては同列なんです。だから自分が変わった音楽を聴いているという意識もない。でも僕の頃はありました。みんなが小室ファミリーの曲を聴いていた時に、自分はかぐや姫の『赤ちょうちん』を聴いていましたから（笑）。古いも新しいも同列の感覚があるとしたら、音楽という文化がどうなっていくのか楽しみですね」

最後に新作の作品が上映されるにあたって『仮面ライダー555』のファンに向けてのメッセージをうかがった。

「今回の作品が実現できたのは、20年間応援してくださっているファンの皆さんのおかげだと思います。自分たちとしてはその恩返しになるような作品が作りたかったのです。この作品を観て、やっぱり『仮面ライダー555』はいいなと胸に刻んで、また10年も20年もこの先応援し続けていただきたいですね。今回、初めて作品を観てくださる方々も、映画やテレビシリーズもサブスクで観られるので、ぜひ、興味をもってもらえればうれしいです」

やさしさや自己犠牲が生む

«« 最新INFORMATION

『仮面ライダー555 20th パラダイス・リゲインド』

シリーズ第4作にして、「平成仮面ライダー」の人気を頂点まで押し上げた、伝説の作品『仮面ライダー555』。放送から20年の時を経て、人類の進化形・オルフェノクと人類をめぐる物語の、「その後」が描かれる。それは果たして、「夢」の続きなのか、あるいは「絶望」の始まりなのか…。

©2024 石森プロ・バンダイ・東映ビデオ・東映 ©石森プロ・東映　配給・発売：東映ビデオ

新宿バルト9他にて期間限定上映中
通常版・特別版：5月29日（水）Blu-ray&DVD発売
CSM「カイザフォンXX」版・完全版9月13日（金）Blu-ray&DVD発売

キャスト：半田健人／芳賀優里亜／村上幸平／唐橋 充／藤田 玲／福田ルミカ／浅川大治／柳川るい／土師野隆之介／松澤可苑／進藤あまね／高岩成二

スタッフ
原作：石ノ森章太郎　脚本：井上敏樹　監督：田崎竜太
音楽：松尾早人　アクション監督：和田三四郎
主題歌「Identiφ's」ISSA

谷村有美 セレンディピティ ～幸せの連鎖～ Serendipity

連載 第1回

昭和・平成の音楽を楽しむムーブメントが活況な昨今、とりわけ注目を集めるのが90年代に女性アーティストが隆盛した“ガールポップ”だ。シンボリックなアーティストだった谷村有美が、ゆかりのある人物を迎え、ガールポップブームを探る連載が今号よりスタート！

取材・文…田中隆信　　撮影…吉場正和

記念すべき第1回のゲストは、ソニー・ミュージックエンタテインメントREDの中村収（おさむ）氏。谷村有美がデビューするきっかけとなったオーディションを受けた時に出会い、デビュー後も宣伝部、A&Rとして活動と躍進を近くで見続けてきた。

ファーストコンタクトは原石以前のタニムラ

――まずはお二人の出会った時のことから聞かせてください。

中村 有美ちゃんと最初に出会った頃、私はCBS・ソニー宣伝部でビデオの制作をしていました。その頃の仕事は、ミュージックビデオの制作、それといろいろと撮影もしていて、有美ちゃんが参加したオーディションの撮影も担当していました。

谷村 「ティーンズ・ポップ・コンテスト」ですね。

中村 そうそう。そのオーディションの撮影スタッフをしていて、一部編集も手伝ったりしていたんです。

谷村 中村さんがまだ社員になる前なんですよね。

中村 そうなんです。まだ大学在学中のアルバイトの頃でした。

谷村 谷村有美のミュージックビデオを撮影してプロデュースしてくださってる板屋（宏幸）監

督の後輩でしたっけ？

中村 はい、大学の後輩です。

谷村「ティーンズ・ポップ・コンテスト」の応募者の予備審査のための映像を撮っていただいたってことなんですかね？

中村 はい、そうです。

谷村 私は緊張していたのであんまりよく覚えてなかったんですけど（笑）、ピアノを弾いてるところを撮っていただいたみたいなんです。後で、「あの時、（会場に）いたんだよ」って言われて驚きました。

――オーディション参加者全員の予備審査用の映像を撮られていて、そのなかに谷村さんもいらしたということですね。

中村 はい。予備審査だけじゃなくて、本番の映像も撮ってました。

谷村 本番も!? じゃあ有楽町のヤクルトホールでも。

中村 撮ってました（笑）。

谷村 オーディションは、予備審査があって、デモテープみたいなのを何回か録っていくんです。最初は、ソニーミュージックの信濃町のスタジオに呼んでいただいて、自分が作成したものを元に録っていったりしてたので、今思えば、すごく手厚いオーディションだったんですね。本番は、予選を突破した人たちが一堂に会して、レッスンを受けつつ、決勝大会に出るっていう。実際に、スタジオでたくさんの関係者が見てるなかで演奏するという回もあって、そういうのを撮っていただいてたってことですよね。

中村 はい。オーディションですけど、レッスンもありましたし、かなり手厚く対応していたように思います。

谷村 SDという新人の発掘や育成をするセクションがあって、「ミス・セブンティーン」のオーディションもそこでされていて、「CBS・ソニーオーディション」というバンドのオーディションもされていて。レーベルでいうとFITZBEAT（フィッツビート）かな。私が受けたオーディションはその中間的な感じだったんです。楽器が演奏できるというのは条件としてあるんですけど、ちょっとアイドルっぽいというか、ビジュアルも審査で見ますよっていう。その初代優勝者が河合その子さんと宮原 学さんでした。河合その子さんが大好きだったので、受けてみようかなって思って、楽器はピアノが弾けるからうまくフィットしたんだと思います。だから、中村さんは原石以前のデビュー前の私を見てくださってたんです。

中村 その時期にビデオ制作に関わっていたからこそ、オーディションの現場に立ち会えたということですから、何かやっぱり縁を感じます。

――今、またこうして対談企画にも。

谷村 本当に長いおつき合いで、いろいろお世話になってましたので、今回は私のたっての希望で中村さんに来ていただいたんです（笑）。オーディションの時の私のことってどれくらい覚えてますか？

中村 すごくピアノを一生懸命弾きながら歌ってたのが印象的でした。演奏がすごくパワフルで、「あのルックスであんなにパワフルなピアノを弾くんだ!?」ってビックリしたのを覚えてますね。

谷村 ありがとうございます！こんな言い方したらあれですけど、売りになるのがピアノしかなかったので（笑）、「ここが勝負どころ」という気持ちで弾いてたんだと思います。参加していた人たち、皆さん歌が上手なんですよ。12歳とか13歳くらいなのに表現力もあって、山口百恵さんの再来か？っていう子もいましたし、ビジュアルのいいハーフの双子の女の子もいたりして、誰が優勝してもおかしくないなって思うくらい、実力があって。

中村 しっかりと個性が感じられる参加者が多かったです。

谷村 私がいちばん年齢が上で「アイドル…、10代後半ですけど…」って気持ちで、たぶん自分を精一杯アピールするためにピアノを弾き倒したんだと思います。

武道館のステージに立つことを勝手にイメージ

80年代は、前半からアイドルの勢いがどんどん拡大し、半ば頃からバンドやアーティストも層がどんどん厚くなっていった。谷村がオーディションを受けた86年頃は、ヒットチャートに多彩な音楽がひしめき合い、音楽シーンが盛り上がり、新たな展開を迎えようとしていた時期だった。

中村 いろんなジャンルの音楽が耳に入ってきて、リスナーの人たちも興味の幅が広がっていった時期だったと思います。

谷村 おニャン子クラブが爆発的に人気があって、同時に、ユニコーンのようなバンドも人気があって、すでにバンドブームも始まっていましたね。そういうアイドルやバンドが盛り上がっているなか、活躍されていたのが渡辺美里さんでした。「My

あのルックスでパワフルなピアノを弾くんだ!?

1990年代に誕生したガールポップ

80年代後半、女性アーティストの躍進が顕著になり、彼女たちを呼称する“ガールポップ”なる言葉が誕生。ガールポップを当てはめるアーティストの特別な定義はなく、谷村のような自作自演のアーティストを表すことが多い。93年には専門誌『GiRLPOP』（ソニー・マガジンズ）が創刊された

ソニー・マガジンズ（当時）＝ソニー・ミュージックソリューションズ（現在）許諾

Revolution」が86年のリリースで、そのシングルに〝SD〟マークが付いてたんです。「あ、これだ！」ってテンションが上がりましたね。「SDってそういうところなんだ！」って思って、そこに出入りできるだけでパワーをもらえる感じがしました。それと、さっき少し話に出たFITZBEATというレーベルに所属するアーティスト、聖飢魔Ⅱやレベッカが次々と日本武道館コンサートを行って、チケットも完売してたんです。その公演を武道館の一番上の席から観せてもらったんですけど、「ここで自分も絶対にコンサートをやりたい！」って思ったんです。もちろんステージもカッコいいんですけど、自分が武道館のステージに立つことを勝手にイメージして、客席ばっかり見てました（笑）。「自分がステージに立った時にもこんなふうにお客さんに盛り上がってほしい！」って。まだオーディションの結果とかが出る前なんですけど、そういう刺激を頂けたのがSDのすごくいいところでした。

中村 結果は出ていなくても、レッスンとか受けていましたし、そういうアーティストとしての意識は芽生えてきますよね。

谷村 ダンスレッスン、ボイストレーニング、ちょっとした演技指導まで。市ヶ谷のソニーの黒ビルの地下にスタジオがあって、練習でピアノを弾かせてもらってると、もっとすごいピアノの音が聴こえてきて。後で聞いたら、村松 健さんが弾いていらしたんです。

中村 スタジオですけど、それぞれが完全防音の部屋という感じではなくてブースみたいな感じなので、他の所の音が聞こえたりするんです。

谷村 そうそう。演奏している人もいれば、歌の練習をしていたり、ダンスの練習をしていたり。あと、映像編集もそこでされてましたよね。

中村 してました。

――谷村さんから見た中村さんの印象は？

谷村 中村さんはとにかくポジティブ！ 普段もそうですけど、いろんな物事をどうポジティブに変換するかを考えていらっしゃるのかなって。成功してる人がもっているポジティブエネルギーがいつも満ちあふれているので、中村さんと話をするといつも元気をもらえるんです。

『GiRLPOP』誕生とファン層の変化

87年11月21日、谷村はシングル「Not For Sale」とアルバム『BELIEVE IN』を同日リリースという形でデビューを飾る。その頃の中村氏はCBS・ソニーの社員として宣伝部でプロモーションなどを行っていた。

中村 私は雑誌などの紙媒体の宣伝担当で、有美ちゃんの作品もいろんな出版社や編集部に持っていきました。言葉を選ばずに言うと、最初は男性ファンが多かったです。楽曲を聴いてると「女の子ももっと聴いてくれたらいいのにな」って思っていたんですけど、作品をリリースするごとに女性ファンが増えていったのを覚えています。本人が女性ファンを増やしたいと意識していたかどうかは知りませんでしたけど、そんなふうに楽曲に共感する女性が増えてきたところに、雑誌の『GiRLPOP』ができたりして。それによって女性シンガーの台頭と言いますか、シーンになったことによって、男性が多かったライブが女性の割合が増えていきました。

谷村 女性を意識したつもりはなかったんですけど、ラジオのお便りは圧倒的に女性の方が多かったですね。購買してくれる方に男性が多いという認識は全くなくて。でも、ライブでは男性の「谷村ー！」っていう野太い声援はよく聞こえてましたけど（笑）、男性ファンが多いというとらえ方はしてなかったかな。曲作りも女性を意識して作るということもなかったですし。でも、確かにある時期からスタッフの方の間で「女性ファンを

【PROFILE】
中村 収／なかむらおさむ
宣伝部にてアーティスト宣伝担当に加えビデオ担当から後に、雑誌、そしてラジオの担当を務めた。制作部に異動後、谷村有美他のA&Rを担当。谷村有美をはじめとする女性アーティストから、米米CLUB、Prinsess Princess、UNICORNなどのバンド系まで、幅色いアーティストの担当経験をもつ

ありましたよね？

【PROFILE】 谷村有美／たにむらゆみ
シンガーソングライター。ピアノを駆使し叩くように演奏するライブには定評がある。エッセイ、特にラジオ・FMプログラムでのDJとしての実績も多数

増やそう」みたいな声は出ていました。後で気づいたんですけど、「ハッピーなラブソングは控えた方がいいよね」的な雰囲気はありましたよね？

中村 言われてみればそうかも。

谷村 〝ブロークンハートしてないと許されない〟という無言の流れはあったのかなって。90年代後半からは幸せな歌じゃないと売れないっていうくらいハッピーな曲が多くなりましたよね。「こんなに幸せな曲でいいんだ。しかもそれがヒットするんだ」っていうのが、休業後の大発見でした。当時の自分にアドバイスするなら「幸せな曲書こうよ」ですね（笑）。

異ジャンルでの複合的な活動が人気拡大を加速

ファン層の拡大と谷村のアーティストのスタイルを確立する大きな要素のひとつとして、ラジオとテレビも挙げられる。レギュラー出演していた番組を通して、谷村のパーソナリティ（個性）が伝わったことで楽曲への理解や共感度も向上した。

中村 ラジオ番組の影響はやっぱり大きいと思います。当時はリスナーの投稿がファクスだったじゃないですか。

谷村 でしたね（笑）。

中村 ラジオの現場に立ち会ってると、届くファクスが女性からのものが多いのを実感します。

――恋愛相談とかも女性の方が多かったと思いますし。

谷村 辛辣でしたよ（笑）。結構真剣に答えてたので、ズバズバ言ってました。KANさんに「なんで恋愛相談とかできるの？自分はできないから『そういうのは有美ちゃんのところに送って』って言ってる」って（笑）。とにかくファクスとかお手紙とかで届いた相談内容は全部目を通して、引っかかるものは全部答えるって感じでした。

中村 ラジオ番組はやりたいと思ってたの？

「ハッピーなラブソングは控えた方がいいよね」的な雰囲気は

谷村 はい。10代から20代あたりまで夜型で、ラジオがすごく好きでした。『オールナイトニッポン』も中島みゆきさんから笑福亭鶴光さんまで聴いていて、ラジオ番組をやってみたいなという気持ちはもっていました。それと、音楽はやりたい。ステージに上がりたい。得意なのはピアノで、クラシックなのかフュージョンなのか、そこにどうつながるかわからなかったけど、オーディションを受けたことで〝日本武道館〟というワードが加わって、武道館公演ができて、ラジオができて、歌だよねみたいな感じで完成されていったというか、つながっていきました。

――〝音楽〟はもちろんですが、〝ラジオ〟〝日本武道館〟というのも重要な要素なんですね。

谷村 はい。ライブに関しては、先ほどお話ししたようにデビュー前に自分が日本武道館のステージに立つところをイメージしていたので（笑）、そこが目標のひとつではあったんですけど、結構早めに実現することができたのもうれしかったです。

中村 ライブも短期間でどんどん大きな会場で行うことができてましたよね。

谷村 新宿の日清パワーステーションで初ライブ（88年10月7日）をさせていただいて、翌年に同じ日清パワーステーションで2デイズ（89年1月18・19日／4月8・9日）をやって、その年末（12月13日）に東京ベイNKホールでもライブをして、90年の12月に日本武道館でライブ（クリスマスコンサート「X'mas Parade 1990」）を。なので、すごく早かったんです。

中村 リリース、ライブ、ラジオをはじめ、やってきたいろんなことがすべてアーティスト活動の軸になってましたよね。

谷村 そうですね。今にして思えば、87年の10月からTBSテレビの朝の番組『ドーナツ6』に出させてもらって、同時にラジオの番組も始まって、そこから鍛えられたところがあります（笑）。テレビは向いてないと思ったんですけど、やってみたら楽しくて。ちゃんとアナウンスの研修も受けたんです！その1年の間にクリス・レアとかデビー・ギブソンとか、来日アーティストに通訳なしでインタビューもさせていただいて、「『ドーナツ6』の谷村有美です」って言えば全部のライブを観せてもらえたりしたので、貴重な経験もたくさんさせてもらいました。それと、番組を観て応援し

てくださった方たちがいたからこそ、日本武道館公演も早く実現できたんだと思います。

待てば待つほどいい作品になるという信頼関係

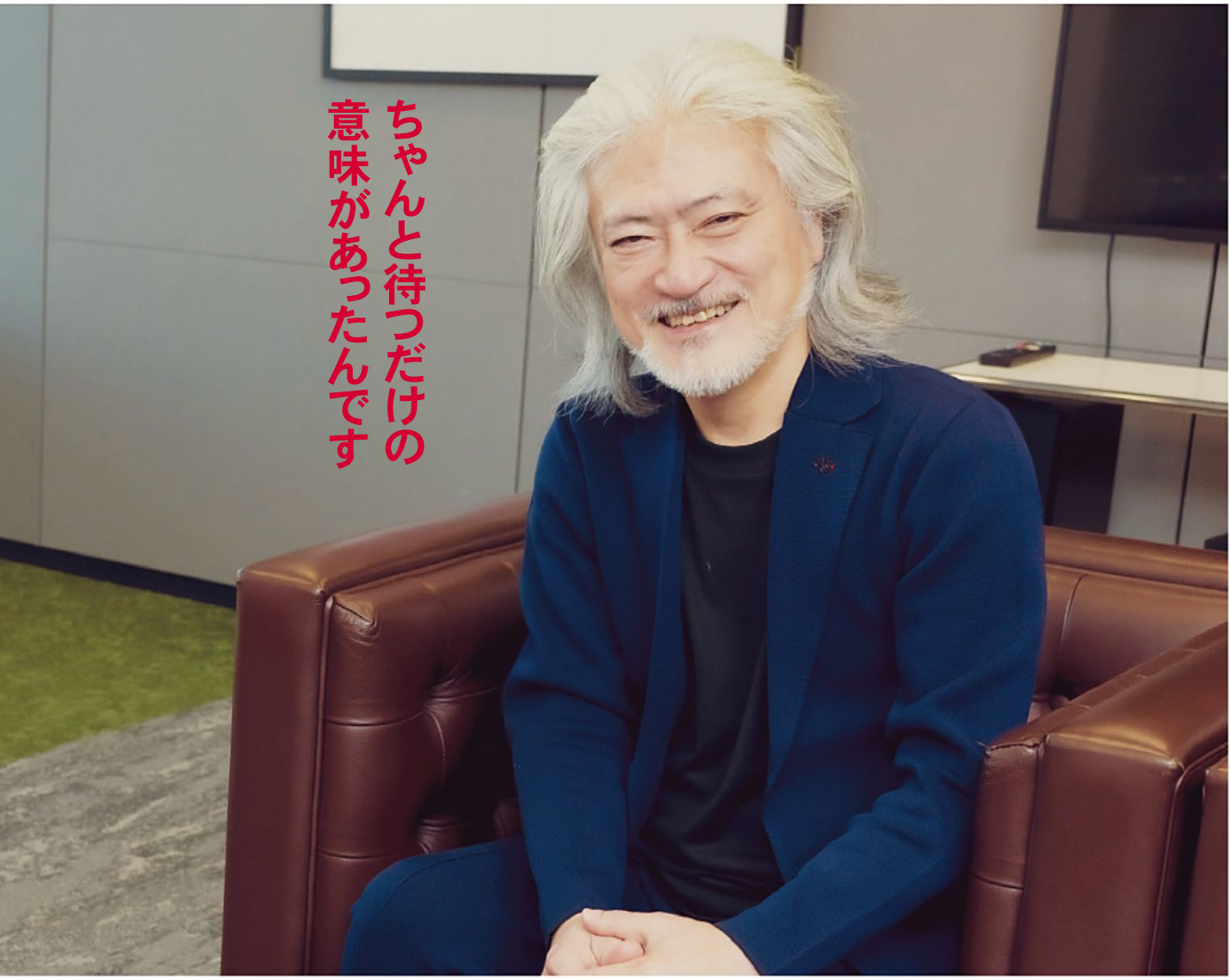
93年、中村氏は宣伝部から制作部に異動し、A&Rを務めるようになった。

中村 宣伝の時から「がんばってる人だな」という印象はありましたが、制作になると歌詞の締切とかにより深く向き合うことになります。「納得するものができ上がるまであきらめずに朝まで寝ずに歌詞を書いていたんだな」って思いました。

谷村 いいものを作るためにあらゆる対応をしてくれました。締切は守ろうと思うんですけど、やっぱり自分が納得できるものを提出したいので。

中村 待てば待つほどいい作品になったから。そういった部分での信頼感があったから待てたんです。

谷村 歌詞を書いてると、カチッとハマる時があるんです。他の人から見たら「どっちだっていいんじゃないの?」って思うかもしれないんですけど、自分のなかで「ハマったな」って思えないと弱いというか、光が薄い感じがするんです。それを(↘)



ちゃんと待つだけの意味があったんです

待っていただいてたんです(笑)。

中村 ちゃんと待つだけの理由というか意味があったんです。

谷村 迷ったけど、その時に出した答えがベストなんです。手前味噌ですけど、全然色あせないんです。

――その色あせない曲のなかから「Tonight」と「HALF MOON」がカップリングされたアナログ盤の発売も決定しました。

谷村 収さん、(アナログ盤プロジェクトが)決まる前から「谷村有美をアナログで聴きたいよね」って言ってくれてたんです。

中村 一昨年ぐらいにそういう話をしたね。

谷村 デビューシングルはアナログだったんですけど、2ndからはCDだけになったんです。アナログ盤からCDへと移行する過渡期で、ソニーミュージックとしては新メディアを推進していて、「アナログは作らないよ」って言われて、「えぇ!」ってビックリしました。そういう経験もあるので、今アナログ化されるのが新鮮に感じるんです。

中村 僕がアナログ盤で聴きたいと思ったのも、アナログ盤でのリリースがなかったから、余計にそれで聴いたみたいという思いが強かったところはあると思います。(↙)

谷村　そういうふうに思ってもらえることが本当にうれしいです。谷村有美自体が、自分一人では何もできてなくて、収さんをはじめ、いろんな方がそれぞれのパートで、ミュージシャンもそうだし、制作の方も、宣伝の方も、パッケージを作る方もみんなすごく愛を込めて作ってくださってて。今はそれをＹｏｕＴｕｂｅで盛り上げてくださって、アナログにもつながっているので、本当に感謝してもしきれないです。愛でできていると思うのでありがたいなぁって思います。

――アナログ盤の発売は新鮮な出来事だったと思いますが、やりたいこともいろいろ増えてきてるんじゃないですか？

谷村　本当にたくさんありますね。私のファンコミュニティで「おしゃべりカフェ」というのを毎週配信して（自分の）曲をどんどんかけていくんですけど、「今聴いてもいいわ」って思うんです。時間が経って聴いても恥ずかしくなったりすることがないんです。「これもいいね」「こんなことしてたんだ」って楽しんでいます。最近プッシュしているのは「６月の雨」という曲です（笑）。

中村「今聴いて恥ずかしくない」っていうのは、さっき話した「待った甲斐がある」ということにつながりますよね。

谷村　ありがとうございます（笑）。あ、今後やってみたいことはこれですね。ヒット曲を出したい！それがこれまでお世話になった方への恩返しになると思いますから（笑）。

みんなすごく愛を込めて作ってくださってありがたいです

«« 最新INFORMATION

谷村有美「Tonight／HALF MOON」
（完全生産限定盤 7inch/33RPM）

2ndアルバム『Face』より「Tonight」、3rdアルバム『Hear』より「HALF MOON」を収録した7インチ・アナログ盤。かつて自身がDJを務めたFMラジオ番組『ヨコハマ ラジオ ナイト 気ままにFeel Mie』（FM横浜）と『MUSIC GUMBO』（FM802）それぞれのエンディング曲として使用されていたバラード2曲が初カップリング、初アナログ化された。

3月15日発売 ¥2,090円
Sony Music Shopにて予約受付中

【谷村有美の動向はコチラ！】(旧Twitter)@tanimurayumi　ブログ https://ameblo.jp/digi-yumi/
谷村有美 official YouTube channel @yumitanimura_official

界の生き字引、高田センセー登場！

に時代をブチ抜く！

ンと“テレビの記憶”を語るこの連載。第5回目のゲストは、た陰の立役者であり、東京演芸界に深い造詣をもつ、放送少年』秘話、現在の笑いについてと貴重な話が満載!

取材・文：フジジュン　撮影：鬼澤礼門

土屋　（ビート）たけしさんとの出会いはいつですか？

高田　古いよ。俺はもう放送作家でバラエティ番組をいっぱいやってて、20～30代は本当に忙しかったんだよ。たけしさんが出てくる前は、欽ちゃん（萩本欽一）と三波伸介さんといかりや長介がテレビの横綱で、俺は三波さんにかわいがられて。『三波伸介の凸凹大学校』って番組の俳句の授業のコーナーで、三波さんに「高田センセー」って呼ばれて。それをたけしさんがラジオで言い出して〝高田センセー〟があだ名になったって話もあるんだけど。

土屋　そうだったんですね。

高田　ある時、ポール（牧）が「ヘイ、高田チャン！（指パッチン）最近、浅草行ってる？」って言うから、「行ってる暇ないよ！浅草行っても何もないでしょ？」って答えたら、「いるのよ、高田チャン好みのいい子が」って教えてくれて。球ちゃん（青空球児）も（ダミ声で）「いるんだよ～、すごいのが！ツービートのたけしっていうんだけど」って。そんなに言われたら観たくなるじゃない？

土屋　観たくなりますね（笑）。

初めて観たツービートは、テレビで使えないと思った

高田　それで浅草の松竹演芸場に行ったら、ツービートが出てくるんだよ。「浅草キッド」って歌に〈客が二人の演芸場で〉って歌詞あるだろ？あれ、一人は俺だから（笑）。それで初めてツービートを観てすごいおもしろいんだけど、「これはテレビじゃ一秒も使えないな！」と思ったの。「赤信号、みんなで渡ればこわくない」とか言ってる頃だから。

土屋　あの頃のテレビ業界にもちゃんとした人がいたんですね（笑）。

高田　だから、最初にたけしさんをテレビで使った人は偉いよな（笑）。それでたけしさんに「会おうよ」って渋谷に呼び出して、NHKの番組でインタビューを録って、「ちょっと行こうか？」って安い居酒屋に行って、朝まで二人でいろんなことしゃべってゲラゲラ笑って、お互いに興奮しちゃって。その後、漫才ブームがくるんだけど、たけしさんが、二人で朝までしゃべったようなことを「こんなヤツがいてよぉ」って漫才にして、（ビート）きよしが「よしなさい！」ってツッコんで。俺とたけしさんとは、そんな流れがあったんだよ。

土屋　漫才ブームの時、高田さんはどこにいたんですか？

高田　たけしさんの側にいたよ。『THE MANZAI』の収録行っても吉本ばっかりで、東京はツービートしかいないんだよ。だから、たけしさんの子守りができるのは俺しかいなかった。

土屋　『THE MANZAI』の〝伝説の博品館〟ってありますよね？

高田　1980年12月28日な。あの日は生放送で、ツービートがぶっちぎったんだよ！CMの悪口言うネタを一緒に作ったんだけどさ。もう漫才ブームも終わると思ってたし、怒られても

PROFILE　高田文夫／たかだふみお
昭和23年、東京都生まれ。日本大学藝術学部卒業後、放送作家としてデビュー。『オレたちひょうきん族』など数多くのバラエティ番組を手がけ、『ビートたけしのオールナイトニッポン』では聞き手としても出演。現在は35年目となる、『高田文夫のラジオビバリー昼ズ』に出演中

第5回 土屋敏男のテレビの記憶 東京演芸

ビートたけしと共

**土屋敏男がテレビ界の歴史を作った伝説のテレビマ
1980年代の漫才ブーム以前からツービートを支えてき
作家の高田文夫センセー。たけしとの思い出から『電波**

いいやと思ってたら大爆笑！あれで振り切ったんだよね、世の中を。「すごいな、この漫才は！」と思わせた。

土屋 あの夜で、「漫才ブームって、実はツービートだったんだ」ってことになりましたよね。

高田 そう。漫才ブームって、実はツービートのものだったんだよな。でもその時、俺とたけしさんの腹の中では「これからはピンだな」とすでにね。

土屋 もう、漫才ブームは終わりだとわかってたんですね。

高田 だから、その2日後には『ビートたけしのオールナイトニッポン』を録ってるからね。1回目の放送が翌年の1月1日だったんだけど、「生ではやらせません！」ってニッポン放送の全社員に止められて収録になって（笑）。放送された時、「こんなヤツがいるのか！」って日本中がびっくりしたんだから。

土屋 高田さんが初めて会った時から、たけしさんはキレっぱなしだったんですね。客が二人の演芸場の時代から、映画『首』までキレっぱなし（笑）。

高田 そうだよ、スゴいんだから。キレっぱなしで首がゴロゴロだよ（笑）。特に30代、あの頃のたけしさんはぶっ飛んでたからこわいくらいだった。俺もちょっとヤバかったから、一緒にやっちゃうところもあったけど。

土屋 高田さんが喜んでくれるから、たけしさんがエスカレートしたのもありますよね？

高田 「いちばんいい客が高田さんだ」って言うけど、俺はいちばん笑ってほしいところで笑うからね。「かゆいところに舌が這う」って言われてるんだから（笑）。たけしさんに火がついてるところに、薪をくべちゃうからさ。それがよかったんじゃないかな？でも、さすがに〝フライデー襲撃事件〟の頃、ずっと記者に付きまとわれてた時は、イラ立っちゃっておかしくなっていて。仕事終わると「北の屋」で飲むんだけど、明らかにイライラしてるのがわかって。「ヤバいな」と思ったから、「落ち着いたらちょっと仕事休んだ方がいいんじゃない？週刊誌とケンカしてもしょうがないから」なんて言ったら、「わかってるんだけどさ」と。俺は仕事があるから、先に帰ったんだよ。そしたら次の朝、カミさんが「ちょっと、テレビ！」って言うから、観ると「たけし逮捕」ってやっていて。「あの直後行って、もう捕まったの!?」と思ってたら、カミさんが「う〜ん、たけちゃんは仕事が早い！」だって（笑）。

土屋 あはは。その時、僕は『天才・たけしの元気が出るテレビ!!』をやってたから、テリー伊藤さんにすぐ連絡したんですけど、伊藤さんの第一声は、「なんで俺を誘ってくれなかったんだ!?」でした（笑）。

高田 で、たけしさんが謹慎になって。亀渕さん（当時、ニッポン放送のディレクター）と「復帰どうする？」って話になった時、「たけしの復帰はオールナイトニッポンがいちばんいいだろう」って話になり。俺、たけしさんが隠れてた湯河原まで行って、「ラジオで生で復帰して、自

【PROFILE】 土屋敏男／つちやとしお
昭和31年、静岡県生まれ。1979年4月、日本テレビ放送網入社。『天才・たけしの元気が出るテレビ!!』、『ウッチャンナンチャンのウリナリ!!』などバラエティ番組を演出。『電波少年』シリーズでは、Tプロデューサー・T部長として出演。現在は、エンターテイメント企画演出会社Gontents合同会社代表

分の言葉でしゃべるのがいちばんいいよ」って話して。「87年7月2日に復帰します」ってことをマスコミに言ったんだけど、その日にLF（ニッポン放送）に行くとマスコミが押しかけるだろ？ 一週早く出ちゃえばマスコミは一人もいない。亀渕さん、頭がいいからさ、「一週間、間違えちゃった」ってことにしてさ、前の週に出ちゃえばいいんじゃないの？」って。それで6月25日、俺の誕生日に『たけし軍団のオールナイトニッポン』ってことにして、朝刊の記事が間に合わない深夜2時半に「何やってんだ、コノヤロー」ってたけしさんが生で出たんだよ。あれはドラマチックだったな。軍団にも知らせなかったから、びっくりだよ。

土屋　へ〜、すごいですね！ あと、事故の後も大変でしたよね。

高田　あれは俺、一切関係ない。俺がブレーキいじったって説もあるけど、ウソだからね（笑）。あれが94年、驚いたでしょう？ あの顔で出てきて「隠してもしょうがない」って記者会見やるんだけど、言ってることが全部筋が通ってるんだよな。引きつった顔して出てきて、「どうも、顔面マヒナスターズです」って。誰も笑ってないけど、俺は死ぬほど笑っちゃったよ。「くだらねぇな、病院でこんなことばっか考えてたんだろうな」って（笑）。俺も12年に心臓が止まった時、「私のハートはストップモーション」って言ってたけど、悲しいサガだよな。

土屋　あはは。あらためてたけしさんはその頃から今回の映画『首』を観てもキレまくってるし、勝負してるってところは何も変わらないなと思いました。

高田　そうだね。だって、たけしさんは『首』のアイデアを30年前に『北野ファンクラブ』で、すでに俺に話してるっていうんだよ。それを松村（邦洋）が覚えてたっていうのもすごくて、「『俺、こういうの撮りたいと思ってるんだよ』って、センセーに話してましたけど、覚えてませんか？」って。

土屋　へ〜！『首』は円熟を嫌うところや、上映までの経緯もたけしさんらしいですよね。

高田　常に危なっかしいんだよね、「上映どうなるんだろう？」って周りをハラハラドキドキさせてな。大人なのにツッパっちゃって軋轢（あつれき）を生むっていう、そういう芸風だよな（笑）。

漫才で振り切ったんだよ、世の中を（高田）

『ラジオビバリー昼ズ』と『電波少年』の意外な関係

高田　それで土屋くんはたけしさんと『元気が出るテレビ!!』をやって、『進め！電波少年』にいったの？

土屋　そうです。

高田　『電波少年』に本当にありがとうって言いたいのはね、俺が『高田文夫のラジオビバリー昼ズ』を89年に始めて、アシスタントにアッコ（松本明子）と松村を使っていて。それを誰かが聴いていて、「おもしろい！」と『電波少年』で使ってくれたことなんだよ。最初はそのまんま東の番組になる予定だったんだろ？

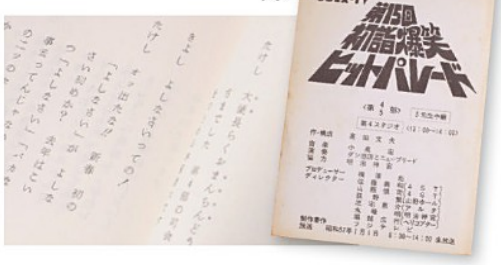
土屋　そのとおりです。

高田　東がいて、あの二人がア

当時を細かく知りたいなら高田センセーの名著で！

右から、『ビートたけしのオールナイトニッポン』から生まれた『ビートたけしの三国一の幸せ者』第10弾まで続いた傑作。テレビでのスレスレトークをまとめた『北野ファンクラブ』。初めて編集長を務めた雑誌『笑芸人』。

年始恒例『初詣爆笑ヒットパレード』の台本



現在も続くフジテレビが元旦朝からほぼ日中通して放送する『爆笑ヒットパレード』。約30年間、構成を手がけた。30日、31日に出演者全員がネタを出してきて、それを一気にまとめるという大変な年末〜年始を乗り切っていた。

THE TAKECHAN-マン 台本は厚さもスゴい

『オレたちひょうきん族』の名物コーナードラマ。キャスティングが豪華。そして、とんでもないスピード感でしゃべる濃密な展開だからこそ、ブ厚く濃厚な台本を書いていた。

シスタントだって言うから。「だったら貸すよ」って答えて、フタ開けてみたら、あの二人だけだろ？心細かったよ、俺は（笑）。でも、それがおもしろいんだよな。すごいなと思って、度胸が。

土屋　度胸だけです（笑）。でも、『ビバリー昼ズ』も最初は松本明子じゃなくて、松本典子をキャスティングするつもりだったんですよね？

高田　そう。それも亀渕さんが、「高田ちゃん、新しいラジオのアシスタント、誰がいい？」って言うから、「松本典子って優秀なのがいるから、仕込んどいて」と答えて。本番行ったら松本明子が座ってたの（笑）。

土屋　実は僕もそうなんですよ。「松村邦洋と松本明子でやれ」と上司から言われた時、頭の中では松本典子だったんですよ。

高田　あ、そうだったの!?（笑）あの頃、松本典子ってすごかったんだよ、出来がよくてな。

土屋　はい。で、打ち合わせに行ったら、「あれ!?」って（笑）。

高田　『電波少年』もそうだったんだ。ツイてんだね～、アッコは（笑）。でも、あの二人が司会でよくやったなと思うよ。

土屋　形は司会者ですけど、二人も被害者ですからね（笑）。

高田　でも、見事に松村を売ってくれたよね。松村は耳がすごいんだよ。『オールナイトニッポン』の頃から、俺の笑い声が『バウバウ』に聞こえたらしいんだよな。「たけちゃん、バウバウ！」って、言ってねぇっつうの（笑）。

土屋　でも、松村の「バウバウ」で高田さんのことを知った人も多いですよね？

高田　多いよ。「バウバウ」で松村も売れたからお互いに助け合いでさ、不思議なもんだよ。もともとは俺が落語をちゃんとやってた時、紀伊國屋ホールで独演会をやって、居酒屋で打ち上げやってる時に爆笑問題の太田（光）がいて。「センセー、ちょっと会ってもらいたい人がいて」って連れてきた男が松村で。

―今回の学び―

一、ギリギリのところを攻めても、ウケたら世論が味方する

一、漫才ブームが笑いの社会的地位を高めてくれた

一、スピリットが受け継がれて、文化は継がれていく

漫才ブームって、実はツービートだった（土屋）

（たけしの真似で）「高田さんよぉ、オイラさぁ」って俺のところ来て。「似てるでしょう？」って太田がゲラゲラ笑ってたら、ダーッて頭おかしいくらいしゃべるからビックリしちゃって。

土屋　高田さんと会って、たけしさんが憑依したんですね。

高田　そう。でも当時、モノマネって芸のなかでさ、フリークのモノマネができたのはあいつが最初だったんだよ。たけしさんだけでなく、古舘伊知郎もできて、石橋貴明もできて。

土屋　テレビを異常なほど観ていて、憑依しちゃうんですよね。で、ラジオに出るようになり。

高田　松村はモノマネと、真面目さをちょっとイジってやるとおもしろさが出てくるんだよね。

土屋　追い込めば追い込むほどおもしろいっていう。

高田　そう、土俵際まで追い込んでやらせるっていう。『電波少年』がやった手口だよね（笑）。

土屋　最近のテレビはどうですか？

高田　作ろうとは思わないね、観てる方が楽しい。テレビも観てるし、ラジオも聴いてるし。

土屋　最近はコンプライアンスだなんだってありますけど。高田さんの話を聞いていると、たけしさんの時代も「これ無理じゃねぇの？」って思ったことをブチ抜いていたんですもんね。

高田　そうなんだよね。ギリギリのところでいっちゃって、ウケたから。ウケたら世論がこっちの味方をしてくれるから。

土屋　そこまではいかないけど、『M-1グランプリ』のウエストランドにしてもあれでチャンピオン獲ったから、あの芸が受け入れられたわけで。テレビの連中がビビってるところをブチ抜けば、まだ穴は開くんでしょうね。漫才ブームがあり、ダウンタウンが出てきて笑いのポジションが上がって、お笑い芸人が憧れの職業に挙げられるようになり。

高田　お笑いの社会的地位が上がったのは、たけしさんのおかげだよ。80年代の漫才ブームがあったからっていうのがあるよね。

土屋　その後、たけしさんは映画でも成功して“世界の北野”になり。今の『M-1グランプリ』を観ても、笑いがすごいレベルに達していて。

高田　お笑いって面に関しては、若い子たちには敵わない。今の漫才の作り方はすばらしいよ。俺らの時代はたかだかお笑いだったから、真剣にやるもんじゃないみたいな世界だったから。そこでたけしさんは昔のことも受け継ぎドラマを作って、劇団ひとりの『浅草キッド』みたいな立派な作品にしてくれたじゃない？それを見て若い子たちがまたスピリットを受け継いだりしてさ、送りバント的に文化を継いでいくっていうのがうれしいじゃない。落語にしても、（立川）談志が亡くなっても志の輔や志らくが受け継いでさ、ちゃんと伝統芸能として、談志というカリスマの血が残っていくんだよ。だからきっと、たけしさんもそうなっていくと思うし。そこに関われたのがよかったなと思うね。

今回のトークは2月10日から順次配信

みんなのテレビの記憶

テレビの記憶を集めたい！ 土屋敏男のプロジェクト

「みんなのテレビの記憶」は、番組を作った人と観ていた人、両方の記憶を集め、Webコミュニティ、YouTube、note、NFTなどを活用してプロジェクトは進化中。土屋敏男プロデューサーによる、伝説のテレビマン同士の対談動画が連載企画としてYouTubeで進行中。『昭和50年男』では、イチ早くダイジェスト版を、完全版動画は本誌発売日から6回に分けて順次公開！ 今回の収録の模様は2月10日（土）から配信予定！ 詳しくは URL https://kioku.tv

驚きも、悔しさも、喜びも

ダンサーETSU&CHIHARUの運命を変えたTRFの物語

デビュー30周年を締め括る武道館公演というビッグイベントが迫るTRF。今回はETSU、CHIHARUとその歴史を振り返る。決して順風満帆ではなかったが幸せ! と二人は声をそろえる。30年間の歴史にはどんな物語が詰まっているのだろう?

取材・文：半澤則吉　撮影：英里　ヘア&メイク：太幡勝己（Allure）／半田桜子（Allure）

DJ BLUE（以下、**B**）今回はTRF30周年ということで、お二人がダンスを始めた頃から今現在に至るまで、ダンサーとしての視点から、いろいろと語っていただきたいと思います。まず、ダンスはいつどのように始めたのですか？

ETSU（以下、**E**）私はインド舞踊から始めました。民族舞踊全般のお稽古場が近くにあったんです。6歳から高校生までやってました。教室を開ける資格取得の一歩手前くらいまでいっていたんですよ。でも高校の頃にジャズダンスブームがあってそっちに移ったわけです。

B『フラッシュダンス』ですか？

Eそう。それでジャズダンスの教室に通い始めたんです。

CHIHARU（以下、**C**）私はバレエが最初です。幼稚園の帰り道にガラス張りの集会場があり、それをいつも眺めていたらしいんです。興味がありそうだからということでバレエを始めさせてもらい、その後、教室の先生が通っていた牧阿佐美バレエ団にも通い、高2くらいまでバレエをやっていましたね。そして、その後ジャズダンスに。

Bお二人とも高校からジャズダンスに入ったわけですね。1990年代にダンスグループMEGA-MIXのメンバーとしてテレビに出演するわけですが、それまではどのような活動を？

Cもうずっとレッスンしていました。ジャズダンスが楽しくなって六本木のスタジオに通うようになり、そこの仲間とニューヨークへ行こうってなったのが18歳の頃。実はSAMさんとはニューヨーク時代に会っているんです。それで、現地で習っていた先生の一人が、東京の「BROADWAY DANCE CENTER」で教えることになり、私も戻って通い始めたんですね。ETSUとはそこで出会ったし、SAMさんも戻ってきて3人がそろいました。

E本場の先生が教えてくれるスタジオで、有名ダンサーの多くが集まっていましたね。

Cプロクラスという一番上のクラスがあるんだけど、クラス分けの仕組みを知らなくて一般で受けたら、誰あの子って目で見られて！

Eもう、CHIHARUはスゴかった。脚が長くてヒールも履いて、プロクラスを覗いたみんなが「えっ？」となった。スゴい人が入ってきた「宇宙人!?」ってなりましたね。

Cその後、SAMさんのGQマシーンというグループができて、私はそこに入ることに。これがMEGA-MIXにつながるんです。

Bそれで『DANCE DANCE DANCE』（フジテレビ）に出ることになったわけですね。これが90年から92年くらい。ストリートダンスという言葉も徐々に認知されるようになっていきましたね。

Eこの頃、ダンスがカッコいいMVも出てきました。

Cジャネットとかマイケルがまさにそう。「BROADWAY DANCE CENTER」にはマイケルの「BAD」に出演していた先生もいたから、すごく刺激を受けました。

これで踊るの？と思った小室サウンドが大ヒット

Bそして93年、TRFがデビューします。

C小室さんがMEGA-MIXのメンバーと仕事をしていて『DANCE DANCE DANCE』を観ていたそうなんです。それで声をかけられて。

Bその時どう感じました？

E実はそういうデビュー的な話が、それまでも結構あったんですよ。

Cまた、そういう感じ？…と全く当てにしてなかったんです。

小室さんのひと言でやっとライトを当ててもらえるように

小室さんから「みんなどんな曲を聴いてるの？」とたずねられて、メンバーが好きな曲を挙げていったんです。すると、好みとは真逆のテクノみたいな曲ができてきて！アンダーグラウンドなグループだったので「これで踊るの？」ってなりましたね。その後、マハラジャツアーで、流動的なメンバー構成でステージに上がるように。でもまだ、当時はステージよりレッスンの方を優先させていました。

Eそうでしたね（笑）。

Cたまたま札幌のクラブでライブをやった時に、今のTRFの5人の形になり、結果、そのメンバーでいくことに。まだ全然売れてない頃の話です。

B正式に5人になった瞬間というのはいつなんですか？

Eそれがわからないんですよ。

Cテレビに出る時はもう5人になっていました。

Bそうこうしているうちに93年発売の2ndシングル『EZ DO DANCE』がヒットしていくわけですね。

C曲が売れたとか、私たちとしてはわからなかったですね。

E売れたからテレビに出てるとは思ってなかったんです。あくまでお仕事のひとつという感覚。

Cテレビで踊っていても、ファンからの手紙には「CHIHARUさんとETSUさんは何をやっている人ですか？」と書いてあった。

E当時はまだ、「BROADWAY DANCE CENTER」の舞台活動の方が魅力的に思えていました。

Bでも、ツアーは楽しかった？

Cそう、楽しかったんです。名前を呼んでもらえたりしたのは、うれしかったですね。

BやっぱりライブといえばSAMさん、ETSUさん、CHIHARUさんはパフォーマンスも演出も見せ場ですから。

Cでも当時は、ダンサー＝バックダンサーで。自分たちのツアーでソロダンスを踊ってもピンライトがこなかった。信じられます？リハでスタッフにピンをくださいと言ってもくれない！結局、小室さんが照明スタッフに指示出しすることに…。

Eそう、何回言っても私たちの話を聞いてくれなかった！

CYU-KIちゃんが間奏で水を飲んでいるところにライトが当たって。

E私たちはその横で必死に踊っているわけです（笑）。

C小室さんが「ダンサーのソロはギターソロと同じだからピンライトを当ててくれなきゃ困

る」と指示してくださり、それでやっとライトが当たるようになった！

B そしてその後、ヒット曲もたくさん積み上げ、ある意味頂点を迎えた95年、「Overnight Sensation～時代はあなたに委ねてる～」でレコード大賞を受賞。TK DANCE CAMPもあって、後輩たちも続々入ってくる。この頃はもう、トップアーティストの仲間入りだったというイメージですが。当時はどんな気持ちでしたか？

E・C うーん…そうでもなかったよね。

C 新曲の振付けは？みたいにダンスに焦点を当てたことを聞かれるようになったのは98、99年頃からだったと。

B それは意外でした！その後にユニット名が大文字に変わったり、小室さんプロデュースから離れていったりする時代に入っていきました。

C 2000年から2006年までTRFのリリースがなかったんです。02年にa-nationの第1回があったんですが、最初、私たちは出演できないって話もあったりして…。

B え～!?なるほど、そんな時期もあったんですね。でもその後、結果としては、a-nationはTRFが爆発的に盛り上げる、というのが恒例に！そしてTRFなしでは考えられないものに！

C TRFがいちばん盛り上がると言ってくれるお客さんが多いと、後々語られるようになったんです。

乗り気じゃなかった!? DANCERCIZE

B いろいろなことがあったんですね。リリースがない頃は裏方のお仕事もされていました。

C 自分たちが前に出ることがなくても、あゆ（浜崎あゆみ）とか、安室奈美恵ちゃんたちの裏方で、演出や振付けをやらせてもらっていました。それは、本当によかったですね。

B 現在も、後進育成を精力的にされているイメージも強いです。

C レッスンはもちろん、さまざまなオーディションやコンテストの審査員も数多くやってきました。

E そしてキッズから大人までダンサー人口はスゴく増えましたよね。

B まさにダンサーとしてのお二人の功績だと思います。そして2013年には『EZ DO DANCERCIZE』がヒットし、再ブレイクとなりました。あの時はどんな流れだったのですか？

E 実は、ずっとやりたくないと、抵抗していたんですよ。

C ダンスはやせるためにやっているわけじゃないから。純粋にみんなが楽しく踊れるように振付けをしているんです、そこをわかってくださるならやりましょうと。

B でも、それが大ヒットした。

E 売れちゃったんだよね。

C エイベックスとしては本当に大穴だったでしょうね。

C きっかけは本意ではなかったけど、やってみてよかったなと思っています。結果、楽しくやせられたという声も届いてうれしかったし、安心しました。

B 20周年のツアーには、『DANCERCIZE』のタイミングでファンになったという人も多く来場されて踊っていましたね。

C 意外とみんな踊りたかったんだなって気づきました。90年代のTRFファンが、お子さんを産み、体型が気になりだすタイミングでもあったのかな？そこもあったのだと思います。

B キッズからティーン、中年層、シニアの世代までダンスを好きで踊る人たちは明らかに増えたと思います。それはSAMさん、ETSUさん、CHIHARUさんの90年代からの活動が実を結んだからと感じています。TRFって本当に、ダンスでも、新しい形のユニットとしても、後進育成という面でも、パイオニアですよね！そんな流れがあり、今、TRFデビュー30周年を迎え、なお、パフォーマンスし続けていますよね。

C 仕事のスケジュールもあるので、毎日は難しいけど、基本はやっぱり踊りたい！準備しておかないともうムリですけど（笑）。

E もうね、ちゃんと準備しなきゃ、骨折しちゃう（笑）。

B いちばん大好きなダンスを続け、今もダンスと向き合っている、やはりお二人は素敵だとあらためて感じました。おそらく、読者のお子さん世代はダンスに興味がある子も多いのではと想像しています。子供たちへのメッセージをお願いできますか。

C ダンスに限らずですが、自分がやりたいと思うことがあったらやってみてほしい。すぐには答えなんて、絶対に出ないからとにかくやり続けていく。その忍耐力はまた次のことに役に立つと思いますね。すぐあきらめちゃうのはもったいないよ！

E 私はすぐにあきらめちゃうタイプなんだけど（笑）。でも、ダ

あらためて聴くと、TRFの曲は泣けちゃう曲ばかりだった

ンスをやりたいという気持ちはムクムクと出てきて。何度も何度も壁は訪れるかもしれないけど、ちょっとでも好きだなとか、やりたいなという気持ちがあるのなら、その気持ちを大事にして続けていったらいいんじゃないかな。少しずつでもいいからがんばろうって。

B 好きなことを続けるすばらしさ…お二人から本当に伝わってきます。今日のお話を聞いたらなおさらで、実はたくさんの驚きも、悔しさもあった30年間だったんですね。

C でも、私たちって幸せじゃないですか。好きだと思うことが続けられる環境にいるから。

B 「幸せ」という言葉、素敵ですね。TRFで踊ることが本当に好きだと言えるようになったのはいつ頃だったのですか？

C ちょうど、a-nationの頃じゃないかな、2006年あたり。最初は自分たちの曲がよい曲なのかどうかもわからなかったんですけど、a-nationでみんなが楽しんでくれる、知っていてくれるということってスゴいんだなと直に感じました。本当に小室さんへの感謝が尽きないです。

B 小室さんへの感謝は、TRFのメンバーみんなの想いでもありますよね。

C 本当にすばらしい曲をいただいたんだなと、感じています。

E 私の思い出は、2006年再始動の最初のライブの時。セットリストが出てきて、本当にじっくり曲を聴いて、歌詞もあらためて読んでみると、本当に泣けちゃう曲がいっぱいあったんです。a-nationでみんなが歌ったり踊ったりしているのを見た時もうれしかったけど、自分自身がTRFである喜びを体感できたのは、その時だったのかもしれない。本当に申し訳ないんだけど（笑）、こういう曲で踊れて幸せだなと思えるようになったのは、意外と最近のことかもしれないですね。

C スゴいですよね。これだけの曲があるというのは。

B a-nationでも他のライブでも、幅広い世代が一体になって盛り上がる。こういうことができるユニットってTRFだけだと思っています。

C 純粋に盛り上がれますよね。だから、今度の武道館（24年2月18日公演）も、TRF世代の人は楽しみにしてくれているんじゃないですかね。

B これからも、もっともっとTRFで世の中を盛り上げていってほしいです！

【PROFILE】 CHIHARU
埼玉県出身。5歳でクラシックバレエを習い始め、18歳でジャズダンスに転向、1年間のニューヨークでのダンス留学後、ダンスチームMEGA-MIXに参加。1993年にETSUらとTRFとしてデビュー。以後、浜崎あゆみ、安室奈美恵など多数のアーティストの振付け、コンサート演出にも携わる。後進育成も熱心に行っている

【PROFILE】 DJ BLUE
1980年代90年代のJ-POPを軸に「大人たちが青春時代に聴いていた音楽を、今、あらためて届けたい！」というメッセージを掲げ、CD・カセット・デジタル配信・イベントのプロデュース、ラジオ「J-POPパラダイス90's」パーソナリティなど各メディアで活躍。TRFのスタッフとして関わっていた経験も

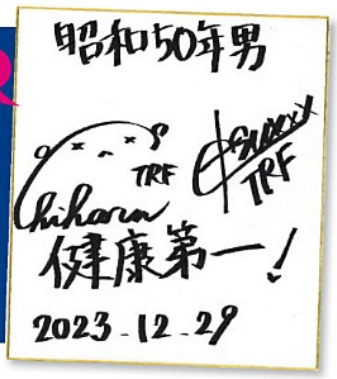
【PROFILE】 ETSU
東京都出身。6歳の時にインド舞踊、日舞を習い始め、18歳でジャズダンスに転向。ダンスチームMEGA-MIXでSAMやCHIHARUと共に活動し、TRFに参加。2002年、03年には個展を開くなどアートの世界でも活躍、多彩な才能を発揮する。現在は後進の育成にも力を入れ、これまで培ったダンススキルを活かし、精力的に活動

«« 最新INFORMATION

昭和カルチャー倶楽部で限定5セット販売！

ETSUさんとCHIHARUさんのサイン付き!!

2月18日に武道館ライブ、3月20日に特別な音源、映像を収録した30周年スペシャル記念盤を発売と、TRFのメモリアルイヤープロジェクトが、この春ラインナップしている！ 我ら『昭和50年男』もその熱気を伝えるべく、今企画の対談現場の模様と読者の皆さまへのメッセージを動画コンテンツとして、『昭和50年男』オフィシャルYouTube「昭和男女TV」や公式Xアカウントにて続々公開中!! さらには、ETSUさんCHIHARUさんからいただいたサイン色紙（右の写真）を特別に添えた『昭和50年男』からの限定5セットで、30周年スペシャル記念盤『TRF 30th Anniversary "past and future" Premium Edition』を公式サイト昭和カルチャー倶楽部で販売します。詳しくは昭和男女TV動画にアクセス、もしくは公式Xをフォロー、次ページをチェックして、公式サイト昭和カルチャー倶楽部から応募してください（応募締め切り2月25日。抽選で当選者5名様限定で購入可能な商品となります）



TRF30周年記念盤『TRF 30th Anniversary "past and future" Premium Edition』の詳報は次ページで!!

30周年記念盤をリリース!!

TRFの魅力、その真髄とは?

集まれば、「いざTRF！」と圧巻のパフォーマンスで魅了する5人のメンバーたち。その魅力の真髄とは、好きなことで“個”が輝いていれば、絆はいつでもキュッと結び直せる。そんな信念を彼らは常に共有しているからではないだろうか…。TRFの軌跡を今再び確認していこう。

文：藤井美保

音楽業界がまだバブル期にあった1990年代半ば、小室哲哉の生み出すTKサウンドが日本中を席巻した。サブスクと多様化が当たり前となった今思えば、それは本当に度を超えた一大ブーム。当時はやっかみ半分に、それらを〝消費される音〟とみなす向きもあった。遠い将来、愛される懐メロになりうるか？その命題に「YES」と即答できる人も少なかった。ところが今、TKサウンドの輝きは、あの頃の若者たちだけでなく、第二、第三世代をも魅了している。

その流れをけん引するのが、昨年30周年を迎えたTRFだ。この2月18日に行われる25年ぶりの武道館公演も、早々とソールドアウト。国民的ヒット曲を通じ、過去と未来が笑顔で出会い、踊る、伝説の一夜となることは間違いない。それもこれも、TRFのメンバー全員が歩みを止めずにいたからこそ。駆け足になるが、ここでは、そんな彼らの歴史と魅力を紹介していきたい。

TRFは、いわゆる美しい出会いのストーリーがあって生まれたグループではない。90年代初頭、すでにそれぞれの道でエンターテイメント界のプロを目指していた5人は、別々の経緯で一方的に小室哲哉（以下、TK）に見初められ、突然意味もわからず集められた。SAM、CHIHARU、ETSUは、前ページ「うらばん」で語られている経緯で。ストリートで踊る姿がTKの目に止まったYU-KIは、後に「小室さんは私の歌う姿を見てないんですよ」と語っているし、DJ KOOに至っては、「知り合いのDJからの声がけがきっかけで、小室さんから直接誘われてすらいない」とも。すべての発端は、ロンドンでレイヴに衝撃を受け、その可能性を日本で試したいと思ったTKにある。だから、TK RAVE FACTORY（当時の略はtrf）。いわばプロダクションシステムのなかで〝作られた〟グループだった。

謳い文句は、〝日本初のダンス&ボーカルグループ〟。シンガーとDJとダンサーという編成は、斬新すぎて誰もが首を傾げた。が、カラオケとダンスカルチャーを結ぶというドメスティックな方向にTKが舵を切るや、TRFはミリオンセラーを連発。フロントに立つYU-KIは想像を絶するプレッシャーと闘いつつDJ KOOと共に怒涛のレコーディングに、SAM、CHIHARU、ETSUは、次々くる新曲の振付けに明け暮れた。各自の役割に徹した5人は、お互いをよく知る暇もないまま、まさに「Overnight Sensation～時代はあなたに委ねてる～」を体現するかの如く20世紀最後にきた夢の時代を駆け抜けた。それがきっかけで、日本のダンスカルチャーが醸成されたと言っても過言ではない。

ストリート文化としてのダンスが日本で注目され出したのは、ヒップホップの黎明期を描いた82年の映画『ワイルド・スタイル』から。その後、MTVの隆盛とともにマイケル・ジャクソンがメインストリームのショービズ最大の要素としてダンスを位置づけ、観るだけでは飽き足らなくなった人々が自ら踊り出した。そうやってダンス人口が著しく増えた頃にTRFは現れ、期せずしてダンスを市井の人々にわかりやすく教示する役割を担う。そこでできた下地が育ち、2012年には中学校でダンスが必修化。今や日本中の学校の部活で、十代がダンスに夢中になる姿が目撃できる。ダンスカルチャーへのTRFの貢献を思うと実に感慨深い。

ジャケットのアートワークを手がけたのはイラストレーターYOICHIRO ANDO

LOUIS VUITTONやCOACHをはじめとするハイファッションブランドや、HYDE、GLAY 、LiSAなどアーティストのライブペインティングを制作。夏フェスのサマーソニックではミュージアムアートを通年にわたり担当。アニメ『東京リベンジャーズ』のグラフィティデザインを務めている気鋭のデザイナー。

一方、21世紀の訪れとともに音楽環境は一変。TRFの活動の場は減少した。a-nationの出演リストからも当初彼らは外されていたという。「うらばん」の記事でのCHIHARUのこの証言には、内情をよく知るDJ BLUEも驚きを隠せないほど。そんな現実に焦燥感を募らせた5人だったが、それでも恬淡（てんたん）と〝個〟がやるべきことに勤しんだ。結果、ご存知のとおりDJ KOOはバラエティでも八面六臂の大活躍。YU-KIはミュージカルや声優としてもキャリアを積み、昔以上に奥行きと艶のある歌声を手にしている。SAM、CHIHARU、ETSUは、裏方としてライブの演出や後進の育成に邁進。『EZ DO DANCERCIZE』というエクササイズビデオもヒットさせ、最近では、さらに進化させた『リバイバルダンス』などで高齢者の健康寿命アップにも貢献している。

そんな〝個〟の活動も忙しい彼らだが、周年などの活動期には、「いざTRF！」とばかりに集結する。好きなことで〝個〟が輝いていれば、絆はいつでもキュッと結び直せる。そんな信念を彼らは常に共有して、心地よい距離を保ち、互いへの敬意を忘れない。「気負いなく、やれる場所があるならとTRFを続けてきたから、個々の活動も、矛盾も無理もなくやってこられた」とSAMは言う。もはやTRFは、道を極めるプロフェッショナルたちの拠り所と言えないこともない。TKの勘で〝作られた〟TRFが、今や〝好き〟をつなぎ、〝継続〟を象徴する家族のような存在に。始まりはどうであれ、ストーリーは継続のなかで紡がれ、そして、それこそが美しいとつくづく思う。

TKの審美眼も確かなら、選ばれしこの5人もやはり只者ではなかった。〝卒業〟でグループを存続させるのが当たり前の今、脱退も解散もなくきたTRFは奇跡以外の何ものでもないだろう。デビュー30周年スペシャル記念盤『TRF 30th Anniversary "past and future" Premium Edition』で、ぜひその魅力とメンバーそれぞれの〝好き〟に触れてみてほしい。

TRF30年間の集大成であり、新たな作品！

昭和カルチャー倶楽部で購入すると、さらなる限定特典のチャンスも!

DISK収録内容

CD1
TRF Special Tracks
★ボーカルYU-KIセレクトによる歌い直し、リアレンジ数曲を初収録

CD2
TRF Non Stop Remix Trax
★YouTube（KOOTUBE）で115万再生されてるTRF DANCE MIX音源を初CD化
★単曲ボーナストラック
『Impression of trf 2023』
オリジナル音源初収録

CD3
TRF Tribute Non Stop Mix
★20周年トリビュート3作品を1枚のノンストップミックスにした初企画、初収録

BD1
2023.02.25 at Zepp Haneda（TOKYO）
TRF 30th Anniversary Live
『THANXXX!!! Live & Party 2023〜』
★チケット争奪戦となった30周年イヤースタートライブを全編初収録

BD2
TRF Music Video Clips
★TRFのオリジナルMVをHD映像へアップコンバートして初Blu-ray化
★ダンサー（SAM、CHIHARU、ETSU）がセレクトしたMVクリップを収録

BD3
TRF Special Contents
★TRF特番(NHK) 本編ノーカット初収録
★TRF特番(NHK) 再編集したメイキングなどを追加収録
★ダンサー(SAM、CHIHARU、ETSU)がセレクトしたライブクリップを収録

今回の30周年記念盤は、従来のベスト盤的な作品にとどまらず、TRFメンバーが大切にしてきた人生のテーマでもある“好きを極める”を軸に歌、ダンス、DJ、それぞれの魅力を詰め込んだスペシャルな記念企画盤となっている。今回初収録となる、YU-KIセレクトによる歌い直し、リアレンジ曲、DJ KOOミックス、ダンサークリップ、ライブ映像、テレビ映像がふんだんに盛り込まれた内容だからこそ、価値の高い作品と自信をもって言える。11年ぶりの新パッケージデザイン（クリアケース・プレミアムアートジャケット仕様）となっている点にも注目してほしい。すべてにおいてコンセプチュアルな記念盤として間もなくリリースされる!!

TRF 30th Anniversary “past and future” Premium Edition

3月20日発売
6DISCS（3CD+3Blu-ray）
初回生産限定盤
クリアケース・
スペシャルアートジャケット仕様
¥3万3,000円

❶ 特製Tシャツ(サイズXL)
❷特製ブックレット
（Zepp Hanedaライブフォト）
❸スペシャルアートジャケット
❹スペシャルクリアケース仕様
❺特製ステッカーシート
（ジャケットデザイン、
TRFロゴ、30周年ロゴ）
❻特製クリアチケットホルダー

詳しくはTRF30周年特設ページをチェック！
https://trf.avexnet.or.jp/trf30th/
※商品のデザイン及びサイズはイメージです。実際の商品と若干の違いがある場合があります。予めご了承ください。

セット内容

オレたちの青春が詰まった

TK SONGS

世代みんなで盛りあがろうぜ!!

DJ KOO

hitomi

マーク・パンサー（globe）

浅倉大介

ゆけむりDJs

DANCERS

あさちる　YU-KO

TICKET

開催日　2024年3月30日(土)　場所　SEL OCTAGON TOKYO
開演 16:00 (開場 15:30)

スタンディ　¥8,500 (税込み)　カー付き！

VIP席　　カー付き！

LivePo

https://t.livepocket.jp/e/tk_night_02

THANK YOU SOLD OUT!

※20歳未満入場不可　※ドリンク別　フードのご用意はありません

SUPER PREMIUM PARTY

TK SONGS RESPECT NIGHT 02

2024.03.30.sat

at SEL OCTAGON TOKYO

東京都港区六本木7丁目8-6 AXALL ROPPONGI B1F

START 16:00　OPEN 15:30

主催：エイベックス・ミュージック・クリエイティヴ株式会社　制作：エイベックス・ミュージック・クリエイティヴ株式会社

PRODUCED BY DJKOO

青春J-POP Project -Memories & Melodies-

Staff

editor in chief
金丸公貴

editor
佐々木雅啓
松崎 薫
村瀬広一

writer
有田シュン
一角二朗
牛島康之
内田名人
大山くまお
國領磨人
渋谷直角
ダイ
(ケチャップアーツ)
田中隆信
DJフクタケ
永井ミキジ
長谷川貴洋
半澤則吉
藤井美保
フジジュン
藤本晃一
(開発社)
安田慎吾
山本俊輔

illustrator
菱沼彩子

photographer
網野貴香
石塚康之
英里
大村聡志
鬼澤礼門
甲斐俊一郎
小林岳夫
徳山喜行
松蔭浩之
八島 崇
吉田三郎
吉場正和

special thanks
高橋名人
てれこま
謎の店

designer
大橋政信
佐藤 寛
遠藤智子
金子久美子
東條晶子

advertising charge
赤嶺龍太郎
桜井大輔

publisher
齋藤健一

本誌エディターが憧れた5人の漢たち

金丸公貴
本誌編集長
昭和49年／神奈川県生まれ

高畑和夫『エスパー魔美』
平賀＝キートン・太一『MASTERキートン』
後藤喜一『機動警察パトレイバー』
冴羽 獠『シティーハンター』
諸葛孔明『三国志』

あまりに突拍子もないキャラは避けて、リアリティのある人物を選んだつもりが、なかなかに“スーパー”な感がある顔触れになった。でも、孔明以外の4人は、平素は秀でた能力を隠して、どこか冴えない昼行灯タイプ。昼行灯の部分だけになら、自分でもちょっとは近づけるかも…という期待を込めて。

佐々木雅啓
本誌編集
昭和50年／東京都生まれ

浅川 拓『疾風伝説 特攻の拓』
沢渡弘志『疾風伝説 特攻の拓』
稲楽キヨシ『疾風伝説 特攻の拓』
鳴神秀人『疾風伝説 特攻の拓』
真嶋秋生『疾風伝説 特攻の拓』

『特攻の拓』から選出。拓ちゃんは当然として、拓ちゃんが困った時に理由を聞かずに助ける“風神雷神”ことヒロシとキヨシはまさに漢！ 秀人とあっちゃんは多くを語らない、背中で語る漢だね。マー坊くんや武丸といった各チームのヘッドはランク外。男気はあるけど、やっかいな面も多いんで。

AD index

バンダイナムコフィルムワークス	002
トイズキング	130
NBCユニバーサル・エンターテイメントジャパン	132

発行・発売 株式会社ヘリテージ
〒162-0805 東京都新宿区矢来町43-17
TEL.03-3528-9791
印刷所　株式会社太平印刷社

HERITAGE

昭和50年男
2024 March vol.027
Born in 1975

次号は 4月11日発売（予定）!!

本誌に関するお問合せ ✉showa@heritage.inc

本誌記載の記事・写真・イラスト等の無断転載を一切禁じます。

ポストに届くワイン定期便

旅するワインポスト

Produced by YOGA CLUB

ワインの世界を旅しましょう。

＼ プロが世界中を旅して選んだワインが ／

初回限定 **¥1000**※1

（初回は1杯あたり250円~!）※2

月に一度のプチ贅沢

毎月、自宅のポストにお試しワインが届く!!

高価なワインを購入することに抵抗がある方でも手軽に楽しめます。
今なら初回のお届けに限り特別価格でお試しいただけますので、
この機会にぜひお試しください。

旅するワイン2種セット	旅するワイン3種セット	旅するワイン4種セット
月額¥1680	月額¥2290	月額¥2790
（送料¥310）	（送料¥310）	（送料¥310）

※1／2回目以降の配送で商品価格2,790円＋送料310円＝3,100円。ずっと配送手数料無料が適応された場合は310円は0円。
※2／初回1,000円4杯セットをお求めになった場合の初回1杯あたりの単価。4杯セットの通常1杯単価698円。

https://winepost.net いますぐチェック!

昭和50年男
2024年2月9日発売（偶数月11日発売）第5巻第2号（通巻第37号）　発行人 齋藤健一　編集人 金丸公貴　発行・発売 株式会社ヘリテージ　〒162-0805 東京都新宿区矢来町43-17 ☎03-3528-9791

圧倒的人気を誇るジャンルに
極道旋風を巻き起こす新たな任侠シリーズが登場！
仁義と復讐の狭間で仲間との熱きつながりが血の争いへといざなう、
極道ノワール・アクション！

山本裕典 × 北代高士 × 高岡蒼佑

コネクト
CONNECT
覇者への道

U-NEXTにて独占先行配信中！

Vol.1 好評レンタル中！
Vol.2~3 毎月順次レンタル開始！

DVD 1 好評発売中！
4,180円(税抜3,800円)

DVD 2~3 順次リリース
各4,180円(税抜各3,800円)

セル：【映像特典】メイキング

公式サイト

STAFF 監督・脚本：藤原健一「CONFLICT~最大の抗争~」「機田同志会 機田征仁」
制作会社：ソリッドフィーチャー「日本統一」シリーズ

CAST 山本裕典、北代高士、高岡蒼佑
松田賢二、黒石高大、脇知弘、波岡一喜、本宮泰風、菅田俊、真行寺君枝
永倉大輔、宮本大誠、聡太郎、日向丈、國本鍾建、高杉亘、館昌美、浜田学

製作：2024年／日本　© 2024 NBCユニバーサル・エンターテイメント

海賊版DVDにご注意！ 海賊版DVDは違法な商品です。決してお買い求めにならないようご注意ください。

発売・販売元：NBCユニバーサル・エンターテイメント　www.nbcuni.co.jp　※発売日、仕様等は予告なく変更する場合がございます。
商品の内容に関するお問い合わせはお客様センターへ　TEL. 050-3612-6030　月~金 10:00~13:00 14:00~17:00(土・日・祝・弊社休日を除く)